ISSEIDO
東京 誠 神

PL 777 .35 09 v.1
Ozaki, Kyuya
Sharebon shusei

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

長谷川[illegible]編

洒落本[illegible]集

[illegible]

東京
春陽堂刊

LIBRARY
JUL 30 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
777
.35
O9
V. 1

端書

名義に就て

集成と名づくるものゝ、全部未飜刻物ばかり、即ち全部が直接原本よりの活字化である。

卷數に就て

此の第一卷を首に、爾後第六卷迄は材料が纏まる積りである。一卷大略二十部づゝ、即ち約百二十部集成の豫定である。

編纂に就て

大凡そ各卷、それ〴〵年代順に於て纏める。但し洒落本の性質上、此等は、純遊里（これを小說體と、色道敎授物とにも細別は出來る。更にまた此の遊里も細別すれば、吉原本、深川本、品川本、其他となるのである。）物、風俗物、商賣物、芝居物及び他の戲著（枉解物の如き）とに分てば分けられうる。又販行の場處により、江戶物、京阪物、又は地方物（江戶・京阪以外は、多く稿本）とも。本集成

また、此分類に據つて、刊行豫定數の第一卷より第四卷まで、主に純遊里物（江戸のみ）、第五卷に江戸版風俗商賣物戯著類。第六卷に京阪物地方物、しかも各卷略年代順といふに於て纒めたいと思ふ。

校訂に就て

出來得る限り原本の儘とした。眞字假名等、振假名の如きも一切原文のまゝ。振假名の字音も凡て修正してない。現代の散文流義に句點讀點を打つ事すら避けた。但し句讀點、原本に有るは其儘打ち無きは加へなかつた。（間々原本の●を○に代用したのはある。）却つて此方が難校訂である事は、經驗者は、酌んで下さらう。知らるゝ通り、此種の古書別けて洒落本類は、間々誤字宛字、清濁音勝手次第である。宛字誤字は、當然分るものは其儘、甚しいのだけ正字に變へた。間々、（マヽ）として、其原本通りを採錄したのもある。清濁音だけは、全部これに修正を加へ、當然濁音と認めらるゝものはこれを附した。篇により、當時の通語等で、我々の不識のため不明のものには、原本通りの清濁に從つた。假名遣は、振假名、本文凡て一切原本通りである。當時の貴重な、言語發音假名遣の好資料にもとの姿心である。（上田萬年博士の言を藉りて）。

體裁上

この體裁、序跋、本文、文字の大小位置、凡て、原本の臭と氣分に近いやうに、植字を要求した。

従つて随分贅澤な組の頁もある。唯本文の中の會話と地の文で、地の文に當る部分は、知らるゝ通り原本は、多く例の細字で二行書であるが、これが此の校本では、そのまゝの植字不能、已むを得ず括弧を以て括り、六號の一行とした。これだけが原本と相違するので、他は、凡て原本の忠實な活字化を圖つた事を憚らず宣する。挿繪も口繪も二三の他は、その儘これを取入れてゐる。（略したものは、原本破損甚しきもの一と、他は文中のコマ畫の如きものである。解題及び本文を對照して、知られたい。）

材料の選擇に就て

未飜刻というても、洒落本の總數五百内外の中、未飜刻は、三百五十部以上。その中で、當集成に採り入れたのは、主に、洒落本第一期（草創期から天明初まで）、同第二期（天明後半と寛政三年まで）、第三期は、終熄期の天保を止めて、寛政末より享和文化頃までの中の、洒落本の各時期を代表する臭の強いもの。末期の人情本臭味の物は、成るべく避ける事にした。未飜刻の範圍は、各期に亙つてゐる。が從來比較的飜刻に等閑であつたのは、第三期のものである。が、一九や谷峨に於て、作そのものゝ價値はさて措き、年代的價値に於て、滿更でない物が多い。これらも出來うる限り採る事にした。

底本とした原本に就て

第一期第二期のものと雖も、漁り得る限り漁り、集成の名を完うしたいと思ふ。

洒落本は、前後二回、禁と絶版、焚書の刑に逢つてゐるから、第三期の寛政末に至るまでのものは他の軟本に比べて、全くの稀本の性質である。(從つて、割合に新しい年代と且つ泛々たる小册子であるとに拘らず、今日殘本の壹買、市場で比較して和本第一を呼んでゐるのも尤もである。)(が京傳、谷峨、三馬の二三の如き、數版を重ねたと思はるゝは除き)。從つて本集成は、材料に至難を當然來す譯である。それが諸先輩の業蹟をその儘取り入れた活字の活字化でないから、一層である。がこれには小生辱知の諸賢があつて、材料の提供に於て、多大の便宜を與へて下すつた。殊に、兵庫縣の成川圭司氏である。氏は、現在軟本藏書家の巨擘、わけて此の洒落本だけでも二百以上、小生の現在知る限りに於て、公私の中あらゆる洒落本藏數の冠である。此の同氏の同情を得て、自由にその祕庫から融通して頂く便を得た。卽ち同氏本は、本卷、第二卷第三卷の殆どを埋める積りであるが、同氏本から選擇、謄寫のもの、全部未飜刻物で約六十種以上である。他は、忍頂寺務氏、飯島花月氏、花岡百樹氏、石田元季氏、市場直次郎氏、小山源治氏等の好意によるものである。及び、小生最近必死の蒐集の、約八十種よりの選拔。卽ち本集成全六卷（豫定）と既飜刻の帝文本の散在、國書刊行會本二册等を加へて、優に洒落本飜刻の中樞を占め得る事、就中本集成が、活字化に於て原文の形式氣韻其儘を傳へて、先づ所期に近しと自負する。

唯、遺憾である事は、帝國圖書館、其他官立大學圖書館（京大の久原文庫など）には、小生直接存じよりの個人藏本にも缺く物數種を見受ける。が、此等は、迚も地方借出の便を得る事が出來なく、（自分の直接謄寫の必要上）また官立大學本は、教授以外の閲覽すらも不自由との内情を知つて、凡て斷念した。（然し同學研鑽の爲、何とか自由な方法がないかとも愚擬が出る。京大には、比較的自由な宏量に見受けられる新村博士が館長であるのに）。こゝにも、微賤ながら予等の事業を支障する幾多の物がある事を痛感した。が、その代り、本集成は、直接諸家藏本により、それら館の藏本に缺くものを多く集載した。共通のもの、無論個人本によつて採錄した。が、此の辛勞を重ねた校本をそれらの館に備付けられる事に於ては、自分は無論欣快としたい。

尚、此等の館の藏本も（所要の數は、共通の個人借出本及び家藏本によつて融通せられて、少數である。帝國圖書館本一五種、他一〇種）機會あらば謄寫、本集成に挿加へたいとも思ふ。

校正に就て

本集成が、直接辱知の個人から借り出した原本であるだけ、校正には、從來の物にも見ざる正確さを保つ事が出來たと思ふ。卽ち成川氏より先つ此の第一卷第二卷分計三十九册、飯島氏花岡氏などよりも同樣借受け、寛大な諸氏の諒解の下に、此の校本製本了まで現に借り出した儘である。卽ち初校

再、三校まで、自分はいつも成心なくして、原本に據つてその都度校正した。尚一校、加へて此の四校で、恐らく魯魚の誤りはないかと思ふ。が大きな事はいへない。知らるゝ通り最後の植更へに違ふ場合もある。よつて製本出來後、更に原本と對照して通讀、あらば、第二卷に補記したい。

前にもいうたが、箇處により原本のまゝとした、文意不通の箇處もある。妄りに吾人の見解を入るゝの危險を思うてである。又、箇處によりては、殊更誤字を使用した箇處もある。判讀の怪しき箇處は、七號文字にて（ヽヽヽヽヽカ）と附記しておいた。諸賢の示教を得たい。尚、各篇、ところ〴〵闕字の已むなきはあつた。乍遺憾、容赦なくこれを斷行した。これあればとて、全體の文意には支障なく、從つて寸毫の非を以て全鱗を沒するの悲慘を、過むる方が得策と信じての事である。

原本よりの讀み誤りは、先づ無いと信ずるが、知らるゝ通り、宛字誤字中々多く、當時の筆耕（原版下を寫すもの）の書誤りもある。それに清濁音は、殆ど不統一である。（此の風、同じ江戸文藝物でも、讀本などは余程正確と思ふ）殊に、同じ洒落本でも、其の初期（自分は、天明初期までをいふ）中期（天明後期から寛政三年まで）のものは、筆耕にも達者なのがゐて、（又は時に、著者自筆の版下もあらうと思ふ）頗る獨得、色々に達筆、從つて讀み辛かつた。後期（寛政五年頃より享和文化以後）のは、此の弊（校訂にとつての）割合に少ない。此の書體の移動からも、初期中期には、學者等の逸

名作多く、讀者の階級も、文字の識別好尚等、著者と同等に近き範圍に限られてゐたと思ふ。語法、使用文字も概して敬服すべきものが多い。が内容は、却つて、讀んで通俗的の意味で、面白からぬものが多い。卽ち殊に初期は、上人文藝、中期の末に、所謂、大衆文藝じみて來、末期は、藝者女郎も讀みうる程度になつてゐたと謂うてよからう。

終りに臨んで、本第一卷所收の二十二部の中二十部の原本所藏家成川圭司氏「取組手鑑」の飯島花月氏「居續借金」の花岡百樹氏の御好意を重ねて感謝する。尚、此のうるさき校本の文選植字に從事せられた印刷所諸氏の勞また多大、諸氏の此の種文獻事業に盡瘁せられた功は、職業づくとはいへ、感謝に余りあるものがある。以上。

大正十五年八月　　編者誌

解題

「洒落本集成」第一卷所收二十二篇、順序略々年代順。但し第一卷に限り、(第一卷には、比較的年代未詳物が蒐つてゐるため。)再校三校を重ぬるに及び、幾多の疑點を生んだ。從つて順序に於て、二三變更を要したいものもある。各篇條下に、これを述べる。解題の要領は、主に年代、作者、本の形式口繪等の體裁に及び、內容に觸れるの繁縟を避ける積りである。內容は、見らるゝ通りの物であるからである。唯、恐らく現在では最も多く此等を精讀した一人として、(卽ち自分である。四校に及んでゐるから、原稿當時と併せて五回は精讀した譯である。第二卷以後所收のものとの對照、及び他既出本との比較、內容よりせる不詳の作者・年代推定等に就て、更には一般洒落本の價値論、分類論、作者論等に就ては、他日、拙筆「洒落本雜記」に俟たう。(尙、本集成最終卷には、別に拙編「洒落本總書目」を附し、一々飜刻本の所在等をも明かにしたいと思ふ。)以下此の意味からの簡單な解題である。

○

郭中掃除

年代、安永六年版。著者、福輪道人。

體裁。小本一册。序文二、本文廿五、計廿七丁。別に、挿繪半丁。（斷裁せる半葉）。序は、十五字位詰六行が半丁。本文は、廿五六字詰七行が半丁。振假名等一切此の飜刻通り。挿繪は、原本に於ては本文第七丁と第八丁との間に挿入せられたものである。

挿繪畫家不詳、春章でもあらうか。作者福輪道人も身元不詳である。此本、祖禮は徂徠、南角は南郭（服部）。挿話として現れる春會とは、春臺（太宰）の意であらう。同じく挿話としての「室町とやらの新介様」とは、伊藤仁齋を指してはゐないか。最後此里の往古の追憶談、復興策は、一興である。又茶屋の名の古文字屋といふのも、古文辭を序して、洒落れた物である。

○

愚人贅漢　居續借金

年代、天明三年版。著者、蓬萊山人歸橋。跋、志水燕十（裡町齋）。

洒落本初期末、體驗派（自分の命名）の中の特色鮮やかな、且つ蜀山人菅江等の日常生活に觸れた好資料である。夫等が實名のまゝで出てゐる、殊に作者自身も、などは、異色である。體裁、小本一

册。序跋共全丁數三十五。(内、序、三。跋二丁半。)序跋は、十四五字詰六行半丁。本文は、十七八字詰七行半丁。但し原文は、●の句讀點を附す。(此の校本は、○にて代用)。挿繪ヒラキ、六丁裏、七丁表へかく。畫者不詳。跋の志水裡町齋は、同苗燕十の謂である。

○

福神粹語錄

年代、天明六年末出版。著者、萬象亭（二世風來。森羅万象、竹杖爲輕、築地善好と同人。別に「紅毛雜話」などの紅毛雜著がある。院本作もあり、作名は源平藤橘。）。跋、門人柳郷。

體裁、小本一册。序一。自序本文共三十六丁。(内、自序の部四丁)。後序一丁。計三十九丁。序の天竺老人とは、恐らく作者の影武者、同筆ならん。此序一丁。自序の部第一丁の表、揭載の如き挿繪、萬象亭、伏見屋對話の體。畫家不詳。自序はこの第一丁裏より第四丁裏まで。最後、皆樣御存知述の下には、例によつて、彼の印章、卍の下に象の印がある。(此校本、此の印を略)序は、十六七字詰九行。自序は、大小の字詰にて、行は八行。本文は、十九字位詰、八行半丁。○の句讀點を附す。振假名一切此校本通り。此本、際物ながら、趣向稍面白く、勿論七福神の擬人は、前代春信等の浮世繪にもあれど、此の本の趣向、また後の歌麿などの青樓七福神に暗示を與へしかと惟はれてゆかしい。後序の

柳鄕とは恐らく實在、萬象亭の弟子にして筆耕をかねた男であらう。(月地は、萬象亭の意。彼築地に住した。)原本、この狐面堂柳鄕の署名の下に、扇面の中に、卍の印が捺してある。(此校本、略之)

○

南極驛路雀

年代　天明九酉春(寛政元)出版。著者、逸我。跋、内田新好。

命題の如く品川本である。著者の逸我は不詳。或は跋者の新好自身の假作ならんか。體裁、小本一冊。序本文共四十丁。外に跋二丁計四十二丁。序は大字、一行十字内外六行半丁。跋は、十五六字一行、八行半丁。原文、序の署名逸我の下に印章あれど不明。挿繪第七丁の表。但し原本、この裏(第七丁裏)並に第八丁表(半丁分)計一丁分落丁か。丁數合はず。内容旣に情緒纏綿主義を現して、中期の特色が著しい。本文、二十字位一行、八行半丁、句讀點○を打つ。

○

倡註銚子戲語

年代不詳。著者、信陽大飯喫、跋者東方朔八千歳親類。共に不詳。推定年代、恐らくは、天明末、寛政極初のものならんか。

體裁、小本一冊。序二、本文三十一、跋二、計三十五丁。序第二丁の裏、所掲の如き遠望の圖と百菴の句。挿繪、春好（春章門下。無論初代春好。）畫、第一丁裏より第二丁表へヒラキ。但し此校本、ヒラキ左の圖、原文破れあり略く。序は、罫を引きて、その間、十三四字詰、六行半丁。本文、二十一字位詰七行半丁。跋、十三字位一行、七行半丁。序の大飯喫署名の次に、南鐐三片、米云々と讀める印。跋、八千歲の次に、干他（或は佛）來の三字の角印あり。

○

遊僊窟烟の花

年代不詳。著者、薄倖の隱士（跋には、薄倖先生と云）。（此の隱士、卷頭、題者の釣散人と同人か）跋、門人それがし。（推定年代、寛政初期。）

體裁、小本一冊。題言口繪題にて三、本文四十三、跋一、計四十七丁。題言、頗る大字、十四字位詰六行半丁、罫をひく。此の題言一丁半。次ぎ、第二丁の裏より第三丁表へ、ヒラキにて、所掲の如き口繪。假宅の男女を唐人にせるもの面白し。畫者不詳。其裏、假宅曲。此の釣山人の署名の次、印ありて、□成、榮□と讀める。本文、十九字位一行、八行半丁。句讀なし。跋は、十八字位一行、八行半丁。意中情の印は、本來は、瓢簞の形也。門人それがし誌の下、□（白カ）露糖と讀める印。振鷺

亭の玉露糖と同人か別人か不明。
〔備考。此本、寛政初期と推定せし主なる理由は、跋に、めりやす、二上り潮來などあり。これ潮來の流行の魁、寛政元二年頃かと思はる。尚且つ體裁等に於て、京傳の仕懸文庫等に似、禁以後の寛政末期とは思へざるが故也。〕

○

通　志　選

年代不詳。著者、世滿里南鐐。〔推定年代、洒落本禁以前卽ち寛政初期か。〕
體裁、元表紙青。題簽は、白、輪廓は子持の線。題字は、通志選　全の四字。此の校本所揭の、北郭先生訂定云々の一頁は、此の表紙の見返し也。小本（但し前數輩に比べて、較や竪に寸伸ぶ。）一冊。序本文共三十一丁。序は、罫ひく、十二字位一行、五行半丁。此序二丁半分、その裏同じく五行に罫を引きて、目錄半丁。第四丁より本文。本文は、十四字位詰一行、八行半丁。第七丁裏第八丁の表ヒラキ、所揭の挿繪。其の落款、嵯峨戯書。不詳。此本體裁の特色は、他數作に稀有なる、本文凡て輪廓（本文を圍める線の事）なし。〔前揭の六本、本文、凡て此の圍みの線あり。〕

○

東都氣娼　廓膽競

年代、西のはつ春版。著者、小金あつ丸。

これが、まづ豫定から、狂つた第一本である。從來此の本、天明かといはれてゐた。成程、あつ丸には政演畫で、天明六年に、北邸故實內所圖會といふのもあるから、天明期に見られたのも、無理はない。自分も、うつかりこれを信じて、此の西の春を卽ち天明九(寛政元)の西とした。が、三校の後に至つて、飜然悟つた。現にあつ丸には、享和期と目すべき「仇手本」等の洒落本作もあるから、强ひてこれを天明寛政初に限定する必要はない。內容の如何によつて、享和かも知れぬと。偖、その內容を、三校時の今に於て、明かに享和期と見たいのである。情緖の細かしい描寫、五囘に細かく仕切つた所、(此の五囘の仕切りは、大した理由にもならぬ。現に寛政元の「南極驛路雀」も五項に目錄は附してゐる。)特に有力な理由は、本文に現れる潮來の流行盛時と思はれる描寫である。其他何々、判然とは言へないが、どうも此の西は、享和の西かと思へて來るのである。が、寛政元にもすでに此の作風著しかつたといへばそれ迄。(潮來は、その流行の魁は、すでに寛政初期にあつたから、これも有力な反證にはならぬが。)此上は、博雅の研究にも俟つて、明かにしたいと思ふ。尙自分も以後、此の小金あつ丸に出逢ふ度、作風の變化其他に注意は怠らぬ積りである。とにかく、このあつ丸は、作期比

較的永く、禁以前の天明寛政、禁以後の寛政末享和初めの二期に亘るものと思はれる。その年壽は不詳であるが、歿年は、武江年表によれば、文政十二年十月歿であるといふ。

體裁、小本一冊。序など四、本文二十九。自序は、九字位一行、五行半丁。此序、全二丁分。次、第三丁表、目錄の中、第三回まで。その裏よりヒラキにて所掲の挿繪。その裏（第四丁裏）、第四回第五回の目錄。本文は、二十字位一行、八行半丁。本文、カコミの線あり。

倘、口繪の秋蝶とは不詳。最尾、あつ丸の署名の下、印様のなべは、彼の署名に平凡に見受ける所のもの。無論彼の居住した、神田鍋町の意である。彼は、小金（黄金）あつ丸、神田あつ丸などゝ稱した、通稱は伊勢屋吉兵衛、紙問屋、副業としては寧ろ狂歌師である。（狂歌名は、神田庵厚麿と稱す。）

○

東山見番　意妓口

年代不詳。著者、振鷺亭主人。跋者、關東米（振鷺亭の變名也）。

推定年代。これも豫定を狂はせた本である。恐らく寛政末或は享和也。その理由は、同著者の洒落本「玉の蝶」（享和初期）に、此の「意妓口」などをすでに擧げてゐる。卽ちこれ以前の本たる事は明かであるが、またそれを離るる事遠くはあるまいと思ふからである。振鷺亭も厄介な男で、別の洒落

本「自惚鏡」は、歴然寛政元年であるから、洒落本の禁以前の作品でもあり、また以後の末期の作者でもあるのである。丁度經歴は、あつ丸と同じである。此本、初めは「自惚鏡」等と同じく、禁以前又は同時の寛政二三年頃作と見たのであるが、内容を再三讀するに及んで、どうも寛政末期かと思はれるのである。深川本の名作として、よくいはれるが、その内容は、頗る人情細微描寫で、末期の特色を裏附けてゐるかと思ふ。が、年代の如何に拘らず、此本頗る名作と思ふ。「花折紙」にも「座元の金箱々々」などゝ譽めちぎつてあつたが、三勝と半七の、思ひ思はれ乍ら、愛想づかしの體で別れた殊に最後の半七の苦悶、家庭の背景も織りこまれて、頗る穿ちを極めてゐる。校者は、再校三校のたび下らぬ事ながら、ほろりとした事を告げておく。其他、全體に、寛政末（又は享和初か）の深川描寫として、典型の一であると思ふ。（此本にも、例の潮來の流行を取入れてはゐる。）

體裁、小本一冊。題言口繪目次とも四丁。本文四十一、附錄一。「紅二新曲云々」は、表紙見返し也。題言は、二丁半、罫を引き、十八字位詰六行半丁。口繪はヒラキ、最右端は、所揭凸版不明なれど、「とやについた子」といふのである。此の繪、中二人の立姿、左の爪切る女、など、頗る淸長（鳥居氏）錦繪の一葉に酷似せり。〔同畫の「風俗東之錦の內」浴後三美人の圖。〕が、恐らく此繪、淸長畫とするは非、歌麿畫は及びもつかず、（村上靜人氏の「遊女の種類」には、此の藝妓口の口繪を擧げて、歌麿としてゐる。）

作者振鷺亭の自畫ならんか。理由は、彼が一方、畫に於て淸長の弟子たりしといふ事は有力な根據ではあるが、淸長としては年代相應せず、それに淸長にしては拙であるからである。

本文、二十字詰位八行半丁。輪廓あり。附錄は、罫を引きて、十九字位一行八行半丁、尾の廣告とも一丁。

○

不粹照明房情記

年代不詳。著者不詳。序は、京傳と思はる。

推定年代、寛政三年以後。五六年の頃か。理由は、序に「足を洗ひし老こみ作者」とあるは、是れ同三年の體刑に懲りた京傳の我身の意であらう。足を洗ひながら、洒落本に序を物する不屆さも、隨分人を食つたものである。此の故か、此本、京傳作として古くからいはれてゐる。が恐らく京傳にはあらないであらう。此本、また所載の如く、「大門雛形」とあるが故に、一に此名を以て呼ばれる。又房情記は、方丈記のもじり、不粹照明は鴨長明の同じくである事勿論である。

體裁、小本一册。序など四、本文、三十三丁半。序は、手紙風に物して、(その輪廓をとり)十五字位一行八行半丁。此序が二丁分。大門雛形云々が次の表半丁分。その裏ヒラキにて挿繪、畫家不詳。

其裏品目。本文は、廿三字詰位一行、八行半丁。(各丁、輪廓あり)地の文に相當する二行の細字書は、他本に見ざる極の細字也。

○

取組手鑑

年代、寛政五年版(「丑島の正月とあり」)。著者、門人團東米賓は振鷺亭。

體裁、小本一册。茶表紙。序七、本文三十二丁半。序は、罫を引き、第一の序、十一字位一行、五行半丁。此分全一丁。第二の叙、同じく罫をひき、六行、十字位一行。此分二丁半。その裏、ヒラキにて、番附面。その裏(即ち序の第五丁裏)、三會目床入後云々の勝負附。次ぎ(第六丁表)、木戸口之圖とありて、所掲の頬短の男(此圖、此の半丁分の三分の二の大きさに近し。」と、細字にて「頭は十月」より「見世の大格子からは」迄、この文字二十三四字内外にて六行分、併せて半丁。その裏ヒラキ(序の六裏より序の七表まで)序說のつゞき。第七丁裏、例の痛快なる横綱の圖。但し此圖、原本には、土俵は杭を以て圍み、且つ文字も横綱床入之圖とある。そのまゝでは餘りに辛辣であるから、その二者を(土俵の上縁と文字)削つた。此書も、無論振鷺の自畫であらう。これは頗る巧いものである。莫迦らしいやうだが、此の圖案化、天下一品、遊蕩に滲入しなくては、かくはとまで思はれる。本文、

外の輪廓あり、二十字位詰一行、八行半丁。處々上部線外に、頭註やうのものを附けたり。禁間もなくの五年の作としては、随分大膽なもの。描寫細に入り、末期本のかゝる典型になつたかとまで思はれる。殊に、負惜、柏木を待ちつゝの所作など、恐らく作者振鷺先生のふられの體驗より出でずやと思はるゝ程、眞に迫る。至妙々々。此のうるさい程の描寫に至つては、恐らく京傳以上かとも思はれる。とにかく此本、巻初より巻尾まで一種のエロチックな氣味で充ちた、皮肉味たつぷりの作。

○

孔雀染勸記

年代不詳。著者、山旭亭主人。

推定年代、享和期に入つてからの作であらうか。山旭亭は、不明の男であるが、或は是れ神田あつ丸と異名同人ではなからうか。即ち此の二者、他の作に多く互ひに序をものしあひ、且つ共に、藍水の北に住んだとある。(あつ丸の藍水の北云々は、廓臈競にもあつた。山旭亭の藍水云々は、「洒落本集成」第二巻所收豫定の「五臓眼」(年代不詳。山旭亭著)の序に、藍水北居山旭亭とあるからである。嘗て某氏は、雜誌「風俗圖説」に、山旭亭を、初代一九といはれたが、これは、信じかねる。尙、山旭亭とあつ丸の問題は、未定として以後の考慮に委ねたい。

體裁、中本一冊。自叙など五。本文、十四別に附五計十九丁。自叙は、十六字位詰一行六行半丁、此の序全二丁。山旭亭主人著の終に、山旭亭の印を押す。次ぎ（第三丁の表）、花魁、樓下道中、後ろむきの姿、壽亭畫と款す、即ちとよ丸畫也。此の畫、原本、汚損甚しく、爲に此校本には略いた。其の表は、所掲の「それ雪は」云々。次、序說、十四字位一行、八行半丁、此分全二丁。次ぎ、本文第一丁、即ち「草庵洒落」以下。此分、二十二字位一行、八行半丁。但し二行の割書（地の文）は、頗るの細字也。（カコミの輪廓、毎丁あり。）附の五丁（評語のあたり）は、極の細字。三十字位一行、十行半丁。尙、此本、本文に現れる人物の一人、あや丸といふは、「としは二十五六」と若くしてゐるが、無論あつ丸（神田あつ丸）を借りたのであらう。山旭亭あつ丸同一人とすると、これは自分を描いたのである。

○

青樓惚多手買

年代不詳、著者、異双樓花咲。序、甘露菴主人山跡蜂満、跋、一閑亭主人。

推定年代、寛政九年頃か。異双樓花咲、不詳。唯、此本と同外題のものに、京傳作ありと從來謂はれてゐるが、恐らくは誤。即ち此本を誤り傳へたのであらう。

體裁、小本一册。表紙青。題簽、白、子持の輪廓の中に、青樓惚多手買　全とあり。序、自序口繪等五。本文跋共廿五、別に挿繪無丁一、計廿六。序は、十五字位詰七行半丁、此序、全一丁。自序、十二字位一行、此の校本の如く短册形の罫を引きつらね、五行にて半丁。此の自序、全二丁。次、口繪、さかゑ屋が表半丁、遠望が裏の半丁計一丁。次ぎ、表半丁分、目錄。裏半丁分、異双樓主人の「鎮々織棒云々」。但し此の狂詩、こゝ屛風を描き、これに書す。その屛風の左下、枕一個ありて、頗る暗示に富む。(此圖略。狂詩のみ、校本に登載)。本文は、十八字位一行、八行半丁。外のカコミあり。駕籠の挿繪は、ヒラキ、第二丁裏より、無丁分の表に亘り、一丁分。跋は、十四字位一行、八行半丁、此跋一丁半。跋の第二丁目裏（丁ツケとしては第廿五丁裏）罫五行にて、初め三行廣告。

○

通俗雲談

年代不詳。著者、雲雀亭春麿。(推定、寛政末、前者と同時頃か。)

體裁、小本一册。自序以下本文共四十丁半。自序は、十一二字詰一行、五行半丁。此の自序は、一丁半。其裏總目の半丁。次ぎ第五、第六の二丁の全、口繪。此の校本は、紙面の都合上、所揭の如く縮めたるも、原本は、第五丁表が桂布、其裏が根川。第六丁表が銀蝶、其裏が太志といふ順。半丁に

肖像一個づゝ。本文、發端以下、十四字位一行、八行半丁。輪廓あり。書體、頗る洒落本らしきもの。口繪畫家は、所揭の如く、「孔雀染」、「惚たて貝」などゝ同じく、豐丸。此の豐丸は、歌川派、豐春の門人、叢豐丸ともいひ、天明より享和に亘りて、間判及び細繪の錦繪版畫に作畫すと云。

○

通言東至船

年代不詳（一に、文化三年版と云。）著者、序を物せる東來山人か。跋は、富樂卿一盃と稱す。

體裁、中本一册。紅表紙、題簽、黄、輪廓太き一線の中に、通言東至船　全といふ。序など四丁、本文廿八、別に跋の一。序の第一丁表は、品目のみにて埋め、其の裏、髮梳ける畫、落款哥麿其人不詳。序の第二丁より一丁半が序。此の校本の如く短册形に線をつらね、十字位一行、六行半丁。その裏、（序の第三丁裏）が、「山東に毒まいおわす京ばしの傳」云々。次ぎ、「水上浮船」云々、「殘橋でひなる」までにて、即ち序の第四丁目表の全。其裏、かしく筆、遠望、碇泊の圖。（但し、この圖の一丁、六と丁つけあり、或は、丁の誤か。落丁にはあらじ。）次ぎ、直ちに本文、第一行目に始まり、（第一丁表）十五字詰位一行、七行半丁。外の輪廓あり。元來中本であるのに、この本文の文字また粗く大に、間の抜けたる感じ多し。初期中期洒落本は文人向、この末期本は、素人向きの感あり。跋は、所

揭の如き體裁、十一字位一行、六行半丁、此の跋表裏一丁。末期とはいふものゝ人情本程濃厚冗長さのなきを、取りえとすべきか。

○

奇談　假根草

年代、寛政八年春版（序に、卯（七年）の行冬とある。）著者、紅月樓といふ。此の紅月樓、別に、柿降の柳庵といへる事、自序に見ゆ。跋者、越野山人（不詳）。

體裁、發端自序惣目にて、全三丁。發端は、罫を引き、その中、經まがひのもの、九字位一行、注は一行が十九字位、但し此の注二行にて、一行の罫内に入る。此の發端一丁半。その裏、自序のヒラキ自序もまた罫を引き、八字位一行、六行半丁。（◉の讀點を打つ。）最尾、柿降の柳庵述の下に、丸き印嬉川（カ）と訓める文字。其の裏（序の第三丁裏）、惣目半丁分、罫を引き六行。次ぎ、本文第一丁表。十六字位詰一行、八行半丁。初め、○の讀點あり、後無し。（此本、「通志選」と同じく、本文、外の輪郭無し。）挿繪房中の圖は、本文第四丁裏より第五丁表に亘る、ヒラキ一丁分。此の書、無落款、北齋派か。跋は、罫五行、九字位一行、此の跋全二丁。署名、越野山人の下に、不明の印一個。

○

青樓夜話 廓數可佳妓

年代、中孟春「寛政十二年」版。著者、成三樓鳳雨、序並に口繪、神田あつ丸。

著者に就て。此の成三樓鳳雨は、「青樓小鍋立」（享和二年版）「婦足髷」（同年）の成三樓と同人。卽ち後は鳳雨と謂ひ、洒落本作、此の三種を數ふ。「慶長以來小說家著述目錄」、成三樓主人の項に見る、文化時代は、寧ろ寛政享和時代と改むべし。尙、此の「著述目錄」に現れたる、成三樓主人の著四種、こは三種の誤、中、雪の梅一册といふは、「婦足髷」の改題で（卽ち淸川奎傳雪の梅と稱す）あるからである。卽ち後の洒落本（他の戲作は無かりしならん）は、三種。此の本、その一也。「小鍋立」は、本集成第二卷に所收の筈である。」

體裁、小本一册。元表紙青、題簽は白、輪廓太き一線にて、「青樓夜話 廓數可佳妓 全」。丁數、序、口繪にて六。本文は、目錄以後を本文の丁に數へて、以下廿五丁。自序は、十三字位詰一行、（六行半丁。此の自序全二丁分。序、天地を少し明けて、八字位一行、六行半丁、此の序の第二丁目（序の全體からは、第四丁目）の裏よりヒラキ一丁分、あつ丸畫の口繪。其裏半丁、かんだあつ丸 なべの署名と印のみ。次ぎ本文第一丁、目錄表裏に亙る。第二丁目、純本文始まる。粗きは十六字、細かきは二十字位にて一行、八行半丁。外の輪廓、毎丁にあり。本文最初の、櫻佐といへる戲作者ありには、自己の

影ではなからうか。「婦足骨」の作者であるだけ、中々に艶態の描寫多し。但し最尾、清川、文七の痴話、愁嘆、清春の義俠、常套と思ひながら、割合に感動させられた事を述べておく。殊に、清春が意見しながら、そ知らぬ顔で剃刀をとるあたり、巧みなものである。

尙、此本、あつ丸の口繪ある事面白し。狂歌師洒落本作家たる彼、また此の人並の畫技を有してゐたのである。政演、北齋等に就て學んだか。彼らと似て、巧臭なき處よし。

○

三人酩酊

年代不詳、著者、三多樓主人（三多樓戲家主人とも云）。

推定年代、寛政十一年頃か。現に同一作者の手に成る「仲街艶談」の寛政十一年より見ての事也。

作者に就て。此の作者、三馬なりとの一說がある。現に、「花折紙」は、である。（徳川文藝類聚第十二、評判記所收本に據る）成程、號からも三馬と見られぬでもない。卽ち三多樓は、三太郎に通じ、戲家は、現にたわけと讀ませ、卽ち馬鹿の謂、これを約めたら三馬である。尙、三馬の別號、遊戲堂、哆囉哩樓などにも通い。卽ち一方、「辰巳婦言」を三馬の名に著し、この本、三多樓の變名を用ゐたのではなからうか。況して、作風、腹立、笑、泣の三上戶の書き分け、彼ならではと思はれる。

體裁、小本一册。元表紙靑。丁數、序、原本初落丁、恐らくは全三丁か。本文、丁數前後を別にし卽ち、腹立上戸の前まで、廿一丁にて終。腹立上戸以下、新しく第一丁、以下十八丁。計本文のみにて三十九丁。序は、初落ならん。次ぎ、序のつゞき「おさへのめんだうなく」以下、十六字一行位、四行、署名等にて半丁分。裏ヒラキ、口繪一丁分。此の畫家不詳。其裏、品目の半丁分。本文は、上之卷以下、廿二字位詰一行、八行半丁。輪廓、毎丁に附す。下卷、字數行數、輪廓等同上。

○

傾城傳受（ママ）

年代不詳。著者、梅暮里谷峩。推定年代、寛政十一年頃。或は、此の本「傾城買猫の卷」の同十一年と同本か。原本、題簽を逸したれども、性質上、金魚の虎之卷に似せて、卽ち猫の卷としたものか。但し今は、確實なる方を取りて、序の中に見ゆる「傾城傳受」をもて外題とする。尙、契情買心得中本二册谷峩作といふあり。こは無論、此の「傳受」本の後摺、中本に仕立て、上下に分ちたる物也。

體裁、小本一册、元表紙茶。序、自序口繪等五、以下その丁を追ひて、本文の終りまで、三十四丁半。序は、遊好山人といふも、無論梅暮里山人〔谷峩〕自身の影武者。此の序、十五字位詰一行、七行半丁にて、全二丁。自序、一丁半、十四五字詰一行、六行。但し此の自序、罫を引く、署名、はつ春

自序の下に、彼の印章三ふのふ一個、黑き鳥の如くしたるを据う。次ぎヒラキ一丁分、辰齋〔北齋派〕の口繪あり。其裏、所揭の如き傘と提灯、署名。本文は、廿一字位一行、八行半丁、カコミの線あり。本文の最尾は、法定である。跋は、罫を引き、十二字位一行、七行。半丁にて終る。

○

青樓眞廓誌

年代不詳（一に寛政十二年といふ。）著者不詳、序のはやし云亭といふ者か。但し云亭は、印の中の文字。跋、松葉亭。

體裁、小本一册。元表紙、赤黑き色、題簽は、子持の線にて圍み、用紙白、「靑樓眞廓誌　全」とあり。丁數、序口繪目錄にて四、本文廿五、跋一丁半。序は、十一字位一行、六行半丁。此の序二丁半その裏ヒラキ、畫家不詳の口繪。其裏、目錄半丁分。以下本文第一丁表。本文は、廿一字位一行、八行半丁。輪廓、每丁にあり。跋は、天地をあけて、八字位一行、五行半丁、松葉亭の署名の右肩に松葉一個を描き、署名の下、角（かく）の印で、ミツモリと訓める。

○

靑樓夜話色講釋

年代、寛政十三年（享和元）春。著者、一九。自畫。

體裁、小本一冊。序本文跋、丁を追ひて至三十八丁。自序は、十字位一行、五行半丁。此の自序、第五丁裏まで。その裏ヒラキ、自畫、その裏（第六丁裏）、「天地人の目錄」第七丁より本文、廿字位一行、八行半丁。插畫あり。本文の末、「青樓曲　少年行」は、第三十六丁裏。跋は、若松亭。初め、「色講釋跋」の下に、上下を開かせた形の印形に、若松亭とある。跋文、十六字位一行、六行半丁にて、一丁半。最尾、略緣起等の廣告は、第三十八丁裏の一面也。

○

青樓娭言解

年代、戌孟春（享和二年）版。著者、蘭奢亭主人（薫）。畫不詳（一に、子興といふ。）跋、和樽。

年代の享和二年は、洒落本書目「新群書類從第七、書目所收」にもある通り、此の享和二と見るは正當である。「江戸趣味」誌上、嘗て朝倉氏の物された洒落本分類中、此の本を寛政二年とせられたは、明かに、戌とあるに拘泥した錯誤。著者が蘭奢亭であり、且つ此の形式内容から謂ふも、禁以前の寛政二年ではない。却說、著者の蘭奢亭薫は、青本數種の著あれど、洒落本としては、此の一種なるが如し。傳は、「江戸時代戲曲小說通志」其他に見えてゐる。狂名橘加保留、又奇南樓、文政七年歿五十七歲の蜀

山人門下の狂歌師であり、本業は煙草屋の主人。元飯田町中坂に住、三河屋彌平次と通稱したと。

體裁。中本一册。丁數、口は、序・目錄・序說等にて五。本文は、ヒラキ口繪の左、その裏面より始まり（これが第一丁）、至四十五、外に跋一丁。序は、原本初め一丁分落。卽ち「心之主人公」以下は、第二丁表である。此の自序、一丁半、其裏は、第一より第五の目錄。次ぎ（序の第四丁表）より青樓妓言解　蘭奢亭主人作云々の序說。此の分一丁半。次ぎ（序の第五丁裏）はヒラキにて、所掲の口繪。此の口繪の左の半丁、が本文第一丁の表。その裏「第一」として以下本文。（此の本文、外のカコミの線あり。）字詰は、序は、八九字詰一行、四行半丁。序說は、廿一字位一行、八行半丁。本文略ミ同字詰にて、八行半丁。跋、二十字位一行、七行半丁。跋者の和樽は、當時の狂歌師として有名な男。祭和樽ともいひ、髮結が本業、戲作數種を見うける。此の跋、署名の下、鈍々亭（ドン〳〵テイ）に因んだ、太鼓の形の印形がある。

此の「妓言解」は、作中作もあり、又、落咄を演ずる箇處もあり、且つ人情に搦んだ所もあり、末期本の特色著しいが、また鯉丈（瀧亭）などの風韻もあつて可笑しいもの。殊に、三馬等の中本に見受ける、本文中、身振りを現した小圖など（此校本は、已むを得ず之を略いたが）、中々、後の型を爲したものかと思はれて、床しい物である。

以上、第一卷は、全部遊里本であるが、中、更に描寫の場處によつて別けるなれば、

○

吉原本。郭中掃除。福神粹語錄。銚子戯語。遊僊窟烟の花。通志選。廓簾競。房情記。取組手鑑孔雀染勒記。青樓惚たて貝。廓數可佳妓。傾城傳受。青樓眞廓誌。青樓夜話色講釋。青樓娭言解。

吉原（假宅）本。通俗雲談。假根草（深川）。

深川本。居續借金。意妓口。通言東至船。

品川本。南樓驛路雀。

（吉原・深川品川本）三人酩酊。

となるのである。更に、以上を最後の推定に據る年代順にこれを並べるならば、第一の郭中掃除より第七の通志選までは其儘。（以上を、洒落本禁の寛政二年までとする。）以下は、房情記、取組手鑑、假根草、惚多手買、通俗雲談、意妓口、傾城傳受、三人、酩酊、廓數可佳妓、青樓眞廓誌、（以上を寛政三年以後、末の十二年に亙る作とし）、廓簾競、色講釋、娭言解、東至船（以上、享和・文化期）としたい。

以上、簡雜ながら、解題と名づく。（七月二十一日稿）

洒落本集成　第一巻

目録

郭中掃除……一
（愚人贅漢）居續借金……三
福神粹語錄……四五
南極驛路雀……七五
娼註銚子戲語……一〇七
遊僊窟烟の花……一一

通志還……一〇七
東都妓娼 廓簾競……一一九
東山見香 意妓口……一三三
不粋照明房情記……一五一
取組手鑑……一六三
孔雀染勒記……二一三
青楼惚多手買……二三二
通俗雲談……二五七
通言東至船……二七五
奇談 假根草……二九九

青樓夜話 廓數可佳妓……四二一
女肆 三人酩酊……四四五
傾城傳受……四七五
青樓眞廓誌……五〇一
青樓夜話色講釋……五二一
青樓娭言解……五四九
端書
解題
補遺
卷末に
再び卷末に

郭中掃除

全

郭中掃除序

北方に里ありその諸分意氣形をよくしるを魂といふ魂といはるゝ迄の費幾千兩といふ事を知らず化して粹となる名けて膽といふ膽といはるゝ迄の費又幾千兩といふ事を知らずかくの如くにして始めて大盡といはるゝことを得たり若夫金の費少きときは揚屋に遊ぶに詮なし金の費少して奢大いなればなり故に數萬兩にして牽頭阿徒に扇れ風に御てふわと臺へ上る事を得たり大夫格子の揚屋へ來る實に天女の粧を凝し七襄の妙を奪ふ今を以て論すべからず壹分と貳朱と是を笑て曰く萬八〳〵われ〳〵色々手工多を盡し夜の目も寐ずに媚してさへ一二兩の床花を取事なり難し何を以て數萬兩の金を遣はせる事あらんや是古今大小の辨なり昔椀久夢に胡蝶となりて中の町

に遊び菜種の花を蒔散し戯れ樂しむ事ありし人みな大盡〳〵といふ金を多く遣ふ故に大盡といはるゝか大盡といはるゝゆへに金を遣ふか必しも分あらん是を名けて此里の物化といふ

金壺

福輪道人題

郭中掃除雜編

青物論

關々とやわらぎ啼く雎鳩のみづどりも河の洲をはなれて雪にしつぼり土手の鷺　かよひくるわの色遊窈窕とみやびやかなる淑女のなまめけるどこやらの女郎衆にうつゝをぬかし塵芥とねてもさめてもわすれやらぬ粋も不粋も左右のなじむきれるに心をなやまし琴瑟鐘鼓をもつて打はやす音曲も妓婦牽頭の三下りにおされ柳よく直なる柳いやな風にもなびかんせ柳はどふした答でいはく柳はみどり花はくれなゐ歌ふも舞ふも決の聲實太平の代の其しるし君の恵みぞありがたき〳〵打ておけよい〳〵〳〵爰にさる大盡の通ひ給へる郭あり茶屋を皆川屋といふ此大盡屋號を給りてより古文字屋と申とかや中にも祖醴は郭にて粋といはれて端手ならずくろ羽二重の着る物に黒縮緬の長羽織ほうろく頭巾紫の新造禿の朱を奪るよそほひは古本買の目利にも一大家とご見へにける茶屋が方へ御入あれば亭主新右衛門是は〳〵祖醴先生の御出マア〳〵あれへともてはやす祖醴なんと久しい何か風雁にこへられ思ひ

ながら参らなんだ【新右女房明】コレハおめづらしいお噂毎日〳〵お噂ばかり申て居ました【下女鶴】御きげん様と盃肴持て出る【若者元兵衛】もし旦那此頃藏前でおみかけ申ましたけれども御つれ方がござりましたゆへ御遠慮申まして御じぎも仕りませぬ定めて御出であらふと内でも咄して居ました【祖鹽】チヽサ来たかつたけれどもつれの親父は道学先生とてふきみそなめたやうなやつ此やうなものと同道しやうよりむしろ曲藝のやつと同道せんがまし殊に出用もあれば是非なく戻ッた官の俗物たる事知んぬべしといふて横になる【女房】もしおまくらを上げませう【祖鹽】クレよからふイヤ此屏風は誰じや得手もの〻東光かこちらは志斎かイヤハヤ何も俗筆〳〵此頃おれが本屋どもに頼れ天狗咄といふ本を拵らへ即おれが書て石摺にさせたこんなものではないと鼻高ふいはる〻おかし【亭主】それは存ぜぬ事ながら拝見仕りたいそれにつき何とぞ旦那の御作の曲馬の詩とやら名が高ふござります直に旦那の御手で一双分頂戴仕りたい【祖鹽】イヤあの曲馬の詩の事あれはおれが作の中のいつちくずじやがもんもうどもの目にはよいと見へるよい詩はいくらもあれどとても目に及ばぬ事【女房】此頃あなたを御尋遊して室町とやらの新介様と申方御三人づれにて御出あそばしましたそれは〳〵御堅いお方斗酒はあがりませずこわ〳〵女郎衆を御すゝめ申ましたれば事によつてはあそぶまいものでもない先町處并に家名を聞たいとおつしやりますゆへ江戸町はどふござりませふと申たれば人気があらからふと御意

なされますそんなら京町と申たればこれは又ついしやうすぎていかゞなどゝおつしやつてこまりましたちふ角町ばかりと申たれば其角のあるがせめてもよからふ家臺はどれへ遣すとおつしやりますゆへ山口などはどふでござりませうと申たれば山口おもしろい山は此方どもの好む所と御意なされましたあの御堅い御きしつでは山はあたりそふもないものでござります【祖禮】イヤ〳〵その山の事でないぞしてどふであつた【亭主】私が御供仕りまして山口へ上りましたイヤハヤ座敷のつめひらき使者の間の請取渡しのやうでおかしふござりました夫から御銘々御挨拶ありて御盃すみましたそこで寸貞様とやらのおつしやりますには何れもよい生れつきでござる恐らくは諸侯方の奥方にしても恥かしからぬ姿色ありいかに薄命なればとてかゝる性善の身を持て貞女烈婦ともなるべきものを禿達から薄情の土地にそだち終浮れ女とは成事と額にしはをよせ苦々敷おつしやりましたそこで御つれの御方樣先生さやうに御感慨ありては座鋪が寥々になります本興に乘じて參りました興盡なば罷りませうと御盃などが廻りました寸貞様成程思はず歎じ申した是からは打くつろいで吟じませうと何か吹出しそふな歌を御うたひなされました始めは皆々こらへて居りましたが竹野がチヒイと申しますと一度にどつとのめりましたそうじて此里では朱子學は取ませぬ【祖禮】ハヽヽハア〳〵彼等は皆宋儒の頭巾氣を免れぬやつ殊に朱熹が理毒に喰ひ醉ふた客それ鴨川で水雜炊を喰はせい【亭主】イヤ湯豆腐をあげました【祖禮】親

父は給たか〔亭主〕ハイ隨分あつくして上ましてもにへるやうにして湯ばかり持てこいと二三盃あがりました〔祖禮〕ハテおかしい事にへゆなら例の烏の山めくらに喰はせればよい〔亭主〕又旦那の御得手ものが始りましたと笑ひの最中大門の方からいせ嶋のもめんどてら松坂嶋の綿入羽織羽二重の白むくもふるの丸くけ帶じだらくに前へしめて來るをみれば三猴なり〔亭主夫婦〕これは／＼三猴様御約束遊ばしたやうに祖禮様も御噂でござりました〔三猴〕ムウ毛唐人はきているか〔祖禮〕粕爾宜が聲がする嗅付たな／＼〔三猴〕イヤ／＼そうでない至體くる氣で內を出かけたればこちの伊介めにくわんをんであふて御供いたしませうと云おるゆへにつれて來た道であいつがおまへの御名を三の猴と申まするはどふしたいはれでござりますといふたイヤおれが名は目にもろ／＼のふじやうをみて心にもろ／＼のふじやうをみざる口にもろ／＼のふじやうをいふても心にもろ／＼のふじやうをいはざる耳にもろ／＼のふじやうをきいても心にもろ／＼のふじやうをきかざる是で三のさるとついたといふたればアイ成程感心つかまつりましたあなたもさる御人じやといけない地口でどふやらかふやらさるにしくさつたしかしどふでこの様に每日飲んでばかり居るゆへ近所では一盃樂先生などゝいふそふな本のさるはしりが赤く此さるはつらが赤いまづ一ッのみませう〔女房〕たつぷり〔祖禮〕此牛房でもおつ付ろとはさむ〔三猴〕是はきつい丸出し忠彌〔祖禮〕又駄口の渡しかと笑ひの最中一興和尚はうてなとつれ立たいこの金名醫

者の類助跡おさへ二人禿に手を引れ茶屋へ来る［亭主夫婦］是は一興大盡の御入と立さはげば［一興］は

鼠ちりめんの着るものに八丈の綿入羽織白繻子の帯しめ淺黃縮緬の丸頭巾よろめきながら座敷へ通り禰宜ス毛唐スこれは二人共よふ揃ふて御出何んと思ふて［組繻三猴一時に］鎌倉へ打立時刻はいつ頃でござるな［一興］さあればこそ大事の事を御尋なれ丹波與作が歌に戀といふ其源をたづぬれば屎尿穴の二ツなりけり［皆々］一どに笑ふ［金名類介］これは〳〵御出來なされましたどつと〳〵さはぐ［金名］百會から出るやうな金ぎり聲でいけぬめりやす［類介］しゆろ箒をはづして口三味

せんを彈〔うてな〕ナヤおふたり共によいごきげんとあいさつする〔女房〕もしうてなさん三日このかたのおるつゞけいつぞやからすねばつかりで御氣がしれぬとおつしやりました是でもいひぶんがござりますか〔女郎〕もしお岡さん聞ておくれなんし夕部もわつちが事を此女郎はしやれかうべのやうな女郎だといひなんすわつちもごふはらさにそのやうに御氣にいらぬわつちならあいなんす事かござんせないといふたと思ひなんしじつはわれがかわゆいからいふのさといひなんすからしやれかうべがかわゆいかへと申しんしたありやうはにくけがないといふ事だといひなんすわつちもまけない氣でおまへの此膝ゆすぶりは何ゆすぶりだといひんしたこれはわれがおやぢのまねさともふ〳〵むだばつかりいひなんす〔祖禮三猿一時に〕口說咄は跡での事丸ヌあけふとさす〔一與〕ちよつと〔祖禮〕しからば三猿ヌとたのむ〔亭主〕何やら女房の耳をなめて是はお二人共になぜおそい元兵衛ゞかけていけといふ所へ〔みさを〕新造禿若者をつれ立來るコハお二人ともによふ御出なんしたとちや屋夫婦へもそれ〴〵のあいさつする〔亭主〕餘りおそい御出御きげんをそこねやうかと氣をもみました〔みさを〕さうおもつたけれどぬしのくれなんしに諸葛丹とやらの七才子の綺の表具が出來て持てくろじきにかけておかずばしかりなんしやうといろ〳〵きをとりおそふなりんしたそれに此中ぬしの思ひ付でかはつたまんぢうを喜介どんに云つけなんしたこれもおそく出來てやふ〳〵持てまへりんしたとおめずおくせず祖禮と三猿のあひだ

にすはるけにも組禮のあひ方とはぬけめのないでしられけり 三猿 一ぱいのんでさす みさを おゝさへ申しんしやう 三猿 新造へあいをたのむ 喜介 旦那方御きげんよふ御あそびあそばせと何やら重箱を出して御たのみ申ます 組禮 一ツのめといふ 喜介 茶わんで二ツ三ツのんで女房へ小聲にて何かいふてどなたもおツつけといふてかへる　かゝる所へ清たき来る何のあいさつもなく三猿がそばへよりホンニ何風が吹たかよく三人一所にあつまりなんした 三猿 しれた事神風が吹て神あつまりにあつまりたもふ 清たき ムウおまへ此里の神かへどふりできつい風さ舟がひつくりかへりそうなもんでいす 三猿 さうかしてせんどから新造出す程に助てくれいの拜みいすのといふでないか 清たき 三猿がせなかをぽんといはしてみさをさんうてなさん聞ておくれなんしあの様に肉しやうの事をいひなんしてはナ女郎の恥はぬしの恥ぬしの恥はわつちが恥くがいする身の上だからたのまいではさ 組禮 サア〳〵かけられたこれは叶へてやらずばなるまい 三猿 こんどはこんどじやがあのやうに禿は大きふなる又おつ付であろ 一興 取あへず世の中の嫁はしうとに早ければ禿新造になるはほどなし 金名類介一時に これは〳〵とうるそく妙ともてはやす三猿丸ヌの狂哥久しいものさあいらが日頃ありがたがるくわんをん殿や九郎助などがいくら拜んでも一文にもならぬゆなそれよりは生たものをとりにがさぬやうにしやる外はあるまい 清たき ぬしやきつい佛さんがきらひさぬしやまへのなんだへ神道者かへ 三猿 此国に生れて神道にやとい

ふじやはないはづじや殊に女郎の身の上は神だらけでなければならぬまづ文をかくにも神かけていのり〳〵起請をかくにももつたいない僞八百に八百萬神文をやるにも通ふかみ佛がそれほどたつといなら文を書にも佛かけていのり〳〵起請の時に三世の諸佛文を遣るには通ふ佛などゝ書たがよいさう書たならじきに切れ文を喰ひそふな事よし佛が利生が有にもせよ僞八百を開てやる佛もあるまいじつにあるなら地ごくがものさ 〔一輿〕取あへずうそをつき地ごくに落るものならば吉原中はみないかゞせん 〔組魂〕これは此里のくろほしへあたり〳〵 〔亭主〕いたみいります 〔みな〳〵〕一同に笑ふ 〔うてな〕ばからしいそうたいおまへ方の一座はみなわる口ばつかりいひなんすせんども類介さんが昔からがさの紙へ包んで持て來なんした鴨をにてみるもふとて喜介が鍋やきをしかけてみんなしてたべいんした跡で新造衆もやり手衆もどふかおかしくごいすねがわるいとおさんどんがもどしなんす喜介どんがよくよく見ればゐのしゝとやらだとさそれゆへ一與さんにありやふにいひなんせとせめたればもどしたはししだもしらぬが喰せたものは鴨だといひなんすからくはぬものをはく事がありいすかとつめられて聞いておくれなんしくわぬものもはく事があるとみへておらが方のげんじやう三藏が彌陀の三尊をはいた事があるよもやあみだ汁を喰ふたことはあるまいにとぬけなんす 新造きよむらまだ聞てくれなんしそれからみんな心持がわるいといひなんすアノ類介さんがくすりをやらふとむらさきいろのうす赤いが

んやくをくれなんすみんなもらつてのみんすとづつうがするやらもどしたり下したりむしがかぶる手あしがつめたうなるらんさはぎさたべたほどのものがみな死そふになりんしたさうすると下でもだんなもおかみさんも御出なんしてはやく良澤さんよびにやれあのいしやの類介はちや屋へ斷いふて一興さんのはらだちなんせんやうにして今からよせるなといひなんしたそれから良澤さん來なんしたこれは古方だといひなんした禿こてふアレよし松さ 祖禮よし松は彼伊五といふ馬鹿と人形まはしたぐはんぜなしか【新造清まち】ぐはんぜなしでありんしよよあのやうに人をたまごろしにしなんすもの【三猴】さればこそなま古方大ごろしのもとい【金名】古方もない義でござります【類介】是はめいわく千萬しかし人を養ふものは穀肉菓菜なりしゝが何のこばい事かそれゆへ喰せた一興大盡もめし上られたでないかそれを喰つてむねのわるいといふが病じや病を直すが藥じや吐たり下りたりするは藥の効じや藥瞑眩せざれば其病いえず何も恥る事はない祖禮先生さうではござりませぬか【禿みやの】こゝな唐人めおいらもあぶないめにあいやんした【類介】おのれ女郎に出るときおれが目をあかしてやる【みやの】じつだかへかゝる所へ南角來るイヤ何れも樣大壯會これはおもしろい【祖禮】ナント角ス足下のくるのをみさねもうてなも清たきも今や〳〵と待て居る得手ものゝ名文でたらし文を書てもらひたいといふ事そふな【南角】かしこまりましたしかしこの頃はそつちでもこつちでも文の文章が上手じやとて頼む〳〵にこ

まりますどふやらわしをば此里の文書のやうにいたします 祖禮 シタガ春會親父はこゝふといはぬか
南角 いろ／＼先生の御内意じやとさそひましたけれども例のへんくつ者まづ悪所といひ食物もふじ
やうなり殊に女郎の三ぶとん錦の夜着さりとはむさくるしい

中でのやりくり人の一身に尻ほど
きたない所はないそれをむさいとも思はず錦で候と大さうに思つて居るつく／＼思はば嘔吐すべき事
なりなどゝ悪たい斗申て居ましたそれはさう先生の思めし付の名饅頭はいかゞなされました 祖禮 イ
ヤ大事の趣向忘れて置た喜介が持て來た重箱もつてこい 女房 持て出る 祖禮 ふたを取て予天の靈寵
によつて于鱗氏の教を受て云付たる此まんじうとしかつべらしく出す 三張 取て一口喰つて是は葱臭
くて喰れぬと苦い顔して居れば 一圓 は三ツ四ツ喰つて苦も甘もなんともない 祖禮 取て十斗給る其
外みな／＼へ手づから遣る 亭主夫婦 は是はめづらしいといやながら無理に喰ふ 南角金名頼介一同に
どふもいへぬとほめながらかんにんなりませぬ今一ツといふ所へ けいこのさもんみや二人つれにて
これは旦那さんがた御そろひなされといふてあがる 祖禮 盃 やるこれを肴にとくだんのまんぢうは
さむ さもん ハいたゞいて半分くふておかしな顔して中から葱を引出しこれ何かねぎのやうなものが
はいつておりますといふ みや は心わるいかして目をしろくしてのみこむ 女郎共 も多くは喰ずにお

く〔禿〕はなんの氣もなくうまそふにくふ〔祖禮〕膝立直して扨もわづか十人そこらの人でいろ〳〵なるものなりたとへば人の心の同じからざるは面の如しこれをもつてこれをみれば億兆の人の入込この里區區たる俗智をもつて量り得んや此まんぢうは一時のたはむれ但李于鱗先生の癖を僕まねたる事にて申さば少き事ながらこれを以て此里の經濟を說んに何ぞ難からんまづ三猴スが臭いといふは正直より出たるしやれなり又一興スが苦くもなんともないといふは心を虛にして無心の樂よりいゑるすねなり茶屋夫婦がめづらしいと義理でくふは商賣がらのへつらひなり又南ス金ス類スがどふもこらへられぬ今一ッといふはおれが方への義理もあり又二ッには俠を立る氣で俗人共の知る所にあらずといふまけおしみより出たる所申さばこれもすねなり又さもんがまんぢうの中からねぎを引出し何かはいつて居るといふたのは物をかるはづみにするすつかりといふいやみのくせより起る妓婦根性なりみやは目をしろくしていやながらくふたはもうさもんがあたりさはりを見てそこらへ氣をとほしたるわるずいなり禿どもがなんのわけもなくくふたのは禿は禿にて差置るべき事なり女郎の喰ずにおくはいやみの最上なれども異味を嗜まずさすがは女郎衆はどあるといはるゝ合點內證ではおかぐらもくふ茶碗酒ものむたくあんを丸かぶりにもするけれどうりものなればよくみせてうらねばならぬ尤のいやみなりわづか此席でか程に役のある事也何れもいかゞ思し召と由良之助の氣になつて申さるゝも祖禮スのいや

みならん 亭主 旦那方に御願ひがござります 三猴 神は非禮を受たまはず無心の筋をゆるし〳〵 一興 たとへどんな無印があつてからが何なりとまいらせたくは思へども達磨宗とて一物がござらぬ 亭主 左樣の事でござりませぬ御存知の通此地も近年だん〳〵さびれまする幸御名家の御目かけらるゝ拙者めとてもの事に此里のはんじやう仕り昔の如く上下共ににぎはひますやうに御教訓遊ばし下されかし恐入たる事ながらひとへに願上奉ると彼寺岡平右衛門がかたき打の供を願ふが如く思ひ入たる風情也

組禮 何思ひけん頭巾をとつてつぶりへあげ扇を持て身ぶりをしけい子どもうたへ〳〵イヤ其元は茶やものではなふて大きなちやらものじやなんとたいこ持なされぬか尤わたくしも蚤の頭を鉄でわつたほどむねんなともぞんじて一兩年此里の經濟の事をこしらへて見たがようおもふてみればはまつたら此方のしんだいがころりしにせてからが跡で馬鹿ものどちらでも盡さねばならぬといふは笑ひながら深みへいつて河童に尻を抜るゝやうなもの處で止めた聞へたかとかく浮世はこふしたものじやッヽテン〳〵 三猴 イヤ〳〵くされても鯛じや〳〵 一興 今の身振始終堀川先生でやられたおそろ〳〵去ながらさいぜんのおれが由良とは三猴スどふであつた 三猴 丸スのしうちはよいけれどもどこやらがなまけた處があつていはゞ少長といふものじやおれがすると生で梅幸でやるはやい毛唐がしうちはぬけめのないしやふなれども持りやうの實惡の場がぬけぬ殊にちとけすばつた所があればまづ杉暁とい

ふものじや 南角金名類介一同に イヤ〱皆様の評判さうでない尤も堀川先生のかたはあれども青きは藍より出て藍よりも又青しどふでも此お江戸での親玉外に相手がござりませぬ女郎さんどふでござります 女郎共 にが笑ひして居る けい子さもんみや 三味せん彈止む 新造禿 大欠口する 亭主 是は是はありがたいそれに付ても御教訓ぜひとも御願申ます 神禮 コレ禰宜ス爰が貴君の得手もの天ノ逆ほこをほつたてゝ彼青海原をさぐるこんたん大吉原國の中の町で教をたれてやり給はんか但しは又丸スが家の以心傳心彼九年面壁とて尻のくされるまで居つゞけ打たるしつぶか今でも女郎共が床かざりに達磨をかざるは此いはれでありそふなものおしえる氣はなかばしか 三猴一興一時に 床の一段女郎と客との諸わけはいかやうともいたそふが此郭の繁華になり昔の揚屋の廢たるをこし太夫格子の絶たるを取立る計策はハテくされの役じや毛唐スかたり給へ南角ス筆をふるい給へといふ 祖禮 是非なく衣紋つくろひ上座に直る 三猴一興 左右へ分れ手を拱いて聞く 南角金名 筆と料紙を持てひざまづく類介第二番目郭中掃除制談の始り左様

一此里往古の全盛はいふまでもなし二十四五年以前までは太夫格子といふ者ありて揚屋に遊び左ばかりの繁榮なりしが二十年このかたいつとなく物淋しくなり太夫格子も次第に賣れず揚屋も從つて亡びたり然るに此里のものは但世の中不景氣ゆへにかく成行是非なき事とのみ思へり其理なきにもあらざ

れども大なる心得違といふべしいかんとなれば東都は日本の惣たばねにして五方の人の集る大都會なれば此地になきものゝ他にあるべき理なく他にあるものゝ此地になき筈はこれなき事なり京大阪今に太夫天人ありて揚屋も相應に繁昌せり尤昔にしかずといへども有ル物ものゝ絶ぬといふ程慥な證據はなき事ぞかし若不景氣ゆへに以上の三品絶たりとならば上方は先につぶれ此地に斗残りたりといはゞ閊へたり畢竟仕方不調法より起りたると知べし細見には太夫九十匁格子六十匁と書ながら再興せんと思ふ者壹人もなきはいかなる愚昧ぞや夫世に盛衰あり物に變化あり風俗は人物に從つて移り行ものなり上方のものは爰の所をはやく合點して己が仕似せを手本とせず客の仕形を手本とす故に客がいか程わるがしこくなるとも此方も又手をかへ品をかへて遣はせるやうにしかけいやでもおふでも取のめす事なりかくいはゞ必いはん一體上方と此里とは其風俗別なり上方ははりなく此地ははりを第一とすなどゝいはん是亦いはゆる負おしみといふものなり左程はりつよき此里になぜ太夫格子はなくなり揚屋はつぶれたる事ぞ河岸と同直段なるひつぱりはなぜ出したるといはゞ何と答えんや爰をよくがてんすべしせんずる處己が仕似せを定規として客を定規にせざるより起りたる事なり然る證據は客がだんだんわるすれになり安店へは茶屋に損なり舟宿より行がよいといへばそれなりにて濟をもつて知るべししからばはやく其機を察し費少く遊び面白くなる様に心がくる肝要なり今より年中行事の法を考へ人

の思ひ付やうになり繁華にさへなりたらば太夫格子揚屋も興るまじきものにもあらず愛が東都の廣大なる雛有ところなりとかく大取より小取といふたとへのごとく物事をかるくして五人より十人十人より十五人客の數多くなるやうに工夫あるべき事第一なり費さへ少く遊び面白くなりたらばつつかけより茶屋へ行が面白く初會より裏に行が面白く裏切より名染が又面白きは人情なれば誰か嘗へせわ〱敷き磯ぜゝりをする人あらんやむかし此里繁昌の砌りは出口の柳とて大門に植置しとかや至景色ばかりの爲ならず女郎の客を送るとき枝を手折て別れをおしむ古實なり我が朝のみか唐土にも此例少からず今も上方にはありしとなん又三月櫻を植ると七月燈籠をかくることは是も事實のある事なりこれらのたへぬこそ幸なれば柳を植る心得あるべきこと勿論なりすべて春夏秋の初までは人の心も浮き立ものなりそれよりそろ〱淋しくなり引込思案の出るものなれば此節一趣向なくんばあるべからず九月は兩側へ菊を植へ籬を結び夫より紅葉を菊と植替にすべし扨十二月初より座鋪へほうれい綿をしき投入立花砂の物等をいかにも目に立やうにありたし此月別して人の氣の傷む時なれば年忘の設ともなるべき事なり人の心に愚なるものにてなんぞかこつけ事なければ行ぬものなり茶屋にて一盃樂みて女郎の道中いそ〱しきを見れば己と遊ぶ氣になるものなり春會翁が郭中經濟錄にくはしければ予は其大概を論ずるのみ是等の趣をよく合點して絕たるを繼ぎ廢れたるを興す闕たるを補ひ過たるをそぎ人情に

さかはすば忽此里繁榮し百年のむかしに遡り貴賤群集袖をつらね晝夜ゐいとふ〳〵の聲絶へず太夫格子も再出揚屋〳〵も軒をならべ又あいがたき太平の代のよき遊ならんとホヽうやまつてまうす

大尾

愚人 贅漢 居續借金 全

序

男子傾城はじめてひらく十七の頃とは。綿と扇の春駒より。三千三百三拾三日ほどまへの事にして。當世ハ。戸の月にも足らざる年に鷄卵をくらつて。細腰に仕ん事にくるしミ。禮ハ松の内の仕まひを逃ん事を案じ。樂は三廓の堂に目をおどろかし。射は三絃箭の大家と心得。御ハ肴の名乘と思ひ。書ハかに。ミのしの小切を費し。數ハ生玉子に手際を見せ。六藝の内一ツもしらず。只忙然と月日をおくれ共。予が大望は深川に三年。吉原に三とせ。新宿に三年。四季のもやうをむねに納めて。世を蝮蛇と思へども。既に兵粮盡て。樓情もむなしく。妓婦に後をミせければ。西驛の企も止まりて。今ハ書出しを丸めて枕とし。たのしミ此中に有。富貴我に於て。浮め

る雲のごとしご拗強てハ見ても詰らぬ故。うそご戀こを二タおもて。兒手柏をどう取ッてご。ちゐ袋をも〆木にかけしぼつて見ても出來ぬハ金。愚人贅漢の借金組と。仕まひハ父母に拂ひの尻。拭ハせるのも是悲もなく。是も世の中なんと。正月筆をこりぬ

かにはゞの尻をぬぐつてやう〳〵と
育れバ又紙華のしり

天明に三を
卯たぬ春

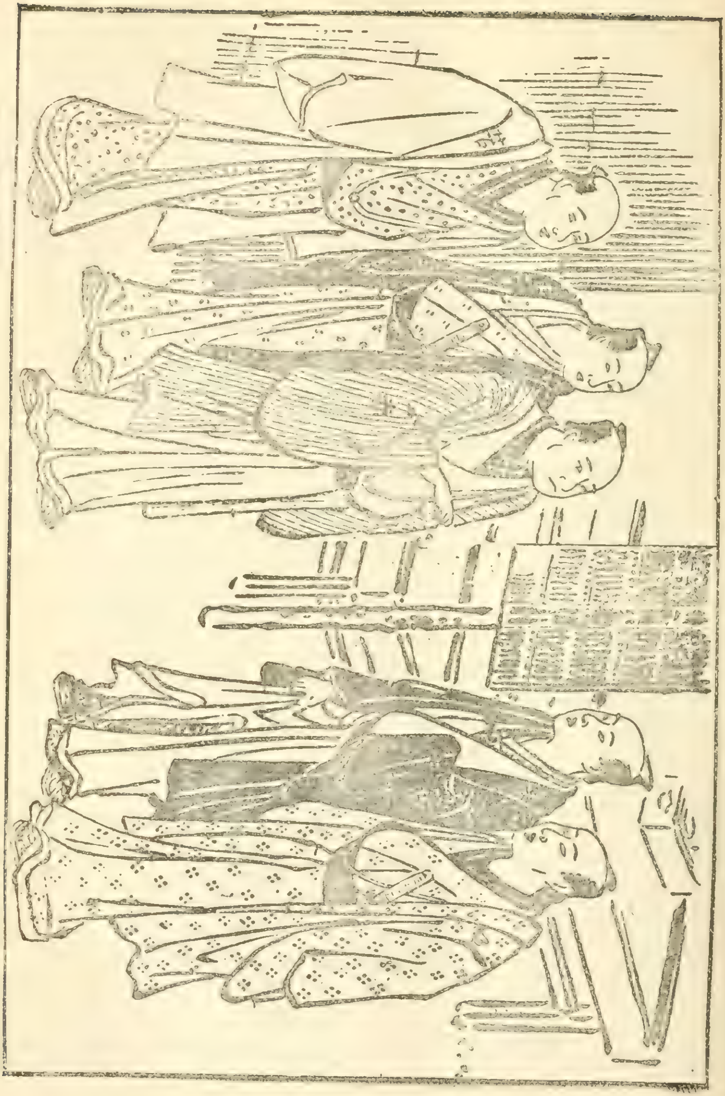
蓬萊山人歸歸述

蓬萊山人

愚人贅漢居續借金

諺に女郎買のぬかみそ汁といふ事を。いかなる事と尋るにぬかみそ汁にはあらず。我高慢知るといふ事にて。人にすれば世の中も角ひしなく。高ひ面もせずに付合もよく成といふ諺なり。又可愛子には旅をさせろといふも。足袋をはかせろと云まちがひにて。板じめのふとんのうへも。はりくといわぬやうにといふ諺也。是はみな世俗の心得違にて。太平の代のけむ（マヽ）印には。傾城といふ得手ものに魂をとらかし。父母に苦勞をかくる息子に。醫を忝く思ふはすくなし。多くのその中に。世上を知つたでもなく。又しらぬでもなく。しならぐならと。しやほんの玉のゆうれいにひとしく。日を送るへんてこは。いかなる者ぞと其名を見するに。山の手の大先生。四方の赤良。燕十。菅江雲樂。歸橋。此愚人男。今日はめづらしくも。富が岡八まん宮の地内に。晴天十日の大角力有ければ。札はいたみの酒きげん。足も小口を菊の後。見物に氣は樽さじき。小角力關脇まくの内。勝負は墨もかわかぬに。賣る勝負の番附は天にもひゞく打出しの。大皷に木戸を出る人は佛餉袋の綻たるにひとしく。大入此うへも有るべくやと。行かふ中に五人の作者仲間ハ。一ツ所にこぞつて。何やら相談におよびぬ

【赤良】角力もおもしろいがちつと。土左衛門が蹴合やうで。いきな事はねへもんだ。蟲歯の為には【雲】此論。妙也ことにかの地には。歸橋子の婦人も聞きおよびしなれば。【歸】とんだ事をいふ。仲丁へいくと。尾花屋から。手のねへはち巻をした人形が來る故。左へ土橋を定むべし（と此相談いつけつせずして石橋のきはに立ている）【赤】ハテやぼな事を歸橋子いやれ。錢がなければ孔子さへ。顔濁鄒やなんぞが内に。居候にさへなられたれば。里の金とふくろ首が。きらずをくふときはつまるがならい。少しよつほどわりい【萱】むしばで思ひ付た。小紫が所へでもよつて。鼻の下のこんりうと出やうじやアねへか。歸橋す。【歸】人の所へよつて顔をかすいのはけた膳とも。先生をつれては出られめへなんでもかでも絹ちゐのふとんに。ねやうちんと出るのさ。【燕】とかくもいくくらいなら仲丁の松江屋がいゝ。娘はごうぎによく出る紙よもはおにあらず。赤良がいゝから氣違ひねへはナ。【雲】歸橋がいやがる所なら。なをおもしろいが。又せんどの竹屋の染の江がやふでは。あとにのこりし者は。大なんぎの物さしだぜ。【歸】よし〳〵何でもかでも。きもをなげ出すからは氣違ひなし。サアいかふ（とさうだんきまり仲丁の松江やへは入）【娘きよ】これはおめづらしく歸橋さんゐん十さん。角力が打出すと。外へ出てまつて居やした（とうそなげたす）見通しはかた付て有かへサアどなたもおいでなさりやし【歸】見通しはわりひ。ちんが明ているか【きこ】あいていやすサア。と。（みな〳〵見通しより奥のちんへ行。女はぼんに



茶なのせて來り）〔女郎〕どなたもお茶を。（みな〳〵手にとる）〔ふん〕（茶の色をミて）とんだいゝ茶だ。名は馬の爪か。新宿のみづだまりはみんなこんな色よ。〔歸〕（ハのんでしまひいとそこをミて）お茶わんは何だの。こうたいのくりのやうす。はぎと見えますおしき事にさくやろうそくを。戰場におゐて立テしあと。こうだいの趣なり〔管〕やかましい。吸ものが出た。だまらつせへ（トみな〳〵吸ものゝふたをとる是より酒事有れど年〳〵の本に有ればのべずして略ス）〔娘竹〕（としまなり）歸橋さん。おめへさんはいつものかへ。ふん十さんはお琴さんだつけね。あとの御二人さまはヱ〔歸〕ふん十子どうせふ。〔エン〕だれがよからうか。おこよも三輪へ引ッこんだし。お今はいせ市の女房になるし。どうもだれもねへす。それよ土橋で娘をして居た。おつうとおとへとおやゑがよかろふ〔竹〕どれもよふごせへせう。おとよ聞て來や。（女ハ立て行を歸橋はよびかけ）〔歸〕コレ〳〵やくしやをはじめから口をかけるとがんつくから。廻しにみんな。口をきらせておゐて。かつて來さつせへ。（女ハよせばへ行）〔竹〕おたよさんの廻しはかわいやしたから。せんどほどじやアごぜへせん。〔赤〕コレ歸橋子。いやだのおゝだのといひながら。此ごろゝ來たそうではなしがあじだの〔燕〕みんなにいつて聞かせる事が有る。今日は何でもおめへたちもちてるといふかんさしばつたりをやめて。あくてんのヲゝあついといふ所をいひなさねへわつゝは又お琴にあつて。二ばんめをかきそくなふか一ッ。人を入るか一ッ。わけてみるつもりさ。雲

樂の色男が心もとねへ承知(せうち)かへ　[雲]いさいがつてんのねじめに。かん菊といふ所をやめて。又此方にも仕かた有りさ（といふ所へ）[女]どなたもおるでなさります。モシゐん十さんお琴さんはちつと。[エン]心まゝでも有るか跡でも有るか[女]何さソレ初(しよ)くわいとあとないひきうにするな[エン]跡はいわずとよし。京都なら赤イきれでまけいわいな[歸]やぼつてへしらぶしつ下にけいこのたてもやうか。[みな／＼]ぬい之介とは有がたい（此消事しにし有）[赤]コレ歸燕さん。だれぞ賑(にぎやか)なたいこもちハどうだろふ[エン]まだたいこもちだけ人がらだぞ。歸橋だれがよかろう。[歸]だれでもいゝがコレおきさん。扇鶯(せんてう)も伊八と組(く)んで出るそうだの。居るか聞にやつてくんねへ。[きよ]角力だからどうでごぜへせうか。（きゝに行所へ女郎五人くるおたよおことかたじみゆへ仕かけなきずに上田じまに黒きはんゐりにてすぐに火ばちのそばへすわる跡三人ハおびにすゝのつくもかまわずかべのそばへすわる）[當]モシ去年の本にも出た。おたよさんとはおめへかへ。お噂(うはさ)ばふだんいひやしたが。今日(けふ)ははじめてのたいめん聞及びしよりハきれる／＼。時に深川へくれば。じきにおめへのみかた。さつそくいふ事有り。歸橋さんには。とんだ事が出来やした。いわふかの（と歸橋が顔をみる）[た]大びしやの久かたさんとやら。馬かたさんとやらの事かへ。よしさ。ちつとは女郎買もさせねへければ。歸橋さんもいのちがつゞきやすめへ（ときなづらでしらなきる）[當]そんなにおめへが高く出ても久かたが名を歸橋さんがほつたぜ（とほりも

せぬにしやくる）〔た〕それもよしさ。久かたさんのほり物をしなさるくらゐならば。月見の残りかゐびすこうまへの。狂言の元手でござへしやう。そんな事はどうでもいゝが（と女郎にむかひ）おとへさんもおやゐさんもおつうさんも。火ばちのそばへ来ねへな。そして（客の貌をみて）おめへ盃を。〔女〕（赤良がまへへ盃を持行）どなたへ〔赤〕どうせうの（とエン十が貌をみる）〔エン〕願がいゝ〔女〕（盃をもち行初手がたに居るおつうに盃をやればうけずにすつと立廊下へ行みな／＼きもをつぶし居るおたよハわけをあらんと思ひらうかへかけ行しばらくさゝやき来る）〔エン〕おたよさんどういふわけだ〔た〕（雲楽にむかひ）もしへおめへもつまりやせん。アノ子を一度よびなさつたじやアねへか。それならばつうらだといゝなさりやア。赤良さんも盃をさしなさりやせん。わつちもきもがつぶれた〔雲〕（きもをつぶし）とんだ事をあの女郎もいふ。なんの年ン忌が有つていつ仲町へ来るもんだな。わつちやアなんでもしりやせん〔た〕それでもおつうさんは一度出たとつて。ぬしの盃はうけられぬといゝやす。又こんなわからねへ事もねへもんだぞ（と葛のかんざしでかみをかく）〔雲〕そんならこゝへ呼ンで。聞てわつちがみやせう（とまじめになる）〔赤〕（此せかい一ッ向わからず赤良ハさるものにてしどうたせうちしてさしきを丸くおさめんと思ひ）しよせんいつた所が金を出して不ふうがを晴るやうなもんだ。そんなにひたいへ海松をみるやうな筋を出した所が。川向ひの立聞。やくにもたゝぬ事だ。おれさへ合點すれば。へんくわ龍逢の

ごとく。先のすきに何へでもつもちいられるが世の中ッアヽいゝ所へ藝者が來た（扇蔦伊八來るをむだないふ内赤良ハおやゑ菅江ハおとへ雲樂ハおつうとやう〳〵きまる）【扇蔦 伊八】今日は角力のおかへりでござりますか。うづと谷風がせうぶは妙さ。ソレ谷風がいつもの左をさして。土俵の際まで。もつて來た所を一ッどつこひと。こたへた形りは。釘ぬきのやうだつたがかあいそうに。うづが形がちいさい故。仕まひはびちや〳〵まけてもよく取りやす。さかいの。角力なぞは見ン物事さ（と見たやうにうそをつく）【こと】（何やらもの思ひすがたにて火ばちの炭をいぢつていたりしが）扇蔦さんおめでたふごぜへすねおりさんはおかわりもなしかへ。（此おりよハ色でもちし女房なり）【扇】此ごろはばゝアじみやして。けふもけさから白髪をぬきやした。わつちが事もやう〳〵と濟でまづ二三日はあたゝかき御膳。（みなみな笑ふ）。モシおたよさん。ちつと見ぬ間にあたまがにぎやか。そこを見込ンで來る人も有（と歸橋が方をしり目にかけて笑ふ此内伊八は三弦を出し二ッ三ッヘシ〳〵とお定りのうた有小冊にして有れバ略す伊八は赤良をみて）【伊】あなたさまは。【歸】犬が下に知たる御方。今楠が在らばさぞほしがらんほどの。ねほける人さ【何扇】是は又かね〴〵お目通りをも。ねがつておりますところ。けふはいかなる吉日ぞやと（もふ少し茶なまぜる）。此末ともにおめを下さりますやうに。ねがひまする。先日はふとくらまへの御方さまの御供で。犬もんじやへさんじましたが。とり〴〵の御噂けふ思はずも御目通りを致しますも

通の此世におふ晦日もおしつけ。さて／＼くろふがたへません（としまいはうぬが田へ水を引やら茶をいふやらとりしまらねごつばなし女ハ火ばちの火を火入へいれながら）［女郎］ちつとあちらへと。いふもふるひけれども。またふるきをもつてとやらで。たばこ盆もつてさあ／＼（とみな／＼を引立る。五人の者。生徳ならねば。まだいゝといふ古きせりふもなく永く坐しきをふさげるも氣のどくと手ン／＼にたばこ入やきせるを持

燕十屛風の中

燕十ハけふふかき狂言のたね有つて床へ入ッてもねずにたばこを呑でかんがへいる所へおことハ紙をかミながら屛風をあけてはいり）［こと］燕十さんきのふは。くわしきお文。とつくりとみやしたが。なを分りやせん。今となつてすむのすまねへのと。水切れの非戸じやア有るめへし。又わたしが是ほどに見せる心いきがよもやしれねへ事も。ござへすめへ［エン］かわつた事をいふ。分かるの分らねへのと。實引をぎミはしめへし。手めへの事をいつ云つた。是からはそつちの氣のおち付くやふに。きのふもいつてよこした通り。なんとなりとほろふハ［こ］そのやうにほりたがりなせへすだけ。なをおかしいと思ひやす。なぜといゝなせへし。おめへが内に斗居て。風呂敷の。なくなつた世話や。せうじの切はりで

もするやうな人ならば。承知もしやうけれど。毎日のやふに。蔦重さんの内や庄六さんの所にふんごんでいるものを。どんな事があつちに有るか。どうして爰までしれるもんだ。しよせん。そんな事をなまなかして。どうだのかうだのといつちやア。おめへもすまずわたしもすまねへ。いつそ永ひ月日の内にやア。おめへの心もしれやせう。［エン］そんなおかしい革足袋の裏へ黐をふみ付たやうな事をいつては。どうで分らねへ。なんでもかでも手めへの手で書てほつてくれたら。心いきのしれねへ事は有りそうもねへもんだ。［こ］それほどにい丶なさる事ならば。ほつて上やせう（と硯ばこと針をかりに行しあとにエン十ハ思ふやうに行しと思ひ心によろこびきやうげんのくだけの末のすゑまでかんがへて置し所へおことは硯と針を持て來ル）［こ］硯ばこも針も。持ては來やしたがほんにほるつもりかへ。しれた事よさあ（と手をまくつて出しおことにか丶せければおことは針を三本糸で卷何心なくすでにほらんとせし手をエン十ハおさへて）是まつた。手めへしんじつほつてくれる氣か［こ］なぜへきうにいやになんなせへしたか［エン］イン ニヤそうじやアねへ。むりな事だと思ハふがてめへが右の手の。鬼十と書たをけして仕まへそのかわりには。おれがほろう。閏正月の蜜柑をゑるやうなやろうでも。そう／＼こけにやアまはされめへ。（とぐつと手をしまい三朝今市の善右衞門といふ身にて鐵のきせるのがん首をやうじにてこうまんにほぢり國分のたばこをやにさがりにすうお琴はきやうげんとはしらずたゞほりたがるとのみ思ひか丶りし所鬼十が

わけ合もいこらずしつてかゝれし仕事なれば此返事にこまりしがとつくりとしあんなきわめ。[こ]なるほどよくしつて居なせへす。此通りさ（トまくつて見せて）もし又わたしが。此ほり物をけす事がならぬといつたらどふするつもりだへ。[エン]どうするとつて。外にしやうが千ンも萬も有ものか。いやといへば。手めへをやめて仕まふ斗りよ。[こ]それではおめへの貌がすみやすめへ。[エン]おれが顔をつぶして。又立る法も有り。[こ]どふして[エン]鬆菁を大勢よんで置た。其中へ廻しを呼でいわふにはお琴は右の手に。鬼十がほり物が有るから。いやだといつて。外の子供をよんだならば。手めへの貌が立そふもねへもんだ。（と二王立にて大やうに出る）[こ]（は是になく〳〵いきつき）そふいふ事ならけさふから。おめへはほつてくんなせへし。[エン]おきやアがれ。此はつゝけあまめ。大門通りのはもちを見るやうに。情のねへうぬが名を。めつたに手にやア付ケさせねへ。せがきの札を見るやうに。やすく書のも。事による。かたじけなくも此からだは母の腹の三階から。揃ひのひやうしぎちやんちやんで。まづ切幕からのたくり出。おきやがれ〳〵と。ないて産湯のたらいへは。千川上水の源をくんで。此職は家主。三升はおやぶんとおもつて。此世のやくしやに出たからは。うぬらが歯じやアとをるめへ。此ごろ内もあんまりな。ごうきにほれたのよめるのと。印判屋がねんきやろうでもおくやうに。人をだます程が有。きりぬいた闘とりじやア有るめへし。大きなからだをひら〳〵と。かるくう

ぬらがするからな。彫ものさはぎもこつちの山うそでもきねでもつくほどな。箔の付た此びんぼう。しめへのくだけもしりながらア、いま〳〵しいつらのかハ。おきにしろよしにしろ。すかねへ氣がねへ茶もねへから。くんで來ひ一ッぱいのむ

雲樂屏風の中

[つう]（は雲樂がそばへ居り）とんだ寒ひねへ。[雲]モシおつうさんとやらさつき坐しきで。あじな事をいゝなせへしたね。どうもわつちがにはしれやせん。おめへをいつ。呼だ事が有るへ [つう]（わらひながら）どうでもよふござゑすはな [雲]それじやァすみやせん。一つ洗つて見せてくんねへ。[つ]おめへも一度呼だもの歟。ついぞみた事もねへものか。そのくらいな事は。しれそうなもんでござへすねへ [雲]（そのくらいな事はの口上がむねにあたり）きこへた。わつちにほれたといふ貌で。おめへの方から盃をさしたのかへ。[つ]マァそんなもんだそうさ [雲]モシおつうさんとやら頭つうさんとやらちよつと見た所はむじからつきりの。小ぬかでそだつた人じやァねへとみへるが腮をいごかせてみれば。おへねへさつまいものあぶらけだぞ。さつき向ふ四ノ二まへ五三で。ざしきへ出た所が。合點が行ねへとおもつたがきこへた。けふの内では。としもわかし。遣ひごろなひだらだと思つてした事

かへ。そうもはかなく。風見のからすを見るやうにやァ廻りやせん。今日の五人の一座は南鐐一片さへくふうが出來ればぽ。此世の女郎は女房とおもつてくらし。ふられた事は雨乞の見物に出たおりと。しつぼのかゐひ奴凧を上た時斗。なんだめづらしそふに。ほれたつらが氣にくわねの。やき蛤と吉ひ地口を。いふじやァねへが。さぼてんといふ手なしでも。春の末にやァかつぼちくひ半夏が入れば竹の子も。くわぬくらゐにうき世を渡り。東中庵のお民には。どこのうちから。聟が來る。花扇が新ごう出すに。十人客も逃たとき。こんな事も聞て居やす最中の月や卷せんべいは近所の子供のむしの種。岡場所くらゐのちよぼくれが。一ツ二ツのさやあてを。承知之進ととるでもなし。錢や金のすくないは。こつちのたての借金組。着物も是ぎり立チのまゝ。内にやァわたのは入つた物は山からちらつたこぶ巻の。ふなより外には何ンでもなし。是をきいたらあきれるだろう。[つ]（は一言の返事も出來ぬやうに先だくどられしゆへ）だん〳〵の事一つとして。むゝじやァごぜへせん重々あやまりやしたが。夫に付ちやァ此事をおめへのほうから洩ハれゝバ。わつちは此ごろ來た者で。どうも外の子供衆のめへゝ。顔がすみやせん。まつたくおめへを。こけに廻すのてうすのといふ譯でもねへから。一つれうけんして。おくんなせへし。[かつ]そうおめへが。顔を立つてくれろとすなをに出れば。わつちも貌づくだ。おめへのつぶれるやうにもしめへがそのかわりに。いやらしい事だが。おめへにたのむ

事が有。どうも足をちかく來られねへ所を。ふだんくるやうに。雲樂さんがいつ日に來た。顯どめであつたの。堀井町で見かけたのと。うぬぼれのやうだが。作者の名のうれるやうにしてくんなせへし[つ]ずいぶん承知(せうち)さ。もふ噂はいゝなさらずとよしさ。どうぞちよつ〳〵と。足をちかく來てくんなせへ。

歸橋屏風の中

(おたよはやうじをつかひながら)[た]歸橋さんけふハ何とおもつてへ。きさかたさんは御きげんいゝかへ。おやゑさんのかくしや(ぶんしやくか)ハやゝやしたかへ [歸]今もつてかゝアハ。すハといふと。大かんしやくきさかたも。てめへの所へ折ふし來る事を太郎やなんぞがはなすから。やかましくつてならねへ [た]せんどあつちに居つゞけをしなすつた時。兒さんや内のしゆびが。とんだ惡かつたそうだね [歸]そんな事をどのやろうがいつた [た]かめ山のばけものが [歸]おもひつき所じやアねへ。おれがくるを内でもしつているか。[た]此ごろじやアおめへに出るを。しつてしらんぶんよ。[歸]そうだろふよ。手めへがこんじやうほねがこじきずもふの廻しのやふに。ねぢれたか

ら。かまわねへももつともさ。（おたよは歸橋が貌をのぞきこんでよくみて又手まへのむれをひろげのぞひて見て笑ひながら）こわひもんだね。小袖の上からも。腹の中がミへるそうさ。爰にこうして居てどんな目にあわふもしれねへ（と手水場へ行しあとに文をおとし有りければ歸橋はひらく其文に△きのふハ御文だん〱と御申こしの段いさゐ承知いたしまいらせいよ〱おしへのとなりになされ候や近ふにさんじとつくりとこうやくの下をあらため申べくとぞんじ候又春のしかけの雛がた御こしうけ取まいらせじきに京へ遣し可申候何事も御目にかゝり申さんとかしことかきし文を見ていつものかんしやくをおこしおたよが來りたらば白ひ共黑ひともかたを付んと思ひしが又心づき此文を落せしハたしかに狂言のすじ也何でも狂言のうらをかゝんと工夫している所へおたよ來る）〔歸〕手めへの行た跡に文が有つたが。少とあけてみたれば。何かこんたんが有りそふだから。やめにした。よくしまつて置けばいゝに（おたよハ歸橋にやかましくいわせんと思しが何の事もなければ）〔た〕これはそさういたしました（と文を手にとりひとりでよんでみる）もし歸橋さん。そうはいゝなさるが。みんなみなすつたろふの〔歸〕見ればどふだ〔た〕此文に有ル事に付て。だん〱の永ひわけさ。おめへもしつて居なさろふ。あざぶのやしきのゐんしさんが。やかましくいつてどうもならねへ上に。正月の事も有り。何やかやで。おめへのほりものもけして此通りさ（と出してみせる）〔歸〕どふともかつ手にしたがいゝ。手めへ手をいたい目して又あつゐめをするものを。こつちの

かまはぬ事さ（たよはけしたゐほりものた歸橋が目のまへにおしつけ歸橋が貌を見ながら）[た]もし歸橋さんどこの馬のほねか。なしのしんか知れねへ客に。おめへの手でりつぱに歸橋と書たほりものを。火あぶりにあつても腹は立たねへかへ。もし日ばかりぼち／＼せずと能く見なせへし。ごうはらじやアねへかへかんしやくはおこらんかへ。是申歸橋さん（歸橋は久しきなじみなりしが少しのわけ合にて遠ざかりし故かく有らんとハかねて合點のうへなれ共是ほどにあいそづかしないわふ共思ハざりしがしあんなきわめて）[歸]嬉しひとこそ思へ何腹がたつもんだ。其譯をいつて聞かそふ。能くつもつても見ろ。ゑんしがそのほり物を消せといつた時。いやだと。手めへがいつたなら。よもやゑんしも。來やアしめへ其うへで外の子供をよんで。正月もきれいにしまつたり。茶屋の娘にまへだれでもして遣つて見ろ。どのつらで何の錢が有つて來られるものだ。ゑんしがいふなりに。ほり物をけしたのは。やつぱりおれに金をつかはせめへと思ふから。そふいふ事もしたろふ。さりとはしんにたのもしひもんだ。（といへど心はつきがねのごとくたれバしんぼうする）[た]おもひ付なら。おきやれ／＼と。いわぬ斗のせりふだね。夫ほどに深ひ心もなく。また金づくでもなく。なぐさみにけしたのさ[歸]しれた事よ。手めへたちの。鼈のへそほども無へたましいで。きつとした事は出來ねへはづよ。去年の仲町の。月見なぞとはちがつて。きさかたが月見なぞは。みんなあいつがくめんづく。又よし原のけいせいはたのもしい

よ [た]深川の女郎にも。いろ〳〵は有るけれど。此ほりものをけしたのは。金づくでも木兎でもなく歸橋さんといふ名にあきてゐんしさんといふ色男に。せけへをかへて見たばかりさ（歸橋にかんしやくのふくろがきれて） [歸]コレおたよ。こつちを向いてつらをみせろ。人にも久しく。だまされたが。けささんまの干もので。めしをくふまでも。てめへ斗はそういふ心いきだろふとは思はなんだ。まことに玉子の四角と。女郎のまことはなひといふが。近ごろは玉子もやきなべにかゝつて。四角になるが。女郎の誠はまだ出來ねへ。是で思ひあたつたは。去年逃そくなつた時。新七も（是は子どもや也）べらぼうだ。おれが内でもねへよふに。何のかのとやかましく。お仲もすさきに居たじぶん。きやくをだました事も有つて。がつてんづくの事なれば。二人がせうちで手めへをにがしあとでゆすればそうおうに。金にもなろふ大仕事をかんを付て。つまめへる。やほな仕方と思つたが今かんがへて見る時は。初手から出て來る心はなく。にげるといふつらで。おれには點をかけさせて。大引でどつこいと。つかまへられたもきやうけんだな。犬めこじきめちよぼいちめ。けぬきとまきのひより下駄。通ひで遣ふ。此五人男の中壹人の歸橋をば。日なたのうるしをみるやうに今までよくもかき廻した。けふの愚人の借金ぐみは。女郎を買にあるくじやねへ。此だゝびろい江戸中に。みじかい羽おりにお太刀をさし。ちろりのかけ干みるやうな。形りのおきやくは女郎のくいもの。金をしほつてとるゆへ

に敵(かたき)をとりに女郎をはぐのだ。うぬが落したあの文も。みせて小言をしつかりいわせ。夫からしゆだんにしゆだんをつけ。しのぎの數でもふやすのか。今じやアそうハとらが石矢でも文でも通らねへ。こふいふからはやぶれかぶれ。歸橋さんがどつこひと。金のいかりをおろしてからは。此の仲町のたるぬきめら。雪かすみかのかりを切り。無ざいにするか。おりやつて。客がせうぶと手をきるまでは。しらみがくわふが地しんがゆらふが。五分でもうごくた人でねへ。ひよつとうなき(すき)にかたが付くと。此やかばねはけいどうのむけへ火に。みなたきしまい。女郎を置たる古跡には。ぺん／＼草にかやつり草。角力とり草女郎花。今でもはやす法は有り。返事はどふだ是おたよ。だれでも相手をまつる屋で。けんくわ賣ルなら買て遣ろふ。くぜつが入るなら賣てやる。みんなもおきてサアごぜへ。此深川のいざこざも。今年で三年ア丶つがもねへ 大びしやきさかたざしき （歸橋ハよくね入て居たりしがひやあせをかいてうなさるゝ故） きさ方 歸橋さんおきなんしどふぞしなんしたか （歸橋ハ目をさましたばこを呑ながら） 歸 とんだ夢をみた深川での。大いざこざ。いま／＼しいあまじやアねへか。 きさ おこし申たがそれほど腹がたつかへ。 歸 おめへの事じやアねへ きさ おたよさんの夢か。 歸 そんなものさ （といふ所へ茶やの男迎にくる） 長吉 ハイお迎(むかい)でござります きさ 長吉さん明ケさつせへ。それからどうしたへ歸橋さん。 歸 おそくなつたこんど來てはなそう きさ らつとで

もはなしなんし　〔歸〕何でもこんどの事〳〵（といひながら羽おりをきて出るきさかたもはしごの下までおくり臺所の上りばなにこしをかけ）　〔きさ〕おさらばよ。　〔歸〕此間に來やしやう（と門を出れバからすがカアカア又内のしゆびも惡く親るいのやかましきをきかん事をあんじ）

吉原の大の鈍金無卿（どんかねなし）の御哥に

後序

大門に伏勢有る時ハ。新造禿面をミだるとは。鴻雁の杜撰にて。雁は嘘八百。智恵の菜は。三文の我朋歸橋なる者。一文錢か生爪の智恵をふるなの辯舌で。東深州の愚人男の大一坐。夜は何時ぞ引四ツの拍子木もせはしなく。歸橋にてうご大びしや。光り長閑き象潟と出放題なる戯言も。いいじやァねへじやァねへじやアねへかと。御評判の數かづさやが。利へいを滿と儲溜蓬莱山人と積重ねたる表題を。愚人贅漢居續借金ご題して。其後尻に。是も他生の燕十が。筆を染の井が。閨に探る事しかり。

卯 そで

かためた春

志水裡町齋

福神粋語録

全

序

予が先生萬象亭。此無駄書を夜の間に綴りて筆を引舟のはつるてう。伏見屋へ渡さんと仕給へる其川端へ來かゝりて。飛乘り見れば寶ぶね。春のはじめの笑ふ門に待まうけたる福神粹語錄。まづさい先キも萬吉原ごうの眠りの長き夜に。枕ならぶる魂膽を書しるしたる小册なり。先生予に命じて卷首に序せしむ。いなまず書クはふと印。太煮の牛房くらはんかと。彼ひらかたの平たき言葉を筆にまかせてかいつくるも。乘りかゝりたる舟なれば壓のをもたい三十石ごゝ ゆきかふふねのあくたいいはず。大口に見ゆるし給はれかしこ。筆を水棹にとり直して漸く漕付クるものならじ。

天竺老人述

自序

[板元]伏見屋善六で。ござります。お宿でござりますか。[作者]池の端の先生か。扨お久しいお這入〳〵[板]あまり御不沙汰致しました申シ譯やら。寒氣のお見廻やら。又御苦勞を懸ケたい事やらで參りました。ちと手重(おも)うござりますが。どうぞ小本ンを一番お書なさつて下さりまし[作]來年の仕込物かの[板]イエ當年から賣出したいのでござります。もはや日合もござりませぬから。ならふなら今ン晩中になりとも。寫本(しやほん)をお上ゲなさつて下さりまし。

予笑テ答テ曰。蕭文琰(シヤウブンエン)ハ燭寸(シヨクスン)ノ詩ニ。年頃(トシゴロ)生掛(キガケ)ノ才ヲ耀(カヽヤ)カシ。曹植(ソウチヨク)ハ七歩ノ詩ニ。日頃口豆ノ鞘(サヤ)ヲ彈(ハジ)ク。萬能及第(マンノウキウダイ)ノ進士(シンシ)。微々(ヒロ〳〵)永和(エイワ)ノ曲水モ。卽案(ソクアン)ニハヘチヲ捲(マク)ル。サレドモ。詩ハ志(コヽロザシ)ノ之所(ユク)ニシテ。言(コト)ニ發(ハツ)スルワザクレナレバ。一ツ斗百篇難(カタ)キニ非ズ。著述(チヨジユツ)トナリテハ又殊(コト)ナリ。

[板]モシ〳〵御詞の中でござりますが。今夜中に出來ませうか[作]よしさ呑込ンで居ます實(げに)思ひ出たることこそあれ[板]てんつてん〳〵

昔鍾繇ト云シ人。帝ヨリ勅ヲ蒙ムリ。義之ガ書タル千ッ百ノ文ン字ヲ以テ。一夜ノ間ニ編リ寄。千ン字文學ノ名ヲ顯ハス。我ハ拙ナキ戯作者ナレドモ腕突ハ誰ニカ劣ラン。某鍾繇ニ成リ替リ。一ト文ン作ツカマツラン

作 何もこんなに大造らしくいふ事もねへ。小本ンの一册や一册なぐりつけるに。手間も隙もいるこつちやアない。

世界は何が能からう [板]何ンでも目出度がよふござります [作]合點だ〳〵先ヅ正月の賣物で案じて見やう「屠〳〵「さござい〳〵「萬じやらこや〳〵「春の初のはる駒なんぞはどふであらふな「傀儡しか「大黒舞か「一枚繪草双紙「白酒〳〵「大根干大根「道中双六福神すごろくチツトしめたぞ。

先ニ山手馬鹿人が道中粹語錄ニ。只輕井澤ノ洒落ヲ述ブ。其標題ニ因テ。福神粹語錄ト題號シ。七福神ノ傾城買。

[板]妙〳〵。七福神の女郎買は。あたらしうござります。ちよつとしめませう。[二人]シヤン〳〵

是ゾ新版春ツタ新作。初夢結ブ寶舟。夜ノ間ニ編ル無駄書ナレバ。ツマラヌ事モ多カルベシト云爾

[作]然らばナニ伏善どの [板]いよ〳〵明ケ六ツのかねを相圖に [作]しん作お渡し申スでござらう [板]吃度ことばをつがひましたぞ [二人]おさらばア。と本やと作者の懸合ぜりふ。すぐさま序文のかはりとす。

天明六年十一月廿日の夜
寒燈の下に筆をとる

皆様

御存知述

新版 福神粋語録

發端

次第へ長き夜のとうの眠りの皆目覺浪乗舟の音もよく大棧橋へ着にけり／＼寶船の福神達。正月二日の初夢に。諸方の人に福をさづけ。もはやお隙になりければ。わつさりと氣を替て。女郎買はどふあらふと。大黒天の思ひ付。しかし辨才天は女體故。不承知だらふと思ひの外。どうぞ廓の景色が見たいわいなと。一端かけての給へば。それでざつと相談がきまり。扨福神の出立チは。大黒天は湊鼠の小紋仕立。夷三郎は黒仕立に。三ツ柏の紋所。多聞天は毘沙門龜甲の憲法襲ね。布袋和尚は三河町仕立のきめ頭巾。お茶道衆の見へに拵へ。壽老神と福祿壽は褊綴居士衣の宗匠風。辨才天は寶髻を解て樂屋結び。銀の釵をちよつとさし。八丈羽織に黒縮緬。白ラ茶純子の幅廣帯。板〆の無垢ばら／＼と。緋縮緬のゆもじを見せかけ。雪の素足に黒塗のこつぼり。何處へ出しても濱村屋の。太夫と見ゆる優姿。寶舟より下立給ひ 辨天 向ふに見へる鳥居は。わたしが額と云ものじやな 大こく あれが名に

しおふ。笠木ばかりは三圍の稲荷さ。時に奥方の燈籠見物といふやうに。寶ぶねを堀の口に懸らせて置も。手おもいじやァねへか 恵もとよりさ。船は戻しの歸りハ駕としやせう 布袋ァヽはや。おしや福祿壽をかつぐ駕昇は。御器量増をくれろといふだらう 壽老神そんなら鹿や鶴龜は。舟に氣を付てかへつたがいゝ 皆々左様なら御機嫌よう 七ふく神サァ〳〵あいぼう〳〵

○山谷堀

ナゲブシ〽まつちしづんで梢のり込今戸ばしとなげぶしに唄ひたる。山谷堀のたそがれ時。船宿の女房が。家名を書た行燈を掃除しながら。おともあげませうか〳〵といふを聞ながして。土手へかゝり 毘どふも感心は辨天子のけふの出立チだ。辨臺子とは妙案だ 恵このきやうげんはおれが書たのさ 辨不忍の巳まちの晩に開覺へた。濱むら屋の聲色でするのじやさかい。辛動てならぬはいなァ 皆々イヨはま村屋 大しんどうてならぬはいなァと。腮を出すところがきついもんだ。さりとは器用な子だぞと。背中をたたく。

これより土手八丁の内。かごかきの酒手ねだり。地廻り素けんのむだ。國侍のおかしみなどあれども。是はつい通りのしやれ本ンにくさる程あれば。めづらしそうに爰にのせず。さて福神達は。は

なしもつてゆく内に。五十けん道へかゝる。
[布]こゝがお定りの衣もん坂。ゑもんつくりで大門をくゞりやせう [壽]時に茶屋は何屋にせうな [福]こゝできめるがいゝ [大]何やでもよしさ。しよせんこの内に知ッた顔はなし。つつかけあがりとしやせう [惠]何ンでもわらつて居る門ドへはいるがいゝ [皆々]それがよかろう〳〵。

○中の町

大コクマイ〳〵ござつた〳〵。當年の惠方から。福神達がござつた。是ぞまことに福德や三右衛門が見世先キへ。福神どつとおし懸ケ給へば [亭主]三右衛門飛ンで出。[亭]これはどなた樣もよふいらつしやりました。おまつお盃をもつて來さつせへ [女房]アイト銚子盃だいをもつて出ながら。それお吸ものをしかけさつせへと勝手へ云付る娘お竹はお仕着せ通りの硯ぶたを持て出。辨てんを見て [娘]ヲヤはま村やさん。よふお出なんしたね。ことしはまだお目にかゝりいせん [大]何さ。この子ははまむらやではなしさ。時におかさん。あの子は娘子かへ [女房]ハイ左やうでござります。それお竹お近付になり申しや。ほんにわたくしもあなたをば。濱村屋の太夫かと存じました。ホ〳〵〳〵ト笑ふ内。三右衛門夷大黒の顔をつく〴〵と見て [亭]ときにお前さまとあなた樣は。どふもお見かけ申ましたお

かほでござります。それ〳〵去年浅草の市の時分［恵］盗まれぬよふに。高い所に見世をはつて居る所を。見たのだらう［亭］ホンニいかさま［大］シイ祕すべし〳〵。（トいふ内勝手から旦那〳〵とよぶ三右衛門ナイト云つて立ながら女房に目まじをしてゆく）［女］ソレお竹あなた方へ一ツお上ゲ申しや。どれお吸物を見て来よう（ト見世を立と中の間のついたていげに三右衛門待合せ女房とひそ〳〵はなす。）［亭］今ござつた客人達は。どふも只ものではない。神と見へるはへ［女］アイサたゞものではないのさやくしやでござりやせう。旦那なしにかみばかり来ることもねへす［亭］何ばかなつ。そんな衆じやアねへ。どれを見てもみんな見知りのある。アリヤ七福神のかみ様だ。ずいぶん信を取つて御機嫌にさからはねへようにするがいゝ。それうがい手水でもして。身を清浄にして。お側へいかつし。何ンでもおらが家名の福徳の三年ン目だ［女］ホンニそういゝなんせば。只のきやくじん達じやアござりいせんどれ料理番どん。見せへ出る出しものはみんな切火にさつせへ。（ト夫婦ひそ〳〵だんじるを見せにてもれ聞。）［寿］何ンだか中の間でひそ〳〵噺すがおらがよふな福神はきやくにしにくいと。断でもいふのじやアあるめへかの［布］何そふでもあるめへ［娘］もしあなた一ツおあがんなんし。［毘］マァはじめなさへ［娘］さやうならおかんを見まして。（トちよつとついでのむ。これより酒もりになるところへ夫婦すいものを持出。）［女］どなた様もおすい遊しまし。ずいぶん清浄に切火でいたしました。（トいゝきらぬ内三右衛門目まじをしてだ

まらせる）〔毘〕先椀中がきれい事だ（ト福神達吸物をすい又酒になる）〔大〕一ツ申シませう〔亭〕ヘイ／＼いたゞきませう（ト盃をいたゞく）〔大〕ちよつと祝義を仕ませう（ト打出の小槌をとり出し。ぐわらり／＼と振給へば。こゝに三両かしこに五りやうこれは夢かやうつゝかと三右衛門夫婦ありがたがる。）〔亭〕おそれながら御返盃申ませう（ト盃をかへす。のこりの福神達いづれもさかづきのたびに延命袋のどんぶりより金銀瑠璃車渠馬瑙珊瑚琥珀の寶ものをとり出しさづけ給ける）〔惠〕コレお松さん誰ぞ呼にやつてくんなさへ〔女〕はい／＼。（トしりのかるきこと鏡こまがはだしなりほどなく女げいしやきたる）〔富吉豐年〕どなた様もよふお出なさりました〔辨〕富吉さん一ツあげませう〔富〕ちよつとお手元〔大〕さしつめお合イは豐とし坊だ〔辨〕そんならちよつと〔豐〕さやうなら是を。お手本ンになさりまし。（ト見事に一ツのむ）〔布〕とんだ見事だ〔毘〕しかしあんな手本ンを出されては辨天子は難義だらう（トいふ内盃がもどる弁天一ツのんで富吉へさす此内地廻り大勢見世先へ立）〔地〕はま村屋のこつちに居るのは。何ンだかごふてきに長いあたまだぜ。別はねへ。福徳やの見世に駒留石が。しやれて居るやうだおれが犬ならいゝ小便所だ〔ツレ〕大佛さまのすりこ木といふ所もあるぜ（トふくろくじゆをどくづく三右衛門はきてんをきかせ）〔亭〕もし旦那方ちと氣をかへて二階であがりませぬか。おまへ方も三弦は二階で仕かけたがいゝ〔福〕二階で呑よりどこぞへ出かけよふではないかの〔皆／＼〕それもよからう〔亭〕左様なら何屋にいたしませう。壽屋と

申シます新廓(しんみせ)がござりますがどふでござりませう [爺々]壽やの亭〱 [女]おめへ方はすぐにお供をしなさへ。(トいへば二人のげいしや帶をゞ直す) [娘]吉介やてうちんを灯(とぼ)さつせへ [若者]ハイ〱(トてうちんなとぼしはき物をならべる) [亭]コレおまつそつちの羽織を出して下さへ。(ト女房おしいれより羽をり出して着せる三右衛門片袖入レながら下へおりる) [福神]サア〱いかふ〱 [女娘]さようならおゆるりと [亭]サアいらつしやりまし。

○壽屋(ことぶきや)の二階

大ジンマイ〜大盡(じん)舞を見さいな〱。扨てその次の大盡は夷大黒を先として。七人の福の神。三右衛門が案内にて壽屋へ御らいりん。二階のはしごをあがりながら [大]コレ福祿貴さまの月代(さかやき)をする時。此はしごをかけはどふだ [福]そんな禁句(きつく)をいふと。やり手衆に云ツ付て大こく柱へしばり付させるぜへ。(トむだを云ながら二階へ上る三右衛門は廻し方のわかいもの遣手お福と相方のそうだんをする。もつけなかほにて壽老神の側へより) [三右衛門]困(こま)ツたものでござります中座のおいらんがお二人外はござりませぬ。跡は部屋もち衆がふたり。その外は新ぞう衆ばかりでござります。 [壽]ずいぶんそれでもよしさ。辨天と福祿壽にさへ。おいらんをあてがへば跡は何ンでもいゝなア夷 [夷]もちろん [大]そう

さおいらたアちがつて。福祿壽やべん天はあんまりどこへもいかねへから。あの二人においらんをさづけるがいゝ 三右衛門 それでできまりました。おふくどんそんなら今の通りでいゝ。どこへおいれ申さうの 遣手 龜づるさんのお座敷へお入れ申シなさへ 三右衛門 よし／＼サア／＼旦那方まアこゝへおはいり遊しまし。（下座敷へいれる若いものしよくだいをともし七人のあいかたのたばこぼんをならべる内かめづるがかぶろどもさかづき臺をおろしてうしたはこぶほどなく七人の相方ゐりくようの如くならび盃事になり相方左の通りきまる）

ふくろく壽　▲龜づる　萬代　ちとせ

辨てん　▲江の島　岩や　巳まち

びしやもん　▲芝うら　かな杉

ゑびす　▲あし舟　つり糸

大こく　子の日

壽老人　さほ鹿

ほてい　唐こと

〔三右衛門〕サアおめへ方何ンぞひかねへか　〔富吉〕豊年さんその箱を取ッてくんな（ト三味せんなしかけてうしなあはせる）　〔壽〕何ンぞめでたいうたがきゝてへ　〔豊〕何ンにせうの　〔富〕いつそ七福神にしやう（トいへば福神たち顔を見合せてにつこり）　〔江〕三右衛門さんあげいせう　〔三〕ちよつと申ませう　〔江〕もしへはゞかりながらお合イをお頼み申シいす（ト毘しやもんへたのむ處へ福とくやの下女長ぶたへおくりものをのせもちきたり）　〔下女〕内義申ます皆様に先ほどはお早々でござりました。是はおそまつな物でござりますが御酒のお肴にあげます。御きげんようおあそび遊しますよふに申されました　〔皆々〕イヨロ上　〔恵〕何ンだかうまそうだ先見やせう。鯛の鱠むし是はおれが書(かき)ぬきだ。尾張大根のふろふきは大黒子の點だサア酒にしやせう　〔壽〕おれにやアこつちの丼(どんぶり)の獨活(うど)を下さへ鹿の角(つの)は妙だ。（トいふ内に二人

のげいしやうたい出ス。)
唄〽ひけやひけ／＼ひくものは品／＼。さまがきわずみ琵琶や琴。こきう三味せんしのゝめの横ぐも。そこでひけや小ぐるま。小どもたちやござれ寶びきしよ／＼。ほづな引ッかけ寶舟を引て來た
[ミナ／＼]イヨ／＼　[布]これはたまらぬはへ　[大]踊りはあやまるぜ　[布]ところを一チばんお目に懸る
(下云さまぶこ／＼したなりでおどりしまい。)　[皆々]笑う　[布]ア丶息がきれる水／＼　[恵]いつもながら和
倘の踊りは大わらひだ　[布]あんまり笑ッてもらうまい。ふり附では藤間も西川もはだしでごんすア丶つがもねへ　[三]いかさま只今の所作は秀鶴が布袋といふ處もござります　[布]そう見られちやア一チ言もねへ。あやまはりだ(下お定りのふく　わらひになる。凡人のあそびと　ちがひ座しきのしやれも神たちの事なればさまでいきなることもなく只にぎやかと金ぎんな下さるばかりにて座しきはすむ。)　[三]チトお座しきを替ませう　[若もの]江のしまさんのお座敷へおつれ申シなされまし　[皆々]サア／＼おとも致しませう(下ひきつれてろうかへ出江の島が座敷へはいれば。もはや床がまはしてある福神たちはそこらを見て座敷の物好などほめ給ふ)　[福]壽老神はどふしたの　[毘]一ッしよに廊下へ出たつけが　[三]見申して參りませう
(下ろうかへ出るとやり手三右衛門をひきとめ)　[遣]お前のおつれ申なさつたきやくじんだが。つぶりの長いお人やかげまのよふなお客や。何やかでどふか見せ物芝居のくずれを見るようでござりやす　[三]何

さそんな旦那方ではねへのさ（トいふ内向ふより壽老じん來り給ふを見て。）只今あなたのお迎ひに參る處でござりました。どこにいらつしやりました 壽 どふもみんなが吞衆だから。いろ〳〵の物を引ツちらかして置いたのをまとめて來たのさ（トふん命袋やきせるたばこ入やうち出の小槌をまとめて來給ふはお年かさと云下戸のせいもあるなり） 三 皆さまがお待なさつてござります。あそこへいらつしやりまし（トゆかふとする向ふより福神とろ〳〵と來り給ひ） 福神 寢所はどこだの〳〵（トいふところへ龜鶴が禿きたりて） 千とせ ぬしはこつちへお出なんし。（トふくろくじゆの手をとる） 福 ちつとおらが處へもあそびに來さつせへ（ト云ながら座敷へゆくのこりのふく神たちもそれ〴〵に床を納る）三右衛門はじめいとまごひをすれば引ケ四の拍子木がチョン〳〵

○中座の坐鋪

哥〽そも〳〵我らは。西の宮の夷三郎左衛門の尉。色の黑いは大こく天。顔の長いは福ろく壽。頭巾ノ〵かぶりて老ぼれ姿のおやじさん。たれじや〳〵いはねどしれし壽ろうじん。布袋はどぶつその中に美くしいは辨才天女とほめたればそこでびしやもんはらを立チ。なぜほめた〳〵七福神のその中で。辨天ひとりをなぜほめたといふのもやぼかいな。笑ふ門ドには福きたると中村座の傳らい。猿若の

小唄にうたひたる中にすぐれし辨才天ッいふにいはれぬ舞臺子風に。相方のおいらんよつほどござつた
ようすにて [江の島]もしへぬしやァなぜそんなにかたくしてお出なんすへ。ちつと横におなんなんし
[辨]わたしはこうしてゐるが勝手じやさかい。かもふておくれなそしてお前の名は何ンとかいふたな
[江]江のしまと申いすは。シテ主の名は何ンと申いすへ [辨]わたしが名かへ [江]アイ何ンと申いすへ
（トいはれて辨才天ともの給ひがたく） [辨]わたしが名は妙音(みやうおん)といふわいな（ト替名をの給ふ） [江]妙音さん
とかへ覺へいゝ名でおすね。そして紋は何をお付ケなんすへ。まァ羽織をぬいでお見せなんしな（ト
いふなかこつけにはなりなとり上着の紋を見て）ぬしの紋は寳珠(ほうし)の玉を三ツおつけなんすね [辨]アイ是
がむねへ付る紋じやわいな [江]吸つけてあげいせうかへ（トたばこをつぎおよびごしになつて辨天の
おひざに　顔を見ながらきせるを出し） どふもぬしのような客人にはわたしらがよふなものは
氣がおかれてなりいせんよ [辨]なぜへ何ンの氣をおかんすことがあるものじやぞいな。そないにいふ
てくだんすときじゆつなふてならぬわいな。是から末はほつとさんす程かよふてくるさかい。にくが
つておくれなへ [江]よくあはせたんすね。何ンの主がわたしらがよふなものゝ處へお出なんすものか
へ。もう一度お出なんしたらかけでおすは [辨]きたらどふさんすへ [江]どふもいたしいせんけれど
（トいふてゐるうしろの方へ禿岩やきたりたんすのかぎをあけるおとに辨才天はうつかりとお宮にござる時のお

こゝろにて）[辨]コレ印鑰童子(いんつくどうじ)香水(かうずい)をたも（トの給へば江のしまはきもたつぶすいんやくどうじとは十五童子の内かぎをあづかるどうじなり）[江]もしへ何ンとおつせへすへ（トいはれて心づき給ひ）[辨]何さ今いふたのはおどけじやはいな。あの子の名は何ンといふへ [江]若やと申いすは [辨]そんならお前の名が江のしまあの子が若や。ま一人のは何ンといふへ [江]みまちと申しいすは [辨]どれもわたしには縁のあるよい名じやな。あの子茶／＼を一ツ下んせ [禿]アイ今持てまいりいせう（トたんすのかぎをびんとおろし出て行）[辨]そしてお前のつかふ子どもはまだあるかへ [江]アイ外に新ぞうしゆが六人おざんすは [辨]わたしはお前方も十五人つかはんすかとおもふたはいな [江]とんだむだを云なんす。さちつとお休みなんし（トいはれるたびにこまらせ給ひさま／″＼まにあいなの給ひて夜着へはいらぬくめんを遊ばす）[辨]マアお前へ先へ寐さんせ [江]わつちやアいや ふせりいせう（トいふ内床の間の三味せんを見て）[辨]お前はさみせんをひかんすかへ [江]イエわたしはねつからひきいせんが新ぞうしゆはどれもよくひきいす。主は定めておひきなんせうね [辨]イヽエ琵琶(びわ)はひくけれど。三味せんはよふひかぬはいな [江]亦ただをおつせへすサアひいておきかせなんし（ト三味せんを持て来てむりにせがまれ辨才天はせうことなく三味線を琵琶の心いきにて唄ひ上ゲ）

譜 ヤタヽイテ八(はら)。甲(かう)カケスカシテ。マアテ。甲(かう)ギヨウ

と琵琶の符をうたはせ給ふ。心耳をすます妙音に江のしまは聞とれておもはずしらずねむりを催す。
扨福祿壽の座敷には。相方のおいらん寐まきすがたにて□へはいりながら 亀つる お休みなんしたかへ（ト云ひながらびやうぶをぐいといひきまはせば）何かつかへるをじれつたがつてぐいと引よせれば 福 ヲヽいたいわいな是さあたまがつかへてゐる。さりとはじやけんな女郎衆だ（トいはれてびつくり） かめ おや〳〵おゆるしなんしどこも痛はしいせんかへ ふく 何ンともなしさ（ト云つてゐるところへしんぞう来たり屏風の外から） 新造 おいらんお休みなんしたかへ 亀 唐松さんか何ンぞ用か 福 唐松さんとやら用があるならはいりなさへ 新 そんならおゆるしなんし（トはいりながらふくろく壽のあたまにけつまづき向うへこける） 亀 おめへもそそうな子だぞ。もしへまつぴらおゆるしなんし 新 おやぬしのおつむりかへ。どふいたしいせうね ふく 何さずいぶんくるしからぬ事さ。度々ござる義さ 亀 そして何ンだ 新 ちよつと耳をお出しなんし（ト何かさゝやく） 亀 ムウそんならの（ト又さゝやき） そうしてくんなんし（トざつと用事はすむ） 新 もしへおゆるしなんしまたざいすよ 福 おつとまちな。まア一ツぷく呑ンでいきな（トいはれてまくら元へつくばいたばこを吸つけながら） 新 おいらんへぬしはどふも似た人がおざんすは 福 何いゝかげんなことをおれに似たものなら。秋葉様の天狗の鼻だらう 新 とんだ事をおつせへす。主によく似た人はね 亀 神だなのれいこくか 新 （ふき出しながら）又たばけ

たことをおつせへす。ぬしによく似たのはね。せんべい折のはんこうさ（是は竹むらがせんべい折のはんこうにはふくろくじゆがすつてあるからなり）[龜]この子はいつそおしやべりでおざんす [福]そう見へるおしやべり女郎しゆはよい女郎衆だ [新]わつちよりぬしがおしやべりでおつすは。又のちにまいりいせう。やつておくんなんし（トゆかふとするをあたまにておさへ）[福]どつこいもちつとあそんだり [龜]あの子は用があるからおやりなんし [福]そんならかんにんしてやらうそのかはり願ひがある [新]何ンでも叶へてあげいせう [ふく]そんなら枕をもふ一ツもつて來てくんな [龜]何ンになんすへ [福]あたまのこぐちへおつかつてもらうのだ [新]又おたばけなんすアイおいらんお休ミなんし。もし主へ [福]何ンだ [新]たんとしやべりや（トいゝながら上ぞうりを引ツかけてばた／＼と廊下をかけてゆく）

○部屋持の部屋

ヒヤウシ〽そんも／＼西の宮の夷三良左衛門どのは。毘沙(びしや)門てんと壁(かべ)ひとへの隣部屋寐そべりながら大聲にて[夷]どふだ毘沙公まだ寐ねエか [毘沙]寅待の癖(くせ)がついてどふも夜ルは寐られねへ（トの給へば相方のけいせいとらまちなきゝちがへて）[芝浦]主はとりの町へ夜お參りなんしたかへ [夷]酉の町もありがたへ [芝]とりの町は正月もおざんすかへ [毘]あるとつて [芝]正月は何をうりいすへ [毘]おせちにつかう

さと芋をうるのさ。そしての霜月のとりはちよぼいち。正月の酉はさござい の寶引さ [芝]とんだ人がらのいゝ事をおつせへすね [毘]人がらのいゝはづよ金杉うまれの芝ッ子だものを [芝]そんなアわたしが名に縁んがあるね [毘]それさぬしに縁のあるよふに芝浦で生れたのさ [芝]いゝかげんな事をおつせへし。しよせんぬしの口には叶いイせん（ト云つてゐると夷の相方かべこしに） [あし舟]もしへびしやさんとやら [毘]びしやさんもあやまる。ふみつぶしたような名だ [あし]さりとはよくおしやべりなんすわしらが客人はぬしとちがつてにこ／＼わらつてばつかりおいでなんすに。ぬしは達者におしやれなんす [毘]洒落るはづさ海ッぱた産たものを [あし]さりとはたつしやな口だね。モシぬしもちつと噺でもしなんし [夷]どうも初會といふものはおかしなもんで何もはなす事もねへ。はやく噺すことのあるよふに仕てへもんだ。つかぬ事だがおめへ釣はすきか [あし]イヽヱついぞ釣ッたことがおざんせん [夷]釣といふものは面白いものよおらアきついすきだ（トいゝながらきせるを持直し）まづつり竿をこう持て鯛めがぴく／＼と引クところをちよいと針やわせをして。そろ／＼だましながら水ぎは迄引きよせて [あし]そしてどふするのだへ（トいへばしかたばなしのひやうしにのり） [夷]そこでこふ釣りあげて。と脇の下タへ引ばさんだ處はどふもいへぬ（ト云さま相方の女郎なつきこかしわきの下へはさめば相方はびつくり） [あし]ぬしやア何をなんすへ（トいはれてちつとうまりながら） [夷]こつして　といふ事さ（トちやか

してしまい給ふ折からとなりは大さわぎ）［芝］ヲヤげじ〳〵が出いしたわつちやアきらいでおす。どふぞ取ッておくんなんし［毘］とんだ事をいふこりやア百足(むかで)だものを［芝］ヲヤぬしやアきみのわるひつまみなんしたら喰イつきいせう［毘］何くいつきゐへるものか。むかでと云ふものはどふもかわいゝもんだ（ト手のひらへのせて愛し給ふ）［芝］エヽモウはやくすてゝお仕舞なんしな。

○廻り座敷

歌へ大こく舞を見さいな。福大こくを見さいな。大こくといふ人はひやうひやくな福神ンにて。大穴持の名にも似ぬ。小まち新ぞうをどつとあつめ。つかはしめの白ねづみを見せびらかし。きやつ〳〵と云つてほしがらせ給ふ。（相方のしんぞう）［子の日］どうぞそのねづみをわつちにおくんなんし［大黒］こりやアおれが大事(じ)のもんだ。まアこのなじんでゐることを見さつし先ヅさいしよの取組が谷風にみの島。中入過が小野川に關の戸。どこひ〳〵（トみじかい手をまくりあげてあちらへあるかせこちらへあるかせて見せびらかし給へば外の新ぞう口〴〵に）［しん］子の日さんそれそこを取ンなんし（トけしかけられて子の日は鼠をひつたくり）［子］もふ〳〵ほつてもけへすこつちやアおつせん［大］どふぞけへしてくんな。その替りいゝものをやらう。壽老神ちつと出て來さつし。大事のものをひつたくられた（トの給へばわりどこ

にれてゐ給ふじゆろうじんせきたごほ／＼とせきながら）[壽]よくさわぐ人だおらアちふせつかくあつたまつてゐるにをきゐることはごめんだ [大]つきやいしらずめ。そんなア名代に相方の衆をよこさつし[壽]ナアニおらが所のは。いかにおれが鹿がすきだとつて。あしかのやうに寐てばつかりゐるしんぞうしゆだ [大]インニヤねるほうもましだらう。おらが所のはあんまりおきてゐすぎてさわぐにはこまるよ [子]よくそんなことをおつせへし。ぬしはこゝへ寐にお出なんしたかへ [大]インニヤ寐には来ねへが子の日に来たのさ [子]よくしやべらつしやる [大]しやべらつしやるめへから鼠をけへしな。（しんぞう大ぜい）子の日さんけへしなんすな [子]何さけへすこつちやアおつせん [大]いゝ物をやらうからどうぞけへさつし [子]そんなら何をおくんなんす（しんぞう大ぜい）何さうそでおつす。めつたにけへしなんすな [大]又みんな一ツしよにたつてからに。そんならせうことがねへ。おめへ方にちいゝ物をやらうからけへさせてくんな [皆々]そんならはやくおくんなんし[大]合點だ／＼と打出の小槌を取出しふり給へば。かんざし笄芥子人ゝぎやうびいどろかゞみ繪半きりしまだ髷をはじめとして。ばらりばらりと出ければしんぞう大勢われ勝に。ひろいあつめるその折から廊下の方より布袋のこゑ。

キヤリ〽ことしや世がよい。ちい／＼がかんむりを。ちい／＼がかむりふりやアどふもこうもならぬちい／＼がかんむりを。ト

音頭の聲ともろともに。相方の唐ことに拍子をとらせ。夜着包のゆたんの中へ二階中の禿を乗せ引キすりながら來たり給ひ［布袋］サア此子どもにもやつて下さい［大］合點だ〱大こく樣ははやすがおすき。はやせや子共はやしたものに寶をとらしよ。わい〱とはやせ大さわぎをやり給へば。壽老神はもとよりにて。のこりの福神皆あつまり給ひ種〲の寶を蒔給ふ。折ふし下タ屋さわがしくよいよいわい〱の聲とひとしく。二階へどつと押かける何事やらんと見給ふ所に。揚屋夫婦をはじめとして家内の男女衣服をあらたゐ。てんでにさゝぐる神酒せんまい。廊下せましとならべたて。實ありがたき福神ンの御らいりん。とてものことにいつ迄も神だなにながさせ給ひ揚屋繁昌里はんじやうまもらせ給へと相祈れば。福じん達チは莞爾やかになんだがこゝろ正直のこうべにやどるかみばなの。かさねかさぬる此家のさいわい。

謠〽いで〱このついでにたのしうなるようかたりてきかせん。朝おきとふして慈悲あるべし。
夫婦の中にてはらたつべからず。いかにもおぶ〱をけつこうして。扨中酒にはふるざけい
やといふ程もるならば〱。たのしうならではかなふまじ。

とうたひの聲ともろともに神はあがらせ給ひけり。

後序

○賴みましよ【萬象】ふしみやか。イヽヱ馬喰町の柳鄕でござります。寒中のお見舞【萬】只今起た處だ。サアくおはいりく。お賴ミ申ます【萬】伏善かハイごめんなさりまし。時に昨日ねがつたお作はどふござりますな【萬】ゆふべ貴樣が歸ると早々やりかけたが。急だから不出來だぜ【柳】時に伏善には間違つて【板】ホンニおはつにお目に懸りました。【柳】先生それは何ンでござります【萬】きのふあそこから賴まれて。急にしあげた晒落本ンさ【板】どうぞ一ツ遍讀ンでおきかせなさりまし【萬】コレ番頭おれが飯をくふ內。讀ンでくんな（トこの內柳きやう本よみをする）【板】妙に出來ました。サテ筆工にこまります。しせきは遲し。勘兵衞も彌五郞もずるけて間にあいませぬ。アノ此頃鶴喜へつかはさつた。田舍芝居の筆工はどこでござります【萬】とりも直さずその柳鄕子さ【板】コレハ逢た時に笠ぬげとやら。初對面から申し兼ましたが。どうぞあなた筆工を願ひます【柳】きたなくつてもよくば書やせう【板】とんだいそぎますから。ちつとも早くいたしたふござります。ナントいつ出來ませう【柳】然らば今日築地門跡の暮六ツの太鼓を相圖に【板】そんならアノ門跡の暮六ツを相圖に【柳】板ン下タ屹度おわたし申さう【板】ヘヱかたじけない【柳】先それ迄は伏善どの【板】りうきやうさま【二人】おさらばア【萬象】チヽチン

〳〵〳〵

時に天明六年霜月廿一日の朝。本屋と我等がかけ合ぜりふ。書して以て後序とす。

月池門人

狐面堂柳鄕

戯作目録

下谷池ノ端仲町　伏見屋善六版

放屁論　風來
同後編
痿陰隠逸傳
天狗髑髏鑒定縁起
里のおだ巻評
飛んだ噂の評
右二冊六部ノ集ト云

佛法奇瑞 菩提樹之辨　風來
當世さよ嵐　近刻　全五冊
同後編　同　全五冊
仙術金のなる木　同
虚實山師辨　同　全五冊
當世野夫論　同　全五冊
遊里やまと言葉　同
諸國しまん　同

金神論　　風來
木に餅のなる辯
祕術工夫箱　　同
風流出來料理　　同
世間膝の鍵　　同
賢愚伝性競　　同
當世袖の振合　　同
産物虫眼鏡　　同
風來かな文集

蛇脫青大通
導通一人案內
飛花落葉
菩提樹種
役者相生双六　　色すり
繁花地金儲之傳
繪本三幅對　　色すり
同　美津の糸　　同
福神粹語錄

南極驛路雀

全

序

世有金翅鳥兩翅長三萬六千六百里莊子呼之爲大鵬其色黄□□て白し常に義理と情を喰ふ色林に入て美娘をころす壽娘も亦殺す手□□千本有て娘と手く良□□して互に相搔相□□故諺に能殺すやつは必ころされ能搔やつはか支轉さると此鳥南の奥を見んと行事億々九億八萬里にしていまだ其半にも到らす道に飛との空々寂々と□□南に向亭數ゐいき□□壽るものを見る忽化して鳥と成大さよし原雀の古登し其早き事夷駄天も素足で遁る其名を問へば驛路雀と答ふ則金翅鳥にいつて曰予南方の世界に通ふ事數年夕に行朝に歸る汝足甚遲南方に行ば先此小卷を見給へと懐中與り取出し手渡してさあ歩行

牡丹餅耳酔ふて自述焉
とりの
はつ春

逸我

仁○二男一妓會　附　濫腸

義○二匠の初會　附　見立と出立

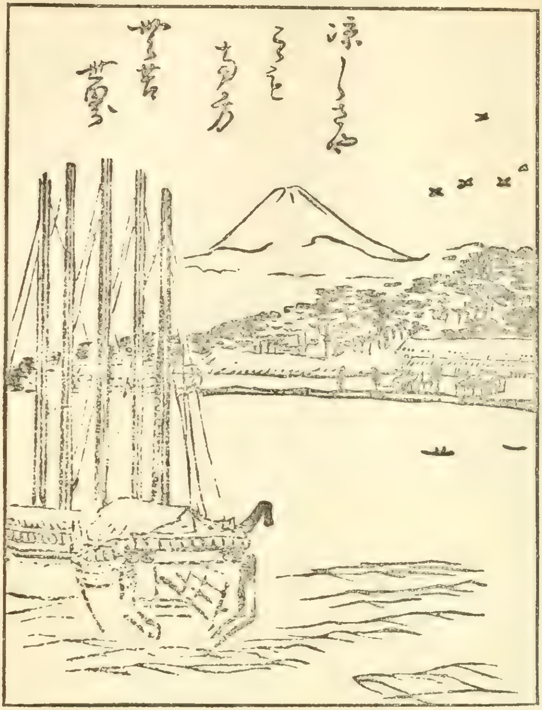
禮○二武の五會　附　心待の秘叓

智○口舌の手叓　附　惡吐の巻物

信○一男五娼會　附　六韜三略の巻

南極驛路雀

申二日、塡然鼓頭撫。交白水、棄レ甲。曳薪而走。家暮三而後止。通一而後止。通以一。家暮矢三如何、日不可也。唯不三耳。是取也十篇木純遅氣家通をごた交にして白水の一ッにきやんと云はず。南濱に糸を引て諸侯をも釣るべし。北方に洞庭湖有れば。南方に蛾眉山有り。菩薩彩向菩成が無苦世界と説しもむべならずや。吉原に腕押して屁を房州へ放く。のべ竿を大和にもんで小便を葛西へ放ッ。やつとうたにぶしとし。紫檀棹を利しとす。しつけの鞭の糸は。御殿山の櫻ン坊にほころび。初かつほの醉耳を突抜て其角は賣のこのたに居る。卯の花に足ふんがけて。菅笠に登る日。市子の綿ほけ出。小袖化して前鎌と成。其ころきやつくといふ。飛んで南濱を稱んとほつす。已に極めて木枕の一對按摩の笛にんで。三線山の金鐵喫□引捨れば。四會の篝上總の山に盡る□旅客の浪枕に横雲を催し。きぬ〴〵に別れをおしみ。父のちぎりを諸縁して。無苦世界を出る織界□三まひ押に郭公を欺けば。ほうかぶり手拭に内の肴尾をぬらす。肴荷□□先陣金杉にうちかぎをまじゆ□□後陣の鰯六疋を渉る。またほのぐらきより。牛のよだれ十八町を續き。お市が髪の毛。佐渡屋の船を繋ぐの長〳〵しきも。吉原羽目と見ば。是を權とも見給へ所かわれば。品川をわたりて



その淺深を氷川に知り。北國に融通して雪の肌を中洲に見る。一不二に腰かけにた貌さんなすむゆうの指遣ひ。に。かく爪を(ははカ)□□かり。居續の晝遊に手管のとあみを打たせ。海の妻戸を若ひ者の酔(虫)□□明ケさせ新造禿を芝海老のごとく打連れ。姉女郎をおほこと見帆かけ船は妓者の貌とともに白く見通へ馬乘り込きんだちのちよんの間の鐙にあらぬ。むさしおとこ。ほうかぶりして。みんなみの里(虫)□□しる

よしてかいにいきけり。壹夜の興不興をすぶに書のめして一坐ならぬ友どちのもとへ贈る。

鯱は雲を衝て嵩へ。千水緯を分て明鏡を夾。萬橋横を連て彩虹を落す侯家星を盡してきらめく。商肆砂子のごとく地を限つて並ぶ一夜の歡樂千歳を壽る。一ッ時の價萬金を重しとせず。門に繋ぐ千石船。千艘出れば千艘入るかゝる江戸の湊。其濫觴はつまみ錢なりとも爰に到て萬頃小判の波をあげ。小粒山をも築べし其枝折さへ見付たらばたちまち黄金の林にも入る。夕べに菰をかぶり朝に金鍔をさす何ンぞ壁と見られて狂言を書かれし事を憂んや是を埋んとせば印幡沼もかたしとせず臍を極彩色し翠丸に銀箔張る屁玉を手つらまへにする事をしらば。何ンぞ河童の屁の嗅をしらざらんや。干見世で十二文に買ツた茶腕は中通りの朝市に南鐐八ツ片に付人が有伏見屋が三十兩に賣つた水こぼしは。田舍小僧が八王子へ打やつて三太郎がしゆびんと成揺子に紫衣の相樽ひろひに地主の手筋有り。ひしは金山寺賣を見れば夕べの夜鷹そば賣り也お寺の賣買も有れば野郎の山伏も有りしらみ紐をこよりでこしらへて安うりと出かければ小紬の上から灸をすへる足駄の歯入は不細工なやつがつよく。蛇はらふせと書た手は悪筆なやつが上手也かぶと形ひごずいきとまつくろに書て引札を出す。兎角ゐてゞなければ酒も呑めぬ硯蓋に四角な鶏卵も出來れば三角といふ遊女町有。赤坂に娶めし靈岸島にこんにやく牛町のよこ丁に根芋をうゑれば大根ばたけに千坪有り。金銀のねこ有れば海に裾つぎし舟にまんちうを積んで五町丁の巻せんべい迄棹させば情を商ふもの米の守と數をくらぶる繁榮は毛唐人の夜光の玉で

きしやごはぢきをし蜀江のにしきは豊島丁の朝せん人にも着せる下谷で三弦をひかせ市ケ谷で浄るりをかたる淺草で馬道をつくり四谷から太鼓をも打すべし駕舁は力杖を銀で張んと思へば棒組はすだれを珊瑚珠で編んと欲す千兩箱で棧橋をかけ屋かた船に佐渡の金山をのせる。紙花を吉野へさかせ酒米で銚子口を埋る。百萬石の威勢にもなびかぬは契情の意氣地っなり平をのり賣婆アがきらひ。鹽うりにお姫さまが惚るも力づくにはならず鰒をきらひなおやぢがお取越によばれて芋を喰て死る。極樂をいやがつて地ごくへ行て疊を擲も蓼くふ蟲はたばこのまぬかみさま。ちんこ切と菜ごしらへして芥川を歩渉にして。九尺貳間配所の住居。心つくしの有明の月代に釜ほり出す娘あんよはお下手。ころぶは上手太夫號もらつて。二の糸も切れるほど聲つり上て願ふちかひは只たのめ。近所の若衆やおやしき方の御世話でうら河岸へけいこ所出し。丸ひ物や四角な物は丸の内から光り。格子は金六町の見世ざらしをもらひ床は古木店の見倒屋のむすこが施主に付。懸札は塗師屋から仕おくり。三味せん屋の若衆は猫の妻はりかへてくれる。門跡さまじやアねへが夫〻の講中が有も師となれば七尺去つて。上りばなに手をつき稽古子供のかへる跡に【兼吉】歌集【葉立】【歌】葉立さん夕べ南極へめへりやしたが。北夏はまことに南方の世界だね。常陸下總を扇にかざし。安房かづさを眼下に見くだし元船の褌に白鷗が夢おどろかす。かつは舟の櫓びやうしを海の塵にして。獵船を芥と見やす。八景はとうけた觴の内に

もありそ海。南溟青樓臨海起。不捲珠簾見海水」とも云ひたき所。松島も是がために腸を斷和歌の浦も爰にいたつて面を覆ふ實に魚龍潛躍水成文と申所さ。【歌】灑々隨波千萬里。鮫頭から洲崎へふんまたがり。浦賀へ穀物の小便せふといふ所さ。【兼吉】笹はたきもしねへが大そうに愚痴をいひなせへすね【兼】コウ夕部ァよふおつりきを云つて逃たの。【かね吉】おめへ又こうけつ斗り云ひなさるものコゥ歌集さん。さつき杵やの善六さんが。新叶の文をもつて寄りなさいしたが。何ンぞうらみでも有りやすか。大きさが枕ほどそのたけ廿尋あまり也あれにはたしか魂の四ッ五ッも有やせふ。【歌】なんだあいつァ近ごろつがもなくむつかしくなつた。これじやァ女郎買ひもやめねへけりやァならねへ。さらばくだをよまふかへ【かね吉】薬立さんへの所へも信州の若衆が寄りやした【薬】内へくればイヽ【かね吉】歸りによると申やした。【薬】夕べのいつしけが廿日あまりに四十兩はよくかたつたが米屋じやァねへが言葉でぶちこわした【かね吉】手に入らねへものァがうぎにあしくいふやつさ【薬】おいらァさんげ〳〵ァいわねへが六こんしやう〴〵なからだだそんなにいちや付くのじやねへ。いつたいけいしやつへこみといふ世界だからつどんなつよひやつでも足腰ャァ立たねへどけへでもころばァ。ころばす事にやァ歌集があかるひ。日本橋から品川までのけいい者ァうしろ付はおろか。足音でもしつてゐらァ。下坐見ならはだかを見やふといふやつだ。おれも大概はしつてゐるが歌集にやァ叶はねへ。

いわして聞キねへ〔かね吉〕歌集さん云ッて聞かしねへナ〔歌〕いやだよあとでけいしやの岡引だといわふと思つてコゥ此文を見な冬の日にやアよまれねへ三丈あまり有らア。〔薬〕ふり袖に裁ても手ぬぐひだけあまらふといふやつだ〔歌〕此くらひのやつが猪の頭から出ると目ぐろ在郷へ氷雨をふらして品川の海へ出るぜへ其くせ何ンの事もねへ。芋をいぶして屁の亡魂をあらはさふといふやつだ。屋形ものの色事をするやふに。文といふやつアよつほどぶいきなやつだぜへ〔薬〕門徒宗の御文章を読やふにあなかしこ〳〵で。さつきからかんきんをして。居ながら人聞キのイヽ事をいふぜへ。ばんにいくだろふ同心にいくべい〔歌〕こよひはちとはやくいかふ〔薬〕おれもはやく行ッて宵の内四ッ手を引かそふ〔歌〕よかろふ〔かね吉〕此内ひら長屋は普請をして大ぶ二階屋が出来やしたねへ〔薬〕ウンアレデ高輪は大によくなつた〔かね吉〕薬立さんわつちも梅さんへお文をとゞけて。おもらひ申やせふ。此間のお禮をよくおつしやつておくんなせいやせ〔食〕又云ッ付ヶこは御めんだによ〔かね吉〕なんにもあしき事は書かず〔薬〕せんどとんだ事を書てやつておれにやア大に手こずらせた。少しは種のねへ事ア書かねへといふはな〔かね吉〕ホンニ女郎衆といふものアぐちなものでござへすね〔歌〕濱松じやねへが廣イやふでせまひものよ〔薬〕そんなら歌集さんのちによ〔歌〕わつちやよる所が有るから先へいつて森元の伊勢屋にまつてゐるよ〔かね吉〕さやふなら御機げんよふ明るカッチ〳〵カチ〳〵〳〵

三五郎　紫色太織の單ものくろ七ゝ子の帯　小もんちりめんひとへばおりこんのたび　三十七八

萬　吉　さらし中がたゆかたかたびらちや七ゝ子帯ちりめん小もん單ばおりこんはんぐつ

[萬]三さんおめへの形りやア山女衒といふ身だぜへ　[三]ッそはねへかふたり出かけちやア口なしかしか岡場所の出入師か見付次第に預けよふといふやつさ　[萬]コウ爰の牡丹餅二ッ買ッていくと三十番これ。高枕だぜへ。　[三]手めへのやふに桔梗やと鈴木金澤にしばりを打たして。天を取ふトいふやつにやア叶はねへ　[萬]アノかしらが内の十一役に足場だひなしにした。是からぐつともやふをかへて遊のほうへ繪圖を極めやふ　[三]その墨がいゝぜへ。やちなが注文はおれが書てやらア（おやちのまへなこしらへてやる事也）こちらへ付て植に歩びや二丁ほど近ひ（高なは十八丁海がわの方へ付て行けば二丁ほど近し）　[萬]おめへの裾に何か長ひ糸がからまつているぜへ　[三]どこにほんにナアうしの涎だアレ〳〵どこまでかつゞひているぜへ　[萬]そいつをつたふて酒屋の娘がおつかけてくるよ　[三]手めへのかたにもとんぼうがからまつていらア。それ〳〵踏めへぞがうけつに牛がぬいて置たぜへ。（うしがくさびなぬいて有といふなしやれてぬいて有と斗いふふんなして有事なり（）大木戸もすぎがんぎかうしん堂まへひら長屋さつま長家も過て八ッ山にかゝるこゝに江戸筋へのせる舟有）　[船頭]舟かへ〳〵　[三]汐留へいくらでのせるへ　[船]橋向ふでのんねへ　[三]ずつとむかふでのせねへか。（ずつとむかふてつきり二百の事也）　[萬]よ

しか乗りやアしねへ（宿へかゝるいなりまへ）［三］萬こうこちらのとしまを見や。イヽつらだがうてきに鍵目が有るせへ。（戸の〆てある江戸やのむかふなのぞいて見て）［萬］アノ破風のあがつた着物なちがひはぎにして、墨坪をひかへて。墨さしをもつている子みみな。吉がいろ事だぜへ（ひたいのあがつた着ものな引ちがへて着てすゞりばこなまへに置ふでなもつてゐる事也）［三］イヽ子だが耳のわきにぬけぶしがあらア（三ッぼしのから紙のもんの内なみて）［萬］モウ佐渡だよろす。さいなかれんといふ合もんだ八十匁と七分五厘〇是からだん／＼から紙のもんな見て行。子もちすじのから紙のうちへあがる）［三］爰は志那濃やだ新州た爰へ上るべい（女郎三人から紙のきわにならぶ若もの横へひらき二人すわつている女壹人行灯の脇にしやがんでゐる）若イ衆上つてもイヽかへ［若］お上り遊ばしませ［三］サア萬こうあがりや　二人上る若者跡に付てくる見通へとなる）［三］長ひ廊下だぜへ。爰で曲馬乗ればイヽ［若］あなた方御初會でございますか。［萬］こよひ地まつりせへ渡ればすぐに手釿を始やふといふものさ［若］すぐにお見立遊ばしませ。［三］遊ばせも大そうだ。萬こう見立てきや。［萬］おめへも歩びねへ（二人とも見立に行）

ちよつと
陰見世の結構

銀燭輩のごとくてらして美婦嬋娟として色をくらべ媚を爭ふ商賣百疊に滿〱自笑私情嘖々として誘ふ水あらば流れて品川を出んとおもひ着る君あらば輕羅と成て肌着にならんと思ふ君がために錦帶をとき。一ッ身をともにしっ鏡となつて嬌面を分んとす。ろうかを顧歩する兩鴛鴦あれば階子を登る双蛺蝶あり。此時異香四方にくんじ臺のもりに蓬萊も有れば。五色とかわる紙花もふり妓者の音樂三階の雲中にきこゆ愛にいたつて碑文谷の仁王樣の力もぬけ。九尺の草りもほん〱下駄にならび堀の內の百度參りも此所へ繩を投る。榮螺堂の百觀音も。女郎菩薩の光りに利生をうしなひ。魚らんの觀音さまも肴かごを捨給わん

[若]御見立でござります（と大きな聲で呼はる女郎おの〱いぎなつくろふ）○（二人の若ひ者うしろへことお形りになつてみたてる）[三]下へうち敷をしいて。祖師さまの開帳見るやふに。赤ひものを上へ着て。柱へ片ぶたになつてきせるをたばこぼんへほうづえに取付てゐる子は[若]アレハ片うたさん[萬]その次の小屋を寶形にして。露盤のうへゑ鏑雁股をさしてもちを誇ふといふやつだからえんぎがイヽあの子は（むすびがみにして新田の矢をかんざしにさして居る事也）[若]アレハわか浦さん [三]よし片哥にわか浦イヽ取組だ。（若者片うたさんわかうらさんと呼ぶ二人立つて身じまひべやへ行禿あとからたばこ入持て行。○見通しへ行子ども硯ぶたてうし持てくる）[三]若衆やのめめへ一ッ斤取ッて下せへ（おしきせの酒はのめぬ故

美酒を一升とつてくれといふ也若者立て行）［萬］アノ子や此間爰のうちへ馬が上ッたといふがほんの事か［子］イヽヘどこのかわかとのさまが。表見世を馬をのりあげなんしたのさ。わつちやきもをつぶしんしたのよ見世を引てからで有ンしたから。まだよふ有んしたが。そでねへと女郎衆を馬がかみんしよねへ［萬］ソリヤとんだ事だ［三］［萬］

［子］わつちやアしりイせん（ほどなく女郎くる○片哥下着白ねりの袷あいさ紅練あやちんの金入の帶上うちかけ紹薄うすねづみ裾に墨畫山水を爲がくわか浦も同じやふの出たち上うちかけ裾に鸚やの風けいた金糸にてぬふ二人三五郎萬吉が向ふへならぶ）［わか］あなたちと上んせふ［三］ちと上ンしよ［わか］まづおとり上ゲ［三］爲てをあけてくんねへか（子ども白てう徳利より酒を明る）［萬］若し嘉吉と長を呼んでくんねへか［若］表二階で今明た所でござります聲色アよく遣ひます［三］呼で下せへ［若］かしこまりました（若もの立て行。聲色げいしや二人來る）［嘉］［長］是は御そろひなさつてよふ御出なさりました［嘉］佐渡のまゝでござります［萬］此間來たつけが。こんたア客衆と四會に出たとつて。おてつを呼んで義太夫とかたすんだ。［嘉］そのばんかへ［長］此間御近所まで參りましたがおより申ません［三］春次が所へか［萬］マア一盃のむが能ひ遣ろふ。［長］チト上ゲませふ（長一ぱいのんで）［長］片哥さんちとけんじませふ（片うたてうしかつちり）［片］嘉吉さん上んせふ［嘉］さらばてうだいと會所のかふか（卜廣右衛門が

九太夫の聲色）［長］さしおれのむは（おや玉がゆら之介の聲色〇三味せんてうし合ス）テン〳〵〳〵チヤン〳〵〳〵へ思ふ事いわでのもりのあけがらす引

松本幸四郎

あわざがらすはなにはがたやほ鶯は京そだち
吉原すゞめを羽がへにして男の中のおとこと
呼ばれしばんずい長兵へとアわしが事でごんす

［三］すごい〳〵［片わか］よふ有ンすねへ［若］チトあちらへ入ラッしやイませ（是から片うたがゞしきへ引ける）

〇

茂點(もてん) 下に白麻じゆばん近江たまご色のかたびら茶こはくの帯おなんど茶五所紋付のはおり白足袋
中ぬきぞうり刀蠟色わきざし朱ざや

嘉半(かはん) 越後横じまのちゞみ紅麻じゆばんはかた帯黒絽三所紋羽おり大小せいしつむしくひ玉子色たびうら付ぞうりこふ麻の手ぬぐひひたいより引かけかぶり

此ふたり石ばしよろずへあがる

[石橋女房]よふ御出遊しました [てい主]是は〳〵だいぶお道が近くなりました。 [茂]貴さま此間やしきの下を御通りだの [亭]どこでごろふじました [茂]窓から見ていた [女ども]サア二階へ入らッしやいませ （二人二階へ上る娘十七八女廿二三皆付てくる）[娘]此間はお遅ふ御ざりましたか [嘉]イヤ〳〵見附の行灯。まだ引かない内に乗り付た。きつく早い駕籠さ小馬とあさ市といふやつだ [娘]ソリヤ駕籠のひやうとくかへ [嘉]こて月っ大坂おふ萬。小萬が傳て皆八ッ山のはや駕だ [女ども]能ふあなた知つてお出なさいすねへ [嘉]またそんな事じやねへ品川のあんまの名まで知ッていらア （てうし硯ぶた吸ものやき肴煮肴出る娘ら三弦ひく） [茂]サ嘉半公盃ッおはじめ [嘉]まア〳〵 [茂]サアつぎ給へ （是から酒事女ども二三人来りのんでさわぐ。茂豬内義に花をやる一角也）皆〳〵らんかんによりかゝつている下へ近所の若ひもの来て二階をみて） [辰]つんだや聞へおへらかんの脇へ遣ろふか [娘]辰さんよしねへあんなこと いふ はな [女ども]おめへの形ヤア仕切場の冷めしといふ物だぜへ （娘きさごを投る） [辰]やつだはじきなおしねへ盃をなげてもらひてへ [皆々]ハヽヽ（又壹人商人にあらず書のあんまか文つかいかといふ男うらな三十二三本風呂しきに巻ておかたにかけてはや足に来り） [松次]辰さんこんやアおぶつさらにやアならねへぜへ [辰]どふした [松]さきの立いてうの半丸が出たよ [辰]そいつは大さはぎだへといつてかけて行。おぶつさるとは遊につれて行ヶといふ事也） [茂]けんくわでゝも有ッたか [娘]なぜへ [茂]それでも大さはぎだといふじやな

いか 〔女〕アリヤ紋付の棒引があたつたから遊に行とて。嬉しがるのでございやす 〔茂〕ハヽアそふか
〔皆〕ハヽヽヽ 〔女〕どつちへ入らつしやりイます。又しん州かへ 〔嘉〕しれしさ但いかないで爰へ一ッ宿(しゆく)。
すのこのはしに只一チ夜 〔娘〕わつちやアいや玉づさじやあるめへし 〔茂〕さらばまいろふ 〔女房〕此間村
じさん吉野さんから御つかいにあづかりました。御次手によろしふ（是は此間二人ながら床花をやりし故
女郎より茶やへつゝとゞけせし故也、床花二匁ほどツヽやりし也。かみさま下へ行。嘉半女をつかまへにかゝる。
〔女〕アレ嘉半さんかよ 〔嘉〕（若ひものてうちんを付先へ出る是よりふたり共丸ごし
にて行也）〔皆々〕御きげんよふ 〔女〕おたばこ入お扇子(せんす)がございます 〔茂〕第一のものだもしてらされると
一チばんに入るものだ 〔皆々〕ハヽヽ（嘉半はあふぎでたゝいてうたひながら行ケば茂點は若者とはなしながら
行く）〔茂〕ひら長屋の奥州(おうしう)屋の娘はかへつてゐるか。〔石橋若〕此ごろはかへつてゐます 〔嘉〕羔ゝ子
だのふ 〔石橋〕とんと半四郎といふものでござります（宿へかゝる）〔石橋〕ハヽアこよいは御番衆のお宿(とまり)
がございませふが新しうはどうござりませふか（石橋の若者しんしうの内をのぞひて見て）〔石若〕よふご
ざります。（皆々上る）〔信州若者〕石橋のお二人一座村次さんよしのさん 〔むら〕よしな（と云ッてたつ）
〔よしの〕吉兵衛どんどふもわるひのふ（廻し若者三人有こよいは吉兵へ廻し番也）〔吉兵衛〕なぜ 〔よしの〕尾
張町の定さんが来なんすはづだから。心待にしていたが定さんが来なんしてから。そういつちや。もら

はれめへのふ [吉]どふでござりませうか [よしの]客しが有といつて下せへ （若もの少し小首をかたぶけて）[吉]そういつちやァ嘉半さんだから合點しやすめへマァ石橋をよびやせふ [よしの]ヱヽすかんどうせふ （ほうばい女郎元町が方へ向て小なごへで）[よしの]あの客衆や私やァ性が合はねへそふで。どうもいやでなりんせんこよひは定さんといつて身あがりさ [元町]わつちも彦さんで仕廻ひイせふ（石橋の若もの吉兵衛連立來）[よしの]石橋さんどうぞおめへたのみイすよ。そのかわりどんな事でも聞イしやう [石若]おめへ又はやくかくれたらよかつた [よしの]そふしイせふと思ひしたがついすはりした。（是から石橋の若者と吉兵衛と二人行て口から出次第の事をいつて嘉半をくるめて名代ときめる）[吉]どふもおきの毒でござります [嘉]座敷は明てよこすだろふ [石橋]座敷とりのからだやりさ。それにアノお子は積氣だの [吉]ゑてになるトいつでもあれよ [石橋]わるひくせがあるものだ。わたしが内の女もそふよ（ゑてといふはやくになつているといふ事也、是有手也。）[吉]石橋さんよろしうおたのみ申やす（硯ぶたてうし吸もの鉢さかなどんぶりものなど出るおさだまりの酒事有）[嘉]こよひはかふいふ日に合はふと思つたおめへはゑゝの [茂]まだおれもさだかならずじや （女郎村瀬よしのが名代のしんぞうをつれてくる）[村]どなたもよふ御出なんし [茂]きつい御もつたいだの （むらせ少しうつむいてゑみをふくむ）[新造]石橋さん此間の文やつてくんなんしたか [石]さつそくその日あげました [嘉]石橋誰ぞよんでくれねへか [石]金

彌とおしげをおよびなされませ。 [茂]能からふ [子供]あちらへ御出なんし（是よりむら瀬がざしきへ引ける） [村]紫野やおつれ申ヤ（といつて立。みな〲行）

葉立（はたち） さらしのじゆばん越後のあひさびのかたびら茶どんすの帶くろ繻一ッもんのはおり廿三四

此葉立廿ばかりの時より梅ざとが所へ通ふ女郎も十六七新造あけよりあい初今では女ぼう同前の中也内中のものみな心安くあまりしげ〲なる故此一兩年は茶やなしに來て若ひもの吉兵衞といふが茶や同前に萬事とりまかない也女郎といひ合セ外の客をせかずもし葉立をせく客有ればかくれてお針の部やなどに居るやふにするゆへ梅里もいふ男などへはふんりよして大かた出ぬやふにするこよいも來ている

（女郎二三人來る花町一ト町きわ）[花町]葉立さん梅さんはへ [葉]どけへか無クなつた。あいつァこよい醉ッてゐらァどこで呑だの [花]愛でわつちと二人呑んした [一町]ほんにおめへも醉つて居なんすよ [花]ソレたんすのめへの白てうを見なんし [葉]はんにか（とふつて見て）まだ有ァ肴が無かつたらふ [花]とうもろこしのやいたのとなまづけを買にやりんした [皆々]ハヽヽ [一町][きは]わつちらのちにおまんまたべに來んすよ何ンぞおごりなんし（女はつ來る） [はつ]葉立さんこん夜梅さんおきやくがなくつてよふございやすね [葉]おはつどん夕かし（がし）が有るそふだ。鹽やきにして下せへたんとかイ丶。なわにや

何ンぞ大きな脊が有るだろふ。見世にやつて下せへ下へ行たら萬次を呼んで下せへ（萬次は梅さんがかぶろ也）そしてかみさんに此間の本をおみせなさいやせ [はつ]わつちものちに參りやすへ（梅里下より早見でおもしろくない貌でくる）[梅]どふせう嘉德の久さんが來ているとよ [花]だがそういひんしたへ [梅]おひしが見世へそういつていたとさどふしやうのふ [葉]どふするものかおれが部やへいかふ [花]おめへのへやとは [梅]お針べやの事よ [花]ハヽヽ [梅]わつちやもふこよひ久さんと切れてしまわふ [葉]てめへそんな一ツこくな事いつちやアかみさんの手めへが大キにわるひよ [梅]じれつてへのう [花]かかる時にや人は死すらん（葉立に氣の有る女郎一兩人有其上廊の内壹人こよひひまゆへとり分梅ざと大きに氣をもむ也○久むつかしき客にて葉立をきつくせく○わかひもの吉兵衛來るこ [吉]葉立さん御よびなされましたか [葉]豐八と澤太夫よんでくんねへか [吉]アリヤ新叶へ出ております [葉]明きしだひ來ひといつて遣ッてくだせへそして新叶へ人遣るなら。きね屋から哥集が來てるるから。明日のあさどうしんに歸らふといつて遣つて下せへ [吉]御手紙でもつかわされませ [葉]ちよつと書かふか [梅]新叶へ手紙やらねへでもイヽよ [葉]ナゼ哥集が所へ遣らア [梅]イヽヨ哥集さんも一ツあなの狐だ。又花月さんの所へでもいかふと思つて（みな〳〵ハヽヽヽ）（是は是より前に葉立哥集がとりもちて新叶花月といふ女郎の所へ色じかけで梅にかくれていつた所がそれが梅里にしれて葉立大キにかぶつた事有それゆへみな〳〵わらふなり）

〔梅〕それにおめへがわつちが所へくる事ァ品川中へ橋からこちらァ大概しれているからモゥおめへのかきやァまくが通らねへよ（女おはつくる）〔はつ〕何でごぜへすへ大ぶにぎやかでごぜへす〔吉〕新叶の花月さんの事よ〔はつ〕それより御てん山からつかまつて來た時はおかしかつたけの（みな〳〵ハヽヽヽ）〔梅〕ハヽヽたび〳〵ごうをさらしなんすのふ〔吉〕それがおもしろひのでござりますはな（久來る坊主客なり外科醫かなんぞのてい腹ッぷくれなり）かとくの久さん御出なされました（と下から呼はる）〔薬〕ソリャ來たぞおれがせけばせくのだエかふ物がまちがつていらァ（女郎ばたばたてん〳〵の座敷へ行）〔久〕コウ梅里は薬立と切たといふはうそじやねへか。ゑゝつらが女郎のびんぼう神。獅子身中のむしだゑゝつに喰ひころされた女ァ宿中でも折介じやァねへが手にあまるァそろばんでなけりやァかん定が出來ねへぜへ〔かとく〕ハヽヽ薬立みぢんだ男がィヽにからだ中がいきさ。女郎を殺す事はごん妙でござりますあのくら田の姫蔦さんが薬立さんに一夜逢ふと外のつとめがいやに成あの人に惚ねへ女郎はよそはしらんがマァ宿中にはあるめへといひなさいやした〔久〕いま〳〵しひやつだほんに切れねへけやァこつちがこけにならァ〔かとく〕ほんに切たそふでござります〔久〕ぬしャなぜしつている〔かとく〕此間神田の文四さんと白さん正良さん本郷の鴻さん四人一座で佐渡やへ御出なされやしたが薬立さんは中洲のかり宅大かなやの豐里を買ふといひなさいやした〔久〕がつてんがいかねへぜへ（とほそごゑでだ

んじているかさく皆もいも栗立と至ごく心やすくするゆへならんで久がくるあるつほどなくおしきせの硯ぶた鉢さかなてうしなど出る梅里も來る）〔梅〕かとくさんこの間あのぐみとやらいふものくんなんせんのう〔かとく〕一ト間さんよしのさんがみな取りなさいやしたや久さん北側東垣の芝浦さんじ姉さんを連れて客衆が玉川へ御出なされましたが鮎はまだずぶちいさふござります〔久〕まだちいさかろふ〈へ〉鮎か來てかけを足す葉や夏椰といふものかの夏やせがはじまるとあいつはふとり出すやつよ〔梅〕久さん大ぶあしが近くなりなんしたの〔久〕近くもねへ十日に一度といふ勘さ〔かとく〕ちく生めかわひ男といふのかへ〔久〕うそじやアねへおゐらア白魚のはしりから寒念佛の年ン明まで三百五十余日みぞれ夕立に無構くわで傳馬町の御用でうちんじや無が品川へ通ひつめだ。かた田の馬とおれが通らねへけりやア高輪の夜が明ねへコウもじの鍵裂に手こずる仕立やじや有るめへし手めへのやふにかける女ア東方朔が御ほうだんにも聞た事がねへ〔梅〕どこでならつて來なんしたか大ぶながたきをしなんすねへかけるのかけねへのと遠乘りの馬じやア有るめへし〔久〕すねおしとまくら引にやア叶はねへが女郎買の立引にやア越後屋から千觔取ふと思つていらア木の事だが御てん山の一ト重ざくらにてんかけて天王さまツヽこぬきに打ツて七月に三役くらつても暮にやア。部屋の疊に髮月代さしてのうれんを着かへさせ。七五三をおれがかけてかけみせの仕まひ紙アうら打唐紙にしてとうこうに書かせらアへ。どんのくほ

に髪結ッて輪違にたばこのむ若ひやつらァ遣らずのどうとりといふつら付で。親仁と女郎にさばァよむ事ァ上手だが。もん日物前にやァ二〆が一石餅をくらつて。胸を淺間山ほどやかして手赤が付てもすつぽんの首を見るやふに襟斗出して燈籠うりが白雨に逃る足付をしあがらァへ 【梅】小山勘助とやらが積の藥の云立するやふで有んすよ。そんなにならべなんしちやァ通りの邪魔になりんせうぜへ 【かとく】古錢うりほどならべなさつたハヽヽヽ（若ものくる） 【客】ちとあちらへ入ラッしやいませ（是から梅里が部屋へ引ける酒事お定り） 【久】コウ手めへ薬立を切れたといふが。此間おしやごじで見かけたといふものが有るぜへ 【梅】わつちと切れたとつて宿へ來なんせん物じや有るめへし。又山崎の常盤さんのとけへでもいきなんすでごぜへせう（薬立中たびときわが所へいつた事有故也） 【久】そんなに手めへ油賣のうなぎつかまつたやふにぬら付出入もねへじや〱ねへか。何ンぼおれが蜆貝で据風呂のふたするやふにいつてもかんじんの。借し元がきまらねへじやたゝける狂言じやァねへ何ンぞそつちで白ひとも黒ひとももやふの付やふが有さふなもんだぜへ。口じやァ櫻草の鉢植へほうはうがおりたともいわれるものだじよさいねへ手めへでもあるめへじやァねへか 【梅】かぼちやの雪隱へからんだやふにいひなんすけへども。指を切らふの起請を書かふのといゝしたとつてそれにころぶおめへでも有んすめへしどうすればよふ有んすへ（久は坊主にてせいがひくいゆへかぼちやせつゐんなからむとあてこすられて火にせき込こ

わ高に成）〔久〕コウかぼちやの雪隠をからむとは何の事ツた〔かとく〕アリヤおめへさんたとへにいひなさつたのでございやす〔久〕手めへ桃じやア有めへし梅里に並ンでなる出入アねへ（是から久はらを立てしゆろ箒で梅里を壹つぶつ梅里大きにせきこんで引ツたくり久を二ツぶつ是から大いざになつて久は切れてかへる久が先へ手を出した故かとくの若ひものも理にまけてつれてかへるちきとなりのむら田の内へあがる久があくたいの卷ものはしげければ略すつかとくのわかひものなよびかへして）〔吉〕どふでこよひの事にやなるめへがソレ御たのみ申やす〔かとく〕先へ手を出したこつちはわるさわるけれど梅さんもあんまり一ツ園だおいらアうけ合はれねへ（といつて出て行く。若ひもの跡へ重花ふる葉立お針部屋より出てくる梅里が部屋もはき出し重花ふる女郎三四人くる若ものおはつお針みな梅里が部やへ來）〔葉〕てめへといふものは久をむごくしてとう〳〵返したの〔梅〕それでもごふはらで有んすもの〔はつ〕こんやは梅さんがもつともでございやす。下でもおかみさんが腹立なさひやした。かねびら切ツて一ツ盃をいふものアいつそにくらしひね〔梅〕いつそげいしやを大勢よんでさわがふじやアねへか〔葉〕よかろふさわぐべひ〔梅〕（葉立が耳へ口をよせてこんたんをだんじて）萬次だまつて居やよ。用だんすの下の引出しに有るものを持て來や（是は梅里外の客にきのふ床花をもらひて遣ひのこりが二兩と貳朱銀五ツ有るを葉立に遣りて今宵のさわざの足しにする葉立も當時親がゝりゆへ金銀じゆうならぬゆへかやふのはかなき仕打有しごくのひじゆへ兎

萬次梅葉三人の外しるものなし葉立が紙入引出しに萬次が預りている故それへ壹ツ所に入ておく） [吉]御呼び
遊ばしましたか [葉]トに新造衆やアいくたりいるみな仕まつて下せへ [吉]かしくさん民さんかつらさ
ん梅が香さんが居なさいやす [葉]女げい者でも男でも明てゐるやつ三組斗り呼で下せへ今夜はちとお
ごらねへけりやア埋られへ見廻しへいかふか [吉]せまくつても妥がよふござります私もこんやちとわ
つさりとさわぎたひ氣でござりました久さんで氣をもみ切りました（といつて吉兵へ下へ行） [かみさま]
吉兵衛二階は何事だ [吉]今夜は葉立さんが奢とつてらんこくで(こゝカ) [かみ]ハヽヽ （妓者もだん〳〵來さわ
ぎてかへるも有外の座敷へ廻るも有り少ししづかになる 女郎三四人に 女共も來りて酒なのみめしなど喰ふもあ
り） [葉]元町さんおめへの松さんは來るか又かぶりアしねへか [元町]いんねかぶりやしねへよ夕べ
來なんしたつけ十藏を呼なんして龍藏と德次が身ぶりをしんしたがいつそおかしふ有んすよ [梅]松さ
んは嫁をとるそうだんが有そふだぜへおめへゆだんしなんしたら大きな目にあいなんすによ [元町]う
んにやありやア庄さんがいゝわでしやくりなんしたのさみなうそで有んした手を廻して聞ンした [梅]
ほんにかアノ庄さんはよふあかはらをたれなんすのふ門之介が煩つてゐるとつてききさんに氣をもま
せなんしたがそれもうそで有ンせふ。 [葉]ソリヤほんの事だあれが煩つているから桐座でやア盆狂言
にすがはらを取組そふだよ。 花さんの安さんは江の島から歸りなさつたか [花]アィてうどいつた日と

もに七日めで 〔薬〕その内あけつめか 〔花〕ナニサ初會に二度出んした 〔薬〕來るかへ 〔花〕夕べから居て晝
歸りなんしたおはつどん聞ねへ安さんはまたいつそあざとひ事を云ひなんすよ 〔はつ〕ほんにさあれほ
どはつめいだがネ 〔花〕晝もいゝなんす事にや手めへを内へ入ると方々連てあるひておもしろひ所じや
五日三日ヅヽとうりうするといひなんすはな 〔梅〕〔はつ〕 梅川じや有るめへし 〔梅〕薬立さんおめへもあ
すは居續に居なんししづ山さんの成程さんがお出なんすから近付になりなんし 〔薬〕朝は歸らねへけり
や内がわるひ晝過から出なをして來やふ 〔梅〕近ひころは御所女中の出合するやふに。六ッあがりとや
らだからいつもあつけねへよ 〔はつ〕一チカ。中かとくみどりや坂口。和國是見なんし文が是ほど有や
す 〔薬〕ほんになア藤藏に袖なしはおりを着せて賣に出そふといふほどあらア 〔はつ〕是はこんや都さん
の近さんにたのんでやるのとコレハ山へいくのと 〔さわ〕山へ人がいくなら深見さん首丈さん齒丸さん
の文も一所にやつて下せへ 〔若〕豐八と澤太夫が參りました（澤太夫豐八が手を引片手に三味せん箱さげて
來） 〔澤〕おつとあぶなし紙屑にけつまづくまひぞ 〔豐〕おきやアがれまだそんなに紙屑の出る時分じ
やアねへもの 〔豐〕〔澤〕薬立さん今ばんは大におそふ成りました 〔梅〕どなたもよふ御出なんし 〔澤〕新叶で
三坐敷そのくせ仕まひは三勝の緣切 〔梅〕いやだ 〔豐〕是はしたり緣切らずさ 〔澤〕私もきらひじやさかひ
嘘八をかたりちらして參りました 〔豐〕只今歸りに松坂で。阿部島の眞琴さんが御出ヒ成まして。ちよ

んのまをつとめて　付たればうれしげく澤太も私も聲をだいなしに致しました〔葉〕もふこよひは仕舞にしたがイヽ三味せんもゆるして遣ろふ呑んで噺していくがいゝ〔澤〕此ごろは百人色男でうるさふござります〔葉〕うら山しひの〔豊〕此間はかゝア左衛門がさんを致しましたから。清姫といふ仕打はなしやたらむせうに越しきす内へ歸るとかゝアが顔が八面大王さ見へねへからよさはるゝが（藝者は橋むかふでなければ遊ばれぬゆへ橋をこして行なしやれて越とばかりいふ）〔葉〕イヽのさこよいも趣がイヽ元〆なおれがするべい太夫も連れ越しにさつせへ〔澤〕私は越とおきにしれます此間も寐ている所へふんごんで來くさつて日高の錦木場といふ物じやさかひごふをさらしました〔梅〕イヽはな何かみんなわつちが部や置て越しなんせな〔はつ〕噂て來たら見世でわたしがてうしを合して遣りやせふ〔豊〕世帯道具をお部屋へ置て越さふ〔澤〕ゐけんに付かふか〔澤・豊〕御きげんよふ〳〵といつて二人は猪むかふへ遊びに行女郎どももおのがさま〴〵ふしどに入ればおはつ屏風な數帳の見へぬやうにあんどうのきは盗引紐しはしこたどん〳〵下ル○はるか奥の座敷で吉なかひのはへた聲で）すいのすいほどはまりもつよく貝なつかしふいとしうてぐちになるほど逢ひたひものどふマアわかれいられふぞ（と文字共當木共しれず口から出しだいにかたれば○こちらの方ではいきなこゑで）こゞゑる手先懐へあたゝめられつあたゝめつ。木々の木枝ももみだして色で逢しははやむかし今はしんみの女夫中へいかなるさとり切たる禪しうのおびくにもなどや心が

うごかではあらじ枕より裾より戀のせめくればせんかたなみにれうりばのふ男ども瘦合ふ氣にもなるべし閏日八日と見へすけば何かしつぽりとしたる座敷で氷おろしなふくむやふな聲で）去年よりことしはいとしうなりきのふに今日はますかゞみ神や佛の御ゐけんでも思ひきる氣が有らばこそほのうの中にはくらされふがあなたにわかれかた時もうき世の日かげが見られふか（と若太夫に筆太夫庄助を調合して）戀を十寸見山彦も廿六夜の灸を香食焙てやるのは恩ならず。すへさするのを恩にして江戸のきつすい一すいの枕に通ふ夢路のちぎり座敷〳〵もやゝしづまりて。不寐のひやうし木かつち〳〵。聞へて上草履の音もたへ〴〵になるかと思へばごをん〳〵といふもの海へ落ると。くわらり〳〵かな棒にはあらであふた嬉しさ別れのつらさとうたふて幾人も通るとおもてのくゞりぐわら〳〵おちかひ内といへば久あとへ箱でうちん持て石橋でござりますといふ歌集さんはやかつた菜立さん書來なんしよ。三さんおいらぽんにくるよ萬公しづかに忍ゝびや茂黙さん嘉平さんすぐにお駕にめしませ菜立さんおめへのアふとんが敷て有るか歌集さん杵屋へよるか。サア遣りやキヤツ〳〵高いぞキヤツ〳〵。カア〳〵〳〵

跋

子品川を慟歎美曰南方之驕也君子居レ之朱註に南方は風氣柔弱也こ故に張こいふは見世番の言の葉にして振といふは江戸入の鳥毛にて有らし其軟き事岸下に漂泊海月のごとし見通しの新吾左隱し藝を出せば單に薩摩芋の笛を吹に似たり根芋横町の横に行娟飯盛はいやな客に大佛を脱がれ色にしつぼりこ濡佛をたのしむ新造は客のかへるをしらずして竟寢こかしに逢ふもいまだ日の鮫頭故也爰に逸我なるもの驛雀路と云へる册子を著し跋を乞ふ予ぐつと承知こ閲なすに妙でごぜへすおそろかん新橋の簪駕は鷓胡のとぶに似た山の遊客此驛に入る時は飯黎果報にまかせ給へと云爾

于時　天明己酉發春

内新好述

内田

新太郎

娼註銚子戯語

全

娼註銚子戯語序

冬奉公

古人の涎は嘗べし。牛の涎は嘗べからず。古人の糟は喰べし。酒の糟は喰べからず。余遊子方言。及び。辰巳園を濫觴とし。秀作數篇の涎を嘗。煉□□喰て一小册を著し。或人に序を乞。或人曰お茶あがれ。□□述作。能案じも無から。我はい□。余答曰一寸の蟲に五分の魂魄はちぶ。されても。よふござんす。糟を喰ば皿嘗ると。白鬢白剃に耻をかき。もとより糟は酒のえん。甘口ながら此一卷。銚子戯語と題しやす。そふおもつて。おくんなんしとか云ふ

鷄茶萬年春　信陽大飯喫誌

盃臺先生娼註銚子戲語

門人　坂上瀧水
伊丹七梅　校合

南鐐之篇

花の雲鐘は上野か淺草かの翁の吟も今此時とおもひやらるゝ彌生の長閑なる夕氣色にみの□□（わのカ）別莊の門にて風流の友とし五六人左樣なれば爰でおわかれまふします明後日のひらきまでよしまるさんおたのしみでござりませう〔芳丸〕どふでござりやせうかときにむすこはずいがへりか〔路洲〕あいすぐにかへりやす〔芳〕そんならいつしよにいかうどなた樣も明後日おめにかゝりやしやう（よしまるはとしのころ三十四五にて黑地に白すじのちりめんの下着に八丈じまのあいぎとびいろはぶたへのあわせ羽おりとびいろちりめんの小袖もへぎはかたのおびひらしやのかますの紙入とびいろびろうどの角さげのたばこ入銀と鐵とのはりわけの金ぞうがんのきせるさめざやのわきざし花いろのくつたびやわた黑の三まいうらつけろしうはとしのころ十八九にてしまなゝこの下着黑羽二重の小袖むらさきこはくの大名すじの帶黑なゝこのあわせ羽をり

唐折きれのかますの紙入さらさのたばこ入高まきへのらうの銀ぎせるろいろのさやのわきざしすあしにばらなのうら付[路]よしまるさんけふの三評も存義と常仙はそろいやしやうが一漁はちがひやせうか[芳]存義や常仙にかんばんにでもでようとおもふが一漁はあてもしねへ[一]さいふ即點の闌女もまたまけやした亀友さんの夕ぐれに歸るお針のさそい合といふ句が十八てんに禿がどふとかいふ句がぬきさ十八てんにぬきときゆうさんがしめたもんだからつゞく勢はなへのさとかく買色がいゝといふからあんじやすけれど歯がたちやせん[芳]まだ〳〵なんとしてそうたへ俳諧はつかをふとおもふ道具の穴をし

りぬかねへでは勝ねへよ俳諧にやァかぎらねへしよじあなをしらねへじやァ不通だそのめがかちたく

ばなんと今からいつておれがしうちのそのめが道具をしやうで見る氣はねへか 路 氣はありどをしとやらだけれどふたりばかりではさへもござへすめへ 芳 てめへなんどはおや玉がくれのちよんの間に深川へばかりいくからよし原のきどりをしらねへさへもねへ大ぜいよりしよじ両吟くらいのことサ 路 そんならめいりやせう（土手へ出て大門へ入中の町巴やへ來） 芳 おかさんこのごろはしばらく 巴屋女房 おやどなたさんかとおもいゝしたらよしさん御いであそばしやしまだ朝

ばんはおさむふござりますが御きげんよふあなたよふ御出なさりいゝしたしげやお茶をあげまふしや
「芳」此むすこはたちばな町のうしうといつて大通のみばへさ花も俳諧もさみせんもわつちが組合だから兄弟のよふにこゝろやすくしやすからおり／＼よこしやせうからわつちどうぜんにおもつてこゝろやすくしてくんな 「路」おたのみまふしやす 「女房」おはつにお目にかゝりやしたよしさんとはひさしいおなじみでおせわさまになりやすあなたさまもこれからはずいぶんおこゝろやすう（はなしの内にてい主源ははつちにしりをはしなりわかいものにもち花とあめのふくろをさげさせてかへり）「源七」これはよしさんおいで遊しやし 「芳」いかゞ／＼どつちへご来りんハハア目黒かな 「源」さようでござります丸の内のおやしきへまいりましたがふと出来ごゝろで目黒へまいりましておそくなりましたこれおしゆんなぜおさかづきをあげねへあなたよく入らつしやりました 「路」あい 「女房」ほんにわたしとしたことがおはなしばかりまふしいゝしておさかづきもあげまふしやせんもしへあなたさんはたちばな丁のおかたさんでよしさんはとんだおこゝろやすいとつておつれまふしなんしたノサ 「源」是は／＼よふこそこれからは御こゝろやすふ御ねがいまふします（吸物酒すゞりぶたなど出し）「女房」お一トツおあんなさいやし 「芳」ちといたゞかふかね 「源」まづ／＼おあがり遊しやし 「芳」州ほうおさきへ（一トツのみ源七へさす）「源」ありがたうござりますがまづ路州様へしんぜられませぬか 「女」まづ／＼ 「源」さやうなら御めん遊

しましほんによし様金杉の中近江のりやう巳来でございますね 芳そふかね其ときはおひでが酔てわつちを大キにこまらせた 源はゞかりながらけんじませう 芳ちとおさへやせうか 源まつおとりあげ遊しまし 芳（一トツのみ）州公ちとのみねへ 路いたゞきやしやう（一トツのみ）御近付のためとかいゝやすからあげやせう（女房へさす） 源これはろしうさまわたくしがいたゞかふとぞんじましたにかゝアへつかはされたはちとわかりませぬ 芳（こがいらいなして）いかさまね 女房おいたゞきまふしませう何にさ源七にをかまいなされます（みな〳〵わらふ） 源ときによし様こんばんの御趣向はいかゞでございます 芳されぱさこんやはろしうをはじめてぬしのうちへつれてきたからとかくわかだんなへはむきといふ所がいゝ 路これはあいわく 源左様ならもふ見世もそろいやしたろうすぐにわたくしが御供いたしませうこれたなのてうちんをよこしやそして羽おりにはころびがきれたから下のひき出しの黒い羽おりを出してくりや（女房ははおりをとりにたつ源七はかつてにておびをしめなをす路しうはがくを見て） 路篆書は親和のことだ 芳篆の額はできがいゝしかし気しやうは九皐かるいは其寗品といつちやア東江だ 路東江はとんだきれいだね 芳こゝにもちよつとご弟子があるが中にも花あふぎなどは號を五明といつてよくかきやす三めぐりの額にも五明楼遊女花扇とかきやした 源きどりは杜若かるいは友右衛門品といつちやア路考だとへ 芳路いゝ〳〵 源坂三津が道成寺はどふでござり

やすね 【芳】是業は上手なものだよやつぱりせうの慶子さ 【源】そふでござりませふ此あいだに見にめへりやしやうさあ御出あそばしやしかうとかうだによつて京町かね 【芳】京町の猫かよひけりあげや町どこなりと 【路】其角も京町が好であつたそうだ 【源】まあおいでなされてごろうじやし 【芳】おかさんおせわともいゝにくいからごちそうかね 【女郎】さようならごきげんよふ 【路】はじめてまいりやしておこゝろやすだてを致しやした 【女房】これは〳〵 （はきものなななす） 【芳】【路】明日〳〵 （京町まんじやのかうしなのぞき） 【芳】（小縁にて）あの本を見てゐるひわ茶ちりめんだはへ 【源】むかふの右から三ばんめかへ 【芳】あれさ 【源】九重さんでござります 【芳】むすこはどふだ 【路】こちらの藤いろがわつちは書ぬきだ 【芳】あじなところをきくの新造じやアねへか 【源】どれへ 【路】あのふじいろちりめんサ 【源】もへぎの帯かへ 【路】あい 【源】通路さんでござりやす去年の秋いゝ旅人しの客がついてへやをもちなさりやしたサアおあがりなさりやし（さきへたちはいる） 【まんじやわかい者】源七さんきのふから御めにかゝりやせんおみたてはすみましたか 【源】どふだいそがしそふだね九重さんと通路さんをあげまふしてくんな 【若】サアおあがりなさりやし（みな〳〵二かいへあがるこゝのへがざしきはおもて座敷にてよつぽどかうまん也みな〳〵座に付）【若】源七さんもそつとそつちへおよりヒ成やしどなた様もよふ御いであそばしました（たばこぼんてうしさかづきすゞりぶたなど出してしばらくありて女郎来座につく） 【九重】ごつさんおとう

どうしうおざんす [通路]おかさんはしやくによふおざんすか [若]ありがたうござりますきのふけふはおきてをります [若]源七さんおはじめなさりやし [源]さようならわたくしがはじめてさしあげましやう [芳][路]おい〻源七半ぶんうけてのみよし丸へさすよし丸のんで下におく源七さかづきをだいにすへこゝのへがまへへいだすこゝのへのおなまへなして [九]はゞかりまふしんせう [路]ちとおなさへまふしいせうか [九]まづおとりあげなんし（路州がさかづきを源七通路がまへへいだすのむまねなして） [通]ごつさんあけやしやう [源]これはありがたうござりますあなたのおさかづきならいくらでもたべます [通]またおだをいゝなんすよそしてはなし木をやろふといゝなんしてよくだましなんしたよ [源]おだましまふしはいたしやせんこのあいだもまふしますとをりあげよふとおもつてもつてめいりがけにおかふへよりましたればその梅さんがちよつと見せろとおつしやつておかへしなさりやせん [通]いりゐしねへやくそくをしんしたものへはくんなんせんでそのむめさんにあげまふしなんすとはごつさんもきついじやうだしだねへこゝのへさん [九]ばからしいねへわつちもひさしいあとに江戸へいきなんしたら觀音さんでやうじをかつて來ておくんなんしとたのみいしたなれどかつてきてもくんなんせん [源]それりやあまことにわすれました [通]むかふのそのうめさんの用ならわすれもしなんすめへ [芳]こりやあおめへがたのいゝなさるのだもつともだきつゐちよ／＼らね [源]これはよしさんまでむかふへおまつりなさへし

てわたくしにだいのかぶりね 〔若〕源七さんわたくしはぢゆうながらいそがしうございますからおたのみまふします 〔源〕をいいきな 〔若〕さようならの〻ほど（出て行） 〔芳〕もしそのはなしほんにい〻はなしがごぜへすか 〔通〕わつちにやあみせもしなんせんからしりいしねへ 〔芳〕はなし本もまふふるいことしのくさぞうしの大通の出入や弟の甚六はい〻出来だ 〔九〕出入とやらはひやうしに金つかふ人のうわさや江戸の春とかいふほつくのあるのかへ 〔芳〕あいそれさ 〔九〕ありやあみやんせんが弟の甚六はみやしたがいきだね 〔芳〕忝をよくかきやした 〔九〕ぬしもこつちへおよりなんしておはなしなんしな 〔通〕わつちもさつきからきいていやしたがごつさんはきついむじやうね 〔源〕こりやあむごいぞわたくしひとりもんですてられるのだ 〔芳〕これ甚六やそこのさかづきを取てくんな 〔通〕をやぬしを甚六たとい〻なんすはな 〔芳〕あいわつちが弟さ 〔九〕ほんにかへ 〔通〕それでもねつから似なんせんね 〔芳〕そのはうを血をわけた他人だからさ 〔通〕ぬしやすきなことをい〻なんす 〔源〕かよひじさんはかわつたことがお氣にあたりましたね 〔通〕なあにさ氣にあたりはしいんせんがた〻さ（につこりとわろふ） 〔巴や若者〕もしだんな様此おくわしはろしう様へおさかなはよし様へおあげなさりやしとおかみさんがおつしやりやす 〔源〕おいていきやそして玉やのみやこさんの客しがきさしつたらおらあいくゐへから手めへつれまふしや 〔巴や若者〕さようならめいります 〔源〕ろしう様は御酒をあがりませんからか〻あがこれをけんじ

ますよしさんさへもいたしませぬか此おさかなで一トツおあがり遊しまし [芳][路] これは〳〵（是よい酒ごとありてしばらく時をうつす）[若] ごたいくつでおござりませうちとあちらへ御入遊しまし [源] さあおとなりへおいでなさりやし（九重かよひなにいでて若芳丸路州源七はとなりのかよひなが部やへ行）[芳] はなやかなてんしきだかけものはなんだ [路] 文麗さんの山水さ [芳] かくべつのものだにふすまの梅は酒龍だの潮龍といふものはきようなものだうきよ絵もいゝがかうした手づよいこともいゝ花は四季咲の杜若か少庸軒流といふきどりかあふかた花屋だらう [路] しほやじやあねへかへ [源] 絵も花もよふござへすが通路さんもよふござへすね路しうさんが新車に萬菊といふところかね [芳] 調子に路考じやあんめへか [若] なるほど人がらにあいきやうでかね [路] おてうしはごめんだね [芳] てうすのではねへしこつてかよひ路だろう [路] よしさんの女郎しはけんしきかね [芳] けんしきだかかへしきだかしらねへがうへがねへ [路] ありすぎておこまりかね（源七わらふしばらくしてかよひち來）[通] ごつさんまだいなんすかへりなんしな [通]（廣次がこわいろにて）おまへさんがたのおいでなさりますまでは身いごかしもする源七ではござりませぬ 引 かよひじきせるにてたゝくまねなする）[芳][路] 丸屋ア [芳] ほんにむだばかりいつて氣がつかなんだひるのとを道でくたびれでござへせうもうかへりな [通] ひるどけへいきなんした [源] 目黒へめへりました [通] ごつさんはめぐろのふどうさんがきついしん〳〵だねぬしもちと

おやすみなんしな [芳]さあごつさんいきなわつちもねよふ [路]まあおはなしなさりやし [芳]いつてき
よふ [原]路州さんごきげんよふ通路さんおたのみ申上ます [通]あい [芳]おやすみ [路]のちにおめにか
かいやしやうごつさんおさらば [通]あなたおやすみなんしごつさんむかふのその梅さんへもよろしう
[原](あじな聲にて)おゝきにおせわすきんせんによ 引(出て行あとにて通路笑ながら) [通]ともへやのご
つさんのよふな氣のいゝ人はおざんせんぬしあおこゝろやすうおざんすか [路]いゝへけふはじめてち
かづきになりやした [通]わつちやこゝのえさんは子どものときからかわいがりなんしたからいつそこ
ころやすくしいゝすから來なんすといろ／＼なことをいつてなぶりんすけれどついにはちあたちなん
したことがおざんせんぬしやあきうくつらしくおきておいでなんせずとおよりゐるしな [路]かふかね
(まへのねにしている) [通]みやどうしやうの羽おりおば御ぬぎなんしておやすみなんしな(羽おりきもの
をそこたゝみにしてたんすへ入ちやうなおゐす) [路]これはばかり [通]こゝのえさんの客しとぬしやあ
とんだ中がよさそふだね [路]あいわつちを弟のやうにおもつてゐるからわつちもあにきのよふにおも
いやす [通]ぬしやあほんのあにさんがおざんすか [路]いゝへわつちが惣りやうでいもうとがふたありご
ざへす [通]いくつになりなんすへそしてしやみせんでもひきなんすだろう [路]十門と十ウさおゝきいの
長うたと富もとの三味せんをひきやすちいさへのはおどりがすきでめへにちけいこにいきやす [通]う

らやましいねわつちなんぞはあにさんとわつちとたつたふたりでおざんすがそのあにさんがどうかく
でとつさんやかゝさんがいつそこまりなんすはな 路 それやあこまつたもんだねわつちもいもうとが
もちつときりやうがよくばうらうとおもつていやす 通 ぬしに似まふしなんしたらきりやうはよふお
ざんしやうがこわらしいむだをいゝなんすなごしんぞさんは〳〵 路 ござへしねへ 通 それじやあおか
かさんがてへ〳〵ではおざんすめへ（新造にしき木来りかよひ路がそゝへ口をよせて何かいゝてたんすなどあ
けるしうちあり） 錦木 ぬしやあ染山さんの粂さんによく似ていなんすね 通 あふかたとしもくめさ
んとをないどしくらいになりなんしやうもしぬしやあいくつになりなんすへ 路 十八でござへす 通 み
なんしのくめさんもたしか十八になりなんすよ 錦 わつちもくめさんのような容しがほしうおざんす
（かよひぢがせなかをたゝきにげて行あと九重来り） 九 あなたおやすみなんしかよひ路さんおやすみな
んし 路 あい 通 こゝのへさんおはなしなんしな 九 あいいつてあいりやせう（出て行） 路 こんやは
あついやうだね 通 わつちあさむふおざんす〳〵　）そんなに　しなんせずともつと
なんしなそして　のおきどころがおざんせん 路 かうかね
通 あれさ　をこゝへおだしなんしといふことさ 路 とんだ　のまごつくばんだいつそかうし
やしやう（わらひ　） 通 そふなんしといふことさ 路 あゝ　の　へへへつて

たへ 【通】よくしいすから　　いなんしそれ　　はおざんすめへ 【通】よふごぜへす
おめへいくつになりなさへす 【路】（わらひながら）ひとつましはなんとかいゝすねへ【路】だれにひとつま
しだへ 【通】しりいしねへ 【路】あの琴はどこだね 【通】おくの染山さんの坐敷でおざんすさつき新造しが
そふいゝしたくめさんといふきやくしにいつそほれなんしてよびなんす女郎しさ 【路】女郎しにほれら
れるとはとんだこつたね大通のねだらうらやましいわつちらもそんな身の上に一チ日なりたへ 【通】
女郎しだつてほれめへもんでもなしぬしにもほれている女郎しがあるめへもんでもおざんせん 【路】ど
ふしてわつちらにほれるもんだ 【通】あつたらどふなんす 【路】女房にするのさ 【通】そんなにぬしのぢゆ
うにもなりやすめへ 【路】おふくろさへのみこめばできるのさ 【通】おとつさんはへ 【路】おふくろにまく
らをさせるのさ 【通】おかゝさんがそふいゝなんしてもおとつさんががつてんしなんせずばどふなん
す 【路】その時はふしだにするのさ 【通】（路しうが　　）それみなんしのぬしはじやうがねへ
からほれなんした女郎しがあつてもいゝだしなんせんのさしかしおとつさんやおかゝさんのいゝなん
すことをきゝなんしやうとおもひなんすがわつちあ孝行だとおもいんす 【路】かう〳〵だか浅漬だか
しりやせん 【通】またおだをいゝなんすそしてもつと　　りるし風をひきいすによ（し
ばらくはなしはやみぬ） 【隣座敷】（よし丸はかよひちがざしきよりたちいでひとりたばこなどのみけるにしば

らくして九重來）　[九]まだよふはさむふおざんすね　[芳]いまじぶんいさむいはわりいせんだねこんやは源七にのませうとおもいやして相手になつてゐゝやしたら頭痛がしてこまりやす　[九]ぬしもふかくはおあんなんせんそうだねそこをとをるのは琴路じやあねへか　[花ことぢ]わつちでおざんすがなんでおざんす　[九]いゝ子だあつういさゆをもつて來てくりやあ　[琴]いまもつてめいりいしやう（しばらくしてさゆをもち來）さあもつてめいりいした[九]よくもつてきたそしてそつちいいつたらみつうらさんにいま文をかいてあげんすからいつしよにやつておくんなんしとさういつてくりやあ　[琴]あいそふまふしいしやう（こゝのへくすりなふり出して）[九]もしこれをおあんなんしだきにゐひかさめんす　[芳]そりやあありがたへ袖の梅かね　[九]いゝへ安寧湯さ　[芳]いゝにほひだね　[九]わつちらいゝといつてもくすりのにほひはきらひでおざんす　[芳]くすりきらいもこまつたものだね　[九]しやくのおこりいしたときなんぞはいまねへけりやあせつなしのめばむねがわるしいつそこまりいすはな（まくらもとにてふみたかく）[御造錦木]こゝのえさんどふなんした　[九]にしき木さんはいりなんし　[錦]あいどけへおやりなんすふみだへ　[九]たけさんのとけへやりんすのさ　[錦]ちつとふでをおかしなんし（こぬ人たまつなのうらのゆふなぎにとかく）[九]またまち人だね　[錦]わつちじやあおざんせんそめやまさんのさ　[九]くめさんだろう　[錦]粂さんがきのふの朝はらをたつてかへりなんしたとつていつそくろうにしていなんす

【九】あんなにあつくなつてくめさんをよびなんすが粂さんだとつてまだとしはいきなんせずあにさんはあるしうちのしゆびでもわるくなりなんしたらこまりなんしやう【錦】粂山さんはくめさんがよびたへよびたへでそんなとこへ氣はつきなんせんのさ【九】そふでおざんしやう【錦】それにやりてしやわけいしのかほつきはわるしそめ山さんの身になつてみなんしてへ〳〵くろうじやあおざんすめへ【九】そばでさへきいどくなときがありんすまゝならぬ世の中だねえ【錦】いつそわつちがよふによびたへとおもふきやくのねえがよふありんすいつてめいりやしやう（にしき木は出て行こゝのへはふみなふうじてしまい）【九】つゝうはよふおざんすか【芳】よくきくくすりだねさつぱりとよくなりやした【九】そりやあよふおざんすあのかよひぢさんのきやくしはにうわらしいおかたでおざんすねぬしのごきんじよかへそしてまだねつからとしがいきなんせんそうだね【芳】ついきんじよでござへすとしは十八になりやすうちにいると氣がつまるとつてわつちがとけへばかりきていやすがあれでもさわぎたつとゝめどがござへしねへ（こゝのへよこになりよぎをかけて）【九】そふでおざんしやうまだとしがいきなんせんからさ【芳】おとこからみりやあおめへたちあおとなしいもんだよ【九】なぜへ【芳】かんがへてみなおとこは十八や十九じやあまだ子どものようだによそれにおめへたちやあ毎晩〳〵いくじのねへていしをもつてきげんをとるようなもんだそれに酒でもきつくよつてさわぐのはだましたりすかしたりしねへけり

やあならぬみのまわりのみぢんめへもしなさりやにやあならずてへノヽのはたらきじやあいかねへ
[九]そりやあそふでおざんすなじみの客しかぬしたちのよふにおもいやつてくんなんす客しをとりい
したときやあよふおざんすけれど中にやあきげんのとりにくいむづかしいきやくしもありいすのさそん
なときあてへノヽこまりんすこつちやおざんせん [芳]それにもらいひきのやかましいと夜つひといね
かさねへといふところなんざは女郎しもつらいのねだ [九]そりやあいゝなんすにちがへはおざんせ
ん（よし丸にあなたいゝすこしあとにはなしもなくしらけければ九重はうつらノヽとね入りしによしまるはねも
やらずこゝのへをおこしたけれど口がすぎたるゆへさすがおこしもならずまちノヽして居ればとなり座敷にて
路州とかふおだかたにやらわからねどしめやかなはなしに折ノヽわらひ声などきこへければなをね入られず
いたづらに夜をあかしけるもおかし）[隣座敷][通]ぬしやあねいりなんすかめをさましてたばこでもお
あんなんしよ [路]ねむくなつたちとねやしやう [通]ねなんすと　によ [路]あゝ御めんだ
[通]そんならねなんすな[路]おきてすわつてでもいやしやう[通]をやばからしいね入りなんすなといふ
ことさ [路]（小声にうたふ）〽あふみや人の庭櫻ひあふぎかざすひ櫻のぢしゆの櫻や瀧櫻 [通]よしなん
しみんなねへしたよ [路]そんならわつちらも　やしやう [通]人が　れば　るものかへ [路]人が　れば
るのさ人が死ねば死なねへのさ [通]またむだをいゝなんすへ　） [路]あゝおがみん

すよう[通]あれさ大きなこへをしなんすなよ[路]それでもおめへがいぢめるものを[通]そんならしづかにしなんしよ（それよりいろ〳〵おもしろきしうちありて夜はほの〴〵とあけければ源七むかいに来りらうかより）[源]よしさんおむかいにめいりした（路しうきゝ付て）[路]ともへやが来てをこすよ（おきあがる）[通]なんでおざんすのぬしやあいつそはやく帰りたがりなんすよ[路]なあにわつちやあかへりたへことはなへがおめへがねむからふとおもつてはやくかへるのさあとでこゝろおきなくねな[通]大キにおせわさねたけりやあねいすのさ[路]おちやでもあがりながら（かよひじきせるにてたゝくまねなしてわらふ）[通]あのねあの（かんざしにてひたいなかく）[路]あのねあのとはなんのことだへ[通]（路しうがびんのそゝけをかんざしにて直しながら）いゝじれつてへあのねあのあすのばんきなんしといふことさ[路]とちへやへそふいつておきやしやう[通]ほんにかへうれしいねうそをつきなんすときゝいしねへによ（となりざしきより）[労]源公ねむかろふにこずといゝにおすこはねているだらう[源]いゝへおめがさめてゞござります[九]（おきながら）まだはよふおざんしやう[労]路しうやさあかへらふぜへ[路]あい今帯をしめていやす[通]ぬしやあさつきからいつそかへりたがりなんすはな[源]かよひじさんおねむさうなおかほだね[通]わつちあねむくはおざんせんがごつさんはねむそうだねへこゝのゑさん[九]はんにけさはごつさんけんきがおざんせんね[源]ゆふべかへりましたらふし見町の五遊がところ

にたてぐわへがござりやすとまふしましたからきゝにめいりましてけさ七ツ過にかへりましたからねむふござりますこゝのゑさんはおめざとうござりますね 九 わつちやきのふのばんしやくがおこりんしてどふもねいられいしねへでこまりゐしたがゆふべはよくねんしたからねむくはおざんせん 芳 何をかたりやした 源 碁太平記でござりました 芳 宮戸川よりはいゝね 源 七だんめの女郎やのあなんごおそろしいもんでござります 九 通 （口をそろへてわらいながら）なにやのあなをかたりんしたとへ 源 これははじめてそさうまたそさうまふしました（みな〲わらふ） 路 ごつさんの下タぎのなんきん返しは小紋がこまかでいゝね 源 もふだいぶよごれましたなんきん返しでおもひ出しましたが此ごろかづさへなんきんの船がつきましたとやらまふしますがほんでござりますか 芳 吹流されたのがついたそうさ 路 唐人もかづさへは初會だろう 源 こりやあよふござります 芳 さあいかふ 路 めいりやしやう 九 どなたもおちかいうちおりよがへまふしんした 芳 そりやあこつちからいふことさ 九 どふしいせうね 通 ぬしああすのばんきなんすはづでおざんすぬしもおいでなんし 芳 あすのばんは川がござへすからどふしやしやうか 九 ごいつしよにおいでなんしな 通 ごつさんあすのばんしまつていゝすからぬしをよこしまふしておくんなんし 源 （介五郎がこわいろにて）いさへかしこまりました 芳 ああさめし前から仙國屋が出るの（みな〲わらふ） 若 おかへりあそばしますかおちかいうち 芳 路 あい

〔若〕源七さんけふは九兵衛がむじんでござへやすからのちほどおいでなさつて下さりやし〔源〕をいどふぞとりたへ〔若〕わたくしはあてにしております（みな〳〵はしごをおりる）〔通〕あすのばんおいでなんしよ〔路〕あい（くどりがくわら〳〵外へ出て）〔路〕あゝねむい〔源〕どふでござります〔芳〕いゝうちだね〔路〕なんだかよくつとめるねへよしさん〔芳〕おいらアつとめさせるも罪だトおもつて宵からねかしてやつた〔路〕おつしやるもんだね（ともへやへあがる）〔女房〕（茶をもつてきながら）おはやふござりやした〔芳路〕あい〔芳〕けさはおそくなつたすぐにいかうぜへ〔女〕まあよふござりますおゆるりと〔路〕あいしかしよしさんはやくかへるもよふござへやせう〔芳〕はやくかへつてあすのばんの筆句をたてるのだの〔路〕あんまりちがへもねへのさ〔源女〕わらふ〔芳〕いつもながら〔女〕それでもお一ツおあがり遊して〔芳〕朝はたべられやせん州公あすのばんくるか〔路〕こざあなりやすめへ〔芳〕せきこみのすじだの〔路〕なにさそうではねへけれど〔芳〕そんならしまつてやつてくんな〔源〕かしこまりましたおめへさんもおいでなさりやしやう〔芳〕わつちやあ用があるからやうすにしやせう〔源〕それはをわるふござりますね〔女〕おかへりなんすかへ〔芳路〕あい〔女〕おしつかに（源七大門の外迄おくり）〔源〕ごきげんよふ路州様明晩はおはやふおまちまふしますよし様もどふぞおいで遊しやし〔芳〕あいどふぞめいりやしやう（それより二人して土手をはなし〳〵廓のかづさやへきたり）〔芳〕このごろはおとを〴〵しいね〔船宿女房〕あゝ御

出遊しやし御きげんようござりますかまあおあがり遊しやしおはやいおかへりでござりますね〔芳〕あい御かわりもなしかいそぎやすから一ッそうはやくしてくんな（こしかける）〔女〕喜六どん両國までだはやくこしれいさつしやい〔喜〕はい　船頭喜六舟をこしらへひなわ莨ふとんなどはこび）さあめしやし

〔芳〕〔路〕かみさんこのあいだにめいりやしやう〔女〕さようならごきげんよふ〔路〕吉原の素顔のなかへ漬菜賣もよくいゝやしたね〔芳〕閑女が高點か〔路〕あい〔芳〕ばかに買色をきくの〔路〕買色でなくつちやあ夜があけやせんときにおまへのあそびは俗をはなれたもんだね〔芳〕どふもなにもかもさきがみへるからおもしろくもなんともねへとかくあそびはいり地のうちだなんだかかよひじはぬしにきついほれようだね〔路〕そんなこつちやあござへしねへがおめへをこれがつてよくつとめやしたのさ〔芳〕これだからつれがわるくちやああそびはなト（よしまるはいろ〳〵まけおしみのはなしをするうちにふたりながらとろ〳〵とねいりしに舟はいつか両國のあがりばへつく船頭におこされておかりながら）〔芳〕せんしうごくろう

〔喜〕あいごきげんよふ此間においでなさりやし〔路〕おめへけふはどこぞへおいでなさりやすか〔芳〕けふは里東が評もののくばりとおひでが名びろめのすりものの板下をかくから内にいやす〔路〕そんならめしをくつてゆに入てからおはなしにめいりやしやう〔芳〕高麗屋が景物の茶をせんじようからきな

〔路〕そりやあよふござりやせうのちほど

大通の二見へわかれ行春ぞ

はせを膏藥

信陽大飯喫一冊を懐にして來予に跋せよといふ予問て曰喫からに龍頭へとゞけ山櫻とは中慶子が風流龍頭までゞけ心の山ざくらとは坂是業が風流道成寺の所作はいづれあやめの大當り也予があらわすところの一巻は秀作數篇の涎を嘗ときくあるが中にもいづれをとるや大飯喫答て曰我涎を嘗に據なしへら平等也　仍而喫證文の一句あり聞べし龍頭までとてもとゞかぬ櫻草なんとごふだと制る予もとより後叙といふもの書こと知らずされど白紙おかれもせねば直にはなしを爰に誌しぬ

東方朔　八千歳親類

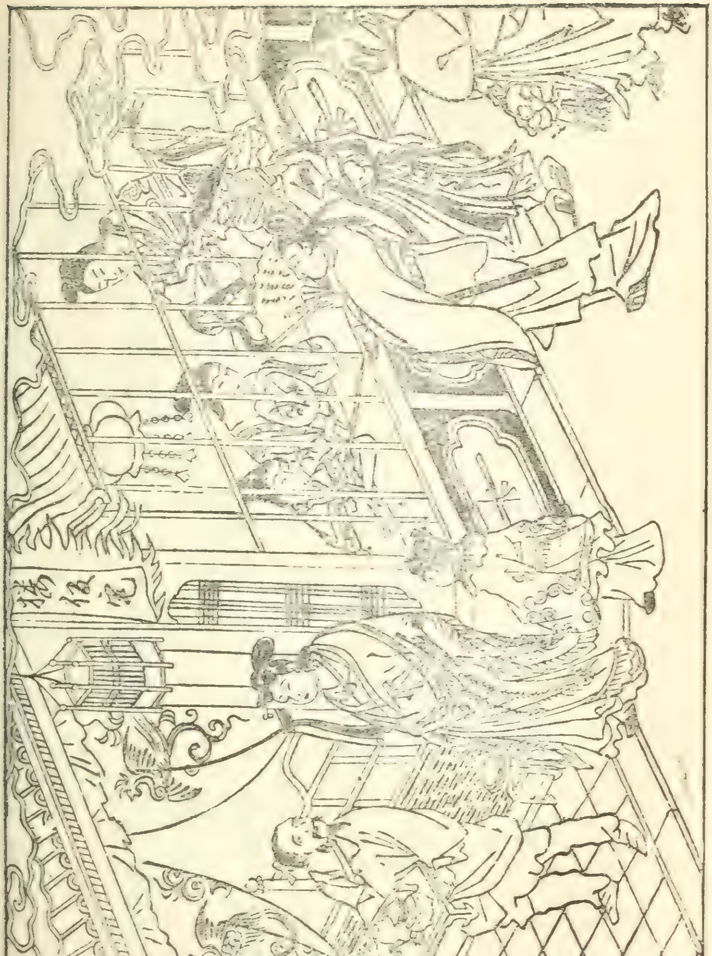
遊僊窟烟の花

全

遊僊窟烟の花題言

祖庭事苑卷の六に曰今禪林正寢を以方丈とす蓋毘耶黎城の維摩詰の室に則を取ると云々こや外山の蓮胤が建暦の殃を歎じ假宅の變化を感じて方丈の記を作れるに擬して聊方丈の割床に三萬二千のおいらん達の座敷とし淨名居士の假宅にあらずといへども將翟曇氏の風喩の趣向亦文成が遊仙窟の夢物語有とやせむ無とやせん唯傍に口嗽茶碗を採芳原楊枝の大ぶさに舌根をそそゐで眞にじれつてゐよこ申て止ぬ時に文月初旬假宅花炮の初日青樓薄倖の隱士墨水に林丸を浮めて

毫を濺ぐ



假宅曲

輕棹隨流首尾松含
情携手上金龍暫時
欲莫曉離別依舊觀
音寺裡鐘

釣散人題

右

遊僊窟烟の花

○第一齣

昔々紙屋次兵衛が千早振茶や場に
戀の問屋株毎夜廓のかよふ神

仐仝从人の名まへは絶ずしてしかももとの女郎にあらず深みへ溺る客人は且切日結て久しく來る事なしむかし元暦末の頃かとよ鎌倉の手越喜瀬川化粧坂の荊棘林内丁の殃に罹て傻事の多かる中にそれ嫖女の身を觀ずれば誰さんの从人といふとも慾のたつまの假の柄にして人間常住の思ひなし盆燈の經文にはあらねど三界無庵猶如火宅こゝをのみ何假宅といはんやされば衆生一念の業火にて微塵の佛國をやきはらひ内證のひなの節會おこなはれずあやめふく居續の一番湯も風呂焚のしうぎを斷甕擔に桃の花をつけて通る中巷の朝ざくらにめでつ哭ふくやの長もち見世さきによこたはり夜具をして茶屋にかざらしたる客ならん三がい無庵の情なしをして愛竹丸ふどうのかなしばりにとらへられはり札のせいろう假宅の門をふさぐ比翼塚の開帳は小むらさきがゆかりをのこして死で花見が咲ならばと南

一の内けいしやが曳うたふ伊勢か玉露糖の土川見まひの折は相かはらねど中の巷のまん中に臺をすへてのみ明す涼はこの夏さらにならずすべてくるわの延喜式廢況や又客に任する身はかりのやどりたが爲に心をなやまし何によりてか目をよろこばしむるたゞきぬ〳〵に向島のきつね火を觀てはむねをこがせる炎とや見ん晝見世におふさきるさをながむれば骨塚原に送る棺桶のむじやうを觀ず呼死なば煙で闇る大門といひししうしんの客もついに行く道とは知れど參谷耶摩の宿の賑ひ假宅のあらふとはよもしらじいたましひかな子孫相續の水を今戸端場の簀に漉れムウ〳〵といふて何のゑきかあらんわる紙は漉かへされて丈六となり元のよしはらにはいれども女郎は元の穴にあらず客も女郎も日本封彊のつゆに似てしばらくも消るをまたずたへぬ瓦のうすけぶり跡なき雲ときえて行きのふのまことけふのうそ縁がほれるかほれるが縁かうき川竹のつとめをばけぶりの花とは誰が名づけそめけん(▲こゝに中の町にあらぬ山宿の片ほとりかけあんどうに御休所とかきて茶だいすにあげや丁何やと書しあさがほあんどうを立七くはん音の丸でうちんをつるしたる道具立の引手茶やすだれの片かげに身をひねつてせうぎにこしをかけ通りなしのぶやうすにて休んでゐるきやく) 紙治 (ゑちごの小べんけいのかたびらに麻じゆばんをきこひ花色のいとさなだの帶を〆紅がはの前さげに扇を前にさし桐角小もんのあいがへしの絽のはをりをたゝんでわきにおくたが見てもよきしゆ(商カ)人やのむすこかぶのとうにたつたと見ゆる風ぞくあだで人がらよく女郎かいにもつてこ

ひといふ男ぶり紙やの治兵へとてやけまへに大きにつかつて今ではしまりほんのきまじめな人也ともはしらくもあたまの小ぼうずかはのゐんろうはやみちな前へさげさらさのふろしきづゝみなしよび旦那の中三どのかさと手まへのでんちうのかさなもつて犬なしり目にかけながらこしなかけてゐる）【茶や女房】あなたお茶をもふお一ツ上ゲませふか【紙次】アイサ素湯があるならくんなせへたしか解毒があつたす（トあんべらの紙入の中から茶入のかうづゝみな出してかきつけな見わける）【女房】どうぞなさりましたか【紙次】チツトこれ〳〵が過やしたから血のみちけだそうさ【女房】ホヤおまへさんとの方にもおいの道がございますかねけしからねヲホヽヽヽどちらへかいらツしやいましたおかへりでございませうおあやしひ【紙次】ナニサ獨樂形のするがやに仲ケ間の参會が有て來やしたが行事がみんなのみてゐゝで大きにグツフウよくわひたさゆだ（トいふ折しも二度ばかりもきた客と見へあたまが丸ひからまづゐしやと見へ名は【変挺】（つれは此ごろ狂歌の會へ二三度くらゐ出た狂哥しにてなりは芝居のすがゝきで出る仕出しと云こしらへ）【鄙の素見人】いつばいのみのすくねとせふ【変挺】こないだは（トおしやかさまのたんじやうといふ手つきなし）どうでございすの森や花川戸（トなじみでくるやうなかほなしてはいる）【女房】チヤおそろひなすつて【変挺】おそろひなすつたも今どうしんきのふすつたは此あたま今こすつたは此ひざつこサあしくしやれるの【女房】ハイ御茶【素見人】きめう〳〵トキニのどがかはくの水車だモ一ツたつぷりとくんね

へ〔女房〕いつそ茶がまごとあげませうか〔素見人〕茶釜といはずとつん出せヱへ〔變挺〕つんだせとい
ふちなアしめるものじやアねへか〔素見人〕コウ梅干があるなら一トロいきてへモウ一ツぺい〔變挺〕い
いかげんにのまつし施代茶でべんとうをつかやアしめへし〔女房〕ハイ梅（トふた茶わんの小梅を出す）
〔變挺〕土手の茶屋といふものだぜ天神ごとしてやらふ〔素見人〕ひどくするのアヽ酢しく此梅ほしを
せんどの女郎などにくはせると蟲がかぶるといふかほになるぜおかみさんモウ一ツぺい〔變挺〕梅ほし
をあけて此ふた茶わんでのみはどうだホウ此ふたも燒繼のりやうだと見へる　どうりでアノ茶釜もひ
びが切れて鷹の羽のかうやくをはつてるの〔素見人〕ウヽそうさ大キにコウトどこも聯のかけどころが
ねへすコウおかみさんこんだくる時に狂歌の額を獻じるぜそのかはり茶をモ一ツ〔變挺〕こいつは消渇
の譫で上消は邪熱肺を燥かし下消は腎經虚して水乾がゆへとかく茶がしたがる黄連地黄湯を一二劑用
ひて津液を益べしだ〔素見人〕醫者くさひ事を云ッちやアおやまるぜいしやくしやなしにもふ一ッぱい
のまう〔變挺〕こいつアあきれらアひもじひのだらふ〔素見人〕コウ色氣のねへ事をいはつしやんなナニ
それ富士屋の跡で出したかすご鯛のすまし吸ものが妙に鹽がからかつたからサそういつてもあをさに　青鷺
抨豆　鯑
はちまきさばの餡かけなざアまんざらでねへやつさノウおばさんモウ一ツくんねへ〔女房〕ヱなんとかお
つしやいますね〔素見人〕そういつても變挺子おらア料理茶やはよつほど明るひよソレ兩國で大にし菊

銘はいけいでちかづき向ふへわたつて權佐がとこなら地ぬしのいこうでつらねをよんで狂歌をしやす王子で近江やゑびすや袖が浦で海上桃林しゆくの藝者をつれて三軒屋の半七が所でのんだ事も有た日ぐろ歸りなら日野どの橋の新月庵ほりの內で手がるひ所がしがらきぞうしがやで耕向亭浮花川でゑびすの宮の半次がとこ荏土むきでうなぎ〆いゝが畢町のすゞき鳶澤町の轍ちよつぴりのみには洛橋で澁屋高橋でむかでやなどが今でのうがちさソレかういつちやア板まへでもはたらひたやうだがどこの茶やじやアすゞりぶたの積かへに王子やきも目にかける何屋の內じやア濕の日には苓溜にすてゝ有隈笹をせんたくして海苔ずしのふとんに敷三ツものゝ丼を間にあはせるといふ事までしつてゐらア〔素見人〕サやみとかはくもう一ツぺい〔變挺〕今でののみ人にはきはまつたぞ茶でひるきよしたさうだ〔素見人〕茶へどをはいたも何分おそれやすソレてうし茶こけ茶きがら茶あいみる茶おなんど茶の返吐が出るといつたら聞ねへせんどの女郎がいゝ事をいつたよチヤノ〱ぬしのへどはてうほうなへどだねへ早そめぐさといふもんだ　わつちやアそのへどにほれんしたと申シていが染ッかへしものはきつひきらひさばからしふおすッサ〔變挺〕おきやアがんなせへ〔女房〕ヲホヽヽいつそおとしばなしがお上手さうだ〔素見人〕おとし咄と女郎買は商賣だはな二三挑おひて行ふか〔變挺〕ナニしるのみにはとうがんのたちうりが一ト切買つて有からまだいゝ〔女房〕モシおまへさんがたはきつひ茶人だねへ　そして今晩は

へ〔變挺〕やほに傾城けいといふとこなしに富士屋で南鐐一片の月と御目にかけたから是からひやか
しかずのこであれが所へちら〱と立より脉を見てから匕かげんの方を出すのさ（ト小ごゑになりて）
よかァせんどの内へあがる法にせうじやァねへか公の甕中はどふだ〔素見人〕すこぶるさびしひのみや
うみほうづき咄しヱヽは出来ず〱實おらア今夜三會めだから返しはよこすに及ばずといつてもに二
百疋
ひやもはづまねへけりやァならねへおそれるの〔變挺〕まづ此そうだんも二ひやくらかん本堂こんりう
〔素見人〕ナァニあのけい（傾城）もちゐのねへあわのお岩さんじやァあるめへし梅ばちのまくらなどであやま
る〔變挺〕かわひそうにまんざらじやァねへ今夜いくとわかるぜ〔素見人〕いつかうとうがらしさ何ン分
初五もじの出やうがわるひから手にはがあはねへ棒くらゐなものさ何分あそこの内は出しものがわり
いそのくせしんぞうを付てくれろの内のげいしやがひまでゐるからサなどゝせめるはな二階を見ね
へくすぶつたやねうらへもる所ばかりさし板をしたもんだからこげ過たさんまのひものゝ腹を見る
やうだあんなとけへいくとがはしねへ〔變挺〕よくさましてくふ男だぜそんならかうツどこぞあて門ンの
あぶらげでウントのつけにそりの舟やどゝしていものだがどうも法がつかねへ何にしろサァ行べし
〔素見人〕いき山町三丁目かのモシ度々ながら袖引茶といふ所をおひとつくれのかね〔女房〕ちッとおま
ちなはいまし今水を入ました〔素見人〕その湯を水を入れちやァいけにあがるぜ〔變挺〕足下はこゝ迄引

ずつておひてはかなく犬にほへられでもねへぜ　[素見人]降と張返もかへねへきれいにかへりさ何ン分
おほつかねへ天氣だ　[野挺]おほつくよかう擲かふ待乳山へのぼりの誹家妓東山醉未歸といつた
南郭先生が妙句を感じて十貳文がお茶とうをあげながら墨水の夕げしきを詠てすがへりときめやう
[素見人]妙にちゑを出すもんだの　それでここそ家內安全子孫長久モシ御しんぞ茶代はこんだいつしよ
に[野挺](立かゝつてびんぼうゆすりなしながら)　長うた〽ちやだいわれらはみやこの生れ色にそやされ
こんなりになられた　[素見人]ヲツトお扇子なんだ松花堂でふき繪の女扇だのこいさア傾城のなをまき
上たのだ一首書ふか　[野挺]なんとでゑす　[素見人]日はくれて野にはふすともやどかるなあさくさで
らのかりたくのうち　[野挺](扇を額に當)またあさくさこやうあさつてときこへるか(何かこはいろまが
ひの引ッこみといふ事ないゝながら出て行)　[女房]いゝけんきなしうでございますね　[紙次]さうさ(トわら
ひながら)どこもにぎやかゝの　[女房]いへもう見物ばかりで內はひまでござります　[紙次]ハテネ(トい
ふ所へめんちりのひとへ物に花色じゆすのはゞのせまきおびかはさんどのさげたばこ入ほうかぶりひよりげた
で)[職人]吉はきやせんか　[女房]イエまだ御見へなさいやせんどなたかおかけなはいまし　[職人]わつ
ちさ(ト手ぬぐひをとつて茶がまのまへにゐる女房のおいどのそばにこしをかけ)仕事をしまつて湯へはいる
といつさんにきたから見ねへがうてきなあせだらふいま〳〵しひあせくさのくわんのんだ　[女房]くわ

んのんさまがなぜへ 職人 ねじやかどうにそうばんが有から立て聞てる内きせるをおつことしたはなこんやはつけがわりひからいくめへと思ふがおめへの内の顔でナントさがられめへか 女房 度々いきなすつた所ならどうも裏じやア それ とも今内でかへりませうから聞てごろうじやし（トいふ所へていしゆきやく人を送りこんでかんばんてうちんをさげてかへつてくる女房そつと今のりくつをはなす） 亭主 （目ばたきしながら）大見世ならいゝがあそこのうちは毎日勘定だから立かへ申てもせわしねへのう 女房 さうさ（トわきを向て引ずりをばたつかしてゐる） 職人 そんならいゝはなかうすらアじかにかうしへぶつつかつてそれであげりやア裏のこつたから若ひものにしるしを遣つて置たらよからふはサまかり違た所があてんぼうにあがつて高が附馬にせうとおもやアいゝしかしあい女郎も出入の出來ねへたちだス。アイおせわ（トへこみなりに出て行） ていしゆ お氣のどくだのう 女房 おかへりにおよんなはいまし ていしゆ 旦那モシかりたくのうちはあんな人のわるひ御客ばかり多ふござります裏からもふ色じかけさ氣のつゑへ 紙次 ハヽヽヽコレ小ぞういねむつてゐてはならねへ手めへ先へかへつてちつとおそからふといつておけ こぞう ハイ〳〵（トいつさんにかけだす） 女房 モシ〳〵おともさんおめへのちり紙があるよ 紙次 ソレ見ろふろしきをとられねへやうにもつていけア、なげい日だ 山の晩鐘 ボヲウン□ 折しもともれいがへりと見へて正月ばかりさすわきざしにこくもちにもんをおひた出來合の空色さらしの

かたびらおみじゆばんけんぼう小もんのきぬばなり花色ちりめんのおびにかぎぶくろをさげ下りせつたおろしたての白のくつたびにはねがかゝつてゐる是はにやつこでゆとうの酒によつた印 その風俗 しゆ人の店預り【伴頭】是もこうとうな仕立 年は十八九にてにうはなたち 江戸ッ子と見ゆる【むすこ】▲跡からほうさんのひとへものに花いろしゆすの帶なし ひたいのさらひやうでしれる町内をまはる【かみゆひの勇】▲ならんでどぶ鼠のつくばおりに中の字をもんのやうにそめたやつ是は祭にきたひとへ物にて此ばんとうの【店かゝへ中】(此四人どや〳〵とは入る)【伴頭】は(なじみにて一トりやうけんありがほにてはなぼう)どうじやこないだは【女房】チヤよう御いでなはいましたねへどつちへ【伴頭】どつちへとはしれし御事いき山じや【女房】きのくに屋へかえ【伴頭】イヤ〳〵きやつめはもうあきじるしじや【女房】おなじみのところほどの事はなひにおまへさんいつそ氣が多ひよ【亭主】モウ見世も出そろつたらうおれがおつれ申さふ(トかんばんてうちんをさげて先に立四人ちやをのみかけてうかれ出る但此てうちんはかりたくの内かりもの也)【女房】おまへさんもいらつしやいましなおともいたしませう【紙次】まだちつとはやひじやアねへかね【女房】小見世では見世の出ません内はなんのかのと申ますが大見世はおはやひがお德さコウトきの國やはどうでござります【紙次】つき合にもいつた事なし(トとぼけてあるはわけの有事にて次のまくに見べし)【女房】おわるくなくば中座で此春つき出しの今の小春さんを片じまいになるか聞て參りませふ(トきのくにやへきゝに

行ほどなくかへり）[女房]よろしふござります今ンばんはおひまで御出なさいます　サア入らつしやいまし（トてうちんをつけさきにたち）河岸のほうからさんじましやう　[紙次]ぶらならいゝが箱でうちんはばつとしてわるい　[女房]さやうならばけしませうかフツ　[紙次]ハテにぎやかだぞ

○第二齣

廓に通りしきの國や小春がいひし

サハリ文句につれてのくならゐにしのわる紙

頃しも文月はじめの空燈籠なくて花炮の初日夜みせのにぎはひいふもやぼなれど川はふねにうづまり岡は花川土耶摩の宿正傳町河原町今土參谷へおし廻して人の土手をつき堀のお送り絕へて駕やのぬけうらをしり爰に雪の梅せいろうそば白梅團子はなけれども擔商人引もちぎらず此所にて商ひ仕候のやど札は細見に入木をし檐につるせるてうちんは十さしの鬼灯に似たりチャンラ〱の清攪は輕けれど大道廣ふして西河岸の犬はしりよりも目まぐろしく引ツ込引手は今土橋かみゆひ床のしやうじに畫しかつぱにひとしく引ツぱづす空花はふじみやけの蛇よりも長く舌を出して逃るソレあけや町の湯やはかゝり湯四ツ時〱とうろうの內七ツしまひといへども耶摩の宿の湯は夜もたく來ル八月何日〱に

はか仕候と大門のはり札ははらねど切見世此うらにて仕候とろじ口のしるしは日本一どおやう汁のかんばんよりもなを目に立ッておかしされば地廻りすけん毎夜四万六千日のごとく假宅すゞめちわ〳〵と覗く見世さきぶつつけかうし見世あんどうの魚燈のかゞやきぶたいおしろいのつやにのりきらめく汗はふろや紙をもつて拭ふ有にゐるゐかほちや顔の揚ゐ有れば左にゐる瓜核がほの殘ゐ有見立る客は千差萬別たとはゞ山屋どうふのやはらかひをすくもおはりやのとうふのかたひをすくもいつれ庖丁の味ひ美なるかな 地廻り（しんないたけぶし）〽隅田のほとりにかこはれてはぎの枝折に四でう半花やはいかひ茶の湯してほんにひねつたわびずまゐ』いめへましひ下駄のはをぶつかいた つれ地廻り 天水桶でふり出して袂へ入れやナ 地廻 一のごんげんの番太郎で一ッそくおごゐべいそうしてほうづきでうちんをかつてけいゐうぜ つれ ウン（トかうしたのぞきちよつと見やま正あんにゐゐおいらんは碁ばん娘をなべぶたでおつぺしやいだといふかたちだぞこつちらのしんぞうがアレあくびをすらア娘や舌を出せといふもんだ 地廻 あれ〳〵今しびれをきらして立つた女郎衆はがうてきひくひ脊だぜすゞめのさんりほどあらア つれ こちらのよこがほを見やおそろしく苦勞そふだぜ半人のこつぱにんに無心でもいわれたらう 地廻 アレ立ッてしよく臺のしんをきりますじやみをかくさふと思つて氣はづかしくぬつたぜべちやねへ大あばたをしやうじ紙へしきうつしにしたやうだ　そして

おそろしくしやくんだかほだつもりぞくねへだらふ［つれ］サアせんのはかはり／＼（トいひながらとなりの見世なのぞき）［地廻］こゝの羅かんはまだ出そろはねへたつたひとりしやちこばつてる女郎を見や諸人あいきやうよけをお守りなさるお茶引尊者といふだらふ［つれ］ごうせい手のこんだかほだ毗首羯摩の作だらう［地廻］アレ／＼やうじを遣ひながら出て來ますさつまいもの惣ざいでへしとおまんまをたべましたゆへ食もたれがしてアレおもツくろしくすはります［つれ］アノあねさんはすかねへといふ目付をするが片目はしやりのおじめだらふ［地廻］うさアねへアノ白歯を見や　むしやうにじまんらしくむき出して見せるが目藥のかんばんにあるおきなの面といふ口だぜ年にふそくもなくッてまけゆはひも氣がつゑへ［つれ］コウむかふがはのつき出しを見やう假宅じやア羅生門も西河岸ももみこみだから埒が明てくたびれねへ（トはなしもつて向ふのかうしなのぞき）［地廻］出てゐるぜがうせい／＼アレが六百のつき出しかの［つれ］弐朱にうられちやア店うけとそうだんものだぜ［地廻］あたまを見なあみだざしぎのもく目のあるさしものでくちなしの色付だらふ［つれ］召物は何だ松葉色の紹かかりてへの［地廻］ナアニ大かた蠅帳を引ッぱがしたのだらうト（となりへ行きながら）［つれ］チット又ふんごんだこはくらひぜ［地廻］そのはづだ爰の見世は惣じまひが有そうですだれが下りていらア［地廻］何だ地ぬし忌中［つれ］なむめうほうれんだぶつ［地廻］コウ雨がはをひやかして堀から大さんばしで花火を見

てけへるとてうど引ケじぶんになるぜ【つれ】コゥせつこまずにあゆびやナやみとはねが上るぜ（扨又こ
なたのまがきによりかゝつてほういんさんにうらなつてもらつてゐる女郎の顔なのぞきこんで）【地廻】何だ待
人かまち人もすさまじひ　どうりでなけい顔だト（いふかうしのかたすみにあつばれのれんらいにてとび八
丈の引どきのひとへものに一トむかしもたつてから染るつもりのこんちりめんの引ケ過のはなりにひだのいぢ
わるくもぢつたすはひらのみじかばかまにふくざうりをはきしんに成てばか〳〵しくのぞひてるよこツつらへ）
【地廻】おいらんバア、と（顔を出してはなばしらとぶつつけ合ふ）【地廻】ア、はなごろし〳〵はな血鵝〳〵
【すけん】モノはなはだしひやつじや拙者とも見物のまへ共はゞからず【地廻】ワイはなツたらしやア、
イ【つれ】のんぴよこやア、イ（とにげあしに行くこのすけんさすがにかんにんの二字なまもつてむれんさうに
はやあし）【かなぼう】チンラ〳〵○（是はさておき以前のばんとうの四人一座下から上まで見物して又こ
の所へまご付てくる右にてうちん左つき袖）【茶や】そうかう致す内よひ女郎衆はあがりますからかうにぎ
やかでは廻しをとりますからやつぱり大見世になさりまし【伴頭】（こんにやくのごとくぐにや付）ひよご
りたひもんじや　こゝらにどぶはなひかコウトいつそきの國やへいかまひか【茶や】さやうならすぐに
おもてから御あがりなされまし【商人】麥やひきわり▲おでんおいもも有▲外に類なし胡桃もちうへに
かけまするがくるみとさとう匂ひまするが肉桂丁字あまひと安ひが御評ばん▲南無めう法れんげきや

うく＼▲うで玉子ゐだ豆く＼▲青柳ずウし青柳よろしう▲女郎衆と客人とのこんたんかりたくの新作のおとしばなし▲あんまはア、

○第三齣

まだ五年あるねんのうち身うけの高と
雁金を〆て封じるむすぶのみす紙

それ假宅入口せまふしてのうれんかた上をし牛臺なくて半籬のわかちなく極さいしきのはり付は荒坊にして若ひ者うらをかへされん事をおもひ中の間のかんばん板は引手に出す四貫からげのぜに、うづ高く積であり（但七匁五分に付百穴のきめ）車井内になくだい所叩土にあらでふろ焚折ふしすべり仲居膳棚をじれッたがりれうり番半疊にしりをすぼむ扨又二かいの有さまは八厶も一ッにむちやと成次の間から腰高の茶臺といふ所は番茶でまじくなひ扇椽舟ごこ天井は屋根こまいを見せ割床の仕切はのきをはさんで鴨居とし出來合の建具あけたてにじれつたく衣桁は竹をわたしれんじにはんぞうの置所なく次の間に寢るしんぞうは三人もやいのほろかやにねぞうおのづからわるく髮さしともに引くるかへし一所につかみかさねたる廻り夜具はさらにかし夜具やの見世に似たり八方せいひくに釣し

やりて部やいづれはしごのすみと定め小べん所の二かいに有るぞまだしもくるはの餘風あり中庭とうろうなくまはり廊下は杉板をもつてし靈寳場のやろう疊かけ方燈かうしやく場のたばこぼんくりかた蒔繪のたばこぼん田町のべつかうやのあつらへいまだ出來ず朱の三方杯臺は間に合の定紋にしてその外調度は出し物と共に略し三印といへどもしごきにてはつの座敷をつとむ嗚呼憐べし漢宮萬里一炬の灰燼となりにき楚人の嗟歎こゝにある歟おりしも川は流星虎の尾十二ちやうちんとほすといひあげるといふも正是瓢客の全盛ならざらんや○（扨此時きの國屋の樓上にはかの引手茶屋のにようぼうをつれてつるしのとほる頃ぬかりんで初會のかほで二かいへあがりすましたる）［紙次］（さかづきもすみてはや床納りねてまつ身のあつくるしさ本式なら本間にもうせんをしきそのうへにかゞみぶとん三ツしやの蚊屋といふ所をもみぶとりのまわしぶとん一まい蚊やのへりばかりはあだに板じめとし次の間にいこうなくたんすなければはをりはたゝんで下へあづけるこれ割床のならゐなり）［かぶろ春野］（年は十二三にてひつこみにもならうといふはたけなれどなんべんもおはりの手にかゝつたしきせゆかたにのゐまいろの丸くげをしめ木のくしかうがひをたいそうにさしうみほうづきをふきながらぜんをもつてくる但かけばんてうあしくわいせきぜんといふ所なれどかりたくの事ゆへやうじをおまけにそへて出す七色茶づけといふものにて出し物は是にじゆんじてそまつ也）アイモシおまんまをおあがんなはいまし　おいらんも今おまんまをあがつてお出なはいますよ　［紙次］いん

にやもふたべゐへよ〔春野〕アノそれでも茶屋から煮花をもつてまいりいしたよ（トいふは中の丁の茶や
ならおくり物をもつてくるといふ所な引手茶やから気どりにどびんへにばなをもつてきたのなり）〔紙次〕せま
つくろしいから膳をさげてくりやついでに火を一ツよ〔春野〕アイいつそずるつこい仲居業だよふ（トい
いながらせんをもつて立てゆきはしごのあたりで、朝ニどうぜ　さがりすよふエ、ふけいきなじれつていよふ
（とん〱とおしびやうしの音する入かわつてくる）〔かぶろ留は〕モシイせんこう花火をかつてまいりいし
た手ぼたんもよこしましたよ（ト紙次が枕元にすわつてしごきかゝる所へ中わるの）〔かぶろぬき葉〕チヤこ
んたあアノそんなものを客人にねだつていゝかよしよふきをされよふとおもつておれにも一ツ本くだ
せい〔留は〕しつたかむしがいゝはこんたあアノおれうばよくぼた餅だとぬかしたのおぼへていさつせ
いさ〔ぬきは〕そんならこんたもおれうばべそかきだといはねへがいゝは〔留は〕いつてもいゝは〔ぬきは〕
よかあいはつせい　やりてしにいつつけて食留をさせらあよ〔留は〕いつ付るも気がつゑゝは〔ぬきは〕
チヤ留葉どんこりや松川さんの土瓶だあけいさつせいよ〔留は〕しらねへよ〔ぬきは〕ぼた餅め〔留は〕べ
そかきめ〔紙次〕コレサぼた餅だのべそかきだのとそんなやぼな事をいつていおりやわねへもんだ　曲
結をかつてやるから中をなをつて指ツきりをしや〔ぬきは〕ホンニかつておくんなはいましよ下へ商人
がもつてまいりやすからその時〔留は〕わつちにもかつておくんなさい　ましよ〔紙次〕ウンよ（トいふ所へ

こよひ初會にて相方のおいらんきのくに屋の通り名をつぎし小春來る　此春のつき出しにて今は[illegible]なれ共丁へ引うつりてからは[illegible]にもならふといふきれう　顔はひなのごとく姿は十二一重もはぢず少し小つぶのたちにてかわいらしくつんとしてそもうつくしきその風情

彼名妓楚蓮香毎ニ出ル時ハ蜂蝶相隨ツテ其名ヲ慕フト華人ノ賦セシニサモ肖タリ艷哉斯美人○こゝろうつくしくしつぽりとして

［小春］チヤ此子いらあこゝにゐるか（トつまをとりて）大事の茶をひつくるけいしてくれめへよ（トまだあどけなく人がらよきしなしにてあんどうなうしろむきにしてはづかしさうによこむきにすわる二人のかぶろは立てはづすろうかにて）［春野］松川さんがさつきからよんでいさつしやらあきり〳〵いかつせいよアイ火をもつてまいりいした［小春］コレサ内證へきてた小どもはまだゐるか［春野］くらがへもんで濕が出來ておりますから旦那さんがこつちの内へむかねへとおつせいしたらほうかぶりをしてつんとして出ていきますわな　おそろしく人がわるふざいますよ　あのモシ（トみゝに口何かうなづきながら）［小春］ウヽウそうしてくりやわすれてくれめへよト（ひそかにいゝつけてやるこれは床を取かへてもらうさんだんなり　まんざらでなき初會ゆへはづかしそふにすいつけて出すきせるもひかへて何か思ひありげにて）モシイどふいふ氣でわつちがとこへお出なんしたへ何もかもみんな聞てまいりんしたがお前さんはいの

じ伊勢屋から松川さんのとこへお出なんしたのじやあおざんせんかへ（下少し腹立のきみにてきめつけるよふにいふ）**紙次**（ぎつくりとむねにこたへいつそしらばけに出る）なるほど松川さんといゝやしたたしか二三度も來たと思ひやすあつちらでおめへの出なさらねへうちのこつてそれからとふざかつてけふ松川さんとこへなじみの顏でもあがりにくしさ又あがられねへといふ義理のわるい事もなく（下さきだつてする事はしておいたゆへつよみをいふ）いつそかりたくの事では有と見立直しとしたなんの譯もねへ事を顏でもふみに來たよふについてくれる事もねへス松川さんもしらねへ顏でゐてくれてもよさそうなもんだに春さんおめへにつもられる所がはづかしい **小春** そううちあけておつせいすから申しんすが座敷ゑも出ぬうち松川さんの客人とぞんじいしたら斷を申てあの人の客人をとりたいによぶにもめにもいたしいせんが茶屋もはつだと申しんす引手茶屋の事ならあつちでの事はぞんじいせんももつともサ又遊びの法をしらねへといふおまへさんでもおざんせん松川さんとこへ腹でもお立なんしてとうざかりなんした譯ならわたくしがとりもつてあけ申しんしようと申たらおまへさんのお氣にもいりひしようが松川さんにおかしな事をもふされんしたからわけて見ぬうちはお前さんはわたくしの客人だとおもつてゐんすぬしも又そうおもつてゐておくんなんしへ **紙次** とりもたれるくらいならこ（れ）らほどむちやに骨もおらねへのさ **小春** とりもつてあけ申氣ならさつきからホンニ氣をもみはいたし

いせん [紙次]男に縁ちかゝせすそういつてくんなさればいやらしいよふだがうれしいのさトいふもい
ゝかゐく氣どつてくんなせいすな [小春]それはこつちから申しんすこつておざんす門並(かどなみ)いゝ女郎衆(ぢようろし)の
おざりいりいす（マヽ。りいの二字筆耕の誤カ）中でふじゆふらしくわたくしがよふなものゝ所へ来ておくんなんしたはホンニうれし
いとこそおもへわるく氣どるなどゝはもつていなふおざんす [紙治]そういはれるほどなをつらいのさ
[小春]なんだか此きせるはとふらねへしんにじれつていよ（トおもしろくなりかゝる折しもせうじの外か
ら）[ばんとうしんざう]モシイおゐらんへちよつと ト（よび出すゆゑ立つてゆく入かわつて紙次が丁での
なじみの茶屋いのじいせ屋の[わかい者]と松川を連したわかい者[暮四郎][やりて]そろつてまじなつらで一りくつ
いゝに来る）[ちや男]よくいらつしやいました [紙次]（かくあるべしとへい氣にて）コレハ内儀(ないぎ)もよろしく
といふ身だ [ちや男]トいふ所もふるい句でござります [暮四良]いづれなアハヽヽヽ [ちや男]時に今ば
んこつちへいらつしやいますならちよつとおしらせなすつて下されば間違も出來ませんが引手茶やか
らいらつしつたそふでござりますから小春さんを出し申たもわたくしどもの内のそさうにはなりませ
んが松川さんからしらせてつかわさりまして大きにむづかしくおつしやいます [やりて]松川さんもも
つともさ　おなじみにもおなりなすつたうへの事だからむづかしくいゝなさりうちさこれが下へから
上へお直しなさるのだからいゝよふなものゝ松川さんが顔をつぶしにお出なんしたよふに氣どつてお

出なんすから小春さんも出し申にくししんぞうしならいゝけれどお部屋頭の女良衆ではあるしどうもにくいのさ暮四良どんこんたあもぬしのあがらつしやる時下にいたじやあねへかお見それ申といふ事があるものかそさうな［暮四良］いそがしくつてつる（下いゝながらあたまをかき）引手茶屋から小春さんのお初會を申てきて今夜は朝座が番だからお出し申したといふ理くつよ［茶や男］なんにしろいつたんしんぞうしへおさがりなすつてから松川さんへおかゑりなさらざあなるめへおいらんへお氣のどくだ［やりて］松川さんよく覺へてお出なんして三度きさしつたが實にわるくもした事なら腹もたゝねへッサあれほどにしてどんなに客人をしたかと内證でつもられる所がくやしいといつていつそ泣てお出なんす［茶や男］それじやあ小春さんのとこへお出なさるよふになつた所がむづかしいのふ［暮四良］そうさ［紙次］久しくこねへゆへ遊びの方角をわすれてみんなに骨をおらせるト（三人へ祝義なする是紙次は松川がよくはしても氣にいらず小春を見こんでむちやにあがつたりくつ小春も紙次におもひついて松川にやるはおしけれどまだ年わかゆへのつきつてさばけず松川は二かい中でのいちつぱりものにてよびたいとおもふ紙次ゆへかくむづかしくひれると見へたり事によると色男はこんなじれつてい目にあふもの也）［やりて］こんばんはいづれお獨寢だろうおさみしかろう［紙次］ホンニ女良買ほど理くつの多ひ義理がらめな苦勞な買物はねへぞト（ふさぐこなたにあなたのいさみさつきの番頭の四人の一座）［女藝者］ウタ〽けに花なら

ばはつざくら月ならば十三夜いづれおとらぬすいどしのあなたへいゝぬけこなたのたていづれ丸かれ候かしこチヤン　【伴頭】ヤンヤノ＼　【朝三】ちとおかたづけ申ましようト（わかい者に座しきをおい立られどや＼／と　へ廻る　は四人むかふ合せの割　也）　【伴頭】（とつちりものにてよろ＼／ぐにやけながら舌も廻らず）よふたぞ＼／どこじや＼／とおしやますなおらん床はこつかな　【朝三】涼しい所にいたしました　【男】おらん内はおそろしくくれい監さびのかすりが氣がちがつたよふに蚊がゐるぜ　【中】わかいしゆにぎやかでいさみだの　【朝三】いそがしいばかりでいつこうもらひがござりません　【伴頭】コリヤ臺屋の麥飯をとつてもらをふ（ト貳朱ほふり出して　へは入るとよいきつてゐるゆへすぐに大いびき相方はなじみにてざしきもち）〽　【松川】（年廿三四にて手とり伴頭を茶にしてゐるゆへわざと紙次がとなりへ　なさせてきゝみゝをたてゝゐるならんでざしき持）〽　【薄舞】（年十八九にて是はおとなしき女良客はまんざらでなきむすこかぶゆへへも早く來りすべつたのころんだのと　）　【松川】薄舞さんへ　【薄舞】なんざんすへ　【松川】しつぽりとお　なんしへいつそうらやましいよト（小春紙次へあてゝいふ扨此むかふはかみたち両人の割床にてむだないつてゐる相方はへやもちにて）〽　【いく坂】ごしようざんすよしてもおくんなんしへ　【中】こういつちやあソレあぢにふしをつけて語り出すよふだがおいらあお爲ごかしやだゝら大じんにとりあつかつちやあくへねへよナンド、へんに柄をすけた男だろう　【いく坂】そうして　どうす

ればくるのだへ　中　トいふ膽だからおめへが達引をしてよべばおれがもゝ引をはいてかよわあ　よく見ねへ男はよし氣まいはよし金はありさ　いく坂　それでほれねばさきがむりかへ　中　おめへのむりならしんにきく氣さ　いく坂　おつういゝなんすね　中　ごうせいな句を出しちやあたまらねへ　いく坂　モシタべわつちがとこへあがつた客人がねいたこの文句をじかにいゝした女良しにほりものでもさせよふといふかたぎの客人さ　中　とんだうぬぼれな客もあるものだおれが影繪だろう　いく坂　モシイぬしたちの一座はまぜこぜでわかりいせんよどつちらの方だへ　中　大山の來迎谷といふ所さ　いく坂　ほんにかへ　中　おらん内はこれでも燕が巣をくひ飯時をひやうし木でしらせるよ　いく坂　ほんにかへそして商賣わへ　中　幕引さ　いく坂　ほんにかへ　中　ホンニ座しきをこしらへてやろう　いく坂　ほんにざんすか　中　普請の時建めいを　いく坂　すかねへ口だよ　中　ナァニすきゝつてゐるから障子の切張ぐらひはほんに請合安賣おめへが本面屋箱入のおゐらんといふもんだから　いく坂　アイサ大きによろしく　中　おたがい長左衛門暑中お見まいコフツいつそ夜具をしてやろう假宅の内床が出來ちやあ女良衆も鼻が高かろう　いく坂　ほんにそうさ　中　そういつても大ふうな事をいふよふだがこれでも燈籠の内抱に祝義も出したもんだよ　いく坂　ほんにかへ　中　おめへのいふ事は間尺がきまつていらあソレも一ッほんにかへ　いく坂　ホヽヽヲホヽヽヽしんにいやだよ　聞なんし玉くずさんあきれきつたもんだよ（びやうぶどなりは勇があい

方しんぞう）［玉くず］氣さんじなもんだねへ［いく坂］いけねへ客人だよ［玉くず］口がわるふすよ［勇］口はかわいらしいがコフ此子のまじりはへんにさがつてるよこきえゆひ（びカ）でひつこくといゝ目つきになる［玉くず］なぜへ［勇］なぜの神がやつこをふる所か田町のかみゆひどこの障子にかひてあつたよ［玉くず］なぜへチヤなぜへが口ぐせになりんした［勇］なぜいかけの手だろうもしれねへなぜかつれてにげてへよ［玉くず］チヤわつちやあそんな氣はおざいせんよ［勇］いやだといふととりつくよ女良衆もおいらにほれられちやあ熊谷の土手へさしかゝつたよふなもんだなうじようしていねへ［玉くず］お前さんおそろしい心いきだねへそんならつれてにげなんし［勇］サヽアしりをはしよんねへ［玉くず］わつちらが内じやあみんながにげんしたくわじの時［勇］どこかの女良衆が引ずりをはいてにげるとつて鐵醤堀へおつこちてしたお白い顔が色揚になつてまつ黒にそまつたそうだ［玉くず］ばからしいよふ女良しもおはぐろがは入てはよわかろうねへチホヽヽチホヽト（わらつてる所へわかい者あつらへの臺屋の麥めしにとろゝじるはち肴なのせた朱の大丸臺をもつてきたり）［朝三］ハイお麥がさんじました　ト（おいてゆく）［勇］中こうおきてほごをつけねへか［中］けづるべいモシ若旦那おきてさら〱と一ぜんと　よび出すなびやうぶの中からむすこの相方）［薄舞］ぬしやあおあがんなんせんとさ［いく坂］二人りしておあがんなんしなわつちやあ願かけて法印さんを仕切ておいておがんでもらいんすからちよつと見世へいつてまいり

んすト（下へはづす外の門口でしやくぜうの音ガチ〳〵）［男］施主の作頭さんをおこそう［松川］よいきつてよく寝てお出なんすから寝かし申ておきなんしト（是もてうづにはづす）［中］作頭さんがよつて寝ちやア曳藏のしやちでも動かねへごうせいないびきだぜ。くるまがさ塚へんとこ。かなわつにつこう。取川。ゑゝさら。おいかけとこせい。小車。くぜり。松坂。扇きやり。蔦きやり。そうならつしやらあひとをつけいにした［目くす］アレサだまつておきゝなんし二てう三絃がまいりんした（トいゝながら是もたつてれんじへはずす跡にて二人はへしとつめこむこゝに年のころ五十ばかりにてじんぶつくさき客人はとぼけて小用に出たと見へおびを前にてむすびじだらく千萬ななりにてよひみだれろうかをよろ〳〵しながら目もちら〳〵そとの三絃にうかれて間ぬけに手びやうしを打〳〵よふた〳〵五しやくの酒に（トねごとをうたいながらとりちがへてよくねてゐるばんとうの床へよろけこみしたゝかつきおこしくすぐりながら）こふおきさつし一ッぱいのむはおきんと（トおもふさま作頭のしたをくつつく）［作頭］（きやつといつて目をさまし見やつた所がしらぬどしびつくりして）とんだ化物が出ておれが舌をすいきつたぞアヽいたいサヽいたへどが出るはんぞう〳〵（トしめころされるよふなこゑをあげるゆへ　なまゑひ先生はじめて目がさめきもをつぶしこそ〳〵とおのが床へにげてはいり此時よひもさめはてゝよぎをすつぽりかぶりくわばら〳〵といつていきをこらしてゐる二人はさつそくかけつけて大さわぎになる）［中］あいてはどいつだとほうもね

へやつぢやあねへか枕さがしをしやあがつて人の女郎とはきけへてゆくきだろうおゝかた紙くずひろか木ひろいだろううつかりと長屋へいれるとあきだなにある小貳朱がま木も引ぬいたりたくあんの五六本も袂へいれて出るもんだこんな明日くらがあるから小便無用の鳥居をけがしてりんびやうせうかち妙やくの引札をあき地のはめにはつておいてもうれねへは大馬鹿大藏不調法わううんのろ童子へんてこ童子め中ツぱらをいふからは大郎坊次郎坊は大太刀をもつてすつぱりとはらつてくれても石尊さまが倶りから龍のちやうちんをさしあげあうんの仁王が手をうつ（マヽ）ふが百鬼夜行の化物から蒸籠をつんでもきかねへ〳〵いやだ〳〵あんなこうべいののろいやつはくさびをきめて五りん五たいのたてめいを鬼門方へいがめてやるよしんば頭がこんぴらさまでかけやをもつてかゝつても天王さまが棟梁でかりまたかぶら矢吹ながしをふりたつてもおれがあいてだ五分でもひかねへコレエイめ浪お浪をふきわける鯨男を見るよふに胸ばかりさすつてるずとこゝへ來てろつぱんしろ辭義ならおれがいくべいは

（トしりをまくつて立かゝるゆへやりてわかいもの女郎皆々よりたかりてすのこんにやくのといつてとめる）

［いく坂］アレサお前さんそれじやあわるいと申しんすに［松川］わつちらがそばについてゐて喧嘩にさせ申ちやあ　內證へたちいせん　アノ客人もかたつきし　よいきつてゐなんすから　ふしようしておあげなんし［勇］もふいゝわな　アノ子も年にふそくもなくつて　ソレ跡のいつぺいが過たといふ

もんだからあやまつたいなりさまでへんな顔をしていらあ　ぜんていばかげたかほでとぼけきつた客人だよ　中れん寺のおしようさまがもらいに出て髪結の勇こうがこうぞりでぼうずにしてやるからか人にんさつし　ト（此さわぎの内作頭はうと〱とねむりながらぶつ〱何かこごとをいつてゐる）

中　（皆々がたてこがしにおれて）いゝはぬしの剃刀ならじよせいもあるゐへ親の日だからけふはれうけんしてやるまかしよいはちまきを見るよふにやぼにひねくるでもねへがとつけもねへべらぼうだ　ひようたくれ猿唐人めとんだ大變者もくればくるもんだきもつぶしな　勇　さきもわるいから入部屋持の細見を向ふ側から見るよふにへこんでゐる　かわいそうに　松川　モシイお前さん方はアノ客人をもらつてぼんさんにしてなんになんすへ　勇　鬼坊主の弟子にやります　いく竹　ばからしいねへ　玉くお　チャぬしの袂から落んしたコレこゝらぢうが強飯だらけになりんしたよソレそこにもなら漬のかう〱がとんでおりんす　皆々　ホヽヽヽアハヽヽ　中　なむさんとも禮がへりの化があらわれた　勇　鹽花〱（トさてまたこなたのなまえひ相方の女良に口をすつたをきめつけられてばからしくあやまり入てゐるふりしんたちのぞきこんではなぶつてゆく酒はわるいが氣のよき客人と見ゆる也）

ふりそでしんぞう　モシイなにさんなんやらさんなまえひさんよぼけさんへでいぶまじざんすね酒にこり〱なんしたかへ　客　なんぶんあやまるつまらねへ一寸てうしをかへてきてくんな　ふりしん　おけん

つんやアおかしいよたんぼうざんすよふ　相方女良 ぬしの顔つきを見なんしな　とぼけきつていなんすよ　ぬしのおかみさんは着物へ酒をかけなんすを氣にして勞瘵(らうがい)とやらにおなりなんしたではおざりいせんか　客 なんぶん大へこみ　女良 へこみ所じやあおざんせん外聞(ぐわいぶん)がわるふすふつ〳〵酒はなりいせんたばこもなりんせん(トきせるも取あげられてふしゆび千萬なかたち也　げに女良屋の二かいほどおかしきものはなしなくもありわろふもあり腹をたつかと思へばきげんのよきありくすぐられたりつめつたりわけもたわいもなき中にひとりすまぬは紙次が床小ごゑにて)　紙治 江戸ブシ へ はやひけ四ツのひやうし木をうつりがのこるから小袖(しカ)きりはふだんのきやらをたく月じやうじうのとぼし火もこよひは星(ほし)にめてられて　小春(そつとびやうぶをあけてはいりうしろむきにねてゐる紙次がかたを力を入てつきおこし)モシイみれんらしく又まいりんした　紙次(おきかへりて)みれんらしくまだおりやす　小春(ハ何かいゝたそうにして手もちなく身をひねりツヽかほをそむけて)だれぞその子や春野かちよつときやコレサてめへさつぱりと用がたりねへよ(下心のうちに少しじれぎみ)　春野 アイ今　小春 今どうしたのだよぬしの蚊(か)でもおつてあげもうしや　紙次 いんにやいゝよ蚊(か)がくおうがたとへ大蛇(だいぢや)にくわれうが　春の なんざいますとへ　紙次 此子も顔はよしりこうではありおしつけいゝ女良衆にはならふがおれがよふなわからぬ客でもとると罪(つみ)をつくるといふものだ　春の アイサわたくしらあ顔がよふざいますから番頭(ばんとう)や鑰(かぎ)やく

はしやあしませんよ　小春　てめへも大きくなつてもかならずこんな客人をとるなよ氣がもめるぞよ　紙次　女良しに氣をもませるよふな客人は客冥利にかなつたといふものだ　小春　モシイわたくしやあ夜のあける迄こうやつておりいすから松川さんの名代だとおもつてかならず手のねへ女良だといつておくんなんすなへ　紙次　かたつきし顔を出しなさらねへでも元がこつちがわるいからであやまつてこそいれ一言もねへに床へも見舞てとばをかわしてくんなさるもの名代とはもつていねへ　小春　モシイぶしつけらしい申よふでおざんすがわたくしはお前さんの世話になる氣はさら〳〵おつせんよト申てはさぞ腹もおたちなんしやうがお前さんなざあホンニお出なんせんがいゝのさなまなかお目にかかりいしてわたくしやあくやしいほど苦勞のたねをこしらへんした　春の　モシイおいらんもいつそ氣をもんでお出なんすからおちつかせ申なんし　小春　はづかしいよ（ト身をひねつてなみだぐむ）　春の　どうぞなさりいしたかへ　小春　どうもしないよホンニ氣のちいさいばかりでいゝたい事もいはれぬものはむねでばかりないてゐるよモシイ聞いておくんなんしわたくしのよふなくろう性なものはほんにおざんせん味方におもいんす番とうしはこゝがむづかしうおざんすから何かにつけてもてい〳〵氣がねをしんすし出て間のないわたくしの事でおざんすから傍輩衆のきけんばかりとつておりいす松川さんはりこうで二階中をかきまわしなんす女良しのこつておざんすからまけてだまつてはおりいす

がわたくしやあしんにはらがたつてくやしくつてなりんせん（トなみだはら〳〵とかほにそて）［紙次］なんにもしらねへおめへをば傍輩衆（はうばい）にいわれるよふな仕内をしたがわたしが咎（とが）［春の］それだからおいらんのとこへお出なんしな［小春］おれもちいさい時からこゝの内に居（い）たものだがてめへも客人（きやく）に出るよふになつてからたまさかすいた客人がついてもいきはりやぎりづくでこんな目にもあいながいねんのうちさぞ苦労をするだろうとおもへばホンニかわひそうだよ［春の］おいらんへわたくしは目見へのばんからおまへさんがいつそかわいがつてだましたりすかしたりしておくんなんしたをよく覺へておりますからおまへさんがおふさぎなんすとわたくしはしんにこゝろぼそくくろうになりますよ（トふりのたもとを口にくわへてともにしなるゝ糸はぎのつゆがんくびをかたむけて）［紙次］なにもちからをおとす事もねへすはやい所が松川さんの譯（わけ）もつけどこもかも丸くして顔をたつて死ぬるまでほそくながく來たならばとはいふものゝ［小春］御縁があつてお出なんしたからその時の事さ［春の］モシおわすれないますなへ［紙次］ナニわすれるものか［小春］夢（ゆめ）まぼろしにもお出なんすをもしやのすへにもたのしみにまつておりんす〳〵 チヤチヤン 〽 おなじつとめのそのなかに外のおきやくはすておぶね（トよそのめりやすなうしろにとりて硯引よせあんどうへ松華堂の行書にてさら〳〵と詩を題して）［小春］モシイわたくしがこゝろいきは［紙次］なに　ト（あんどうを引よせてよむ）

感君高義重山丘　一語先寛兩處愁
劒合延津終有日　珠離合浦不須憂

[茶屋]ハイおむかひにさんじました [小春]そんならもふおわかれもうしいしよう [紙次]おさらばよ

[引四ツのひやうし木]チヨン

右小春紙次が件の諸譯は見る人の力に任す假宅の模様轉じたる此本の新趣にして故をもつて新らしき新宅の世界は目出たく後編にお目に懸ましよう

全册の畢

跋 烟之花 二 意中情

薄倖先生胸中洒落たること光風霽月のごとし。周茂叔小册を作ともよも斯情史に過じ。其氣性高きと釋僧淵を欒頭こし。歌妓莫愁に青樓曲をひかす。班婕妤に怨歌行をうたはしむ。吁湖上笠翁日域の戯作者ならば。跋をかゝしめん。彼魯祖禪師は九年面壁られて大悟し。長慶禪師は七箇夜具敷始をして雀悟すこは。豈魯ならずや。抑殷の紂王鉛粉を始て製し。西狄の人燕脂を造出してより。宋の梅花粧。隨の桃花粧に流行し。今や中島のイギリス。紅屋の壓花香をもて文飾す。嗚呼斯文の艶なる。誰に見しよとて脂粉つきよぞ。覽者悟らば是選述の指歸而已

門人それがし誌

白露糖

通志選

全

北郭先生訂定

必來
南士

里干隣通志選

中之街

兀山房梓行

通志選序

大堤春水滿。相映送二春衣一。日暮逢二公子一。不レ知何處歸とは。南郭先生のしやれ。闇の夜はよし原ばかり月夜かなとは。寶晋主人のしやれ。兎角浮世はしやれのこと。しやれて〳〵しやれぬいて。しやれた處が雨落のきしやごのごとく。瓦の如し。それしやれのことたるや。通なり。通といつぱ。遊里に有て風流なるをいふ。予人のしやれを聞はつりて。一小册をあらわす。通としやれと相並ぶ。しやれが通歟通がしやれ歟。いつまでいつても同じことなり。則題して。通志選と呼ぶ。天寶生レ二酒落一不レ盡後之君子乃茲集以盡二通志一而通志盡二于此一

世滿里南鐐撰

通志選目錄

發端之章一

大堤之章二

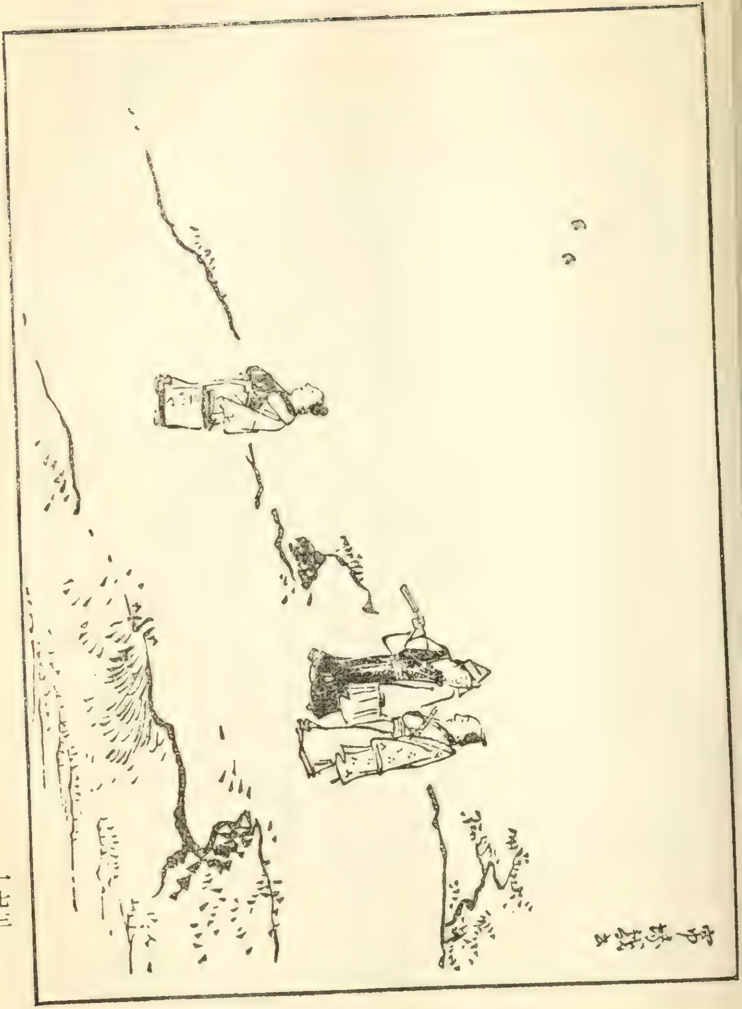
登樓之章三

通志選

發端

世滿里南鐐編選

大道直如髪なる通町のほとりに清助といへるものあり十有五にして學にこゝろざしある人に問ふていわく何が謂に亡八と書哉ある人答ていわくはて知れたこと孝弟忠信禮義廉恥の八ツをも忘るゝゆへ亡八とかくと聞たがさいごのすけ朝に通となつて夕に死とも可也とこゝろえ十有八九に及んでは第一家業に疎く俳諧の評ものには孕句をもつてなき髭をなで活花の會には繼上下をいため付杵屋が門に入つてはさいじりへ定紋を蒔繪し盆景の稽古には須磨明石を丸のみにしたるこゝろになりちくらを書ては義之徴明の再來と自稱し其外何によらず二十日鼠の米櫃をかぢりちらしたるがごとく挽臼ほどにもいかねどもくらからぬ藝者とおもひ虚言と味噌とは胸に封じこめ我こそ大通の色男とうなづき猪牙に銀ぎせるをくわへ四ツ手に鮫ざやの小尻をあらわし親に家屋敷をうらせて孤までには至らねど毛せんはたび〳〵かぶり終に居候の身となり藥研堀に行四郎が妻の兄寸伯老が家を主としよごれたれどもうづあられの長羽織さめたれどもとびいろ純子の帯をしめ兩國の茶みせに腰をかけおきやうほ



う久しいネと茶をのみながら往來の女の貌をながめ居る所へ油町の大和屋の手代喜兵衞といふもの丶通るをちらと見付て大喜〳〵と呼ければ [喜之衞]「ハア是は淸助樣此間はすきとお目に懸りませぬ [淸介]「コレサ〳〵それじやアかたいはなマア〳〵久しぶりだ一ぷく呑みさ〳〵 [喜]アイと腰を懸れば淸助は喜七を無たいにすゝめこみサア〳〵ずい行〳〵とふたりづれ淸助がからみへに喜七がりちぎ先ヅ船宿からと相談きわまりいそぎしが [淸]「おれが心安イ船宿があるコリヤアおれが大イの恩を懸て置たとちよつとにもみそをいゝ三河屋の見せをのぞけば後家が聲をかけ淸考さんおめづらしい御出だネマアおあがりなんし　あなたよふ御出なんした [喜]「アイ [淸]かゝさんこの男はおれが兄弟ぶんだからたのむによ [後家]「アイおはつにお目に懸りやした是からおたのみ申んす [喜]「アイおせわになりやしやう [下女よし]「アイお茶ア上りんし [淸]「ムウおよしどふだ此ごろはきつく尻が大きく成ツたと（一トツたたく） [よし]「エヽモおよしなんし [後家]「アリヤアわたしに似てさ [よし]「アノ淸考さんの久しい物さ [淸]「コレかゝさんけふはとんとあそぶ氣じやアねへがの此男に道で逢ッての一ツぱい呑ンでからのおもひつきだがけふは茶やをやめの奢なしのずい行のずい歸りといふしやれだがおらア大ゥみせはあふかたふさがりだからいつそ半しやれと出よふとおもふがなんとどこぞいゝ内が有るかの [後家]「アイいくらもござりやす [淸]そんならどこがよかろふの [後]柏屋になさりまし

清「わるし〳〵 後「なぜへ 清「わつちやァあそこの花の井を買やした 後「さようなら京町の爲びやになさりませぬか 清「ムヽそりやァよしサ〳〵モゥいきやしやうがみんながいなゐネ 後「アイけふは久助はやどへ参りますの藤兵衛はかけをとりに参りましたが何さわたしがおともいたしやしよふおよしや藤兵衛が歸つたら早くよこしてくりやよそしてこゝをあけやんな よし「アイ〳〵とはきものをなほし〉おゆるりとお遊なんし

土手のゆきゝ附見立

松は常盤に日本堤の往來に提灯は星のごとく貴賤のへだてなく行通ふ中に清孝大喜後家もろとも土手へさしかゝれば後よりモシ旦那そこはぬかりますもそつと右へおよりなされましといふをふり返りて見れば是も堀の提燈を先へ立て三人連の客壹人は花色ちりめんの小袖に紅粉かばのうら緋ちりめんの羽織に緋ぢりめんの筒うらが四五寸下まで見える樣に仕立四ツめ結の一ツ紋壹人は黒綸子の小袖に淺黄むく黒たんごに玉虫裏の袷羽織又壹人はちと輕イと見えて上田八丈の格子嶋の羽織にちゝぶ絹の目引小紋の小袖いかにもしろべらしい聲で 「(こんちりめん石部金太夫) 「イヤ武左どのモシ貴公とは久々での御參會でござる度々御文通に預りましても彼是と勤仕に暇のない拙者が儀でござれば

とんと御出會相成がたく委き御紙面に貴報さへつと〳〵に相ならぬ譯故心外にうち過ましてござる今晩の御同道此金太夫に置ましては千萬大慶至極に存まする（黒ちりめん形井武左衛門）「ハヽア石部氏の仰の通り自分儀も殿の御日がねを以て當役儀を仰承りまして此かた一向にすン暇を得ませぬ故に誠にお物遠に罷り有ましたが今日は久々にて御門出ッ致ましたも貴公の御誘引なし下されたればこそ存よらず能イ鬱散を仕るだん過分至極に存じまするなんと新五左せまじき物はみやづかへとは能ふいふた物じやの（上田八丈の羽織沓野新五左エ門）左樣でござります甚以私儀も御用多に罷有まして片時も役所をはなれませぬ所に御兩所樣の思召をもちまして今晩の御供此新五左衛門いかばかりか忝ィ仕合にぞんじ奉ります　武左衛門「是さ新五左衛門其樣におりめ高ではわるいぞや屋敷はやしき又こふ悪所へ同道するからは今宵一夜はとんと格式にかまわずずつとやわらいだがよいぞやナントさがみやそふではないか　船宿の男「なる程左樣でござりますイヤモおまへさまのやうなすいなお方にあなたのようにおかたくなさつてはおあそびになりませぬ　武左「チヽサそふじやテイ　男「ちとおくだけなされませ　金太夫「成程武左殿の仰らるゝのが御尤じや　男「イヤちとおまちなされましらうそくのしんを切ませう　金「そりやけしたは　男「イヤ是は私一生の無調法　新五左「サア〳〵早ふともをせい〳〵　武左「闇夜燈火なふしては歩行成りがたしじや（船宿は番屋へ立寄火をとぼす）此うちに彼二

人は行き過て 〔清〕「是々大喜今の三人はとんだやつらじやアネエか 〔喜〕「アイサ 〔清〕此しやれた世の中にもあんなこけどもが有ノゥかゝさん 〔後〕「ホンニネ 〔喜〕しかしどれも人からの衆でござりました 〔清〕「ナアニサどこへ行ッても女郎にかわひがられぬやつらさト噂のうちに土手も半過(なかば)になれば田町の方から 〔新交〕是賤鳥(せんてう)やあんまり急ぎやんなサアこけが女郎買に行やうにそんなにせくなア 〔賤鳥〕「なんだ新交今夜はなんぞといふとあぢな事斗ッりいふはいあんまりいやみからみをいふネイ 〔交〕「ハテおのしやアあぢにぢくねた事をいふなおらアそんな氣じやアいわねエハイ云にくゐ事ッたがおれも新交と云ッちやア石原から中の郷きつてつらを見しられた男だア 〔鳥〕「なんだエあんまりみそをひるネエおのしがさうならナおれも相應にナ水がみの銀ぎせるでな賤鳥サン〳〵とナ立られてナ來たもんだア 〔交〕「コレおのしがそんなしやく(じカ)ほくを云のもナおらアがつてんだアアノ此中かねつき堂のおはなが帶をおのしがかりてな吉田町の伊勢屋でナ繩目(なは)にあわせた事をおれがちよつと口を出した事を今に氣に持て居るからそれで此頃は何ンぞといふとあぢにひねくるのだア 〔鳥〕「ハテ色々なごたくを引ずり出スハイそれじやアなんの事はねエおれにさらさせるのだアコレそんなしつけいを云はふよりやアなおのしちつとたしなみやれヨ 〔交〕「なんだおれにたしなめとはなんの事ッたアおら何もたしなむおほへはねエハイ 〔鳥〕「エイコレおれがしるめいと思ふかエイあんまりりつぱな口をきくねエ夫あの跡

月ナおのしも鐘下のお市にかんざしをやつたがあれもきゝやア割下水のはたえに勤て居るおはしが二三年跡から心がけて漸々とこしらへたかんざしだけなそれにマアかあいそうに一年にたつた三分弐朱の給金で勤るやつの物を色をしかけてかんざしをあやなすといふ事がある物かホンニおのしも引事にかけちやアこうしやなもんだア [交]「是ェ、あんまりそんなたあごとをぬかすねエ云はせて置ケバとほうもねエあごのたゝきやうだアなんにせい是じやアすまねエぞ [鳥]「すまざアどうするイヤどうするのだエ、（ト云ふときはるか跡から）△是エ、 [萬八]「ふたアりながらマアまてエ、と聲をかければ [二人]「そふいふなア萬八じやアねエけエ [萬]「ムヽヨといひながら息を切つて欠來り是ナアおのしたちやアなんの事ツたおとなしくもねエマア〳〵何ンでもそれじやア濟ねエからなんでもおれ次第にしやれ能イよやうに譯を付やうマア角ドの酒屋まで來やれとむりにふたりを引つれて跡へ歸る所を朧月夜にすかしてみれば三人ながら仲藏が定九郎といふかたちなり [満]「大喜あれ見やれ色々なやつがあるもんだノ [喜]「アイサ [後]「ホンニ人がらのわるいねエ△扨又大音寺前のほりからすみる茶色の様な聲で 長うた〽 かきをさそなら春日山是も神のちかひとていとしとのごと合相傘のしつぼりと（田中の方から）[彦]五郎じやアねエけい [五郎]彦かェ [彦]「ムウわりよゥさつきからたづねたア [五郎]「なぜ引 [彦]「今夜そゝりに行てな仕廻にナ伏見丁へ上るべいとおもつてよ [五]「ムウそりやアいき

だな 彦「ムウ 五「ヤちくるいめ 彦「きまりであろふが 五「きつとだ／＼ 彦わりやア今迄どこに居たヱ引 五「おらアな入谷の十がとこでナ能ばくちができるときいたから此中こしらへた大島の半てんをナ釜島屋へくらわしてナ壹ツ本かりてな道のわるひにナゐつちらおつちら行やいなやなア二三番でナみんなはたきおとされてナヒイに成てけゐつたはイ 彦「ヤそいつアいけねいナ 五「ムウヨきいてくれろへまだあらナその上にナ今朝貮百で買た日和下駄のナ齒をふんけいたはイ 彦「イヤそいつアいけねエナ 五「ムウヨ 彦「それから見ちやアおらアよつほどりくつが能ワイ 五「どうしたエ 彦となりうらでナ七八百もふけたからナ直に山谷の小張屋でナおごつてきたワイ 五「そりやアおつだなしたがあそかあよせば能はい 彦「なぜ 五「ハテ酒がいけずかつきがわるしかそうていあだらけねエハイそれよりやア佐野屋へいけば能はいまづ酒がよしかとうふが大きいワイエヽ是あぶねヱヮイそれみろころんだは 彦「エヽいめゑましいはなせヽふみ切たアホンニはつつけと云道だア 清「イヤ今夜はいろ／＼なやつらに出あふ晩だ 喜「ホンニきゝてい事をきゝやすネ是より衣紋坂へさしかゝり清助白イ手ぬぐいを出して前がゝりにかぶれば 喜「モシ清考さ／＼それはどうしたおしやれでござります 清イヤサ是から先は通る程の者がみんなおれを知つてゐるからゆだんがならぬ夫レに五十軒からぶつたつて中の町は雨がわそのうへ第一にするがやのかゝアしうが見付ても大

の悪也大かなやの女郎も中の町へ出て居よふもしれずほんにうつかりとあるかれるもんじやァねェ

喜「如何さまおまへ様の事なればそうも有そうな物さ　後ホンニおまへ様ンのやうにしやうのわるいお方もござんすめい　清「チツト聲高しモウお屋敷前に成やしたと清助小聲に成て大門へ入り是々大喜今大門に居た禿はおれをおれを見付はせなんだか（マヽ）　喜「イヽエ　清「扨もあぶなかつた　後「モシ清幸さん今大門に立て居なんした新造さんがおまへさんをじろ／＼見てわらひなんしたにエトのせかけられ　清「それには大ィの譯有りさアリヤア去年おれが五六度も買たやつが出した新造さとうそとみそとの中の町から京町へ入り海老屋の見世をさし覗けば中座もまだ半分の餘もならんで居れば清助そゞろになりこけが十九文見世を見物するやうにきよろ／＼と見廻し　清コレかゝさんあんまりどつとしたのも見へねエノ　後「何さよふござんすにへ　清「是大喜どれにしやる　喜「アイどれもどれも美しい揃へで目うつりがいたします　清「何さどいつもあんまり氣の有のは見へねエ　後「モシエそうおつしやるけれどネ此くらゐ揃た内がそんなに有ルものじやァござんせんにエ　清「それもそうけいサア大喜早くきめやれ　喜「アイマアおまへどれになされます　清「コレかゝさんアノ文を書てるやつがどうかよささうだがどふもつらがみへねエ　女郎住の江「千どりやァ　禿「アイ引

住の江「めしつぶを持てきやァ　千鳥「アイ引　住そしてノウ二かいへいつてノ清花さんの客衆にノ

封じ紙を二三めいゝらつてきてくりやアト顔を上る〔清〕「ヲットよし／＼きれい／＼こいつはすごいかゝさんおらあれにしやう〔後〕「アイさあおまへさんはヱ〔喜〕「アイわたしがのはおまへ能イやうにたのみます〔後〕「イヱサそうおつしやらずとお見立なんし〔喜〕「アイ〔後〕モシヱ今こつちらを向イて何か云なんしたのはヱ〔清〕「それよりやァアノかんざしであたまをかいて居るのが能からう〔後〕「アノお子かへ〔喜〕「アイあれに致しやせう〔清〕「サア／＼それできまり／＼〔後〕サアそんならおはいりなされましト先へ立てモシ若い衆へお客様ンがござんすヨ〔若者源兵衛〕「ヱヽイ御上りなされまし〔清〕「サア若イ衆コレ腰の物をたのむよ小柄は中橋／＼といわれぬ先に階子をあがりサアどこだ

廓中の諸譯

若イ者座敷へ入サア是へお這入なされませトあんどうをかきたてる〔後〕「モシ若イ衆へ今云たおふたり様を間違はぬようにおたのみ申やす〔若者〕「アイ〔清〕こりやア能座敷だノあそばふなら諸事表座敷の事ッた〔喜〕「アイサ〔清〕「掛物はなんだ休山か布袋だなんだアノ花の生ようのぶきようさ水きわが第一わるいおらが生るとまだよつぽどおつがあるテ〔廻し者〕「アイお茶ア上りんし〔清〕「ヱヽコレわりやアいつ江戸へ来た國ニアどこだ伊豆か遠州か〔禿〕「ヱヽモすかねヱノウトいふうち若イ者多葉

紛盆二ツ持て出て　[若者]「アイちとこちらへおよりなされませ　[清]「チツトのみ込〳〵是で調度女郎衆の居り所がきまるといふ時（住の江が禿ちどり）盃臺持て出る　[清]「ヤ是リヤアとんだ美しいノ
[喜]「いかさまネ　[千鳥]「おがみんすヨウ　[清]「したがモウこはめしくさくなつたおいらんのむなさきへつかへる時分だ　[千鳥]「すかねヱノウ　[後]「又清幸さん穴(マヽ)ををおつしやります　[清]「今夜おれが
をしてやらうぞ　[若者]「ヱおまへ様ぬかつた事をおつしやります　はモウとふに私がいたし
て置きました　[千鳥]しつたかヨウトせなかを一ツたゝいて行　[みな〳〵]ハ、、、、、こいつァ能〳〵
トみな〳〵わらふうち女郎二人来る（清幸が相方はすみの江表座しき也大喜が相方はらうか座敷にて松風禿に遣はす）　[若者]「サアこつちへおいでなさりまし　[女郎二人]「アイトたんすのそばへ居るト（座敷はしばらくしんとなる）　若イ者盃をはじめハイあなたへ御上申ますと清幸へさす　[清]「マア〳〵大喜　[喜]「イヱ先上りまし　[清]「そんならおさきと一ツ呑み住の江が方をしり目で見ながら臺の上へをく　[若イ者]「モシどなたへ　[後]「アイあなたサ　[若イ者]「ハイト住の江が前へ出スすみの江ちやうしの口でこつちりとして臺の上にをく若イ者大喜がかたへ出す　[喜]「ちとおあけ申やしやう　[住の江]「マアおとり上なんし　[喜]半分受る　[清]「ハテひとつのみやれナア　[喜]「アイト盃松風がかたへ遣ル松かぜ少し請て
[松かぜ]「モシおかさん上んしよウ　[後]「アイちとおさわり申やしよう　[松風]「アイおあいをおたの

み申んす [清]ちと見申んしようか [松]わつちやァ呑んせん [清]「初會にやァどこの女郎衆もそうした物さと盃をとる若イものゆるりとお上りなされませ [若]「モシかみさんおたのみ申ますト立て行ク [清]「こりやァねつからひやだ [後]「そんならちとおかけなされまし [清]ヲイト火鉢へ懸る大喜鼻がみにてあふぐ（此所にて吸物出る盃しばらく廻る）らうかゟへイこりやァどなたもようお出なされましたと（揚屋の若イ者藤兵衞）「ちやうちんけして座敷へ入 [後]けふはおそかつたの [藤]「アイやう／＼今歸りやした [清]「どうだ藤兵へきついもつたいだの [藤]「イヱサけふはモウほう／＼あるいてげつくりくたびれやしたしかし歸つて聞ばおまへがお出ときゝやしたから茶づけを一ッぱい立ながらかつこんでじきに參りやした [清]「ソリヤア御苦勞／＼ [後]「ほんにあの大文字屋の文はとゞけやつたか [藤]「アイ [後]そして下谷のはちつともきたか [藤]「アイイヱサるすだからお歸りまでまてと男衆がいひやしたから待つておりましたればやう／＼五時分になつて歸らしつてネどふで二三日のうちにおれがいくから今夜はマア歸れとつてネほんに三文にもならずに歸りました [清]そりやアきつく茶になつたノ [藤]「ヤモ一言もござりませぬ [後]「コレ藤兵衞やおらモウいくにヨ [藤]「アイ [後]「モシおふたり樣ゆるりとおあそびなんしアイ女郎さんがたおいとま申んすヨ [二人]「アイ [後]「コレ藤兵衞やおむかいは何時かきゝ申てきやト後家ちやうちん付てかへる [清]「是さ大喜そんなに火をあふぎやんなア

女郎衆の髮へ灰がかゝるはナア　[喜]「アイ是はそゝうをいたしました　[清]「そしてマア炭がたんといろうと思つて女郎衆の顔が青ざめて來たはなナ　[住]「エヽ氣が違つたそうだ　[藤]「清幸さん又きつい穴サ　[清]「よしか　[藤]「アイよしさ　[清]「サアそんなら一ツいきやしやう　[二人]「アイ　[三人]「シヤン／＼　[清]「しかしこんなに穴斗ツリいふと女郎衆のしうちがわるくなるもんだ　[藤]「モシそれも穴かへ　[清]「よしさ　[喜]「よしさ（是よりぢくち）　[藤]「よしさ　[清]「よしさが茶をたて　[藤]「をたて　[清]「をたて　[藤]「をたてがながし　[清]「ながし　[藤]「ながし　[清]「ながし組がしら　[藤]「かしら　[清]「かしら　[藤]「かしらかくし　[清]「かくし　[藤]「かくし　[清]「かくしによらい　[藤]「によらい　[清]「によらい　[藤]「によらいのわたし　[清]「わたし　[藤]「わたし　[清]「わたじけない　[三人]「ハヽヽヽヽ　[清]「けないとは大のさし合　[藤]「チツトそのけないで一ツ上りませ　[清]「何さおれ斗ツリ呑はなアサア／＼大喜一ツ／＼　[喜]「アイとひとつ呑でさす　[清]「ちよつと揚屋町　[藤]「アイそんならちよびとおあいをおたのみサ　[住]「アイぬしのおあいならひとつのみんしよウとちゆうと呑　[清]「イヤちつとやけるハイ　[松]「モシヱおめへよりやアわつちがネやけんすよウ　[禿共]「アイおめしよう上りんしと（だん／＼ならべる）　[藤]「サア／＼お膳が出やしたちとお上りなさりまし　[喜]「モシ清幸さんお上りなさんし　[清]「何さめしは内（シヤア）でもくうはナア諸事のみ事さ／＼　[藤]「そんならおひらでもお

肴に上りんし 清「さらばひらをくわんとてトしやれながら明て見てなんだ此切身は鯖じやアねヱかイヤコリヤアスコ來たはイヤモ甚くさし〳〵長いもにしいたけとはきつい病人イヤおらをば痲疹（はしか）でもしたと思ふそふだ（此間女郎はふたり向合てゆふべのきやくのはなししてゐる）「禿衆おちやアもつてきてもらおふぞへ 清「サア〳〵大喜此ひら皿（さら）で廻すぞ 喜「イヱ〳〵それは大の惡（アク）でござります 清「何さ一盃ヅヽぐい呑さ〳〵といきもせずにぐいと呑んで大喜へさす（大喜はしやう事なしに受る禿八分めほどつぐ）大喜ちよつと口を付れば 住「モシヱわつちが助て上んしようと住の江すつと呑んで住「コレちどりや此平アそつちへ下ゲやとなげる（若イものきたり）若「モシちとあちらへお出なされませ 清「おつとのみ込〳〵と兩人立ば 藤「アイおたばこ入はわたくしが持て參りますと藤兵衛つゞいて廊下座敷の中程松風が部屋へとろ〳〵と入モシ清幸様今のうち 清「なんだれいこくか呑込く 藤「マアこゝから遣しませう 清「何サおれが方からやるはなアと（ないものをあるやうにいへば）「大喜藤兵衛に一角わたせば 藤「行燈のきわであらためそんならわたくしはおいとまにいたしませうお迎（むかい）は何時へ 清「ハテ七ツサノウ大喜 喜「アイ 藤「そんならゆるりとおあそびなされませとちやうちん付て階子（はしご）をおりる 清「ナント大喜此たんすも中はからであらふノ 喜「そふかネ 清「此ふとんは大（デエ）ぶすへくさくなつた 喜「アイそれでも夜着は能イ物のはてゞござります 清「何さおら

が仲間の市にせり市に出ると八十四五ぐらひに外ふめねヱきさまなどの見せへ持て行と四百こみの三分ぐらゐ外付ケはせまい〔喜〕アイマアそのくらゐな事でござりませう〔ちどり來り〕もしへあつちへおいでなんし〔喜〕「サアそんなら清幸さんお出がよふござりませう〔清〕「マアノ＼爰で一盃やつつけふ〔ちどり〕「イヽエマアあつちへきて上りんしよふト手をとり大喜も一所に表座敷へ行キ住の江が□へ入ル千どりはたんすから何やら出して出て行〔清〕「コレ大喜ヤおらがやつは餘ッ程きん／＼物だの〔喜〕「アイサ美しいものでござります〔清〕「何サ夫よりマア此夜具を見やれ仲間市へ出しても百円五十匁斗リが物は有こん地の錦にそして緋ぢりめんの三ッ〔喜〕「もしへもん所は三ッ揃でござります〔清〕「ヤそりやァおれと同じ紋だなんときついか／＼〔喜〕「ヤモすごい事さ〔清〕「此茶だんすの中はどうだハヽア一ッはざぜん豆一ッは梅ぼしの煮たのだ是さ此ように洒しほだくさんに煮るから此あまつたるさ〔喜〕モシ／＼それはきつい悪でござります〔清〕「しかし此たばこぼんは安イコレ／＼下の引出しにはみす紙の殘りが少しこりやァなんだハヽヽヽ引ッぺがしが四五まい有こちらの引だしはなんだハァ金龍丸だ〔喜〕「モシ今に來やせうにヱ〔清〕「扨とちがひ棚はどうだハァ淺草のくわんおんのみゑいと三河じまの不動が有ルこつちらはなんだハヽヽヽヽ改名が張ッて有〔千どり來り〕「モシヱ何をしなんすへと云すてヽ火入を持てゆく〔清〕サア大喜一ッ盃呑ふ〔喜〕「イヤわたくしはモウ御

めんなされませ 清「ハテつき合だ一ばいのみやれとつべたいやつを茶わんへうけて喰ちらしの硯ぶたを引よせ残りしし丶たけや梨子の小口切をつまみか丶る所へふたりともに来りまだおやすみなんせんかと屏風の際にすわる 松「ヨゥ酒をのみなんすネ 清「アイ諸事酒の事さ 松「モシあつちへお出なんしと大喜をつ丶けば 清「そんなに早く　　　ねいもんだヨ大喜もつとあそびやれなア 松「イ丶エぬしのおじやまになりんすこつちへおいでなんしと大喜を引ッ立モシ佳の江様ンおやすみなんしモシヱゆるりお　　　なんしと大喜と一所に部屋へゆく大喜　　へ入レば 林夜着をかけてやりの上へ直りてモシエあの清幸さんとやらは能く酒をのみなんすネ引そしてマア能くしやれなんすね引トたばこすい付て出しぬしもちつとおしやれなんし是ヤそこを通るのははる野じやアネエか「アイ是やアたのみてエ事があるよウ「なんでありんすヱとしやうじを明る「あのノ能子だからの茶を一ッぺい持て来てくりやア「アイ「そしてまだ用があると立てはる野が耳へ口を付てアノ源兵衛にのそつとノ云ッてくり「何をヱ「アノさつきにノたのんで置イたじやぜんまめをノはやくこしらへてノかみさんの目にか丶らネヱよふにしてノそつとよこしてくりやといつてそつとそふ云ッてくりやヨウ 禿アイト行扨松風は立てたんすから　　　を出して又　　へ上りたばこを吸付て出しそのきせるにて松風も一ッぷくすい　　の　　へ入る時春野茶を持てくる茶わんをとり 松「のみなんせんか キ「アイト大

喜一口のめば松風そのあとをのみモシエぬしやアどこでござんすへ　キ「わたしやアいなかさ　松何いなかだへ

早明がたのかねのおとにくや

烏がかあく

通志選終

東都氣娼廓膽競

全

自序

謝庚樂は遊びを好み山水にわたる。右軍が鵞を養ひ。子散が驢馬を集む。予好んで著述す。されど短才不能にしてふるきを忌れ新きを不知。何をか綴と一日机上にかゝれば。今こむかしの仲の町。意氣地をはるの花川戸。助六下駄の男達。長兵衞が義氣権八が色と情の比翼の印。其染色は小紫。それを趣向の眞として。正月二日のかきぞめに毫おつごりそのまゝ。東都氣娼廓膽競と題す

小金あつ丸

しるす

なべ

目録

○第一回
権八閼て仲の町茶やへ
小紫と忍びあふ世かい

○第二回
まむし治兵衛唐犬十右衛門
三浦屋大一座の世界

○第三回
唐犬十右衛門更哥が
手管に落る世かひ

○第四回
江戸がみ久治彌十新町
にて悪言をきめるせかひ

○第五回

長兵衛みうら屋のした座しきにて小むらさきに逢権八が行するをかたる

以上

西のはつ春

東都氣娼 廓膽競

小金あつ丸著

○第一回

權八せかれて小むらさきこ 仲の町の茶屋にてあふ

物いふといはぬ花あり仲の町とは櫻のころの秀逸なり爰に三浦屋のおいらん小紫は權八に今宵もちよつとあひの手に心せかるゝむねの内色には見せぬ大鳥風しとやかに八文字けだしのくれなゐ素足の雪さくらが中をおしわけて尾張屋の前あたり（茶や娘おまちきせるをもちながら）［お侍］おいらんおはやふ［小紫］アイ（トおもく＼しくふんにこしをかける番頭しんぞう小の糸うちかけのすそを直して是もこしをかける）［若者三次］おたのん申ますと（とかへるを呼かけ）［紫］コレ＼／三次どん今夜はいせ屋の客人が來さつしやるよ更哥さんも一チ座でざんしやうちよつといせ屋へ寄てきいていかつせへ［三次］まむし樣がお出なさりまするかへ［番新］さつき人がきいしたよ［三］ハイとかへる［小］（小ごへにて七三きいしたかへ）［待］さつきお出なさいました［はん］モシおいらんまむしさんがお出なんしやうからわたしは若きをつれて伊勢屋へまいりいすからやうがおざりいすならわか葉をおよこしなんしへ［小］おたのみ申いすに

へ【ばん】わかばやおいらんがやうがあらつしやるならいせやへきやようそ〳〵あすんであるくめへよ
【若】アイ【ばん】わかきや手前はいせ屋へいつしよにあいびやおまさんお頼み申いすよ【ま】おいらんは
すぐにおくらせ申ませうぃせ屋へおよんなさらずとよろしうごぜへましやふネエ【ばん】あいさ(トいせ
やへわかれゆく二かいはおくの四疊半のまつくらな所へせうじ〆切床をとり權八たばこをのんでゐる所へ小柴あ
がる)【小】オヤこわうざんすまつくらでしれへせんよ【權】オツトきたりト(手をとり
にじいゝ　だ【權】じれつとふざんすからちやづけ茶わんでのみいした【コシ】今夜はまむしの治
兵衞が來るじやアネエカ【小】アイサしんにじれつとふざんす夫レに十右衞門樣が一チ座でさら哥さん
はモウ伊世屋へゆきなんしたらう心ならネエこつてざんすこん夜にかぎつてナぜきいしたらうにくゝ
つて成リいせんそしてまあおめへさんはこのごろたよりもなんせんがどこにゐなんすへ【權】どこにと
つて小松川のうばが所にさヤホンニ乳母が泪をこぼしてのゐけんむりとは思はぬがモてまへがことば
かりは思ひきられねへ三日あはねば十年もあわぬ思ひけさもくらいうち藤十郎が來ておれにたん氣を
出すなチツト心當りないゝ事が有とくれ〳〵いつたがアヽもふ此のやうになるよりはと思ふ時も有ヨ
【小】ほんに藤さんは情しりざんすか(ネカ)【權】それはそふと手まへまむしがそふだんを内へするといふ事だ
がいよ〳〵身請がきまつたか【小】聞たくざんせんそんな事をいつておくんなんすな(トしばらくふさぎ

はらはらなみだなこぼす）〔權〕アヽぐちをいふめへ（ト折ふし下にてせつかへが三味せんにこんばるがこへとおぼしくしん内ぶし伊太八）〽むかしの身なればどのやうにしやふもよふもしつたれど〔權〕此やうに手めへのせはにばかりなつてくちでれいをいふより外しかたもない〽忝いぞやうれしいぞや〳〵〔小〕それもみんなわたしがわざ〽とてもこの身はむもれぎの〔權〕手前もいくつもりに心をさだめるがイヽ〽すへのあんじもそなたの爲〔小〕ナゼぬしはそふ氣づよくおなんなんした〽こんどの事がしゆびしてからさきへゆきやればたまのこし我身の上とよろこぶぞや〔權〕ハテモウおれはちつともうらみとは思はぬ〔小〕（トしやくり上てなく）〽すかぬ事をいわしやんすいかにながれの身じやとても心に二つはなひわひな（トいふ所で三味せんのいとが切たやうすにてわらいごへきこゆ）〔權〕これも手まへの爲をおもふからョ〔小〕いゝへためにはなりいせんこふして人の目づまを忍びお目にかゝるをたのしみにこそながらへていゝす誰ひとりもなくおまへさんばかりたよりにしてそのおまへさんにまであきられるわたくしざんすしよせん（トいゝ袖なさしくわへなく）〔權〕手まへ斗り惚たよふにおれもおなじこつたは〔小〕そんなら今のやふな事をなぜいゝなんす（トいふ所下より若葉しらせ手しよくなもつてくる）〔小〕どふせうねへもふきいしたもしへ今夜はこゝにとまつておくんなんしあすはやしきへいきいすから七ッがへりおくつてすぐにきいす〔權〕氣の長ひ事をいふぜへそんなら今夜は藤十郎が所へ泊ふ〔小〕そうな

んし（トいうちおひ〳〵人くるゆへにかいにて顔をなをしかへる）藤（いせやからかけぬけきたり）はやくおゐでなさりやせ今もふみんなお出なさいました（トいゝすてゝにかいへあがる）藤 権八さん 権 藤十郎か 藤 今夜は私が内へ 権 なんにもいはぬ忝い 藤 私はすぐに三浦屋へ 権 のち程 藤 お目にかゝりましやう五ツのひやうし木カチ〳〵〳〵〳〵

○第二回

まむし治兵衛唐犬十右衛門
三浦屋一座の世かひ

小むらさき更哥一座尤なじみまむし大じん小むらさきなじみゆへ此の座敷たいこ持はらんし藤十郎たこ七江戸かみの彌十久治かるさのはんゆき次の間に居ならび茶屋若者長八何も大惣おしきせのはおりにて（みな〳〵うち寄大さはぎ）まむし 小紫はどふした 長 おいらん只今（トいふ所若者だいの物二人りにて持ていづる三つあし大ひろぶたうつはもりつば也）若者 若葉そのてうしをそつちへ 禿 かたづくる（イヤトいふ所へ）小むらさき更哥いづる尤いしやうつきくだ〳〵しければ略す 藤 出がある〳〵（此内久治彌十は揚新造にて）すぐに座敷より（てん〳〵のなじみの所へ行く）久 彌 藤さん旦那へよろしく 藤 しやうち〳〵跡からいへせへ たこ七 旦那チトおまんまは 十右衛門 みんなちつとでやうらね

へか [まむし] たひう（べろとカ）とくさいかみなりぼしのから〳〵はもふ有めへ [ふり新] ぬしはきつい口のわるひ事ざんす若葉やぬしにや十さんのおはしをもつてきや（是より大ぜいおまんまとなるがや〳〵此座敷ながきとみしゆゑさら哥は十右衛門をそつと呼出しあきざしきにてはなし合をする是新手也一座のうちにてざしきをはづしこつそりとはなすうちナニカしじういろの氣どり床へいつてはなすのはあたりまへなれば此ざしきはづさせてちよつときまるがやま也） [まむし] 十右衛門はどこへいつた [たこ] おてうずでござります（こなた座敷には更哥）もしへちよつとこゝへ [十] まつくらだぜへ [哥] 私が胸（むね）といふものざんす [十] 誰ぞ來アしねへか [哥] くるこつちやアざんせんぬしアしん山さんに秀（ひで）さんの事をうたぐつていゝなんしたそうでざんすが本ににくいよ [十] 手めへが惚れていて [哥] ばからしうざんすたつた二度しかきいせんそして坊さんでざんすものを [十] 二度はおろか一度でもほれるひにやア惚るはソシテとんだ色おとこだそふだ [哥] ごせうざんすなんぼ私がのろひとてそんなに見る人に惚いすものかエヽくやしいよ（トやたらに　　） [十] （イチエハ）へとんだかどちがへだ [哥] かどちがへもわるふはざんしやうぬしの名までほりいして今さら外に何んぞ出來ちやアすみいせん [十] そりやこつちでいふ事だ（トそつちこつちいいやつていたりしがざしきをはづしてきてはいそがしい所はなし合ゆゑ程なくはなしごへやむさてこなたの座敷にはたいこげいしや此手しやうちなればまむしが十右エ門をさがさぬやうにいろ〳〵おかしみのはなし有り）

藤 モシ旦那でおかしい事がござります まむし ナンダきゝていな 藤 チトお座敷ではふんりよなれど
あたりをよこ目みるおかしみの身ぶり有 ふり新 はやくはなしなんしサア／＼ 藤 せわしねへモシ
さる所の女郎衆がァル雪の降晩に色男に仲の町であふやくそくでどふも出られねへからどうぞして
あひたひとおもふ折からいつも内へ來る誹諧師に年頃五十斗りの坊主來りしゆへぬしにちつと無心が
有りいすといふと　その誹諧師が　なんだ色事なら年寄つたからごめんだといふと　マアおきゝな
んしわたくしが今夜ぜひあわねけりやァなりいせん人が中の町へ來ていゝすがどうも内が出にくい
からぬしいつ所にいつておくんなんしごしやうざんすそふすれば内でやかましくいゝせんといふか
ら此宗匠もおさきとはしやうちなれど内のやふに出入をする事ゆへソリヤアめいわくなもんだがとい
ひながら一所に出たが五ツ時分さあい合傘においらんとかの仲の町へきて見るに色男はこなひそこ
でおいらんもヱヽモウじれつてい人の氣もちつとはさつしたがいゝいつそぬしにきのどくだが揚屋町
迄いつておくんなんしと又かの宗匠を引ずつていつた所が爰にも居ずそれから伏見町から水戸尻とた
づねても色男にあわずさナニカおいらんもじれる宗匠もだん／＼夜はふけるさむくは成り着物はしめ
るこゞとをいゝ／＼たづねあきて内へ歸つて上るとてうどひけさおいらんもきのどくがつてぬしに
いつそ氣のどくだ何ンぞ取りにやりいしやうそばにしいしやう鰻にしいしやうかと聞にやつてもも

ふひけ過の事なれば土屋も八幡屋もできねへから猶〱氣のどくでどふしいしやうへといふと宗匠もからはらふるふほど寒くなつたからばか〱しい何ンにもいらねへ一銚子取りにやれ何ンぞ硯蓋のあまりものでも有ふとそこらからもらいあつめて茶碗で二三ばいぐひ飲にしていつも心安く二階へ

ナニカ宗匠が色男の氣取りに成つてソノ女郎衆をつらまへていふにやア手まへといふものは今夜の色男はどんなやつかしらねへが此雪の降にやくそくしてこねへでほう〱さがさせるやうな實のねえものと色をしよふよりナントおかしらしいが年寄つてもおれと乘けへる氣はねへか小づかいくらいの立引はするはといふとソノおいらんがいふやふがおかしい今夜はぬしにいつそ氣のどくで何ン〔小〕うそをつきなんしばからしい〔藤〕イヽエサほんの事さ〔ふり新〕しつたかへ（トいふうち何くわぬかほつきさら哥座敷へ出て來る十右工衛門も來る）〔哥〕にぎやかざんすねへ〔まむし〕とんだおかしい咄しがあつたのさおめへどこにいた〔哥〕ひとり寐にいきいした

ねいす（ト左りの手
まむし 色男をおいてひとりねらるゝものか 哥 ひとりねてもやつぱり主を
なかへしりめに十右エ門を見る是ほりものがあるといふこと） まむし ナゼへ 哥 ナゼでもさ たこ
時にもふ引でござりますチト片付ましやう（まはしかたそろ〳〵出てものを引） まむし 久治殿十はどふ
したいつたかの たこ七 らんし さつきに旦那へよろしく申てくれろと申てまゐりました 下 あした
なぶつてやらつせへ久治は新造だそうだ 蘭 イヘ女郎衆さ（ト是より 納りみな〳〵いとまごいしてかへ
る） かね円ツゴオン〳〵

○第三回　唐犬十右衛門が床の意氣さつ

頁哥が座敷は本間天上はくろへ彩にさるほうふち横を朱かき合せ二方れんじの釘かくしはすいろ
かたつむり次の間は長持たんすかざり夜具きらびやか也入口にのふれんの紋所をこんの染ぬき床違ひ
棚くゐ手を盡し五明ィなりの香だんす哥かるた箱高まきゑ定紋をちらしふしんあたらしくて一トきは
くわび也今夜は色客の長兵衛名代の夜十右衛門は篤に成むつかしき客ゆへけどられまじと宵のうち
よりいろ〳〵とゝかけいあすもはや　もおさまり） 十右衛門 松のや水を一ッぱい引くんで来てくりや

（入ちがふてさらうたくる）彌十さんと久さんと先へいつたから行といつてらんしさんに藤さんがうきさつていきいしたよ　[十]どんな女郎をかふか　[禿]アイト水をもつて來る　[哥]そして是へのたばこを出してきてモウいつて寐や（トくしかうがいをわたす）[哥]モシおやすみなんすなら品川へお出なんし爰ではねかし申事はなりません　[十]ちつとねかしてくれろ　[哥]いゝへマアおまへさんはあんまりばからしうざんすにへ女郎衆にことをかきなんすかなんぞのやうに加奈川とやらへもおいでなんして居續(つけ)にいなんしたそふだねヘ[十]誰がそんな事をいつた　[哥]おいよさんとやらおもとさんとやらいふ女郎衆がおまへさんに惚きつていさつしやるそうでざんすそりや私が所へばかりお出なんしではおざりいせん何ンとどこでもよふざんすから一軒にきわめなんしてこつてごろふじいし　[十]是程手めへの所ばかりこつて來ていたらよかろふ　[哥]よしておくんなんしコリヤアなんでざんすと文を出す[十]（びつくりして）此文はおれがのじやねへだが持て來た　[哥]そふでざんしやうそれでおまへさんの心意氣もわかりいしたモウなんにも申いすめへと（つんとしてこれな手ごとに長兵衛がかたへ行つもりなり）[十]手めへもふり袖の新造かなんぞのやふに人のしやくりにかゝつてなんにもそふあつく成事はねへおれがそふいふ心なら何しにくるもんだ　[哥]今夜來たのをおんにかけなんすのかへまむしさんのつき合ばかりできなんしたのでざんしやうこつちへ來てもおめへさん一人りで來なんした事は一度もざ

んせん [十]手めへもむりばかりをいふぜへいそがしくつて出られもしねへものを [哥]アイサ旅がけに色をかせぎなんすからおいそがしいのもそのはづでざんすモウ〳〵おもひ切やしやうたんとおやすみなんし（ト立ていでて行）十右衛門はいろ〳〵かんがへみればしやうがうぬぼれものゆへあゝいつてもおれにほれているから大かた今にあやまつてくるだらうとまだまよい色男が来ている事はちつともきが付ずうかり〳〵番新相手にはなしている）[番新]（さら哥がはづしたなと見しゆへに十右エ衛門がまくら元へ来て世事ばなしをはじめる）もしへおまへさんもちつとうは気をおやめなんしおいらんにばかり気をもませなんすあんまりばからしうざんすにへ [十]ナニそふいふわけじやアねへはなおれだつても世間廣くつきあふもんだヨシかな川はおろか天ぢくまでもいくめへもんでもねへ五町の内の事ならいくらおれが腹を立ても無理じや有るめいと思ふが [番]それもおわるふざんしやうわきへおいでなんした事もとふにおいらんでもしつていさつしやるものをそんな事をいゝなんしておこまんなんせう [十]おまへまでむかふへならんでおれをいぢめる [番]いぢめるとお聞なんしちやおわるふざんしやうおいらんの恥は私共のはぢざんすから申いすよと（いろ〳〵はなして気をとられてまじ〳〵としていたりしがそろ〳〵つかれが出てねる屏風を立廻し次の間へ出てねころんで）[番新]折しもれづのばん油をつぎに来る八ツのひやうしきカカカカヽヽヽヽ

○第四回　久治彌十　新町の世界

[久]彌十なんでもおれが行くとこへつき合せい [彌]どこだ [久]どこでもいゝちつとまて何かふんだやふだ紙をくれろ [彌]おれが何紙を持もんだ天水桶であらへ [久]むごくするな（トむだ口きゝながら新町へくる）[彌]こゝは何といふ内だ四六か [久]かりたくから貳朱になつた手めへどれにする見立やな [彌]まて〳〵むかふの三人めのむらさきにしやうそして手めへのはどれだ [久]おれがのはまがきのとりつきにいるふり袖だ手めへあれをしつているか [彌]いんにや [久]ありや高なはの茶屋にいた小ちよくよとんだよくなつたじやアねへか（トふたりながらあがる）[久]コウ長八どん彌十がのは正面の三人めむらさきおれがのはまがきのとつつきにすゝ竹のふり袖だそしてあすあさ寐わすれると事だ旦那のむかひに來る時ちよつとよつてくだせへ [ちやや男]アイ旦那はまた流しだもしれやせん [彌]旦那がながしだと奇妙きてれつだぜへ（トしやれている長八だんじて若者いでくる）[長]久さんあなたよふ（まはしかぶろ茶をくんでくる）[彌]長八どん酒さかなをたのむぜへ [久]十一屋でも八幡屋でもちかいかたへ [彌]よくいそぐぜへ（此所おさだまりの酒さかな硯ぶたおい〳〵きたる）[ふりしんのすゝ竹]久さん何ンぞおもし

ろひ事を聞かせなんし（ト見せ三味せんたかりてくる）[彌]一ッぱいのまふちしへチト上ゲいしやう [久]おゝさへ [ふ]まず [長]わたくしはかへりませう [久]のんでいけばいゝ [長]おたのみ申ますと歸る [す]サア久さん聞せなんし〳〵 [久]やかましいそんなら彌十ひかねへか [彌]おらアいやだ [久]てうし節（ぶし）にしやう（トてうしをあわせる）〽つゝつ十五につふつはちにつにおらアがでゝほうかうちやるたいこはとんからから〳〵すいとつとんさつてもよいねじやよめじやしよんがいなさるめがはつてもむめの木かほゝのやふでもホウしりがだん〳〵たなつちりでもつまとさんためたりやおめこかんへたへへ（エハウホウ）さんくつね [みな〳〵]チ、、、、、、、、、カ、、イ、、ヨ、、 [彌]いゝこへだぞへ [久]おきやアがれアヽくるしい [ふ]もつとひきなんし [す]かんへたへた申何ンの事でおつせう久さんもつとうたひなんしな [久]もふ〳〵いやだ是から彌十をせめろ [ふ]もしへ何ンでもちとうたひなんしな [彌]ごめんだ〳〵何ンにもおらアしらねへ [す]きついごもつたいざんすねへ [彌]ほんにしらねへ [久]よしかおもしろい事をしつているぜへ [彌]ばかアいへ [久]ふりしのさんちとあがらねへか [ふ]いたゞきいしやう（トもにや時々つり床もおさまり）[久]コレ彌十が女郎衆はいつたか [す]アイいきなんしたろふ おまへさんのお出なんしたあくる晩格子（ばんがうし）へ藤さんがきなんしてわつちをなぶつていろ〳〵な事をいつてから歸んなんした眞（しん）にいやしく成りいしたから燒きせるをおつつけてやりいした

久そりやア手めへにほれたのだろふ すよしなんしすかねへよ 久大きなこへだぜへ すゝ客人と一所に來なんしたのかへ 久ウ、、 す客人が來なんせんとぬしはきなんせんのだね情があらつしやるよ 久せんてい客人とこねへでも今夜はくる氣だ すよかつたねへぬしの口はてうほうだねへ 久しれた事さ儆をくつたり酒をのんだり すおふしやれなんすなへ茶屋の男衆が旦那とやらのいきなんす所の新造衆がぬしにほれていなんすから今夜はとまんなんすはづでおつしたをあの人さんがすゝめてつれ申てきなんしたそふでおつすぬしのやうなホンニまづい意氣が有ものじやアおつせん 久ナニうそをつくおれがすゝめたのだそんな事をいつておれが歸るといつたら泣す すしれなんすな留はいたしいせんいきだサアいきなんしナ 久そうはらア立ずとかんにんしてくれろ すヲヤぬしの連衆のこへでナニカきこへすサ 久何ンだ又何か腹ア立たそふだ久しいもんだうつちやつておけだまりて寢たふりをしている（トひつそりとしている）彌十が床の内（まじり〳〵としている七ツになれど女郎こぬゆへ大きにかんしやくたおこすほどなく來り床のわきにたばこをのんでへいきでいる）彌コレ宵からだまつていりやけしの介が足駄やうに高ひつらをしやアがつて毛唐人が船遊山に出やアしめへしたばこ斗りばく（ほゞカ）かり〳〵くらつて惡くしやれるあまだ ふかんにんしてやんなんし色男といふものは長泣するもんじやおつせんはやくだまんなんし 彌何がどうしたとこいつはいゝかと思やがつておつぺしよつたさつまいもといふ筋を出

してロびるまできいろ〳〵したつて齒が立ものかへマア此彌十を呼ふと思ふにやアどぶへ落したいぬつころといふぶる〳〵したなりでよばれがものか [ふ] よばねへ氣じやからいゝじやおつせんか [彌] こいつは女郎めうりをしらねへやつだコレへこんだ所へいらつしやるもわへらがやふなほくてんな女郎のさいどのためじやはへたとへ旭如來が還俗して水戸尻の秋葉を賴んで蓮花座のやりくりで袴をはき九郎助稻荷が挑灯持て誤り證文を持てきてもお聞なされぬ日にや荒神松へうつた丑の時參りの釘ほどもきかねへは手めへも十人なみの女郎の氣か不便な事だかゞみでつらをみやべちやねへ玉眼入のたどんにさんだらほうしの黑やきをかぶせたといふつらだ [ふ] ぬしやアとんだ色が白いねへ [彌] しれたこつたはへおれがやうな客人を日に三度夜に三度おがむと一生色男にふじゆふはしねへ [ふ] たしかぬしに鹽をあげいすと願をきゝなんすねへ [彌] なる程口のたつしやなあまだぜへ鹽をあぐるもすさまじい鹽をかふくめんが出來るもんか我よふに多葉こをくらふとしめへにやアたばこでも年をいれねけりやアつとまらねへとんだおたふくだぜへ [ふ] もふそれきりにいふ事はねへのかへおくろふさんにへおやすみなんしと出て行（彌十もはらがたつてならねどもしやうことなしにまじり〳〵としている）烏がカア〳〵

○第五回

長兵衛權八が身のうへ
を小むらさきにだんず

爰に花川戸の幡隨居長兵衛は權八が事たのまれ今宵まむしの大盡のやうすをうかゞふ尤更哥が色客
にて名代の晩なり　[ふり新]もしへねなんしたかへ　[長]ウヽどうした二かいの客人はおさまつたか　[新]
おしつけおさまりんす　[長]モウ普請が出來てもやつぱりかやの釣手はそうり（そカ）札か　[新]ばからしうざ
んすみんな釘がざんす　[長]おまへのかんす（とはいゝのこと）はどふだ　[新]わたくしそんなものはもち
いせんよ　[長]それでもかりたくで三尺のおし入にござとまくらが二つあつたのはおまへのかんすとね
る所だとちよざくさんのはなしだものを　[新]長さんおゆるしなんしそりやアあの子のでざんしやうわ
たくし共はしんすばかりでかんすはもちいせん　[長]よくうそをつく子だそりやそふ小むらさんをのち
にちよつとよんでくりやと若葉にいゝつけてくんな　[新]アイそして今においらんもおいでなんすよ
（トはなすうちさらうたくる）[哥]うたぞのさん十さんがよいきつていなんすから氣をつけておくんなん
しそしてひけをうたぬうちになんぞ取りにやつてくんなんし　[新]アイト出て行　[長]まむしは寢たか
[哥]アイサ小むらさんもいつそ氣をもんでいなんがぬしが來なんしたもしらせ申いしたらどふぞのち
にまいつておたのみ申いす事があるからねかし申ておくんなんすなとたのみなんした　[長]人の事ば
かりいつていて時に十右衛門はねたか　[哥]あいさもしへ權さんはどふしなんしたのでざんす　[長]お
れがのみこんでいるからむらさんにもあつてはなさねへけりやならねへ事がある　[哥]今夜もあの十右

衛門らがうぬほれをだしきつておりいすいつそきいたふりざりんす［長］それでもしよてはほれて呼ん
だじやねへか［哥］六にばからしい（トはなしているびやう風の外ﾞ方）［小むらさき］モシエおじやまじやざん
せんか［長］おいらんかサア［哥］むらさんぬしとはなしなんすうちちよつと十さんの所へいつてきい
りんすにへ［小］たしか今日がさめなんしたやふすでざんすしかしそれでは私がわるふざんす　哥ば
からしうなにゑんりよなんす事がざんしやう權さんの事をくわしくおきゝなんし（ト出て二かいへゆく）
［長］時にこんやきたろふねへ［小］アイサ何か藤さんがのみこんだといゝなんしたそふでざんすから
きゝいしたらぬしのおせわだそふでざんすおありがたふざんすがまむしさんの身請の相談きうに成り
いして權さんの身のうへはしつておいでなんすとふりしよせんわたくしは生(いき)てはいられんすまひと
（はらはら泪をこぼすうつむく）［長］これかならずたんきをだすまいぞ今うろたへる所じやねへおよばず
ながらばんずい屋長兵衛男が請やつた事にやちつとも氣づかひない［小］そうでざんしやうがわたく
しが身のしろどふまあしよふがざんしやう［長］そこはおれがむねにあるまづ氣をしづめてまむしがか
た四五日身うけをのばす積(つも)り其内にはおれが方で［小］つがふのできる［長］手立もあるまた權八が事も
十が九ツ内へかへるそうだんもたのんで何から何まで氣をくばつて置た此長兵衛かならずわらわせて
くださるな萬一何かの手はづがちがつたあとはおれにまかせひとまづこゝを［小］にげる［長］口へ手を

あてゥ、こ）トうなづく（びやう風の外よりまむし大じん）長兵衛様子見届たぞ[長]なアに ト（ひじのあてみにあんどうきへてまつくらとなる）[まむし]此いきさつは [長]後編に

お目にかけましよ

浅草の鐘ボヲン〳〵

千早ふる神田の八町堀のひんがしらん水のほとり濱荻樓上におゐて

小金あつ丸

しるす

なべ

東山見番 意妓口

全

紅二新曲來春歌
我士聞歌喚奈何
誰唱章臺斷傷句
青衫白髮故婆娑
振鷺亭主人題 借慰閑

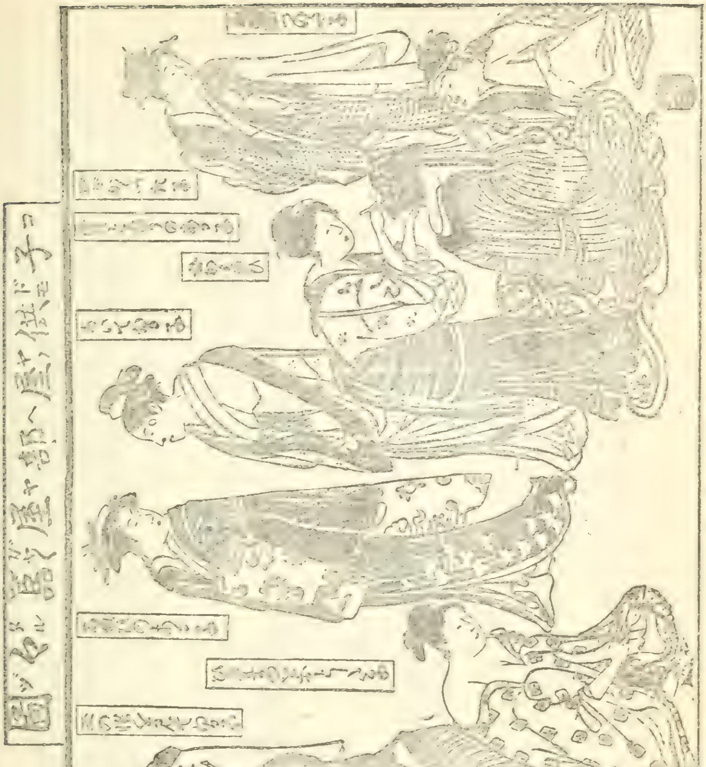
意妓口題言

振鷺亭主人撰

鄕上永非の外傳を著し維蔵下富岡の内典を編す明人の北里志平康記の流煙橋書の本義にして清の曼翁が板橋記に效て斯士橋記を作る彼船亭の巨燵は圍火にして被爐の洞房を想像せ粤に按督の火縄賣あれば樂戸に所德の煮懸南鑾あり蓋金陵の五丁珠市の千蝶名譌の樂籍淫は日今の男樂女伎が號を呼ず蝶は菜種の花知らず菜種は蝶の味しらず君にあふ野の夜の鶴尾花が許に招かれては扁舟の危を忘れ交起があくる門戸の鑰は向卯の眠を覺す三春館の舊迹は今空しくペン〳〵艸に一夜の夢を慷ききのふの梳籠けふの上頭となる足をや籤牌坊の富廟に備ふ意妓口といふ［マワシ］三勝さん◉屋へ出ます

おゝかた半七さんだろふみのやといふと嬉しさふな出やうだとは嚌室の妬鬱散の酒は鳥亀の情うろたへて出る事はねへおまんまでもたべていきなとは鴇兒の奇察イヱとをしになるお客だから茶やでたべますとは倡門を出る捨詞待身なりやこそ畳ざんその十露盤づくを宗として予近來北國を斷て東山の一寸切遊を是とす惟棚の間を惜以所の法なり扶桑橋邊魚米市之隠士毫を算用帳場に濺ぐ

門人關東米寫



土橋意妓口　目次

第一回　晒屋半七於舟宿女
房閨之感金算段

第二回　美濃屋三勝晝(マヽ)置見通
宵泊干綵(マヽ)輔直

第三回　内寨茶屋有懸部屋妬
無據突出切文

東山見番　意妓の口

振鷺亭主人撰

第一回

花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは沅湘日夜東に流去臨海橋の人音はいへ木長屋の出這入にひとしく新堀の河岸藏は印の八形情妓の鬢差かと疑はるされば義仲巴御前の鞍壌の有　に打こみ義經暴風の晩に逆櫓を押て新地の燼をのつきるは靜といふ妓婦がアサヽノアスサまだ〳〵の潮來にせつこみ項羽の山を劈く勢ひも床ばなれがのろく厲子が朝なみしとなり信陵の好色はちよつと借を初會のつらで他の晩妓を呼び孫覇の大酒は藝者買ともちあはられてゝゝくくゝゝなをしの書付に醉を醒し陶朱の商上手も鑵妓の算段におよばず東坡が赤壁の月見も豈東山の夜宮を懷ざらんつかひすごせし後朝はとんだわるひ心もちとなり後悔前に立ざればてうちん持を後にたてると同じく大河の戀風は浮花な頰をなぐり内河の旭は目が覺てから睡し實も女郎買は夜が明てからおさきまつくらとなるもの敗妓の祕す事なれど待人には盃を下々じめでしばりおけばその客かならず來りにくしと思ふまじないにはそ

の客のまへの寸をとつてこよりにむすび寐たる床の疊の下にひそかに隱しおけば客そのこよりをとりすてぬうちは他の女と合ふてもかの事は出來ぬとなりかくこんたんをしつくしては西瓜賣の行燈も白紙で見せ紙屋が手ならひの師匠へ年始の禮にくるは何のためなるかと思へば七夕の短册をうらん仕込とぞかく先から先へくゞる世にあるものは妓の誠なきものは客の信節なりその誠を感じては尙にげべくきれべきは此惑ならずや吁思ひにはどうした花のさく事ぞ〇（こゝに舟やど軒をならべし中にあつちらで通りのよき一軒の舟宿大和やとかきしかけあんどうは與三兵へが筆意をあらはしそうどうこのかまのふたは一のとりゐのごとくごたいさうなり［女房］はあつちでざしきをしてゐたあがりゆへしろう人とちがひはなしがあふゆへ客が多しかたほつけにて佛だんの三ツぐそくをたすきがけでみがひてゐていしゆはいろでもつた中ゆへ名をよぶ）［女房］源さんかんてらを見てくんなせい［源］市やろうはどこへいつた（市とは内の船頭の事也）［女房］かしへ行やしたハトいふ所へ店者のまだ青ひ客跡先を見廻してにこ〳〵しながら門口をひよいとはいる）［女房］ヲヤ丈助さんお出なさいましさつひ御見かぎりねト（いひながら茶をだし）おとりさんから文がまいつておりますト（狀さしの文を見わけて出すを一の宮でも取たやうなかほでさつそく封を切る）［丈助］御やうすかたぐ申上り〳〵まづとや時しの御さゝはりあらせなふ御機げんさま よく御入らせ遊ばし候やうけ給はり度ぞんじ上候そふまし我身事もかはりなふながらへおり候へば御きもじさまやすふ

思し召下されかし[丈助]ごもじさまとは誰事で有ふ[女房]おあんじなさるなといふ事サ [丈]サアよめぬは（ト文をもつた手がうれしさにふるふ）「扨とやおまへさま御事はせんし御かへりのせつさつそく御入らせのやうに仰られ候へ共御いらせもなく候へばしみ〴〵くろうになりじれつたくふさひで斗おり候へばすこしはふびんと御くませ下されせめて折〳〵の御はこばせありし候へば上なふ御うれしくそれのみ神かけいのり〳〵」ちくしやうめ [源]ちくしやうと書てはございやすめい [丈]「まだ〳〵御はなし申上度事候まゝいづれ二三日のうちにどうぞや御内のしのび遊ばし候て御入らせ下されかしにはなしが有と書て有が何ンのこつちやらふな[女房]さればねへ[丈]「まことに申上たき山〳〵なれど御らんもあるまじくと何事も御めもじさまとたのしみに申のこしり〳〵めでたくかしこ

「ツサちくるひかんとんびめ」とり〳〵丈助さま

何兵衛だらふネ[女房]御もと衛サ[丈]ゑらふ書くさるはへト（お定りのかへすがきから二三べんくりかへし見て折目たゞしくたゝんで懐中する運びも此内がほんのたのしみ也）「サヽ行てやらずばなるまひはやふ舟をこしらへておくれ[女房]お出なさるはいゝがせんどのやうにおつるけはなりませんよ[丈]げいしやもかはれたつた七匁五分限じや（トいふ所へ船頭市かへりかたの手ぬぐひをとるがあいさつにて）[市]中河岸は出やせんから大さんばしへ廻しやす（ト舩をおろす）[女]酉だから降もしめへ筈はいるめへのう（トい

ひながら枕箱とうすべりとせんどうのあはせをふろしきにつゝんでゐんばなへ出しておく是は見となしへきかへて出るのなり）[丈]船しうしほ時はよひかなとんとモウ氣がせくおいそぎじや（トそゝくさのみかけたきせるなかくてへでいれかゝる）[女房]ソレまだ吸がらにお火が[丈]とんとやけじやはへ（ト立上ッてそばにある茶わんをけとばすところ〳〵とこけて行ッてちんがよくよねてゐるかごの中へはいるとちんきもをつぶしてとんで出る）[狆]（ワアン〳〵）[女]ばか丈助さんだは [丈]ちんにおれがなじみを見せたいほんまのト一じや [狆]ワアン [丈]こいつはたまらぬ（トにげだしながら）かしまでお送はかへつて花やかでゐるひじや [女]さやうなら（トはきものをなほす）[狆]（もあがりはな迄おくつて出て）ワアン [女]市どん四ッまへにつれ申てけいらッせいよ [丈]狆おさらばよウ引（トかけだす）[女]モシお手ぬぐひが [丈]ホイト（立かへりその手ぬぐひを取てじだらくにかぶると頬）[狆]ワアン〳〵〳〵 [女]きつひおせつこみサ [源]こいつもでいぶつらがしやくんできたの [女]お祖師さまの御もりものをやるからもひとつわんといへ [ちん]ワアン〳〵 ▲（扨きやくは狆におひ出されて裏かくら（ぐカ）へと急ぎ行たましゐははやすそのじしんばんのわきにあがつているべしかく用なかゝへたせはしなひ客が多ければよびだしの切なきるもよきあんじなりさればごふくやに夕アけの五六人ヅヽたへぬも尤の事でかし是はそれには引かへあかねやの半七がむすめおつうをおぶつてくる）[うば]わつちらが旦那さんはこつちらにおいでなさりやすかへ [女]ヲヤおんばどんおとうぐ〳〵しいの [うば]

是を旦那さんへ（卜その方旦那さまと上書した文を出ス）［女］御しんぞさんはよくやかましくおつしやらねへ［うば］ついぞなんにもおつしやつた事はございせん［源］おこし申しやな（卜どてらのなりで三味せんなかゝへて女房にけいこしてもらふ吉原すゞめなつめの先でひく）三下り〽そふしたきゞくとしら菊のおなじつとめのその中にほかのきやくしゆはすて小ぶねを［女房］モシへおかみさんから何か急な御用をおつしやつてつかはしやりやしたよ（卜ゆりおこすことにあかねやの半七は女郎かいにもつてこひといふいろ男にてとしはまだ三十になるかならずと見へてはゞのせまき本こくらのおびにランタツの唐ざんのあはせおくみばしまゆうきでどうないたじめにしたあはせかされがひざつこのとこでちらとむくれ客ぶとんの上にわりさんしよの龍もんのはおりをかけたまゝたばひもなくねてゐるは土ばしの三かつといきしなふといふ中とてふとした事からもつれ出しせつこんでゆくわけとなり夜どまり日どまりのうへ此五六日ぶんながしのけさの歸りにちよつとよつてゆきしやうがのあさ茶によひをよびだしてぶつたをれたまゝ今おこされて目をさまし［半七］内からつかひがきたやしきの用だらうアヽとんだわるひはらあんべいだ（卜女房からきた文の封を切ると中から小つぶがいくらかあるを取てかね入へ入ながら）おつうきたか風をひかねへやうにはやくおつかさんとこへいきや［源］おんばどん川びたりの餅をくひにきさつせへよ［うば］アイ（卜おつうをおぶつてかへる）［女］又さつき三かつさんからお手紙がめいりました（卜文を出す）［半］ばかなつらな晩に來てくれろ

だらふ（トふうを切べに筆でこせん紙へ五六まひ書たを見ながら顔色かはる）[女]なんといつてよこしなさいやしたへ[本]病氣で引ッこむから二三日きてはわるひといつてよこしたがあすの祭二日の仕舞もちつと心付た事もあり何ンにしろがつてんがいかねへきてはわるひといふ事が一ッそくばかり書てある今から行て黒ひともあかるひともあらつて見るぶんの事よはやく舟をこしらへさせてくんねへ[源]アノ子もなまごろしな事をいつてよこしたうつちやつておきなせへし一本入させて中へのつこむ法もありやすあすも又すきにいかれるこつてごぜへやすは[女]アノ子もそういつてよこしなさるほどではこん夜お出なさつちやァむだが出來ませふ御しんぞもおつしやらねへほどむねで御あんじなさるもんだからあんどさせ申てそれから又お出なさいましホンニ氣まぐれな旦那だよおまへさんはなぜそんなだらふ（トひんねぢた文がらで火鉢をみがく）[半]はや緒の切れた夢を見たからのりだすなといふしらせだらふこんなやさきに行ッてはかならずわるひものこんやは内にねやせうよ（ト何くはぬ顔で外へ出る）[女]お送り申ませうか[暮六ッの鐘]ボヲン[半]おそのと三勝とはたとへて見れば深山木と都の花じやなア▲（かくて半七は内へ歸らずむりに一座をこしらへてつれの舟宿からのり出すそのわけは商賣にする茶や舟やどへもめんぼくなひほど足がちかくかんを付られる身のうへはみな心のひがみから人なうたがふ此時節一人では行にくきわけなればなりかゝるふかはまりとなりては遊びくがいのつらさにまさる女郎買はたゞあさぎこそよ

けれ）

こゝの内にはなるこがなきゆへよぶなり

第二回

[うらのさんばし]（にて船頭）みのやア、〳〵 [女]（ともへのもんのちやうちんをさげて出て來り）ヲヤ半七さんどなたもお出なあいまし（トやれぶねのみよしをとらまへ中を見るとてうちんの紋がいつもと違つて居ル故）大和やさんじやアございやせんネイ（トいふは外からのつてきたゆへなじみの舟やどへ茶やからしらせてやる事也）[半]よし河岸の五條やといふ氣のきいた船宿さしらせてやらずといゝぜ [女]それでもやまとやへ跡でネイ [半]よしサさアあがんねへ [候兵衛]ナニあがれこけが榮螺堂へのぼりやアしめいし此舟も蟻の餌食になるだらう（トわる口をいひながらさんばしへあがるつゞひてくゞり出るは）[權八]コレサまちねへアノ椀の中へひよぐりこんで見せやふ（トさすがうか川通の乘なれたとてもやつてあるふねへかゝらぬやうに何もごせうとおぼしめしがもつたかけわんがよしごのそばに干あがつてゐる中へ小べんをぷんさしのやうにひよぐりこむ）[女]サア御出なはいまし（ト先に立ツてへいじ門のくゞりをはいりにはからすぐにろうかのさる戸を明けてみな〳〵はいる）[半]孔雀の間よい鼓鳴館へ這入らふ（ト向つて右はくじやくの額のかゝつている見通し左のこめいくはんへはひる）

候和歌町の夢本だと鼓鞍樓といふものだあそこの鶴の三ぶく對も久しく見たものよ 權こゝの見通しは向ふの秋葉寺といもせ山といふものだ 半びいどろのとうろうをとぼしたもこないだのやうだのう（トいふ所へしよくだいさかづきだいをもつてくる）娘分チヤ半七さん三勝さんはけさおめへさんがおけいりなはつてからたしか引ッ込みなせへしたよ 半ソリヤァせうちだがだれぞ中どしまといふ所を（ト口にはいへど心にふさぎ何かかんがへ姿候兵衞權八はそは付てゐる） 娘分モシ思しめしでも 候なしサノ＼ 娘分そんならやはらか所がよかろうネイ 候すのたつた所がいゝとうふがなくば湯でも吸はふ 娘おいろさんがなくばおはにさんにしねへモシおめへさんはお雪さんだつけネイあの子をおよびなはいますか 權ウだれぞ二組ばかり 候一組だの二組だのとけい者も重箱といふものだぜ 娘はおりにせうかねへ 權太夫がいゝはな 候はをりと太夫とまぜて袋はまけてもらはふ 女すきな事をいひなはいますよ（ト立ッてよせばへ聞に行出しものを持つてくるとしまの） 娘分チヤノ＼半七さんなんだへきつひまじめだネヘ扇子をチヨンとさしてサト（扇をひつたくつて） どなたもよふ御出なはいましちつとおすひなさいまし（ト吸もの三人の前へ直し船頭のかげぜんもすへておく） 權としまだけさばくもんだの 娘なんとかおつしやいますね（トひやかしながら松葉ながしで前髪をかきおびへ手をはさむもはやり也船頭は艫をしまつて來り手ぬぐひを手に持つたまゝきうくつさうにかしこまる） 權船ンしうがすはつた所はそう

ばんをうたふといふ身がありやす（トいふ所へげんばんからかへり）［女］釣屋へ大一座があがりやしたからかけていきやしたが板にいゝのはさつぱりなしサおいろさんは酒によつてゐるからとゝはりだからお花さんにしやしたおゆきさん來やす　［娘］よくアノ子はいつこくをいふ子だとまりの初會なざァいつでも酒によつたのむしがいてへのといつて出てこねへよ（トいふ所へ太夫伊十兵次羽をり夏吉來り一坐のかほをづらりと見て）　［伊十］イヤ半さん一別以來けさのまゝまでござりますネァハヽヽ　［權］ちよんびらとちかづきに（トさかづきをなげる）　［伊］モシふさりましたからやつぱりひろつてのみていのでござります　［半］また藤だなへとうふをくひにいかふか　［伊］入舟の湯へ這入の山の朝酒から釣といふ所もわるくはねへやつでございますこないだあけ汐には大野やのどぶのおち口でやみと鯊がつれます　［兵次］ゑび釣ならきやうだいじめへから三間堂の方へのぼるとざらサ　［半］ゑびすの宮の三次ほど釣ずきなものもあるめい　［夏吉］毎日こつてゐなさるねへ　［半］やぶのとなりの龜がとこのほりはおしひ事にせめへ根津のほりもいゝス　［伊］せんどいゑさ漂でまつぱだかながきつ子が賽の河原にさうどうの有つたやうにとり卷てゐさのおし賣にあつた時ほどおかしかつた事はございやせん　［半］アノまつぱだかなはらへ人形を書て釣竿の糸へやんまをいわひ付てた十ゥばかりのやろッ子はりこうなやつよ（トげいしやとはなしの合ふがなじみのざしきの風體にてはむかぬがふう〱にて）　［候］コレげいしやをかつたかか

はねへかしれねへちつとにぎやかにしねへかやだアといふとはなのあなへぺん〳〵草を挿てよせ場のいろりへよしごを生すぞ　〔兵〕なるほどねお客がお心安ひとめいようしやうばいをわすれる　〔權〕ひかずとものこつたらふぜ　〔伊〕是も御しうぎ　〔兵〕聞も御客の苦界とやらサ　〔夏〕三下り〽日ほん橋からふか川がよひちよきにゆられてゐいたいばしじやとひナ　松にすみよしつくだしんちじやないかいなふる石場にしん石場おもてやぐらうらやぐらどばし仲丁海にすそつぎ三間どうゐびすの宮には二けんちや屋ア引チンチヽリチチヤン〳〵（此てうしを合す時ふたりの子どもくるゐしやう付は爰に略す候兵へは〔お花〕中どしまにて初會此うたふ中に候兵へはあたりさはりないひ權八はこくうにさはぎ半七はふさひでゐるお花は一ッ内の子共ゆへよこをむいて何かないしよばなし權八がのは〔お雪〕じみに丸まげのまたがへしといふとしまにてうらだけさばきかける）　お花さんこつちへよんねへナ（ト立つてすはり直す）　〔兵〕おてうしがねへきつねけんでいかふか　〔候〕なんだかしみつたれだ　〔權〕しみつたれとはふどうさまに引上られた文學(マヽ)だらふ　娘おめへさんはいつそ世事がいゝねへ　〔伊〕旦那はまだ酒がしみつたれねへンだらふョ　〔娘〕ヲヤ〳〵引まみへの猫が出たよどこでかゝれてきたのだらふのふ　〔川〕引まみへをおつことしてゐる所へ口がかゝつてうろたへて付て出てくるつらが見てい　〔伊〕ひきと申せば此間山のみな本の庭へ六ッ足の蟇が出たと申ますが考へて見るに御客の足のちけへといふ吉相だらふとみんなも申しております　〔兵〕モシ御はなし

を一ツ（トしかつぺらしくなり）石かけにかにと舟むしが日なたぼつこをしてゐて中にやア岸どをりを舟がくるとにげるをかちとするもんだからきさまの穴へにげこむめへもんでもねへから舟蟲だのかにだのといふしやべつはねへたがひに一ツにげ仲間と思つて下せへとはなし合ている所へくるちよきのお客が聞付ておれも其仲間だ（トみな／＼わらふ所へ）【女】きたりハイ半七さんへ三かつさんから御口上病氣でおりますからおざしきへはまいりません床に待つておりますとサ【權】イヤ有がたひト（手をうち）ちつとどうとかいふ所だらふ【兵】此場は一ツ且引取ふ此けいしやはいけずるひはやく箱をしまはねへか【夏】糸箱でも手つだいなせい【伊】此伊十などを一ツでポンハイ明きますは半さんおまへにはついぞ出ませんしかしこんばんは高ひものどなたも又かさねてはまけますアハヽヽヽ【船】ソレ盃がゑりへとつ付た【女】チヤびつくりしたよ（ト先に立てみな／＼どや／＼と二かいへ上る）▲（右見通しの一件の内二かいの角八疊にははや三人のわり床を廻して有されば三かつざしきへ出られぬわけといふはぎやの客にあすのよみやのしまひはしてもらへど半七をせいてしかけなたのみしきやくはばらをたつてまちがひとなり八はたやへ借金であつらへしがあたまのものもうけねばならず氣がもめてゐる所へ半七がきたゆへうそをいつてやつたしんじつがありやこりやとなりてなをじれつたく座しきのながひもこんきがなくしみつたれななりでは初の一座とげいしやの前へかつかうわるくそれゆへのにせやまひなり床のまの方へよせて屏風を引廻したる中に【兄弟分の女郎】か

みはいぼじりまきにごてんぼうをさしたやつはや　りくつもすんだとみへこゝにおち付てはなしてゐる）おめへ半さんきなつたじやァねへか［三かつ］病氣だからくるなといつてやつたにちやんときたはな［兄弟分］そりやァそうとけさだんなへよばれてどうした（此だんなといふは子供やのていしゆの事をいふ）［三］きゝねへなマアだんなのいゝなさるにやァ手めへあすの祭をどうするつもりだおいろ（おいろは一ッ内にて三かつにつゞひてあきなふゆへ中のわるひ子也）はおれに話も有ッたがといひなさるからじきさま胸へきたからわつちがいつた事をきゝなせへし四軒の茶やじやァさうをうに顔もうつておりやすッサまつり二日のしめへぐれへおきやくの念をつかひなさるにやァ及やせんとづゝかり立ッてへやで三弦をひきながらかんがへて見やすにおろろさんが半さんのりくつを旦那へふつこんだにちげいねへのさうらみが有ならじかにいへばいゝ［兄弟分］ウゝさふさ［三］いつて見たがいゝ父のつきつていエへる子じやァねへはなおいろさんばかり立ッてわつちをつぶしなさるなら旦那でもお持佛さまでもねへから達引によしんばねんを入れても半七さんに仕めへを付させせわに成きやくの五人や六人しくじつてもと思ひやすよ［兄弟分］三かつさん〳〵おめへ奉公に二ッはねへからかならず氣をはやく持なさんないたこのもんくで當りなさるからだんなも苦労にしてゐなさるはなへやのもめるもせうちさおいろさんと物をいゝなさらねへ

ごてんぼう名かくしほうばいむすび天神にもさすかうがいなり

もせうちでわたいにわけてやれといひなはつたよ〔三〕ホンニ半七さんは初會からもめつけイした客人でどふいふ事か呼で見たく夫から苦勞くげんをしてさんだんとはたらきとやりくりと借金とで是程迄に譯た中今さらおしひとは思ひやすがいつそこん夜ことはつてしまはふかと思ひやすよ〔兄弟分〕おめへといふものもわからねへもんじやァねへかへいゐ木長屋の板頭で五日勘定にいつもほめられるおめへが何ンの色のひとりぐれい旦那もしつてしらねへかほはせうちさ此頃うちおめへがあぢだから半さんもせつこんで足がちかくたくさんさふに思ひなつてももし來なさらねへやふになるとなんでもねへものにしてしまつてさびしい晩などへやにゐても心ぼそくむけいにやりたくつてもまけおしみで手がみも出しにくゝついのちごひをしやすもんだよ半さんとおめへはたとへのこぎりでひつきつても切れるゑんじやァあるめへはな〔三〕そんなにわつちやァわき目からものろくなつたと見へやすかへほんに折のわるひ晩に内のしんざうしを名代に出しておひても氣をもんで夜あけまへに逢にくるやうにしもし　はなかつたかと湯で　のやうすを聞ィたりまだ三年ンの年季もぬけもしやのすへにもと思つてる半七さんがつまらねへ時は出居衆ですごす氣だものを客にあびせて用事を付旦那へ願つた墓參りもむちやくちやでのびたとて草葉のかげからかゝさんもよもやむりとは思ひなさるめい目鼻の明かねへ半七さんではねへがつかひすごしたあけくだものむりな事がいはれるものか心づかひもし

ておくのにこゝのしかたも氣にくはねへ爲になるやうにせうで付届(つけとゞけ)もしてをくのに船宿もむねきなは
らがたつ茶やもかへさせ船やどもかへさせ半七さんの顔を立ざァわつちやァしんでもくやしくつてう
かみやせんよ（トなみだはら〳〵と枕にしがみ付てなく）[兄弟分]なんの氣をくさらして癪(しやく)でもおこしなさ
んな赤玉でものみなんねへか [三]氣がはつてゐるから何ンともねへおめいまだこつちへ來て長やぶ
ゐるまひをしねへとおいろさんがいつたを聞(きい)たからわつちが黑じゆすの帯(おび)をやつてあしたはやくしねへ
口がやかましひはな（ト兄弟分のよしみとて部やのたんすのかぎをはながみ入の中から出してやる）[兄弟分]ホ
ンニお客のきげんはどうともしいゝが部やのつきあゝがとんだむづかしいよのう一ッ内に居りやァ
あさ晩ものをいわねへでもわるひから何でもあしたさかなをこしらへるからおいろさんと手を打てし
まひなせいなヨ [三]さきの出やふによつてすみすましのならねへ筋(すじ)もねへのさ（トいふ所へみな〳〵あ
がりきたるゆへ）[兄弟分]床が廻るさふだいきやせう [三]のちに [兄弟分]半さんもきげんよくしてこ
んやけいしなせへしよ（トいひすてゝはづす三勝はとしが十八ばかりあらひがみをおとしばらのしまだにわ
らにてゆひ半月のいすのくしをちよいとさしまへがみの所へよりかけむすびのかんざしをさしおしろいなしのす
がほよせぎれの本八丈のねまきにはゞ二寸の糸さなだの下〆白ちりの下おびにてしりをむけてねたふりをし
てゐる是はこよひ半七をじらすさんだんなりその所へみな〳〵來り男げいしやはすぐにいとまごひをしてかへる

但女げいしやは下にまつてゐる事なり）【娘】モシ夏吉もけいしやせうかねへ【半】（ウヽト

【女】（來る）およびなはいましたかへ

【雲】こゝだよたどんを入れてくんねへついでに茶も一ッよ【女】ハイー（しやうじを引て下へ行）【權】此茶は

おれも片手たゝひたからおめいと半ぶんヅヽのまふ【雲】五分でもすきなさらねへネ【權】さやうサすい

て見せるは玉子の目きゝひあたりのべつこうソレ五分でもすきが有ルなら切込ミなせへ【雲】ついぞね

へおめへさんがたのやうな革じやアごぜへせんわたいは是でもまだ初心さ 〔權〕初心とへそのをと一ツ所にしまつておひて折ふしほしなさるだらう初心のかびたなアいかねへものだ 〔雪〕おきやくのひましになつたもくへねへものさねへ 〔權〕おめへもかねざしで五分もすかねへたちだ 〔雪〕わたいは女だからくじらさしさ 〔幾〕おめへのやうなくじらがあるとくろひ雪がふつてるりこんの白魚ができるだらふ 〔雪〕船宿衆の天井じやアあるめへしあげたりおろしたりしなはいやすネ(自註ニ日このしやれ舟宿の天井にある艫のあげおろしの事也)アイモシ(トやつと手のはいる手まへのたばこを權八がきせるについで出す) 〔權〕アヽいろ男には何がなるへ(トきせるをちよいとはたく) 〔雪〕色男たアどんなものだへ 〔權〕こんなものさ(トしたを出しべつかつかうをする) 〔雪〕チホヽヽ〱へんちきなかほをしなはるおまへの鼻のあなは蓮根のやうだよモウおがむからよしなせへしはらすじがざくじのやうによれ切れやすあんまり色氣がねへよ 〔權〕色氣がなくてもいでといふ日にやア此面でも女ころしさ 〔雪〕わたいも半ごろしになつた内だねなまごろしにしておきなはるといきりやうがとつ付やすよ 〔權〕いきりやうがいやなら貳朱でも取付てくんねへコレおがむ 〔雪〕ふけいきなあんまり口をきくとかきがねがはづれて耳へぬけうらになると紙くずひろひが腹の中を通りぬけるから不用心でごぜへす 〔權〕おれがぬけうらはいゝがおめいの井戸ばたがはしやいでいるだらふつわででうづにいきはあやまるぜ 〔雪〕チヤきつゝいしやれ

さ【權】そういつても此口にはほれたらうほれたかコレどうだへんとうぶてへんとさま出ぬうちやかへしやせぬ【雪】アイほれました【權】どこにほれた【雪】わたいがかういふ四角なもんだからおめへさんのやうな丸ひお客がよふごぜいすは【權】四角だの丸いのとあら木のもんを見るやふにすみ切角の人間もねへもんだ【雪】それでもむづかしひおきやくがありやすはなおめへさんのやうな世事のいゝ客人はおかほれがしやす【權】川ほれがすると土左衛門だそういつてもおめへのあんべヱしきにやァほれたよ【雪】ほんにかへうれしひねへ【權】小づかひの一包もやりてへ【ゆき】なにをへ【權】ともれいのこはめしを【雪】きざな【權】かつぎてだの【雪】アイサ五十五〆中ウばらさ【權】中木場の川岸に力もちの石がならんでゐたがおめへの名もほつて有だらふ【雪】わたいらがやうなものにほれられたもおめへさんのゐんぐはだねへ【權】ゐんぐはもつくばつてゐるうちはいゝが立ツておどつちやァかぶしまひさ【雪】よく口をきゝなはるすかァならねへかへ【權】くちがすくなると歯と舌が三ばいづけになつていつぺいのめるのさ【雪】おめへさんはよく口をきゝなはるがあたりさはりをいゝなはらねへからいつそまんざらでねへよ【權】かきなさるならかはらけの小の字のやうにざつと手がるくかきなせい【雪】わたいは十ツぺんずりにかきかける氣さなどゝうくからいゝ（トはらんばいになつてゝやうじをつかふ）【權】うくものは上ゲしほのおかはじやァねへか【雪】きたねへたとへだきれいにしやれなせへしな【權】きれいにしや

れるものはなんだらう〔雪〕雨おちのきしやごかへ〔權〕ふるし〳〵コウト〔雪〕わらへ〳〵つかへるやつさ〔權〕何ぞいゝてへ（トかんがへる）〔雪〕ちつと　　じやァねへかねへ〔權〕モウ半丁ほどしやれてへ〔雪〕ホンニおめへさんの口は剃刀だよ〔權〕さびたさうだはさみ小刀とぎにちつととがせやう〔雪〕にくひ口をきゝなせへすな〔權〕おめいのあいきやうを一トちよぼほどくんねへ〔雪〕コリヤア人のをくすねてきたのさおめへさんのやうに外で世事のいゝ御方は内でとんだやかましひもんだよ〔權〕内で是では氣ちがひだ〔雪〕ホンニさふだらふよわつちらが内のだんななどもにがむしをくつつぶしたやうなかほをしてゐなせへすが見番などでは大じやれださうさそれでなくてはしめしがきかねへネイ〔權〕しめしおん事さ〔雪〕モシおめへさんがたの一坐はどうもわからねへどつちのほうだへ〔權〕けふは出番さ〔雪〕出番もすさまじひ今どきの店衆はたばこぞんさやつぱり女房もちのほうが思ひやりが有ていゝのさそんならおれにホのじとレのじか〔雪〕さればねへ〔權〕女郎衆といふものはどういへばかういふとよくそらつたばけるもんだ〔雪〕さうばかりでもねへのさ〔權〕そんならにげてくんなせへ〔雪〕アイにげやせうサア〳〵〔權〕ござれやせき候ホウホ〔雪〕チホヽヽヽお花さんわたいがお客はとんだきさんじだよアノ子はどうしたねたさふだ〔權〕モシそばやでございやす箱を取にまいりやした（トびやうぶをたゝく）

はらだち上戸いよいざめと見へてはなのつまつたこへで）　候コレもちつとちんまりと　ろへ此女はふやけたさうだ　花ナニへひじきで酒でものみてへのかへ　候なんだこいつァ酒いみ客をとりこなせエヽもしねへで大かた坐しきへ出たゑちごやの松風せんべいやすゝりぶたの柚まんぢうのぬすみぐひでしよくもたれがしたのか屁ひりの神のもふし子かおちなほうをつんむいておつぺしたかほちやのよふな嶋田のまげばかり大そうだがしぼりばなしのまげいわへも大かたいわ井のざうりのはなをだらふコレまはし元ゆひをこしらへてうるぜ角（とカ）とちもよしにしろうしろざしもおきにしろ箱打かつるのはしのやき付がさうをうたくしは當世風に山斗り高ひが切までしたものだらふついでにめし物もふんでやらふ　なんだ定紋のすがぬひが白だむしのやうだはいけふさ〱しひあまじ

やァねへかへ 花ふさ〳〵しひとは何ンのこつたへこのごろさすぴら〳〵か緋あふぎのかんざしの事かへ 候にが汐のさつぱッ子を見るやうにぴこしやくしやァがると罾のせんどうじやァねへがのつけにそらすぞ（トだん〳〵こゑが高くなるゆへお花は上手をつかつて見れどなを〳〵やかましくなり舟やど女ども丸めに來り一坐もおきて立あふ） 權なんだな外に客も有もんだしづかにしなせへな 娘お花さんおめへどうしたのだ 花茶もくんで來やすたばこも付て上やすつとめる事もしておきやしたわるかつたらごふせうなせへししよじいたらねへわつちサ 候しり目でにらむなへわれがしり目がはやればナめつかちの干ものが出來るはへ此女郎は年中板をしよつてめう代にばかり出てゐるからねざうがわるひ見ばんへざうきんをもつていつて廻しに板をけさせてこいしかたによつちやァ顔を立て惣花の札もはらせめへものでもねへがすべたに達引も犬のくそも入るものかたれだと思ふへおれが內じやァ見世のやつらに女郎を惣菜にしてくはせちよき舟やねぶね三てうたちながしのそこりにのつこまれ臺所のたゝき土は女郎のなみだですべるはへ舟宿の女房のすき紙は御ぞんじゐの封切らすでふき大天狗小天狗の二人船どうで高まきゐの枕箱からかんしやくを引出すからは中の上か本床かてうしをなげる用心しろがらくためら店さらしめら正月やめあま酒めおでんしらぎくあんべいよしめ 花きつひめのじの字づくしだネイやくしさまのぐはんがけかへ 候何がどうした（トふみにかゝるゆへみな〳〵取さへてゐろう

かにそうに立大さはぎになる）［娘］アノ子もじよせいのねへ子でごぜいやすは下へかつこうがわるふござへす（トよつてかゝつて上手こかしにする）［候］木場の材木をみるやうに立ごかしが氣にくはねへ和哥町へいつてのみなをすうつちやつておけ（トはしごばた〳〵）［娘］いゝ出しなしつちやアきゝなさるめへから御きげんまかせにするがいゝはな（トせんどうにいゝ〳〵下へおりる）［半］おれもいかふはの［權］おめへはのこつて身ぶんの所をわけてきなせいな（候兵衞は玄關へかけ出スおくつて出たる）［雪］モシ二三日の内に（ト權八がせ中をたゝく［候］いま〳〵しい○（さて大風の吹た跡となり半七が　の中には）［花］アノ客人はけいつてくる客じやアねへはなばか〳〵しく長い　でソレノきたねへから用心をしたが氣にあたつてじぶくり出したのだはナ［雪］わたいがおきやくはひやうひやくでいゝよ半さんつれ中てきておくんなせい［半］お花さん壹ツのみねへな（トいふ所へ下から）［女］モシ見番から札がきれますとさ［花］とまりツぽうに出るはつれへのふ［雪］モシ半さんこんやはあやまつてゐるなはるねいつもきげんのわるひと入あはせるといゝよ三勝さんも氣を揉でゐるなはるからこんやはいぢめなはんなへ（ト二人ながらすてぜりふありて明てかへる跡はこんみりとなり下の見通しは四ツ明のきやくとみへて太夫のこへにて）ジヤウルリジンク〳〵舟は帆でもつ帆は舟でもつ土橋なか町は色でもつチヤチヤチヤン〳〵［作者曰］此本右うたふ頃の流行也）▲さて二階はしんとなつてとなりざしきの　の中は四ツむかひの直しざかなにしよ

く臺をつけられて義理ではなりなかつて茶づると見へ）　哥〽思ひきらしやれもふなかしやんなわしはな
かねどそれこなさんが○　[半]なんだかなき
さうなばんだ　[三]何んだか親にはなれたやうな心もちだ　[あん]まさけが過ませふ　[三]酒でものまね
へけりやアうまらねへはな内で付てくれた名でもおの字名でなくては土地にふさはねへさうでこんな
にくろうをするのだらうよ　[あん]まへどおまへさんの内からひな松さんといふが出なさいやしたが住
合のいゝ女郎衆でございました　[三]はじまらねへとじれつていと思ひながらおかみさんをおひ出して
はいらふといふ法もつみだねへわつちは女房もちなどの御客のせわになる氣はむじからつきりねへよ
（ト半七にあてゝいふ半七はそしらぬふり其所へ）　[娘分]三かつさんちよつと　[三]何ンだいゝねへな　娘様
やかにおきやく　[三]ウヽよし〳〵（トうれしさふにはなおきて）モシ半七さんはきやからかりにきやした
おめへにもはなしておく銀兵へさんサむつかしいおきやくたがあたのお事にしてくれるいさあすの住
かけがまちがうと内のおかみさんがひるきといふもんたからお色さんがこんだの勘定に板がしらでわ
たいが板わきにでもなつて見なせへしどのかほでそばをふんばはれて居られるものかへそれはへ手紙
を出して祭のこんやむかひにやる譯だからねちよつといつておいゝやす宵とまいとか何とかいゝやす
がモシ床へでも廻るやうなぎりでおそくなつても必わるく思つてくんなせへすなへ（トせつにかけて

半七をせかせる手ごと也）［半］あんまりよくも思はねへのさ［三］なんのじよせいもなくつて（トつんとして床を出て行くははらのたつたものなりさて又こゝから半七が舟宿へしらせてやりしゆへ船頭源來り手ぬぐいをひれくりまはしながら枕元につくばひ）［源］おむかひに參りました［半］源かこんやはつきゐへで外からのつてきたからしらせてやらずともいゝことをして　おいたに（トいふ所へ女來り）［女］源どん［源］なんで有ますこんぴんちやん［女］三かつさんの［半］直し肴で源にのましてくりや（トいふゆへとまりとなり女肴をもつてきたれど半七は氣くたびれてすや／＼ねるゆへ二人でのみくひをしながら）［女］きのふはひまでからだにもちあつかつてゐたよけふはおつけへされねへほどにぎやかだつた［源］おらんほうはずでへひまだから内へまはつてもおやかたへきのどくだあしたァ舟をたてに出ねへけりやァならねへ奉公だ［女］さうさ奉公してゐてもわるひきをだしちやァすまねへのさ［源］かういふ字あまりのいたこがはやるよ〽おれをツヽ突(つき)だし外に女ぼうらしひやくそくでもしやァがるがせいごうぬがねんねこしたとこへもゝんがァといふてばけて行くエヽヤレコレコレハイドツコイ［女］こつちじやァあんまりいたこはひかねへよおめへ舟うち場(は)へとまりにいきねへかわいさうによくするさうだ［源］うらの晝夜(ちうや)壹分をしまつておひた［女］しやれらァ（トつきたをし）ねてゞもゐるかと下で思はれちやァわるひよくおよつたからひイていくよ（トびやうぶを廻し源も下へ行かくて時うつりなんの手かしれぬ夜中のすゞりぶたはその　の中

のゆかしくねる名代にねぬ客は小すぎにかきし口上書にあすあひにくるやとまつにつらし夫帳場は引ケてかたなかけはゴウセイスムユウ（マヽ）のごとくつくねんたるおき番の女どうこひばちの麥ゆのたぎりはいびきかとうたがはるかし場の男はつみかされたる三味せん箱とともによこたはり舟やどべやのあたまかづは十さしのほうづきににたりふきんはしめしかここにかけあらひばしはかめのこざるにつるしてありすでに夜はあけるに三分はやき

［八まん鐘］ボチン　［客］舟をそふいつてくれ　［女郎］まだはやひはな　［女］富岡のおふねが出來ましたよ

［鷄］コツケコウ　［烏］カアヽヽ　［路次口のつき米や］ガタリクサリ

第三回

くり明る廊下の戸の音はいけそうぐしく秋葉寺のふせ鉦は出入の肴やのくる頃なりその比目におくり出客をかへして一ねぶりにはや廻しは床を上にきて包でふろしきを引ツちよい女郎はおこされてから夕べの紅顔たちまち青ざめて子どもやへかへるきのはけふの一トむかし是朝なをしの時いたれるかな　［源］（おきて來り）モウめいりませう

（トいふ所へ女來たるゆへ）あさなをしといふとおき番はねむひかほだ　［女］わたくしやアねやアしませんよ（けふは八

月十四日にて八まんのよみやゆへいつもよい はや起にて娘分そろへの前たれなかけて出て來り）〔娘〕チヤ半七さんけさも又おすゞけだらふネ 〔半〕されば 〔晩〕本てうしでも三下ガリでもといふ御あいさつだねへ（卜三かつなゆりおこす おこされて 〔三かつ〕はびんのほつれなかきなでゝるふてたすがたにはりなもちれおきのかほのうつくしさ半七がまよふたも尤の事也）〔娘〕モウ湯の出來たじぶんでござい やす髪結さんがまつておりやせふいつて御出なさいやし 〔三〕そんならそうしやうかネへ（卜ぞつとすがほのながし日に半七にものなもいはず出て行はあぢにきのもめるあさなり）〔娘〕こゝははきませふ中六疊へおいでなはいまし 〔半〕二かいの見通しから海のけしきを見ながらおかいなつかはふ 卜中のざしきへくるこゝから海が見へる也）〔娘〕べんてん洲がよくはれたよ 〔半〕此天氣じやア帆をもつておかふ洲へ投網に出られやす 〔半〕だれぞうつくしい所をいつてやらふ夏吉といふ吉を 〔娘〕あさだからねへ（卜いふは日明のきやくはふんぎにどこの茶やでもにぎやかにげいしやなよばせたがるもいたり入かはつてま一人のとしまの）〔娘分〕（だしものとぜんなもつてくる） けさはまだなんにもございません（といふ所へほどなく夏吉いへ吉きたり少しはなし有て）〔いへ吉〕あさだからにぎやかなものをひかふねへ 〔半〕つなでくるまがきゝていの 〔夏吉〕チヤつなで車をひくときめうにふんがきれますとさ 〔娘〕やつぱりしつぽりと五大力がいゝよ 〔いへ〕（ばちなもつた手を一ツなめてうしをあはせ チヤねがかはつたよのちにふらねばいゝ 〔なつ いへ〕チヤン

メリヤス〽いつまでぐさのいつまでもなまなかまゝみへもの思ひチヽチントン〳〵ツンテン（このうたな
うしろにして三かつ本みがきにして出てくるそのすがたけさ仕立おろしのしかけはごり〳〵するむらささち
りめんの折づるのすそもやふ下着は白ちりめんで三ッ人がらよくきこなしこいおなんどにてつせんからくさの織
切紺地金の帯なあだにむすびトヶ（ツカ）小杉十帖ばかりかみ入にまきて帯にはさみ白りんずのぬきゑりからすじかひに
かけ香のひもな見せ長じゆばんと長ゆもじは目にかざしても見へぬやうなひぢりめん但しひぢりめんのゆもじは
ちか頃外場所にてたまさかにしめる事也つむりはふめるべつかうものゝあみだざしに小紅やの松かね香な匂はせ
島田くづしのもみおあけ（バカ）いちり（ガカ）かつこうよくできてかみゆひの手ぎはな見せおしろいののるうりざねがほいず
ずなはりしまぶたい少しあなきも心にくしいつたい中肉にしてはり有てあいきやうふかく少しこゞむがくせのお
したてなりこんなしやつつらもけさが見納と思へばいかしておくがくやしひ半七が心の内ものゝいひたひほどま
けおしみでいわれず三かつもわきがほじまんにすましてじらしてはみるものゝもしやこれぎりできなさらずばと
氣にかゝりそばへよりたひほどいきみでよられず）［半］けさの朝酒はまよひの打どめになるかして何か
さつぱりとしたやうな心もちだ今までせけんへつかずともよひうそをつきあだなくろうもしたもん
だが是がいゝ引しほだらうよ大しほならさんばしでなべかまでもあらはふに［いゑ〳〵なつ］〽たとへせ
かれてほどふるとてもゑんとじせつのすへをまつ合チンチなんとせうチヽンチャン〳〵［半］おれはか

はつたしやうとくで腹のたつ所がおかしくなりふとした事がかんしやくにさはり用事もおわるからふ是を思へば夫婦してかせぐが世の中他所行のなつた時分みんなも見たであらふまだ朝がへりの船くらくあんかを入てしやれて行くにアノ市場の向河岸で目あかしの魚（目あかしとはあけがたのりやうくれがたのりやうはふさみと云）をよつてゐる篝のあかりで見れば夫婦たがうつかりとしてはすぎられぬものだもろ町のかみさんたちは仕事の間に帆をぬひゐさやのにやうぼはめゝずをさすが針めどより手がるひもしやうばいに身を入るといふもの女房があて字まへのいの字のやうに角を出すもしよたい大事に思ふから女房のばゞもあたるめいものでもねへソレヨむきみ屋の河岸のごみだめにさいてゐる菊でも見て一ッ刻もはやくけいりませふこれが新地の洲へのつかけたやうに引かゝつてゐてがうはらをさらさうより檜垣のいかり綱をのつきる時いつそ引ッからまつて死ねばよかつた是もかうの屋のかしのいなりさまをいつものりうちした罰だらふよぐちな事をいふやうだがけさ明がたひよくござのかがりのきれたゆめを見たよ【なつ】【いゐ】〽たがひの心うちとけてうはべはとかぬ五大力チンチ【娘】なんだかあだねへ大分【娘分】半七さんは泣上戸におなりなすつたさふだよ【半】なひていゝものはうぐひすと女郎し斗りさ【三】おつな事をいゝなせへすが夕べことわつて行やしたから一ッもよけいとよくばつてぬすみを賣たわけサさんだんだから病氣のうそもありうちさこゝを一ッくみわけねへおめへ

さんではねえが女郎買の仕(し)やうもわすれなせへしたかへ（トしり目でにらむ）［半］手めへおかしな事をいふの［娘］三勝さん一ッのみなせへな［三］つぎなさんなのめねへによ［源］ナニのめねへといふ事があるもんだ（トむりに手をおさへてなみ〳〵つぐ）［三］つれへのう（トいゝながらいきもつかずにのみそばにありつ（マヽ）、茶わんを出して）のどがかわくからもう一ッぺい［娘］氣がちがつたさふだよしねへ［三］いゝわな（ト又ぐいのみゝくろうを十萬坪(つぼ)へうつちやつたからけさは一人で浮(うく)のさ［なつ｜いゐ］〽さはさりながらかはる色なき御ふぜいトンツ［半］モゥ何ン時だ［源］四ツでもごぜいしやうむかい船が出ましたらふ［なつ｜いゐ］〽やがてあをぞへかたゐぞへチヽチンテンおしき筆(ふで)とめそろかしくチャン［半］わり花にでもしてやつてくんねへ（ト金入からざらりと明て金を小ぎくのかみに引ねぢつてなげだしついと立てうらはしごをかけなりにはへとんでなりさんばしから舟へちよいととびのるみな〳〵あはてゝおくつて出る出ぬものは三かつ一人也若ひものは札ごとはきものをもつて出るせんどうはまくら箱を引さげて出る跡から女は引出しをあけてつりを入る娘ぶんはさんばしにたつてゐて）［娘分］源どんコレサいゝしらけにしなさつちやアこつちでもすみやせんから二三日の内にきつとつれ中てきてくんなよ（トいふこゐを跡にはや舟はうみの茶やのまへえくるたりは八まんの門前の堀にて戸場出入の舟宿のあるかし也）［半］向ふからぞうきんのやうなつゝツぽをきてろをおしながら何か呼(よん)でうりにくるはなんだの［源］あれかへ［ろくに舟のむきみうり］

ばか／＼／＼／＼ばか／＼／＼／＼／＼ニ・イ

山東意妓口 畢

附錄　　關東米識

右縁切の段先生の活文にして貳朱作者と割床の論ならず抑もてるふられるのおもしろみは未遊の淺黄にて名馴深くなりてはつらひと義理と理屈と腹のたつ事斗に成もの也譬へば是から末を書かば三勝はどうしても來ると思つてゐて一月も立元が惚てる二人が中泣たり笑つたりして呼とめた客ゆへ惜く成て誤の文を出し茶やからも舟宿へ迎ひに來る此時半七行ねば未運の盡ざる人也是非立歸る故三勝も達曳をしてどうらくにて年季をふむやうになるもの也誠に客によき引しほあり女郎に捨時ありされはとて女郎の突出すは情しらず逃るはむちやな客なり略情通趣識士前編の覆るを見て後編の戒とすべし

深川大全（ふかがはだいぜん） 振鷺先生作 全五冊

傾城人相鏡（けいせいにんさうかゞみ） 同作 一冊

芳原遊仙窟（よしはらゆうせんくつ） 同作 一冊

白無垢芳町櫻（しろむくよしちやうさくら） 同作 一冊

不粹照明房情記　全

房情記序

書肆來て予に序を乞。房情記と題するは、作者の意を深くもしられど、野暮とは卑下の言葉にて。ちん〳〵鴨の正眞長明、うまみの染しはらわたにて。行水の流の里。しかももとの水くさき手ごとにあらずといふ事か。嗚呼其才の高きこと。なんとやらも足下に見くだし。その筆の走る事なんとやらもをそしとせん。こゝらはまじめに書たりとも。手のない文のごとくにて。

かわりのふとはもふしながら。序文も本のみてくれなれば蚯蚓をやたらにのたらしぬ。そこらはよろしく御見物。御さつしくだされかし。たとへたらわぬ我筆も。もしやのすへにもおみすてのふ。御求めごらんのほど。御たのみもふしあげ。こととみゆを梅みる春の日。足をあらひし老こみ作者

化物の引込

夜八ツ時すぎ　かく

かし本やのおとくゐ

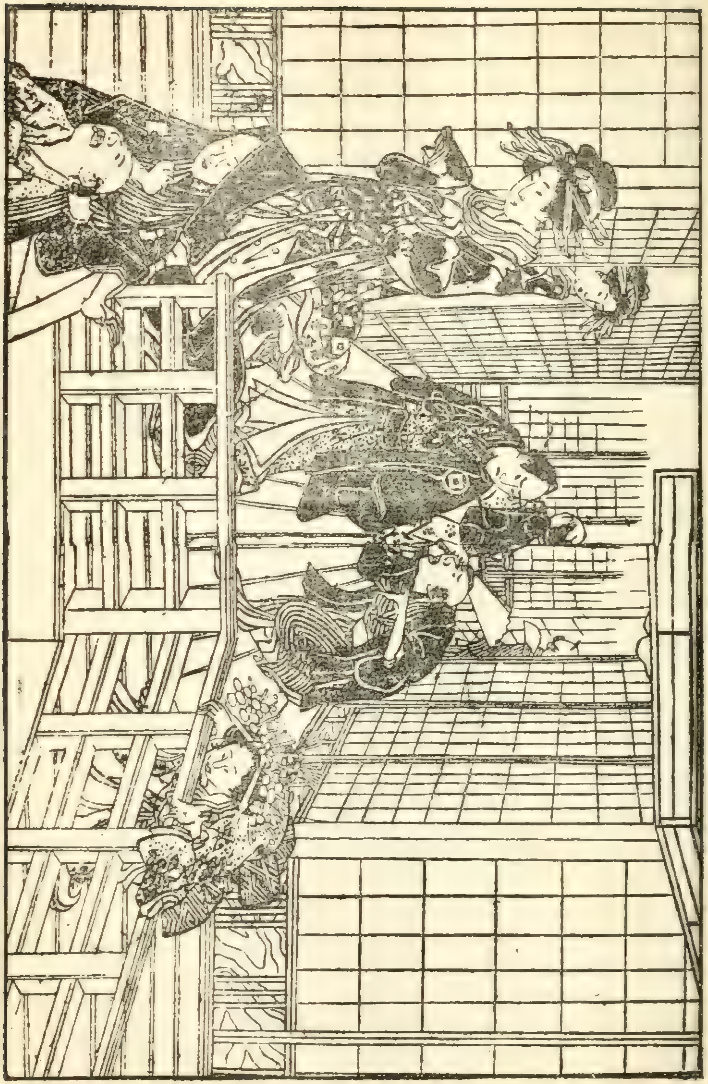
江戸中の

旦那様

青樓實記 大門雛形 一對

傾城傾國にこがなし
かよひ給へる
客人にこがあり
（こは近世の名妓何某の筆とか聞ぬ）

寒からぬ程に
見て行ケ峰の雪



房情の品目

第一情　總まがきの己惚客
第二情　半まがきの苦肉の契情
第三情　まがきの中の眞情話

通計全情三種稿

不粋照明房情記

○

行水のながれ〳〵のうき里に。すむとは名のみ濁江の。よどむうたかたきゆるのもむすぶもおなじさきの世の。みなやくそくとさとりなばうぬぼれもなくいきすぎも。たえてこの世にあるまじきを。おのれにまよふが凡俗のくせ。あとさきしらぬむめんもくかたで風きる長らうか。ゆきかふ人もおほかるにおれこそといふ。かほにてすましきつてゐる **客**（年の頃廿六七。いろ白にてうすあばたあり。五分もすかぬといふ心もち。いはゆるはんかつう。女郎はこれでなくッちやアといつでもてまへからいろおとこのきはめなだすたちなり。もつともこゝのうちへ二三ヶ月まへよりのなじみ。こん夜はみやうだいにて。うすぐらきところにおしこめられてゐる）**アイ方としはづ**（年のころ廿四五ぐらゐ。もとより手どりにてきれはなれよく。じよさいなきしろ物。かりたくのころより。とう。なにとかいふ大じんなじみとなり。なにごともひきうけてするゆゑ。物まへのくらうもなく。かみのうへもきりまぜなどゝいふいやみなすて。こゝのうちにても一二の女郎。こよひはその大じん来りざしきはまんどうのごとく。はいばんろうぜきとしてひざをいるゝのところもなく。たいこげいしやのかづをつくして目もあやなり。又かのいろおとこきどりのきやくはものしづかにみやうだいべやにう

づくまり。茶やのむすことさしむかひにてせきばくたるけしき。もとよりげいしやなどをよばぬを色男じたてとこゝろえ。手まへがつてのりやうけんもいつたいせうが（分カ）よりおこることなり。あいかたもこのこゝろをよくしりてやはりいろきやくあつかいにしておくも。きやく帳のだめをさすこゝろにてよぶなるべし）〔としはつ〕（いそがしそうにきたりて）アヽもうざしきがさう〴〵しくツて。いつそきのぼせがしてなりイせんヨ。ヲヤとくさん（茶やのむすこ）でへぶまじめだよ。もしへこんやアあいにくでいつそおきのどくざんすネ。何だかじれツたくツて〳〵ト（すこしかほをしかめ思ひだしたやうに小ごゑになり）アノきんすけどんにさうまうしイしたがどうぞさうなればいゝがネ〔客〕なにが〔とし〕何でもサ〔客〕ウヽざしきのことか。ナアニそりやアゑきもねへこつたわたしはどふでもよしサ〔とし〕おありがたうおす。マアおきゝなんしあのさう〴〵しいことを。モウばからしいのう引〔客〕アノ何か。いなかの客か〔とし〕さうざいます〔客〕たま〳〵だからたんのうするほどさはぐだらう。たいこもちのうしろへそるじぎをうれしがつて居（ゐ）るうちがはなだのうとく公（こう）〔とく〕（心におかしくおもへども）ほんにさうざいますヨ〔客〕それだがあんな客でなければ。おれがどうでもたア云（いは）ねへからかはいがんなせへ〔とし〕（おかしさをこらへ）なアに其くせそけへいつちやアやつぱりじよせへはありません。そしてきいておくんなんし。けふもやくそくの盃（さかづき）を持（もつ）てきたつていつそ恩（おん）にかけへスアヽもうすかねへよう引（これはかの大じんかれてやくそくの盃をもつてきてや

りしなりもつとも盃の下へ小ばん七両ばかり入れてありしゆえ女郎もかくべつに思ふべし）［新道］（ろうかにて）おいらんへ鳥渡［とし］何だなこけへきていひなナ。客人がたづねなんすなら今何だか内しようのおかみさんと。はなしをしてゐたとさういひなんし。もしへあつちの客人はいつでも八ツにはかへりイすからまア待ておくんなんし。チヤ火がねへヨ　ト（手をたゝきかむろをよぶなしほにたつてゆくらうかをとふる女郎これはへやもち）［二タざと］モシエ能お出なんしたネ　［客］チヤ二タざとさんかマアおへエンなせへ　［さと］ヲヽこかアまことにせまいヨ。いつそきうくつでおつせうネ　［客］かん居のわびずまゐもわるくねへやつさ　［さと］アノ四郎さんをなぜつれまうしてきておくんなんせんへ。おうらみざんすよ　［客］けふはよんどころなく連歌の會へ行といひやしたツけこんどはぜひいつしよにきやせう　［さと］アノ四郎さんは哥をよくおよみなんすそうだネ手もよくおかきなんすヨ　［客］さうさつかねへこつたがおめへアノ此間うちかんざしへつけてゐなすツた。ふると一チから六まで鬮のでるものはどうしなすツた　［さと］あれかへ。ありやアこのぢうネ大きな坊さんといつ所にお出なんした時。四郎さんにあげ申イしたよト（はなしの内らうかを通る女郎としわかなれどもりこうものにてすゑたのもしくみゆる名は）［鷺草］もしへよくお出なんしたネひとりかへ　［客］（いまゝでたてひざをしてゐたをきうになをし）アイ　［草］しんのことでおすネ　［客］モシおゐらん。いつもおきれへだネ　［草］アレサ又おなぶんなんすよ　［客］のう徳公（茶やな

りしごつとするよのう［茶や］左樣さネ［草］いやでかへ［客］又そんなことをいつて。あいさつにこまらせなさるよ［草］おなぶんなんすと。わたくしもおあいさつにこまりイすものを。アノネとしはづさんがネ坐數（ざしき）のことができねへとつていつそぬしへおきのどくだとツてきをもんでお出なんしたヨ（とはよくいひあはせのゆきとゞきしものなり）［客］ナァニどうでもいゝものを。そして何も今更にせへの樣にまよふののぼせるのといふじやァなし。たゞおめへ方（がた）が心やすくしてくんなさるがおもしろくツてうか〳〵くるのだものう［さと］あんなマァあはせかゞみをおつせへすヨ。としわづさんがお聞（き）なんしたら大ごつたらう［客］そりやァかまいやせんト（口にはいへど心にはもう來そうなもんだと思へどもおとさたなきゆへすこしふさぐ）［草］鳥渡（ちよつと）いつてまいりイせう。今又おきにめへりすよト（たつ）［客］マァよからう（ト袖をつかまへる）［草］あれさじきにめへりイすト（いでゝゆく）［さと］アヽこんやァなんだかふさいでならねへ［客］客か［さと］アイ初（はつ）ざいますはナそしてまゝよサ（まゝよといふことわからぬゆへ）［客］フント（いつたばかりまゝよとはいなかものゝことなりこのあいだよほどときうつる）［茶や］ちとおかたづけはどうでござります［客］ウンそれもよかろうのト（いふやいな小べンにおつたてさう〳〵とかたづけてもらうにいかなるわけにやこのきやくのまはしどこほん間のとなりへおさまるいまださしきは酒えんさいちうにて笑語のこゑみゝをつらぬくにこちらは名代べやにひとりなれば茶やはぐはいぶんもわるくしりがむづ〳〵す

ゐやうなれどもまさかふりすてゝもかへりがたく内にもいろ〳〵用があるゆへ女郎のくるをまでどくらせどおともせずもじ〳〵してゐる此きやくいつたいじようしきのしうぎばかりゆへちぶんの物にはならず何もせうばいとあきらめさうおうにうけてゐればきやくはおのれが通りものゆへと思ふは大きなあやまりなり此ようなるともがらとかくおほくあそぶにもよくあと先をかへりみることかんようなるべし）〔客〕アノこの間女げい者や男げい者が。會所へよばれたそうだがなんだの〔茶や〕さしたることつてもねへさうでござります（トいひかれてゐるいつたい廓中のことを茶やなどにきくは甚めいわくがるものなり）〔客〕おんなげいしやは。例のころぶ一件だそうだがほんかの〔茶や〕マアそんなこつてもございますそうさ〔客〕此間ほかで聞たら。なんだといつたつけ。アノ女げいしやが十人ヅヽ組でる内のせわやきが一人に成たそうだ〔茶や〕エヽ〔客〕そしてもしそのうちに何ぞわりイことがあると。のこらずゑんりよするじやアねへか〔茶や〕エヽ〔客〕そしてかゝへでも地めへでも。その内は勿論両どなりをも當分せうばいをさせねへそうだの。なんぎなもんだ。しかしそのくらゐにせざアどうもなるめへよ。ともぎんみをさせるやうにしたアいゝ思ひつきだが。かんざしを二本より外にはさすなの。夏うらのついた物アきせねへのといふそうだが。こいらアいらざることだの〔茶や〕へヱ〔客〕ときにとなりじやアきこんにさはぐの〔茶や〕左様さネヱ（此うち茶やのおとこおくりものをもちきたりむすこを呼いだす尤さしたる用ではなしされどもせんこくよりたいくつをして

ゐるゆへよきはづし所とおもひ）【茶や】宿でようじがあると申てよこしましたから。ちよつとまへツてまへります【客】チヽともかくもしなせへ【茶や】（そばにゐる名代しんぞうにさゝやきあいがたをよびにやるとしはづふせう〳〵にきたるこれをみるとそこ〳〵といとまごひをしおとこをつれあしばやに出てゆくふとんのむかふへすはりすこしふさいだおもむきにて）もしへどうも坐敷のことができイせんでおきのどくざんすネエ【客】ナニどふでもいゝはナ【とし】それでもぬしをこんな所へおきまうしていつそきにかゝりイすよどふぞあの客人をはやくかへしイしてネ。ぬしやアきれいずきざんすからあつちをよく掃せへして。ゆるりとふせりイせう【客】ウン【とし】そんならどふかしてはやくかへるやうにいたしイせう（ト又でゝゆくきやくも心はやたけに思へどもひきとめられもせずひとりまじ〳〵としてゐてもつまらずあんどうのむだがきもよみつくしゐれぶりをしてゐるしんぞうへなにをはなしてみてもいつこうな物ゆへいろ〳〵かんがへよう〳〵【客】アノさつきこつちへくるにの。柳橋から船にのりやした【新】柳橋たアどこのことざんす【客】兩ごくのわきさ【新】兩國とはたしか夏になりイすと。花火のあがりイす所ざんすネ【客】そうさ【新】アノかりたくのときやア二階の格子からとき〲みへイしたよ。あのボヲンと上へあがりイす玉も火だそうでおつすねへ【客】ウン火さ【新】モシあれがよく火事になりイせんねへひよつとどこぞへもへつきイしたらおほごとでおつせう【客】なアに人も多ぜい付てゐるし。廣い川のなかだからきづけへはねへのさ

新 夫でもこはいやうでおつすよ 客 マァおれのはなしを聞なせへ。舟にのつてさつ〳〵としるの木のあるあたりへくるとの 新 しるの木とはあのあづまばしのあつちの。おやしきざんすか 客 どうしてしつてる 新 瓦町の二階から。遠目がねで見ィした 客 それからの。その乗てゐた舟のなかゞあかァるくみへたのさ 新 ヲヤいやだ。どうしたんだネエ 客 おれもふしぎに思つてゝ若火なはの火でもおちやァしねへかとそこいらアみても何ともねへのさ。そのうちせんどうがあれ〳〵といふからふりけへッてみたらト(手でまねをしながら)此くれへな人だまがあをゝィひかりをひゐて。ふはり〳〵とくるのスおれもぞつとしたのさ 新 ヲゝいやだそんなことをおいひなんすなこをゝおすはナ。この間こつちでも。京町にいやなことがありィしてこはくッてなりィせんからそんなはなしはおよしなんし 客 それでもこういふやうにト(こしをたてゝ)おつな手つきをする) 新 アゝいやだヨ引きみがわりィ。どうしいしようネエ引ト(はちもつとめもわすれなきごゑになりてかけだしてゆくきやくはふつとおもひつきにおどかしてしんぞうまでみちなしにしいよ〳〵さみしく本間もいつしか床もおさまり夜はしん〳〵とふけわたりかりたくよりひきうつり後は夜廻りきびしくおもてざしきなどはねそびれることたび〳〵なりされぱこのきやくの目はさらのごとくさえふすまをもる風すやりのごとくさながら大ィごうにことならずこのとき本間の床ははなしも

あいつがき

たらこういつてあゝいつてといふべきことをむねのうちにてすへんふくして小べんはつまれどもこゝのせうじをあけるおとがきこへたらもしはらをたつてかへるとでもおもひはせぬかとこらへゐるのもきついしんしやくなりこれもゝとがほかからほれどころのないほどうぬが身にほれてゐるゆへなり○かの川柳に〳〵うぬぼれをやめれば外にほれてなしトいひしはかゝるともがらをやいふならんみぢか夜のころなりともこんなばんは一時千秋

したくをなしよう〳〵かへるやうすなり

〔とし〕（まはしべやへかけこみ）もしねなんしたかへ　〔客〕何ねるものか（たぬきねいりをせぬはまだしも大できなり）　〔とし〕いまよう〳〵かへりイすからネちよつと仲の町までいつてまへりイすヨ。其うち坐敷をばだれぞにそういつて。きれへに掃除をしてもらひせうネ。そうしてゆつくりとおやすみなんしトいひすてゝ出てゆく。

まだ夜ぶかのことなり。客もあればぜひしんぞうでもやりさうな所を。自身におくりゆくは宵にもらひし金のいかうにて。又何事もせわになるきやくゆへかくするなり。それとはしらず色男きどりの客はおき出て。なかじきりのふすまをひらきざしきをみれば。宵にとりちらせしものところせきま

でにおきならべ。あたりに人もなしかたづけるやうすもみへざればぜひなく。自身にとりかたづけてろうかへいだし。遣手べやのすみからほうきをさがしきたり。

おのれが癖につかはる也。かゝる形も夜なればこそよけれほかより見たらばさぞおかしかるべし。やう／＼のことにてさつぱりときれいになるゆへ。五ッぶとんの上へあがり。いまにかへるかとのびたりちゞんだりまつてゐてもかへらず。どうぞはやくかへれかしこのきれいにしたのをみせてきもをつぶさせんと。心たのしくおもふうちはやなかのまの土圭。七ッをうちまもなく七ッ半を打ゆへ。どふしたことかとおもふおりから大戸のくゞりがあくゆへ。さてはいまかへりしと思ふに。はしごのおとどん／＼と。大ぜいの足おとゆへ心ならず思ひおき出て次の間よりのぞきみれば。いぜんのきやくとつてかへしたいこもち女げいしやも。いぜんにばいし。ひきつれていりきたるあまりのことにきをのまれ。そこらあたりをまごついてゐるゆへしんざうがひつぱつて又もとのまわしべやへつれゆく。かの客はすぐにとこの上へあがり大じやれとなる。まわしのきやくはあッけにとられどをうしなひぐうのねもでず。手もちなければろうかへいでゝれんじをみるに。いつしか夜はほの／＼と明わた

りむかふのやねにとまつてゐる鳶が。日かげをにくむ木兎をなぶるやうなかほをしてみながら。イ
ヽベラボウ引

○

[客]としのころ廿四五いせう人がらたいがいせかいは上の部のまじりみせ [女郎]ハみせのおしよくにてはへぎわうすくねんあきにまもなきしろものきやくもさうおうにありしがうわきものゆへだん〳〵おひなくしかりたくにてよほどしやつきんをこしらへやう〳〵引こしたればこのせつく前大むづかしにてとやかくむねをくるしむる所こよひはつの客にてざしきもお定りの通りすみて床へ来る
[女郎]主アよくお出なんしたネ。なんと思ひなんしてきさしつたヱ [客]（二三年まへにこの女郎のところへ一チ度来りしをありしが大ふできにてまじ〳〵とひとりよをあかすご〳〵とかへりそのゝち心にもとめざればば女郎のかほもろく〳〵しらぬゆへこよひふとあがりし也されどさそくのぬきあはせにて）なんとも思はねへけれど。きたければこそきたのさ [茶や]チヤあなたアいらしつたことがございますか [女郎]ソウサ。二三ねんばかりあとにいちどきさしつたのさ。ちよつと見まうしてもそりやアのがしイせん [客]（ぬからぬかほで）もうそうなるかの [茶や]そりやアひとかたならねへことでございます。どふりであなたでなけりやアならねへとおつしやりました [女郎]チヤさつそくだねへさつきざしきでそうまうしイせうと

ぞんじいしたが主にはぢでもおか〻せ申イすやうにおきどんなんしちやァわるうおすから。しらねへ顔をしておりいしたわたくしもついとうりの客しゆの様に思ひイせんから。だまつておりィしたも心のあるこつておす（トじよさいなくいひくろめられきやくもぜひなくわかいものにしうぎをするこのあいだふたつみつげいしやのしやれなどありて）[茶や]マツおいとまにいたしませう。さやうなら明朝おいらんおたのみ申ます [客]みんなごてへぎ〳〵 [茶。げい]ごきげんよう [女郎]おさらばよ [茶。げい]ハイ（トたち出る）

[げい]ヲヤはきものがみへねへヨ [茶や]ヲツトれんじにあり（トうちつれてかへる） [女郎]主ァほんにいつ見まうしも（て）おんなじやうざんすヨ [客]ナニそうでもあるめへ。おめへこそいつもくきやかだ [女郎]ヲヤよろしくだよなんぞおごりィせうか。わつちやァもう〳〵そんだッちやねへよいくつだと思ひなんす。これでもネまだはたちさ [客]フンそりやァ。あるきなすつたら足のうらがいたからう [女郎]なんとおつせへすへ。しやれじやァおつせんハナ。そしてなぜこんなにひさしくきさつしやらなんだへ

[客]それこそおめへのほうにおぼへがあるだらう [女郎]ほんにあの時ァ。まことに酔てたはいなくねてしまい〻したから。なんとかお〻もひなんしたろうネ [客]ナァニわつちらァふだんそんなめにあひつけているから。これはなんともおもはねへが。あのじぶんにやァ山の千さんがしきりにくるのに。おめへもあの人にやァしんのこつたといふから。いくらあせつてもはじまらねへとあきらめてゐやし

たが。千さんもこゝのにけへをとめられてほどもたつし若(もし)もといふあくねんがきざしてあがつたが。おめへが出(で)なさるめへかとおもつて。大きにあんじたのさ 女郎 ばからしいでねへのなんのといふことがおざりイすものか。そして主(ぬし)ア千さんとこゝろやすくなんすか 客 ナアニ千さんはしらねへが。ちつとわけがあつておめへとの中(なか)のことアしつてゐるのさ 女郎 主がそうおつせへすから。おはなしまうしイすが。わたくしもあのじぶんにやア千さんにも惚(ほれ)ていゝしたのさ。いまおもへばなぜあんなきであつたかとおもひィすくらゐさ。主(ぬし)もわりイびやうきでひさしくわづらッてゐなんしたそうだが。此ごろ扇(あふぎ)やへいきなんすはなしをきいて。いよ／＼あいそうがつきイした 客 そういつてもこゝを出(で)さへしたら。あの人の所へゆくきだらうの 女郎 ナアニこれみなんしこのとうりさ（右の手をまくりほりものゝけしたるあとをみせる） 客 ヤレむごいめにおはせたの。それでもまだゆびのまたのはあるだらう 女郎 松(まつ)さんのかへ。これもけしてしまいたいけれど。これみなんしところがところだから。あとになりイしてはめにたちイせうと思ひイすからかうしておきィすのさ。もし氣におかゝりなんすならどうともなんし 客 けふやう／＼二三ねんぶりでうらにきたものう。氣にやアどんなに思つたとつて。ヲヽそんならこうともいはれもしめへぜ 女郎 こう申イしちやアなんとかおゝもひなんせうが。ぬしがこれからきさしつてせへくれさつしやれば。わつちやアどんなこつてもいたしイす。それだつて

主（ぬし）の身（み）へきづをつけやうといふのじやァおつせん。わつちばかりどうともいたしいす【客】おめへにいてへ思ひをさせていゝ子のふりでみてもゐられめへ。そして此頃（このごろ）ァやかましいじやァねへか【女郎】めヘッからこつちのうちではやかましうおすけれど。主せへお出なんしておくんなんすりやァわつちの身（み）はどふなつてもようおつすよ。（まへにもいふとほり此節句まへむづかしければぜひくひとめんとかくいふ也）【客】そりやァ魚ごゝろあれば水心ありさ【女郎】（此もんくにもはやしめたとおもひ）そんなら。主のむねのはれるやうにいたしイせうから。あすのばんきておくんなんし【客】そりやァありがてへといひてへが。そんなくすぐつてへことァいやだの。くるならくるやうにしてきやせうよ【女郎】おつウおつせへすネ。主ァどふしたもんだねへ。そうお聞なんしてはわるうおつすはナ。わつちがそんなことァしるゐへすめへとおゝもひなんすのかへ

【客】よんでせへくんなさるなら【女郎】おつウおつせへすネ。マアうそにもうれしいのゥ【客】こいつはおぼつかねへ【女郎】まだそんなことをおいひなんす。そんなら主ァお出なんすともお出なんせんともかつてになんし。しかしわたくしやァいつまでもはなれヱせんから。ひよん

な者にみこまれたとあきらめてお出なんし。さあ主の手でなんとでもこゝへいれておくんなんし。いやであらッしやらうがごしようざんすよ。今針ヨウとりにやりイせう。コレおきわヤア引 [禿]アヽイ引（ト來るときによりかむろのおの字名をよぶはこゝのうちにかぎるとなり）[女郎]こゝへ顔を出しやト（小ごゑにて）となりへいつて針を二本とつてきてくりやそつとよ [禿]アイト（ゆきそうにする）[女郎]こう〳〵（小ごゑにて）ろうそくウの一ッ取てきやァノ爰へ耳を出しやト（みゝに口をよせ）十六せんのウよ [禿]（用だんすの引だしなかた〳〵いはせて出てゆく）[女郎]とんだ女郎だとさぞおさげすみなんすだらうのウこんなことをいたしイしてそうして主がお出なんせんとどうしいせうネエ [客]夫やァおめへにも似合ねへことを云なさる萬一わつちがおめへの所へこれぎりこねへにしろわたしなんざアしつていなさるとほりつきあひやなにかで。ぜひこのさとへくるもんだから。そんなうしろぐらいことをして。外《ほか》へでもゆく所をみつかッたらいゝはぢッかきだらう。から。そこにきづけへはねへはナ [女郎]どうぞきておくんなんしよ。主がお出なんせんといきてはいられへせんよ。（とかくするうちかむろはりをもつて來ておいてゆくはやひけ四ッのひやうし木もなり程なくひつそりとなる）[客]夜《よ》はながいじやァねへか [女郎]それだからながみせの時ァ。まことにたいくつでなりイせん [客]さうだらうよ。コウさつきおめへみせで何をしてゐた [女郎]ヲヤみさしつたかへばからしイヨウ引ヲホヽヽホ [客]なにをわらうのだ [女郎]そ

れだつてもおかしうおすはナ 客 何が 女郎 あのネト（いひそうにして）マア申イすめへ。あんまりばからしイから 客 そういふ程なを聞てへネ 女郎 夫だつても 客 何だナ初心らしい 女郎 アノあんまりたいくつだもんざんすからネ。菅り江さんとぎんなんをやいてたべてゐゝした 客 どうかそんな物らしかつたがおいらア又かのばゝアの椎のみかと思つた（ちかごろ廓中へしゐのみをうるばゝアの來るをみなさまござんじ也） いぢのきたねへやうだが喰はなしをしたらちつとはらがきたやうだ 女郎 酒をおあんなんせんかヱ 客 そいつアおもしれヱサアちやわんとしよう 女郎 ついでおあげ申イしよう 客 チツトアリきみやうかんろく 女郎 アレサそりようのこしておのませなんし ト（とつてのむ）もしへかげんをなんしてお上んなんし目がちらつくと彼事がわるうおッすから 客 それでもしらふじやアきのどくで出來ねへはナ 女郎 きのよはいねへもしへどふぞ共屏風をぐつとひいておくんなんしよ こつちのもこういたしゐせう 客 そいすゞり箱をこつちへよこしな。と云にこの針をまく糸がねへ 女郎 ほんにネヱ。ばからしいことをしいした。さつきとつておくのでおざりいしたものウ。きのつかねヱヱ。 客 そいつアとんとはじまらねへせんぎだ。よしにしようか 女郎 （しばらくかんがへ）もしいゝちゐがありイす 客 どうするのだ 女郎 この中のネ。ふとんのうらをすこしほころばして。いとをぬきイせう 客 あとでこまるだらうぜ 女郎 なアによようおつさア ト（ふとんをまくり糸をひいて歯にてくひき

り針なまく）さアぞんぶんにおほんなんし　客　目をねぶつてゐな　ト（左の手をまくりほゝさうにして　こいつアあかりうけがわりい　女郎　ほんにのうおれつてへ。もしこつちのほうへお出なんし　客　こうか　女郎　やつぱりおんなじこつておすネエ。客　どうしたらよからう　女郎　こうしひしようそのみせたばこぼんをおよこしなんしそれをこけへ置イしてネ。灰ふきのふたをうらがへして。それへろうそくをおたてなんし。こう蠟をながしてさ　客

せかいは小見世二人り一座もつともなじみ□おさまりて屏風のわきに茶めしのだいをとりまき女郎まじりにくつてゐる

○

多風（年の比三十四五うはぎしんしうつむぎ酒とあぶらでぴか／＼するやうによごれたやつ團十郎がしきせふくぼたんのしたゆかたじやくはいにはなやかな帯をしめしはちりからもすこしばかりくひかぢり落咄しの前座といふ人物今一人は）仁三（年の比廿六七ゐせうつけたいがいこれはなにもげいのない人なれどた風にどきいたふうでもなくさうおふにどうらくもしたれどもそれをおもてへ出さずしんびようにしてゐるゆへ女郎もまんざらでなきあんばいなり仁三はめしをくつてしまひかたわきへよつてようじをつかひながら）仁三　なる程た風さ

んはめしもたつしやだぞ（仁三があいかたむだ川年二十ばかりこれは川筋より此あいだくらがひなして來りしゆえなにごともじよさいなくこみづなところへきがつきまだいつかうさとことばがうつらず思ひのほかふとつぱらの女郎なり）[むだ川]あれさそんなことをいつてえんりよをさしつちやアわりいサアよそつてあげまうしいせうト（笑ひながら手を出す）[多風]サアこれから茶めしのしんがりだ。諸事色氣よりくひけの事だ（た風があいかたそげ山年廿四五かんざしのあと小ばんなりにはげ物すごくみゆれど思ひの外心よしなり）[そげ山]仁三さんはいつそしようしよくだよ[風]其かはり女にかゝつちやア中みせのだるまだ[仁]目がねへといふのかおきやアがれそういふ多風さんも中の町で（トいひかけてかほをみて）はなそうか[山]はなしてお聞せなんし[風]なアにおれがじんじようにまうしあげやう。さる大みせのばんしんよ。いつもしまちりめんを五めへぐらゐぶつかさねて。後家もちのなゝつやでも。三兩はおんひらなしといふめへざしに。ちいさな銀かんざし。それひらッてへまげのひつつめ島田で。このゝだも白ちりめんのふんどしをしめて。内しようからしりをくつたといふ。ぐつとにくみ仕立な女よ。目がくり／＼として半四郎づぶ[川]あれさそのこつちやアねへ。ぬしがどうかさしつた事をサ[山]サアきり／＼おつせへし[風]ハテそれからはなさねへけりやア。狂言の筋がわからねへ。そのしんとさせる茶屋でたび／＼落合おちよふとおもひなせへ。何だかおつにせじがいゝから。いつぞは／＼ト（はなしにの

りがきてまちめになるところへすふきだし）［山］おやむしのいゝ［川］あれさまあだまつてお聞なんしそれ
からへ［山］そこである時さし向ヒになつたと思ひなせへ。といふ身になつてもしへいつそなれ〳〵し
いやうだが。ぬしにしんにおねげへがありますと。たまらねへじやァねへか。胸へどつきり來たが。そ
しらぬ顔でなんだへといふと。此事をかならずだれにもはなしておくんなんすな。そしてまァかなへ
てくれさつしやる氣か。くれさつしやらねへ氣かといふから。さァしめたとかなへいきな顔色で。身
にかなつたことならばといふと。それでもこんなことをまうしいして。さぞおさげすみなんすだら
う。いつそはづかしいと。わつちがひざへ。トうつむけになつたらう　山フウきついこつた［風］そこ
でいふことをきいてくんな。わたしは妹が一人りありますが。あにさんがどうらくで。わたしがゐる
うちへしちによこして。すでにながれる所さ。きようでへつれだつてこんな身になるもぐわいぶんがわ
ゐしことに一ッうちにゐちやァ。ほうべへしうのめへへもきがねがあつてつらいものざいますから。
いろ〳〵してやつと仲の町へきよねんからげいしやにだしいした。それさぬしがしたかたをうちなん
す俄に出るおすいさこねへだ茶屋がしらのにけへで。けいこの有たとき。ぬしもいかしつてしつてゐ
さつしやる通り。年がいかねへに物おぼえがわりいものだから。いろ〳〵につきまはされるこつて。
わたしをひきまはしちやァないてばつかりおりいすから。どふぞそのきつかけとやらのちがはねへ

やうにぬし氣をつけてやつておくんなんし。しんにおねげへざいます。そして客人といつしよにちつとうちへもあそびにお出なんし。そのときアきつとごちそうまうしいすもよきできだらう。あんまりおれもくやしいから。れいのたべんを出してそりやア魚心あれば水心とやらだと。小あたりにあたつてみたが。はりこのあねさんがでんがくをやくやうによこたてへかぶりをふつて。大不承知 川 チヤくすかねへのチ 山 フウだれがおめへにおれなればこそよんでやるのだ 風 おれなればこそ來てやるのだ 仁 サア又ふうふげんくはがはじまつた 風 仁三さんおめへのうはぎはなんだ 仁 ほんばとやらさ 風 ウヽ大(でカ)てまきといふやつだの。おらがあねさんのうはぎはなんだ藤鼠か 山 やつぱりむらさきさ 風 ウヽなる程ひあふぎのぬひのおつこちたあとばかり昔の色が残つてゐる。コレがくむくのどうをみなこれでもむかしはひぢりめんだらう。さんけいのあるびんづるそんじやとおんなじこつて。あけへ所がところ〴〵に残つてゐるうちがいゝ。これもだれぞの古着で中の町をも見たやつだらうが。不幸にして。手めへにかはれていつせうじようめへのおりたまがきはのぞくこともならねへといふやつだ 山 サア又た風さんのわる口がはじまつた 風 おや此大平の麩ははさめねへ〳〵と思つたら。おきやアがれ底のはげた所だ 山 はらもみのうちだもうおしめへなんし(といふおりかむろなしがりながららうかをとほる) あだ花 いけそう〴〵しいがきだなんだな 禿みどり それでも中の町へいくから。し

けのどんにきものをかしてくれといつてもかしませんものを【禿しけの】おらアこんたにかすきものはねへよ。何のいぢきたなめ【みどり】なきむしにやましだよ【花】ヱヽそう〴〵しいといふのにとほけやいぢをわるくしねへでかしてやりなんし。そして中の町へいくならかんべやのたばこ箱に。おあしがあるから五匁かつてくるのだよ。コレサ〳〵むかふのはかけとやらがわりいから。あげやまちのゑびやでよ。とほけや手めへにも用があるよ（トしやうじなぐはらりとあけあいさつもなくそうわとかいふすゞりぶたのだいなとり）藤七どんがそうわがたりねへといつたから。これをもつてゐつて。コレサマア人のいふことを聞きやな。おれが床をまはすなら。おきわどんのむかふじやアわりいと。そつといふのだよ。アヽ草臥た。た風よく来たの【風】やりて部やのむかふでわりイたアおたのなすぢだの【花】なアにはしごのをとがやかましいからさ。これからすつかり寐てやらうといふやつさ【仁】あんまりそうでもありやすめへ【花】チヤ仁三さんくらくつてさつぱりしれへしなんだなだ川さんこれへいつぺへついでおくんなんし（ト茶わんにひきうけかう〳〵なゆびでひつさいてくびながらゝこんやのやうにまご付たばんはねへ。れいのさんじるしがきたらふ。いつでもけんばんのげいしやしゆうをつれてくるもんだから。あのざまじやアいられめへ（トそでを手がるくたゝいて）これが此間の一ツけんでなしやつとのことでわつちが鏡とゑどぎのさんのうしろざしでいれけへたアな

[山]そしておめへのあたまのもなアどうした [花]とこがまはるからうかつのさんにかしてやつた [山]
あの子はみせか [花]そうよづぶあたまのものがなくてみともねへから。わつちがはやくあがつた時ア
いつでもかしてさゝせるはな（さすがのた風も此はなしはきかぬかほにてさてこゝはむだ川がとこなればみ
づくろひなして） [川]サアおんをひかふ [花]わつちもめへりイせうむだ川さん [花 山]おやすみなんし
[川]まアようおす（を聞すて四人どや〳〵と出ゆくあとはひつそりかんとしてしばらくはなしもなくサアおやす
みなんしと仁三を床のうゐへおひあげべうぶをひきまはすときゐんぎなをしのかうしのをとばた〳〵〳〵まへに
もいふごとく此女郎は川のほうからのくらがひゆえさしむかひになるといよ〳〵里ことばなし）[川]あのをとは
なんだへ [仁]ありやア東河岸(ひがしがし)で。客(きやく)じんがねへと。しよくだいのうゐでみすがみをもやしたりあんなに
かうしをばた〳〵たゝいたりするが。客人(じん)のくるまじなひだそうさ [川]ヲヤおつだね ト（じやけんに□
□なまくる） [仁]さつきでへぶやりてにだんじられたな。うわきもてへけへにするがいゝ [川]フウそ
んなげんきじやアねへ。こゞとこそあらふにおきわどんのいふことを聞(きい)てくんな。おれがさつきび
しやもんさまからけへりに見世のではなをみたが。おめへのおしろいがいつちうすいから。もつとこ
くつけなせへそれが川にゐたくせがうせねへのだッさ。そしておへやといはずにねへばうといへの。
けいしやのことを羽おりといふなのと。おだんぎよ。なんといつたッてお生れつきのとんちきがお

なをりなさるものか 仁なるほどあつちたアちがつてこまることがあるだらうのふ 川まアでへいちきやくしのなげへにあきてならねへはな。あつちじやアそれ羽おりの三四めへに太夫衆でもよんで。ざつとざしききりでかへるといふ手もあり。そうでなくツてもおむかへ／＼でおひ出すだらう。さアこつちだ見せのでるか出ねへにおしあがつて。日の出るまであはせ鏡もつらからう さつしておくんなんし 仁おめへのおくんなんしはもらつて来たやうだ 川そうよのう。そうざんすこうざんすと。手めへでいひながらをかしくなるよそれよりをかしいはこつちへ来た時こあめ町のよし岡から来る。唐桟にもらつた唐ざんを着てきたら。もめん着ものだとつて。みんながわらはアな。あたまへはべた／＼あぶらアくつつけられるし。いゝ年つかまつツて。ひぢりめんのふんどし。きぢけへじみきつてゐらア。アヽなんだかねぐるしい（トねまき帯のむすびめをなゝの所までゆりあげ） 川こチおめへなんといふきでくるのだ 仁ほれたからよ 川しやれじやアねへはな 仁ハテどこにもふつてへな金をもつて。かくれしのんでいやなところへくるもんか。又どこのおやだツてよく女郎買ニいつたツてほめるばかもねへものだ 川そりやアそうだけれどつきえへといふこともあらアな。なんだかごしんとやらがわからねへ（トはらばひになりたばこをすひつけるふたひき三ひきのむなわきからとらふとする）ト 川まちな此たはかアしたにあるよ（トべうぶへかけたうはぎをれてゐながらひきおとしそのたもとにいれておいたゆも

とざいくのやうなまるいひきものゝたばこいれもつともてうつがひもん所きんづくめなるをいだし）さアこりやうのみな［仁］フウト（いつたばかりこいつ色男だらうとおもひわざと聞ず）［川］わつちが十七の秋だつけっ此人にむやみにほれて。雨のふるときさんばし迄はだしでおつかけたときやア大そうと（どカ）いれた（だカ）ッけ［仁］夫じや今でも［川］にくいこともねへのさ。それだけれど今じやアかみさんはいれるし。いゝなぶりごろなこぞうだとおもつて。いゝやうにされたからよん所なくあいそづかしさ［仁］ちつとぐちつほいやうだが。何もみれんの残らねへものが。よし隙くだりまでこいつをもつてもこめへス［川］こせへなをすもつう為だとしよてへもちかたぎになつたのよ。もう二三年もわけへと。これ見ねへと。火ばちの中へでもほうりこもうといふ所だが。そうするでもねへから、おめへもつていつてきせるをこせへるたしにでもしねへ（仁三はわざとわらひながら）［仁］そしてまアおれがごしんとやらがわかりやア手めへどうする［川］どうするッて。ほりものをしたッて。かみをきつたッて。うれしがるたちでもねへから。どこぞで二十りやうばかり金をかりてくんな。それ程できずば十五両でもいゝ［仁］そりやう手めへどうする［川］ながのねんきをかゝへて、ばか〴〵しくこゝにもいられめへとおもふから。又口を聞てもらつて。さんげんやへでも出てみやうと思ふのさ。でへし金をかりねへけりやア。四匁かんじようだから五日うりづめりやア。壹両貳分貳朱とれるの。そのうち床のそんりやうかれこれにひ

けたところが。壹兩ぐらゐは手どれるから。そればかりな金はぢきにけへせるはな。人げんの心はけちなもので。かけへのうちはきやくじんがけへツても。むけへのかゝるまでは寐てるるが。サアじめへになつてみなせへ。そう〳〵かえつてかせぐ氣になるから。うりだかもおのづとあがるヨ。それからはそうだんづくで。おめへの氣のすむやうにしたらよからうじやアねへか 仁 あすかアたしか三味せんがいるの 川 それもそんりやうでいゝのさ。五日にたつた百五十。床も上どこ中床とふたとをりあつてねト(はなしのさいちうせうじをあけて) 多風 仁三公あしたア文字たかが會ぶれにたのまれたを。さつぱりわすれたが。もうしゆつたつとしようじやアねへか 川 ト(きうにおもひだしたやうにさとゝばになりて)おやばからしい。まだはやいじやアおつせんか ト(おきかへるひようしにまへかんざしがばつたりそれをきつかけに)

七ツのひようし木

コン〳〵〳〵〳〵〳〵

取組手鑑

全

取組手鑑序

諺曰野夫有功者。夫俗書包敎誨亦復爾々。獨奈近來坊間左禮籍特述通人之寐言而已。未曾敎誨之端實如塗塗附。今閱門人東米之此編三敎垂々在人之準。其術之多也四十八手未也愚矣。解百術而將採拾八百八町云善哉嗟嗚豈不强者乎

取組手鑑叙

不買再の御見は人目の大關にや。緣を結の前頭は突出の耻し顏。晝廓の神酒陶ひけて鹽花を振ればづらりと並ぶ圍也。地色地取相肖たり。中入の辨當は中居膳を持運び。本中あれば中三あり。表子は寐さんと念ひ客は投られじと想ふ。故に手と脚をして術を擢にあり。年寄は思案柱に倚り息子が足の通ひを瞻は。上草履を容歟。勘當を許す歟。譏裸に成ても床花を遣は江戸ツ子ならんと。僕切落に教訓の勸善元をして丁惡を懲し。周をして床入をするは。土俵入の谷西河岸と呼ふ。自身番の行事贔屓の捘なからん事を願ふ。眼情の徒。頬冠をこらつしやるましやう

先生の一坐丑島の正月

大黑舞の初日横綱の

傳を受て關東米　吉書

最中
月

玉露
糖

合方

大關　江戸　附周中三
關脇　同　座鋪持
小結　同　部屋持
前頭　同　雜見世
前頭　越後　西河岸

蒙勘氣

當正月二日ゟ雨
天十日居續仕候

客方

大關　諸州　淺黄裏

關脇　江戸　旦那向

小結　伊勢　一番々頭

前頭　近國　旅人衆

前頭　江戸　息子株

三會目

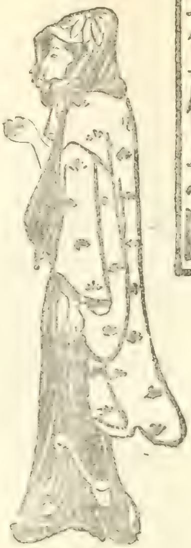
床入後

柏木　　負惜

古野川　無勝負　　來傳

頃は十月にわか過の事なれバ郭中ひつそりとして火の用心の廻りしげく中の町へ出るおいらんもすくなくおちやをひくもあれどこゝに大きな女郎屋ありさすが家風とてひけ前に中座は残らず見世を引て立た跡のもうせんを取廻ししんぞうばかりふにとられたごとく引のこつて居ると右畫のごとき客が見せの大格子からハのぞかずほ

木戸口之圖



そこうしのうすぐらい所からきうくつそうにのぞいて居る内からすだれをすこしときあげて【コ、、女郎、格子の際にもたれて外を見る圖小さく。略す】トいふすがたで何やらぼち〳〵とはなす△後に作者東米不残聞取たれどでんじゆ事ゆへ爰にしるさず○ 玄關の前から奥の方をのぞくと中庭のふんがはまつすぐにしよくだいと中の間の箱どけいその奥が内しやうにて亭主今角力から歸りしと見へて茶づけをたべながら 〔亭主〕風のあるせゐかでいぶ二階がさみしいノ此川は下座敷にきやくじんがあるかの今ちよつと見かけたつけどうも利口なやつは氣がつかわれる（女房はりきんだ皮羽折をたゝみつけはんふりのびろうどをさすりながら）〔女房〕コレさき

やかんじよのあかしが消たそうだよそしての翌も旦那が角力へいかつしやるから／辨當になんぞ切溜ものをいれておくように喜介にそういつてくりや（ながい膳立たしかけながら）

中居 この箸紙をちよつとごろうじて 女房 旦那へモシイ琴浦の琴といふ字に我乙さんの我の字を書てなんとよミやすね 亭主 フウ琴我サ かね四ツの時斗 ギリヽチヤアン

客人 女郎 取組手鑑

十文錢は湯屋の鋏札にぶらさがり扇子箱變じて箸箱となる飛鳥川の淵瀬定なく國々に色町の數多しといへども名高きは京の島原大阪の新町江戸の吉原なり江口神崎朝妻は古き名のみなり往昔より傳りて古き色里といへるは一に播州の室津二に大和の木辻三に泉州堺の乳守といふ此ちもりの里に立よらば大木屋といふに通ふ神來傳といへるは二十七八にていやみのあくが拔た色男今行名ざしにて揚る奥座敷のおいらん今この川年は二十二三當時の手取にて座敷へ出るまへ茶屋の息子に來傳が樣子を聞強ものと見てとり床柱に倚かゝり立膝をし楊枝をつかいながら額で來傳を見るよふに見ぬよふにすますよふにうれしひよふに完爾〳〵としながら 此川 モシイちつとこつちへも盃をお廻しなんし（などゝいつぱいのみ出す折から番頭しんぞうがしらせにちよいと立て座敷のひけるまで貌を見せねば作者） 未レ考 つれ貸借といふは三十五六貫こなすといふ氣で惡みばかりいふゆへあいかた今柏木は多葉粉ぼんをひかへて居つたきりだまりんで居る貸借は自惚にて盃をさすと柏木なをな

此初會の座敷のようすさま〴〵おもむきあれども他の本にゆずりてしるさず見るものすいれうあるべし

たぶにんぞうになる　尤この川よいは年二ツ三ツしたにてまだかよふな客をこなされぬゆへなお（此川竹のよふす初會にはおもわれず女巧者いのじゃ　ゑて吉）兩人名じみの事ゆへ茶やのむすこと二人にて座敷をこしらへるゆへはなはだわかつたはなしのてうしなればろうかをおし歩にあるくのだいこやまかい中の女郎通りすがいにのぞひて見てハすいたのすかぬのといらぬおせわをいふ客人たち初の事なれども一二の女郎のざしきゆへやり手あいさつに出る來傳はわかるゆへこいつ客のれうちなふみにきたと悟り祝義をする）　やり手ヲホヽヽヽヘイ有がとふおざりますアノ子やおてうしをもつとてあいのほうへよせておきやおいらしものへかゝろうぞよほんにまだ御膳をあげんそうだ（トすてぜりふでろうかへ出ながら）花いきさん上草履がかたつは見へやせんによびと所へよせておきなせい（トれんじを見て）わるいこつたよくとりしまつておけばいゝにはきものが中庭へおちそうだ（ろうかの中ほどにかぶろがじやうだんに心やすいきやくのまげへひつかけたながい紙がおちてある芝居ならみかんのかわといふもの也とつて見て）こんなこつたによつて氣はゆるされねい（ト中ほどの部屋ざしきをのぞくと部屋もちの女郎いびきすや／＼客は初心にて初會ゆへ目ばかりぱち／＼まぢ／＼して居なびやうぶのそとから）モシヱまきやさんへチットどふしたもんでおざりやすへ（ト氣をつけあんどのそばのしかみ火ばちの中にすぎばしがけむつているをつゝけしどびんをかけながら）こんなこつたによつて火の用心がわるい（トまたろうかをばたありく／＼）まだだれかれんじをあけ

た（トつるしたを見て）風があたつてなるもんではねい（トちよいとれんじの戸をひきたて）ア天氣になるそふだア、南無妙法蓮華經ト（部屋へはいりかゝりひろぶたのからがあるをかたづけておも〳〵しくすわる〔作者〕やり手にいしゆがあつてむだをかいたよふなれどもおく座敷から表ざしきの向ふやり手部屋までは奥行二十間あまりのろうかの事なればしやれ本で紙一枚がものは随分ありうそなら小便のせつためしてごろうじろ△こゝにあわれをとゞめしはけしぼうずの禿親ざとよりおやぢがなくなりし事をしらせて來り仕着のねまきのしもげたようなりにてしく〳〵ないて居るそばにしんぞう二三人立合てなんのやくにもたゝぬ事をいつて居るふりそでしんぞう座敷へ出るかぶろにいしやうをつけながら希有な顔付にて）〔ふりしん〕かわいゝこつたね〔今一人のしん〕モシこの子よりやア利口でざんすネへ〔やりて〕早くして出なんしなコレちりぬやてめいそんなになくととつさんが迷ふぞよ（火ばちの灰を火箸できれいにならしながら）〔姉女郎〕この子はモいゝかげんにしてくりやよじれつてにきゝわけのねいよさつきから泣てソレ見やよ顔へひゞれがきれらア最いつてねやよ（トふさいだ顔つき〔此川〕はきげんらしく今宵また名染の大事の客來りろうか座敷に名代などとらせしばらくつとめて瞎が出るとはづしてあいさつに來る）〔此川〕モシイちりぬがこつてさぞおふさぎでおざりいしよう〔姉女郎〕アイサちよつとごろうじいしこねいにさつきからないておりいすはなわつちもいつそかわいそうサこんな事のしらせかいつそ用をいゝつけいしても氣のぬけたようでおしたよ〔やりて〕モシ今夜はあいにくつのもしやのが見へましてわるふおざりますねよくしんぞう衆で濟ました

ネ【此川】なんだかモウわからねい事をいつそいゝしたなぜこんなにひへゐのうてうづがちかくつてなりいせいよヲヽさむト（ぶる〳〵と身ぶるひをしてみす紙とつまをもちそへはしごを下りるとおやしや此川が姿

中庭のあたりでいづくへかきへてなくなるドロ〳〵〳〵とはしごをかけおりるは雪隠へ行容なるか）扨も奥座敷にはいゝ頃なしぶん【柏木】おまんまをたべにたつてしまい廻し方はぞんぶん用をたして來り座敷をおつたてる茶やの息子はチトあちらへといわぬばかり負惜は呑込すがたモウそのじぶんかのといひッゝ禿に手をひかれ藝者に供をさせ中三かいといはぬばかりに大きな聲でろうかをしやれながら【柏木】が表ざしきへはいる來傳もともに表座敷へゆく折から廊下座敷にたびうどらしき客人たいこもち里東女藝者みやや繁おわか相手にて狂言ありその外大勢にぎやかにて名代をとつたよふすちらとにらんで小便所の前へ來りフム（ト氣がつき祝のてりふり町のみせといふ上ぞうりをぬぎ木りをはき向ふのはめの

札をよみながら小便をする内いろ〳〵此川が仕内をかんがへる　▲そばに女げいしや【ゐて吉】ついて居る）【來傳】まさしく座敷のようすといひ廊下ざしきのアノきやくじんサテハ【ゐて吉】おてうづを【來傳】せずともの事サ時に今夜はきれい事の何かおたのしみができたろう【ゐて吉】イエいつこうなもんでござりますほんにあなたアどふいふ氣でこつちへ御出なされましたへなんだかまじめでなんにもおだしなさりやせんね【來傳】コレそんなことをいつてくれちやアうらみだぜホンニこれでごあいさつだすぐにいつてやすみなせい【ゐて吉】ハイさよふならおちかひうちにモシお見わすれのう（トいそがしさうにあいさつし

て茶やのむすことつれ立て歸るハ定てまだけんばんに川のある事なるべし【來傳】通り者もはなはだ此川がざしきのおもむきにまよはされあるひは小べんにしやうとおもひあるひはねをつけなをす氣になつたりして更に心けつちやくせず廊下をうつら〳〵とざしきへはいると本間ははやびやうぶ立まハして此川がいたじめかけてあり中〳〵ねられるもんではなくちがいだなの本箱にひねつて經典餘師といふ當時はやりもの丶かざりつけありこれを一冊ぬき出しついしゆのとうづくへによりかゝりよんで居る來傳がこゝろもち此うへはあるべからず次の間にはおめしをべちやりくちやりとたべながらばんとうしんぞうが送りもの丶ざぜん豆のむめぼしなかみわる音ふりそでしんぞうが下りぜんのふびのかわをむく音から紙ごしにきこへて）【ふりしん】モ丶丶丶此炭アじれつていとつちやアおざりいせんよなぜこんなにはねんすねい【ばんとう】モシモシ一山さんちよつと（ろうかを通りかゝりし）【袖留しんぞう】なんだんすへ【ばんとう】アノぬしのとこのきやくじんでさつきできたにばなをネこのどびんへネおがみのごしやうとやらさ（トいふハやぼな名代のきやくへにばなとくわしをだしたをさつきにらんでおいたと見へるなり）【袖留】マアよしにもしいしよ（トけんびきのあたりをぶきりとしてゆく）【ばんとう】ムウすかねいヨウ【ふりしん】きついかへりくじなこつたネ【ばんとう】チヨツトすいつけてくんなんし（多葉粉ぼんのひきだしをあけ）【ふりしん】いつそはしやぎいしたよ【ばんとう】いわぬ事か惣菜の菜をひとつばいれておきなんせばいゝに【ふりしん】そういゝしたがこんだの料理番のようになにをいつてもずう〳〵しいとつちやアおだんせんよ【ばんとう】かけかまわぬこつてだんすうつち

やつておきなんしな［ふりしん］それでもアノにくうだんすモシこう〳〵をいれておいてもしありいしやう［はんとう］ばからしうだんすきり〴〵すじやアあるまいし［ふりしん］イエきり〴〵すは奈良漬ばかりたべんすとサト（よう〳〵たいらげてしまいふりしんそこいらをかたづけるゑびのしがひたひとつ所へよせはし箱をしまいしかみ火ばちへ炭をついだりするふりしんの様體さつまいもがあくびをするといふ顔にてどふやらみづばなをたらしそうなむすめたりばんとう新造ハふしやうものにてふところ手をし楊枝をつかひながらじろり〳〵と見るうすきみ悪いまなこざしにてかちぐりがくしやみをするようなつらをぶりしんてるごまめをふたちやわんへいれから紙を明ると［来傳］まだおきているゆへ一大事ゐけんといふがんしよくでふた茶わんを半戸だなへしまひ硯箱のひきだしをかきちらしようじをたづねるもつともうすぐらし）［ふりしん］モシくろもじを一本おくんなんし［来傳］たゞのでもいゝかの（トやる）［ふりしん］おかたじけのうおざんすモシおやすみなんしト（出て行尤こよひ二かいのようすさびしきばんのけしきにて両隣のおいらんひまでいきつしやるゆへ壁ごしに碁をうつ音又こちらとなりはあんまをもませながらあんま十とくを相手にしやれる聲がきこへる負惜がそばには引込にもなろうといふほそをもての）［かぶろ］おいらんでおつせいす只今しよくじをいたして参りますからツサ紙を一まいおくんなんし（トあんどの前へすわりよふ両足をはだけしりを踵へつけてすわりつめをとるといつてお針の所からかりて来たはさみでつまらぬ釘貫の紋などはさむはなはだゑりくびながくちり

けの灸が見へる）　負惜　コウてめい色があるだろうの　かぶろ　したつかしりいしね　負惜　よくかじけね
いの膝の上へあがりや腮の下をくすぐつてやろう　かぶろ　ヲヤすかねい猫ではおつせんによ　負惜
だがよこんだくるならうなぎのあたまかまたたびをもつて来てやろうよ　かぶろ　そんな物はいりいし
ね　負惜　それでもてめへは人間の子のよふだよかわいそうにいぢめおどりでもおどらせればいゝ
かぶろ　にわかのにうごの島わへ　負惜　てめへの身ぶりをいつてきかしやうか　かぶろ　なんでざいま
すとへ　負惜　まづこんじやうが川太夫が見臺といふもんでよしりすじつているが口ばしがかんどつく
り顔だちがくらやみのころ柿日玉が硯へおちたこんぺいとう鼻ばしらがぬかみそへ身をなげたなたま
めじやくろ口をくゞるろくろ首といふゑりつき髷がやかた舟のみよしといふものだぜ　かぶろ　（もり
こうものゆへあそびかける）おまへさんのはなの下はねアノネ夏中アノネ竹村のわきのほりぬきのアノ
ネアノネ足代のよふだんすホヽヽヽ　負惜　ウヽおきやがれ（ト　へ手を　こむ）　かぶろ　あれ
エヽ引どふもふきやく人がエヽ引　負惜　大きな聲だなべかまがわれるぜ　かぶろ　ホンニぬしたちは口
がわるふすヨ引（ト出て行斯て　負　は火のうねぼれゆへ柏木がざしきでしよげていたはまつたくおれにおそれた
にちがひなし床へ来らばぶちころしてやらんと今や〳〵と鼻息あらく唖の狐つきのごとくびやうぶの中で寝たり
起たり枕を右にしたり左にしたりふとんの中へいれておいた鼻帋袋を上のふとんへいれたり下へはさんで見たり

またとり出してきせる筒を紙入へしまひ鼻をかんだりせきばらいをしたりひとりごとをいつたりはらんばいになつて一ぷくのんだりたばこぼんをつき出したりあをのけに寝て黒びろうどの夜着のはんゑりをかいでみたりあごをなでゝ見たりおきて帯を〆かへしたりきせるとたばこ入をきれいにならべておいて見たりきがつてねてみたりのりでゝ寝てみたりよう／＼夜のあみがさを二上りから二タくだりばかりうなる所へ次の間のしきいのあたりでかしは木が寝にたんまりになる身ぶり負惜にはおかしくもなんともなけれど外から見ると大べらぼうなり〔柏木〕みやきのさん氣さんじなもんだね　なまこをこわゞりそふた面の〔細留しんぞう〕モシおまへさんおきゝなんしたかへ　せきいとさんのきやくじんを宵からいつま居さつて帰るとつてせきの戸さんがたゝかれなんしていつそとめなんしたけども床の香爐獅子のような顔をしてぶしやれんすからモウ／＼ネ憎ふしたまだきけんがなをりんッサ〔柏木〕せんど一度しいしたからさつきちよつとあいさつにいつてきいしたチャびつくりしいしたよなんだのう〔細留〕コリヤアノなんでおざりますよさつき桂野が十徳さんのまけへおけるといつておりえしたつけ（トいふはじやうだんに気をながくつないだやつなり）〔柏木〕イヤヨひようきんな事をして又しかられんせうきつといゝつけておいてくんなんしおやすみなんしへ（ト今宵負惜をすかぬいへうかねてうしなれどもいつたいたき川がひとがらよそほひがあいきやうありて去々年のつき出しにて年はまだ十八九なり負惜が寝て居るとふくにおもつくろしくすはりれんじのしやうじを見つめてだまりん

で居る○たばこをすい付てだしそふなものと心で思ひよこ顔なみながら）〔負〕惜寒いにこゝへはいつて　はどうだの〔柏〕（まへがみをかきながら）いつそモウ月がさへたそうで戸のすき間からしやうじへうつるよヲヽどうしやうのアレほそくなりいす〔負〕ひとつすいつけてくんな〔柏〕（たばこぼんを引よせながら）おあがんなんしわつちやァたつておりいす〔負〕ホイ玉にきづだ酒はあがらずじみなもんだ〔柏〕わたくしはいつかうなもんでおざんすよ〔負〕何もそうひねつてくれることたァねい（トはねたき

〔柏〕ヲヤばからしい（トツんとする是より柏木がせりふしやう事なしにあいさつをするよふによむ人よむべし）〔負〕コレ大あやまりだ氣にとめてくれてはなんぶんすまねいとかくあとの一ツぺいが過るとりうぎが出てならねいドゥモ初のうちはこつちの氣性がしれねいで心づかいだ氣でくゝつてすふながくめんどうを見てくんなせい時になぜおめいそんなに無口にしてくれる一ばんうちだしていつてくれりやァはなし合のわかるめいもんでもねい〔柏〕いつそ口ぶてうほうでだんすからおまいさんたちのよふにわかりなんすきやくじんには怖ふだんす〔負〕ナニ化物じやあ有めいしたゞしおもしろひ事があつておふさぎのかたちだね〔柏〕そんな事はぞんじいせん〔負〕コレ額をぬいている男をそうはぐらかしてくれる事もねい〔柏〕それでもアノぞんじいせんものを〔負〕（枕紙をなでながら）おしげりをサ〔柏〕しげりといふかぶろはわつちらがうちにはおだんせん〔負〕何のこつたしげりといふ禿があつて

見たがいゝしろのみといふおいらんが出來てはだな大根の名代をだすだろう 柏なんだんすとへ 負又まじめになつてくれるよ（トこつちからチヨイト　つて又しくじる）柏なんぼわたくしがよふなものだとつてたいがいにしておくんなんしへ（トあたむ）負七軒のいのじ扇やはとんだせじがいひネ 柏中の町の茶やは一軒もぞんじいせんよ 負御全盛のこつたからそいはづだナントあの燈籠のじぶんつれだつてあるくがいゝもんだの 柏客人と河岸みせなんぞを見物に參りますはいつそせつのうだんす 負シタガ明方に茶屋で一ツ盃呑なをすはいゝのう 柏氣のどくでだんす 負くびでは女げいしやでさとじいつ花のこつたろうス 柏とふにおりいせん 負此夏の心中などはあわれむべきこつた 柏木いのちあつての物だねとやらさホンニしんおうをしてしにんすと高い山がむかふにあつていくらのほらふとおもつてものほられんせんとさほんだんすかへ夫を聞てからいつそ怖ふなりいしてやり手衆か堀の内さんへ願がけがあつて七年法華とやらで參りんすからついでに願をかけてつかわしいす 負又そんな事をいつてふさがせる一ぶくつきやつてくんな（トきせるなをチヨリとはたくとはいふきの中でチプ）
柏（けむた手であをぎながら、チヽせつな 負（これで三度のはたきゆへいふ事もかんがへて無言になる 柏木は
ねるでもなくおきているでもなく負惜ハしやれでもなくふうがでもなくとつてもつかぬとき）さつぱり人通りがなくなつたそうだの 柏（ふしやうぶしやう）エアイモウそのじぶんでおざりいす（トいつて見たものゝ

負惜さへばりはじまらずおしいものを無かすとおもへば一ばい茶やのむすこに惡くいつてきかしやう〳〵とばかり夜のあけるをまつ）

奥座舗 そも〳〵これにひきかへてちくるいかん玉子なるは來傳が　の中此川が立合のおそきはゑんむすびの取組ならん扨　納まつて程なく廊下に此川が聲にてモシおそれんすねおしげりなんしへ（トいゝすてゝざしきへはいるその姿はどつしりとして受出されしなにはづばゝあがなし立花扇がいや顔そめの介がむつちりとした所とのつしりとせし場はしのはらをかみまぜてあいくろしき所はげいしやのいつ富に似たり手は白露が玉をあざむくおいらんにて大ていのものにあらず）

此川 チヤまだおよりいせんねト（あんどをかきたて中ごしになつて居て何か文をつら〳〵とよみくだしもめくちやにしてひとつ手玉にとり）里山さんへ返事はあしたつかはしひしやうよモシイ晦日はほんの三十日でおざりいすかねい

來 コウトウ小サ

川 おちつきいしたと（すわり片手な　へかけなにかに〳〵して居る）

來傳 おゆるりと御用ならおたしなせい

川 おかたじけのうだんすさつきからまだ楊枝をつかつてお出なんすネ捨はぐるとどうもおしいもんでおざんすよドレこつちへお出しなんし中をたがふとかいゝす（ト楊枝をおッぺしよりはいふきの中へいれる）

來 今の文を見せな

川 アレカへどうもつれしゆの多いきやくじんはどうもわるふだんすよ三浦やへおいでなんした客人がおとゝひつき合てわつちらが所へお出なんしたのを今なんのかのといつて付屆の文がまいりんしたのサどうも女郎衆へたいしてなんとかお

もわれんしやうとおもつて氣のどくでおざりいす　〔來〕ソリヤアおめいのこつたからその客人が見かへたもむりはねい　〔川〕

○子曰巧言令色鮮矣仁　言を巧にしてへつらひ笑など顔色を令ごる類の人は仁義の心けつして鮮ものなりと聖人孔子の仰なり

（トよみかけの論語をよむ）　〔川〕なんだかモウわかりいせんにへ　〔來〕初からわかつては花がねいのさ

○子夏曰賢賢易色　御門人子夏の曰らるゝは凡人徳を好こころねがわくは色を好に心を用がごとくなるべし

川じれつとうすにへ(ト本なひつたくりふとんの下へはさみ)よふウたばこをおわがんなんすねいチツトきせるをとりあげんしやう　來コレサこいつをとられちやア手持ぶ沙汰だ　川それほど手がありやアよふおざりいすはアレサついでおあげ申イすよちつとこれをおあがんなんしてごろうじいし　(トやつと手のはいるたばこ入からう口(虫)いろすいつけて出す)　アイもしと(じばんでふいて出す)　作者曰、情をふくんだものなり此きせるで一ぷくのみたい)　來(ちくせうめのみながら)　アノ琴はどこだの　川[illegible]込発しおざりいしやう　來正月は定て御全盛なこつたろうス　川モウ餅搗の唄がほうぼでしいすとむねがどき〳〵しいす　來つき出しは此春かの　川さのふ道中のけいこをしいしたどふしやうのみんなおまへさんになぶられんすのだヨほんにこん夜はおなじみの所がわるくつていつそおきのどくだんす　來あぢにいぢめてくんなせいすのこのじうち茶屋まで人をよこしてしまおうとおもつてもいゝ晩はなし初名

代で來る株でもなしふさいでいゝしたが今宵はいかなる吉日ぞや [川]ほんだんすかへそんならわたしも申イしやうせんどの晩さゝによこしなんした時晝からの客人でひけまいには歸りなんすと茶屋にいつてつかわしひしたにどつちへかお出なんしてこつちへはお出なんせんではおざりいせんか [來]いいわけをいふも自惚らしい [川]何もコウ聞たがる事もねへねもしへぬしは京町へお出なんすといふ事をきいてめいりしたがほんかへ京町にやアいゝ女郎衆ができいしたネ近江やの琴歌さん上總やの景清さんなんぞはわかつたものさ [來]ナコツト見せなおめいの髪ハアノばいむすびかよこひやうごがいゝぜ [川]髪結にそういつてそういゝしよ [來]人の氣もしらねいでこんな事をいふでもねへす [川]アノおまへさんがかへ（折から次の間にガタリと長持のかんのなりし音をあいづかして此川てうづといふ顔でたち出る此所極神秘にして作者もしろうはづなし○次の間の外にばんとうしんぞう立て居る長持のまへあたりで極内々にて） [川]いつそ怖ふだんすよ今寐入したよふすサ目がさめいしたらしらせておくんなんしおたのみ申イすにへ [ばんとう]ゆるりといつてお出なんし（トしばらくしても來らねどさすがの米傳もうぬぼれたこりて心づかぬは人情なり所へふりしん此川がたばこ入ときせるを取に來り持てゆくぬかりんでいた米傳比ときさてはと氣がつきむつと成次の間は） [ばんとう]ちよつとねぶとを見ておくんなんし [ふりしん]モウモウ〳〵アノネいつそうみきつていさなドレおして見いしやう（トおしつぶす） [ばんとう]わつちや

アいやチヽいたどふしやう（いチヽいたチヽヽヽ二折から廊下なしらする七ツの拍子木ねづの番うつて
来る女郎屋のひやうし木は田町あたりの番太郎のうつとちがつてチヽチヽチとはうたずしりきりとんぼにうつな
りなのごとし　カ。カ。カヽカヽカ。カヽカ。　ばんとう 地七どんかどうりで音がいきだとおもつ
たコレよらつし　ねず ちつとおかいやすのサ　ばんとう こんたアノよくゐどへいつたら音羽がかつて
きてくだせいといつたにながしてくれたのにくらしいよせんどの時がしなけいさつし　ねず チツト難
澁あやつりさモシたわいもさんがゐて音さんのかんといふ聲で寐ごとをいつていやすきやく人がこく
うにせきばらいをして居やす

ばんとう 座敷はどこだ　ねず
新造部屋でサ　ばんとう はかならしい　ふりしん早く水をくみ入るノウ　ばんとう そふだつけ髪あらい
日だの火ができたらちつと持て来てくだつせ　かみあらい日は二十七日なり家により節句前にちがふ事あり
座の大がまでたくゆへ二かいしんとしているゆへま木のはねる音さこへるなり此日女郎ははやおきゆへたい夜に早
く寐たがるこのまおもふて一つ行かゝるニコレノヽ手拭がおちているよ　ねず ホイ大事の手ぬぐいを
モシちよつとごろうじろいふおとして一山さんのをもらいやした口べにがついておりやすひもじくな
るとはトしやぶつては茶をのみます　ばんとう 右の手でおなぐらをとりなでくらはせながら此人はセウ

すかねいとつりやアねいにさ、すかん〳〵すかん　[下女]　ヽかけさつて奥の方へかけさる〳〵

[ほんとう]　申しきりの中ら銭を一分はさんでいた見て目のうちにて客人に茶をつしつたそうだがねいそうに（ト立胡ル時へ上りサ、夜はしん〳〵と更わたるこなたの間には屏の中郎で見つ起つ来傳が頭に色帯あるやうに頭にゆきしとおもひ切株ようとすれどもよくつかしやほになれ進せるくこの葉やアの香やアア〳〵うつくしいやつたのあるいろないこのあまでもへは大きにせきぎくこれずいほどけつくはまず安き人相にしてなか〳〵誠ににいたりきとられたものではなくたまらなくなつて下女へ右の旦に伺が火ハ下し川住人の火打袋を出しよつて〳〵と打火（川から）[ほんとう]ヒシへお火をおくれ申なんしやう（トふりしん来り火入へ火か二ツ三ツいれて火の川へ置捨なく）[川]（すました顔で来り北方にすはりたる煙草をついで居るいつかう頭がしれず来傳はあるのけに寝てあたまをおさへながら）チツトはなしてきかせな　[川]ムヽ（トわらいながら）モシイ　[來]コレもつとはなしてきかせなせい　[川]ムヽ（トにこりとしながら）頭なんしたかへ水でもよふざんすから一ツおくんなんし　[來]いゝげんきだの　[川]またムヽ（トにこり）[ほんとう]（トかミ火ばちにかゝつたぬるい茶をくんで来たり）いつそひへきりいした　[川]よふだんすまだ火がおざりいすかへ　[ほんとう]アイおざりいす（ト手あぶりへ火を入火の川へ立てねる）[川]（ハひへた茶を一トいきにひつかけむねを三ツばかりたゝいて）ナヽせつな（ト来傳が顔をながすつていきがほへかりかゝる）[來]そのほつべたを

〔川〕おまへさんほんになんのこつたへ宵からかたつきしおさけしみなんしてばつかりお出なんすからしんにじれつていとつちやアおざんせんにへ〔來〕なんといわれてもこつちがまよつたから詫はねいのサ〔川〕なんはわたくしがよふなわかりいせんものだといつて補留たちうどかなんぞのよふになぶつておくんなんす事はおざりいせん一夜のやどをかりた氣になつておいでなんすものをしよせんわつちらがはかないこつて呼とけ申されいすおまへさんではおざりいせんから宵からあきらめていんすけれどおつもんなんす所がはづかしうおざんすモシイかならずおなじみの女郎衆のところへお出なんしたら手があつたといつておくんなんしへ〔來〕ナニもつていねいけつしてせんな事はねいのう行違のねい仕様にやア明るくなつて大手をふつて歸つてお目にかけよう〔川〕イヱ〳〵早くお歸し申さないじやあ跡で氣がゝりでおざりいす〔來〕おさやあがれべらぼうといゝてゐわへ〔川〕になんにおまへさんは〔來〕どふしたきざくとしらざく()〔川〕エヽじれつとうおざりいすよ〔來〕いつか一座はわかるそういゝあいまの松サ〔川〕わかりいす事もおざりいしやうかね

すまふの大こハ大門へハはいらず五十間にてたゝく事なり

〔昔〕むかし女郎のふる時はあんどうの前しやう売りはた帋の置やうにてしれしよし今はふるといふ事絶たり手前勝にひようとくのたいのをやり手うれしがり丹半可通の穴しりにて洒落本でも書たがる人なり額をぬいた客多くは此徒なり右の負情買こなすといふ氣なれども實は女郎の情に疎しかよふの客ちつとあまいことばをかけられると用もなきに格子さきで客をよんでは道などへみへをしもちつとあつかましくなるとねだりたがるなりこんたきやくをこゝの内できふうといふ扨又柏木は此川より二だん程下手なれども傀儡人形の如くきわいとおとなしきとあどけなきになつんで来るよき客あるべし此夜の取組負情手強き風なれども思ひの外つめつたりくすぐつたりする手でいくなりどうしても二十うちのおいらんはまだ發かしみが抜ぬけへなり負情歸る時きつと茶屋の息子に柏木もまだいつこうだとわるくいふしかし此川ごとき名取の女郎は却て買よきものなり此客なじみに成とも物のかゝらぬ日を考へ燈籠道から初て暮の十四五日じぶん二階で跡着の沙汰のある頃になると来ぬ客なり

抑色の道は曲天窓開闢以来日本の當年今日まで如才のないてあい皆迷ふたりしかれば思案の外と

は金言なり人間命のせんたくといふ事なくてはならねば分相應のたのしみは大事あるまじといふもの〻此分量がいたつてむつかしきもの也されば女郎のかくはやつばり惚たのなり此客好たとおもふか爲にならうとおもふかこのふたつの外なしどふやら最一度呼で見たい心よりかける也是を負惜いごとき客はふとい女郎とわるくいひ來傳ごとき譯しりは味ふべし初會にいかほど惚たりとも實が見せらるゝものでなし先あやなしておもしろくわせ名染だ上の誠なり右此川此夜來傳へ初に出たる跡へ跡着を請やつて居る大事のなじみの客ひけ前に來り廻り座敷へ入て名代をとらせ下ざしきにはしんぞう買でよぶ色客ありされど來傳をまんざらでもなくおもふ心から彼大事の客はおつうこしらへて來傳が座敷をもらわせ却てやう〳〵ぬけて來んしたなどゝ色さやくをうれしがらせる事なるべしいづれもむづかしき客のおち合はなはだそわつく晩なるべきにいつかうそのけぶらいを見せず後に下へよこにいつて歸りし時來傳がさとつたよふすを見てとりそれより打出してのしこなし七ツ過に火をいれたと左をぐつとさし込だる情は實に此家の關取ならん來傳が遊びのよふす家體も白魚もくつた客と見ゆれども明方に此川にもろく手先でやられしは土俵際で足があがつたやうなものなりまことに此川が趣き恐るべし是より此川は來傳にべらぼうめといわるゝがうれしひよふになり來傳はからだ中が女郎くさい香がして晝も夜も此川が聲が耳で鳴よふに成右の金をつかふ客は色ごと

の仕送り屋となり下座舗の色容はつき出されて目が覺るなり來傳はたわいもない人に成べし夫迄此角力勝負なし咨嗟一唱三歎なる哉

大尾

孔雀染勒記　全

自叙

顔艶タル娼妓仲樓ニ止ル客ト而此扉ニ不レ可レ止者不通にだもしかじこむかしも今もかわらぬいろのみごりを无の名によべる子の日の松の太夫しよくこて春宵一刻のうちのたはぶれに千金の價をもつて根びきをしやごの花に詠むる庭の鶯のはつ音にのごかなる春をつげ田圃の蛙の哥には居續の雨を乞て客をこゞめむかふの人よぶ時鳥郭ゝがゝその夕づくひ鶏明の四角はキのじにとゞまり傾城の誠にいきぢにこゞまりその君子のこゞまる所をもつて青樓小補孔雀楽觀記と題しあらたまの春のはれ着とてあらたにしたてるひとかさね嗚呼ちがひねへのまんなかなるべし

山旭亭主人著

山旭亭

それ雪は
傾情に似て
おもし
ろし
ふりも
ふつたり
とけも
とけたり

青樓小袖 孔雀染勒記

論語町に曰君子の道四ッあり馬道中田圃大音寺前と堀となりあるひは猪牙あるひはよつで四方の萬客爰に集る事北辰へ衆星の向ふがごとく此廓のはんゑいいふもさらなり春の仲の町の櫻は入相に花を咲かせつながれてくるこま下駄秋はとうろうびんのうつくしきにうつゝをぬかし俄の狂言とともにかきのめされまきちらす花の雲客は上田か淺黄うらかきのふのまちにんの客人けふは旅人の客とうつりかはるはくがいのならひとて夜毎にかはるうき枕さやうなら御きげんよふおちかひうちとの艶言にあやなくわかれたれかはつまならん仇し勤の仇し身にも風鈴のおとにさくら艸のちらん事をおしむ東雲にもはや茶屋のおのこのお迎の聲といちどにきくほとゝぎすないてあかしのうらやくそくぜつせぬ日も青切はのがさずそのゑひざめにのむ水よりもわかれの鐘ははらわたにしみわたりさこそ曉ばかりうきものはなしとはきぬ〴〵の實情をのべしことの葉ぞかし

草庵酒落

千早ふる神田の八町堀のほとりに傾吉といふ江戸がみあり世間の人は氣保養によしはらへゆくに此男はたま〳〵に内へかへりては年季ものゝ宿入の思ひをなすその住居は草の庵といへばしさいらしいがおさだまりの九尺三間の長家なれどゐからぬ何つくりの男にてあかれ掛行燈あらば代々丁の裏茶屋といふ家にて補にゆふべにとひくる客も目かなすけふもたま〳〵きのふのつかれをやすめんとうたゝねの夢ならで表より入くる客日本橋通の息子 [豊巴] 「としは廿四五此男のいきうけ米い並上方にあり）どふだけふはうちか久しひもんだ見るすじやアねへかよ [女房こり] （三十二三きりやうもいゝといふ程にはないがあいらしい女光悦もの其むかしは毎日よし原へ入込みし咲いきな風なり。きしじまのふだん着に黒七子のはんふり花色ちりめんのうらとうはちみいつそあついといふ身でじゆばんなし黒七ゝ子のちときた帯を横のほうへむすびあらひがみをさげてうしろへわらでいわへておりゝ ヲヤ傾さんさきほどおうわさを申ましたサアおあがんなせへとし [豊巴] マダおつむはお移徙の御祝儀にもあへりやしたんだよくはやくでゝやしたネ 「こりおあにがとふでござひますやう〳〵ひつこしましたがなんだかせまくて成りません [傾] （よそからかへつたまゝいなり年は四十四五くらひすこやつこなりはあいにまのたんごの小そでうらふりなし下着はおやしきからもらつたと

見へ八丈のとふちこふしにおなんどちやはぶたへのじゆばんもへぎなゝこの帶△まくらもとにかんばんにあるや
うな大きながんくびのちいさひきせるみかけた都名所圖會の本を取ちらかして昼寐をしている）[こ]もしへ／＼
[けい]ウ、、、、、 [こ]きのふの朝から赤坂のお屋鋪へめへりまして今朝かへりました [ゑ]傾さん
ごうせいおつかれだの△（此の屋耳に入日なさます）[けい]艶巳さんかへごめんなさへまし昨ふかゐゐい
さんの所へめへりましてゆふべ夜通しの酒で大よわりさコレおこの湯をいつぱへくれろ [こ]（アイトゑ
んばに茶をくんで出しけいに湯をやる）[けい]（ふところからこぐすりをだす）ア、いゝ心持だ [ゑ]何んの
藥だへ [けい]いへさあんまりの氣過やすから田町の隱居に益氣湯に加減をしてもらつてたべます（ト
はなしの中におじより又ふたりづれ [あや丸]（としは二十五六なりはでついろおなんどのつむぎのもんつきお
なじはおり下着はしまつむぎじゆばんはちりめんのあみだしぼりおなんど茶のしのびどんすの帶もつともんか
ら小もやうありふたへはなをのくすべのせつた風のたび狂歌のけいぶつでとつた手ぬぐひをもちどんぶりはけい
せいが諸寄のはきかけにしたふんしうどんすのきれのこりなどんぶりにしてよこしたのなり越川しだしのもへ
ぎちりめんの雨さしのきせるづゝな一所に入たばこいれ京ばし御ぞんじ也）サアむねきし先へはいらつし
[むねさ]二十七八なりはめんちりめんの茶みぢんの小そでおなじはおり下着はやつぱりめんちりめんのあひみぢ
んあさぎちりめんのじゆばん黑どんすの帶やわたぐろのせつたさんどたばこ入惡玉のかなぐなりきせるはぎんの

がんくびのひしやげたやつどんぶりはひどんすと黒どんすの[虫]じら）マア先へ（トふたり一所にはいり）[丸]おこのさんどふなんしたといふ事もねへ艶公じやアねへか見ねへふりはうらみ葛の葉だ [む]見ないで水を酌ばい丶 [ゑ]ごうせい大盡がそろつたのやかましいてやいだス [二人]ハヽヽハヽヽ [こ]モシへもつとそつちへお詰なせへし [けい]二階にいたしやせふ 丸 其事がよかろふ〳〵コウ二階へあがるとけつたるかな南山これ石がん〳〵たりだ [む]かん〳〵たりやいてくわふはどふだ [ゑ]たつしやにしやれるノ [む]ときに傾さんのところへモシ隅田川といふ所はいつでもとふりすぎやすからぐつとのみ口じやアねへがあんじたひねつて白銀町の新店の名酒りう水といふところをけん上サ [けい]こいつはきついかんしんだ [丸]わつちがあんじもすごかろふ越前の海丹といふところだ [けい]こいつは團扇があげにくいふんさんにさばひてもらいてへ [ゑ]飛ちがつてこんぺいとう娘にやる氣だ [丸]どふでもてんとりだいろきやくはかむろをあいすだ [けい]おこのやおもたせをかんをつけやな [こ]（はしごから首をだして）モシ今鯛をこしらへやしたがなんにいたしやせふ [け]どなたもおまんまといふ所は [丸]おらアおまんまにこりはてた [ゑ][む]ナニサ腹巾ははなはだ滿々だ [けい]ソンナラうしほにしやなさしみでもこしらへたか [この]平目をさしみにいたしやした [三人]そんな事をするからわりひ [けい]ナニサ時にかんがかんじんだとふり過たホイモシわつちが妙なものを出しやせふ（トねづみいらずからふたものと揃づ

ゝみな出す）これが精進のしほから是がわかめこいつをやいて肴にいたしやす外のわかめは燒てたべられるのはござりません赤坂からいたゞきました 丸（一盃うけて肴をくい）成程此わかめ妙なあじだ 丞此鹽辛はみりんで鹽梅をつけたがせうはなんだしらん けい此御酒は隅田川といふものだ 丸どふもあふにやなかなやは夏の夜といふ酒を飲せるヨ 丞夏の夜とは 丸のみかゞわりひといふ事サ けいおきやァがれ名酒とおもふ內がいゝいちぜんやひやうのやまじりておかし玉やなんぞがいゝ酒をだしやすどふしても亭主が飲うちがいゝ 丞けふひやうのやの政七を日本橋で見かけたがどけへいつたろう けいおふかた高田のむかひにでもめへりやしたろふ むおらァ廓は皆ナ日蓮かと思つた けい禪宗がおほひのさ 丸ナゼ けいもと尾張からきたものがおゝふござりますそれでサ堀の角の寺が旦那が多ふごぜへますのサひやうのやは橋場のげんせう寺が旦那サ 丸きのふおますにあつたが白玉おぶんよりわるくなつたよふだどこにいるか むお伯父の所があの近所だそうさそこにいるといふ咄しをきいた 丞ひやうのやのしきせはまつだやとおんなじようだ けいあれでもちがいやすひやうのやのは羽衣さあのあんじにはこつたそふさ こサア出來ましたよ（ト朱の吸物椀にうしほをもり木具へのせて出す） 三人サア〳〵マアおこのさん一ツあがりやし こ唯今頂きますゥ（ト此うち中の丁のひやうのやの清六みちんさんとめにさやの帶手のぐひはさみのいそがしそふに來る） こ清六どんがきやしたよ

[けい]チイ [三人]こゝへよんで飲せよふじやアねへか [こい]こゝへあがれといへ [こ]こつちへあがんなさへ [清]ハイ〳〵〳〵（ト二階へあがりじぎなする）モシあしたは赤坂のみひさんがお出なさへますもふきのふから尾張町の出番も始りましたからぜひ今日お出なさへましと申されました [丸]サア〳〵一ツ飲せへ [清]これは有難う御座ります [ゑ]りうかん町の客人が川口で船をひつくりけへして皆ナ濡たそうだの [けい]アイサ私は其時は参りましなんだ大きに仕合さ [こ]（かみにぜにをつゝみ清六にやる） [清]ナニサこんな事じやアわるふござりますマアお預ケ申ます [けい]ナニサ〳〵とつておかつせへ [清]それでも [こ]イヽから取ておきなせへ [清]是はどふも [ゑ]サアもふ一ツのまつせ [清]イヽへ大きにたべました [む]それ切〳〵 [清]これはたべすぎます（ト一ツすいものわんのふたでうける） [丸]ソレお肴 [清]有難うござります（トのんでしまいしたくなし）私はたべ逃に致しませふ [こ]マだよかろふ [清]イへまだほう〴〵へ参りますトかへる [ケい]そんならよくいつて下せへヨ [こ]宜くヨ [清]ハイさよふなら [ゑ]ひやうのやの亭主も楊弓はすきだの藤治と三人で引た事があつたつけ此頃はうちではひかずに田中へひきに行そうだ [丸]藤治も落手前だ（トこれはさし手前落手前はあがるとさがるのなり楊弓通のことば）おゐらがのは前ついたりうしろついたり定まらねへ推手がきかねへから（おし手とは左りの手まへつくとは右へよるのうしろつくとは左りへよるのなり） [こ]モシひやうのやの旦那はなかまつやのふうを眞

似ナせへますヨ　[む]ぜんてへ堅ひ内だなかまつやといへば中靏はせう花堂をならアの　[けい]左様サ阿波太夫が内は御存かへ　[丸]大ふくやとかいつた　[けい]能しつてお出なさへますヨ　[こ]モシあの牽頭のけん吉はよく人のほれる男だネ　[む]いつかの俄の時あれが花籠にのつた色事の藝者に挾箱をかつがせた事があつたの　[けい]さよふサ其時かゝアが其藝と大喧嘩がござりやした　[ゑ]名はいわずともだが七軒あたりのかゝアがほれて下の方へ茶屋をだしたの　[丸]ソウ〳〵其病氣の中も其藝者とかゝアと兩方からつゐていて看病は色男の筋だの　[けい]どふすればそふほれられるかしらん　[丸]時にもういゝじぶんだろう　[三人]成程よかろふ　[けい]いきなさるのかおこのやいもやへ四挺そういつてやつてくれろ　[こ]お出なさるやうにさつきお咄だから今かみ様ンが來たからそういつて遣しやした（トいふうち駕四挺ろじよりかつぎこむ○是よりゑんばおや丸むれき傾吉四人駕にのり出ろ船とちがへかごにはむだもはなしもなくさつ〳〵と眠りながら土手までゆく）

中之街之騒劇

近松翁が金言に只初より假初の勤ばかりにあふ客もたへず重なる色衣ついのよるべとなる時は始の虚も皆誠いつわりもなく誠もなし縁の有のが誠ぞやとは又あるまじき名言なり通となり野暮となりお

さきと成て後にこそその味ひを知ぬべし此三子何も劣らぬ氣なれども通と半過と各〻一ッ二ッになりたり通はみな持まへなれどむかふに鏡があれは夫に移りしが誠の通ならんそれは扨置四挺の駕は飛がごとくに上手にいたり 三人 みんなかごのたれを上て下せへ（トかごのすだれをみな〱あげる） ゑ 何とこう見はらした所は妙だネ△（跡のかごのあや丸きゝつけ） 丸 そうさ けい ヲレハこゝからおろしてくれろ旦那方は大門のきわ迄やつてくれろト（いふむかふから竹いせやの男傾吉さんお早ひねと辨當ばこのやうなものをさげて來る） けい ヲイどけへいく 男 毘沙門様へ御神酒をもつていきやす（又むかふから中尾やの長八來る傾さんこりやアどなたもおはやうござります） 丸 ウヽどけへいく 長 江戸へ參ります ゑ ウヽそんならまだ八ッ過だわへ む 後によト（別れ行かごは大門のきわへおろす） 三人 出る けい 誰ぞ獨りおともをしやト（いゝながら先へ少し早あしにかけ行ひやうのやの門口から歸りやした是をたのみやすとみじかゐ脇指を出す） 女 どなたゞ けい 中尾やへいかつしやるあや丸様や艶巴様むねき様ン三人ヨ（ト奥より藤藏與市よろしく申てくんねへ）△（ほどなく主人ひやうのやのまへゝきたる） 女 お早うござります 藤 よふ御出なせへました 三人 アイどふだ出ていざア直にあゐはねへか 藤 唯今お跡からト（立わかれ中尾やへ上る） 梅 ヲヤどなたも傾吉様 女房 おはやふござります 千 いらしやりまし よし （はきものをゑんの下へいれる） ゑ （手水場へいきながら臺所で）長公料理もんだの 長 （硯蓋をつみながら）

よふ御出なさりましたおよしどんお草履を上な [ゑ]ヨシ〳〵（トかへり見せへ三人共すわる）[千]（さかづ
きをもちいづる）[ゑ]コレとよもトあわ太夫ヲよびにやつてくろ [丸]おれも馴染のを呼ふ今兵のやに
藤藏がいたからそして升太夫もよんできさつし [む]おれも付合だ内のお梅ほうにせう [けい]あんまり
大勢だネ [いち]二組斗に成れまし [二人]何さよし〳〵早くいかつせへ [千]畏りました [けい]てんで
んなき〳〵 [丸]柿の皮といふもんだ [ゑ]うさアねへ [いち]お梅早く着かへてきや [けい]もふそろ〳〵
出るわへ [む]向ふの松やの二階にいるのは唯レだ [いち]にや（玉カ）人様さ（トいふうちけんばんよりかた〳〵と
三味線ばこ五ツもち來る）[い]はやくヨ [男]ハイ〳〵 [丸]さき川が出て來た [む]書がいゝそふだ [ゑ]お
しひ事にせいがちつとひくひト（此うち中づるやの中づる出てきたり中尾やのゑんへこしをかけ）[中づる]丸
さんよく御出なんしたネ [いち]おいらんおはやう [けい]いつでも奇麗ヨ [中]おゆるしなんし [丸]こつ
ちハおあがんなさへし [中]こゝがよふすヨ [あい][藤][升][兵][興][はな]おい〳〵に來る [梅]モ出る（此内盃
廻り吸ものも出る）[藤]モシ傾さんふ[（虫）]いしはどふだヨ [けい]モウ丸さんに太キナ目にあつたナニカそう
だろふと思つたゆへふだんのなりでいかねへつもりをむり引づりさどふも酒はあけられねへ [丸]一ば
いのまふ いゝおよしなせへしと（てうしをとりあげる）[丸]むごくするの（ト此所大勢がやく〳〵青物市のごと
くかきとれず）[いち]江戸町へおしらせ申たか [千]ハイ只今お出被成ます [貴船]（おや丸が合方としば十

八九なりは上着がひぢりめんに花かごのぬひ帯はかべちよろ下着はそらいろちりめんみな下着あやのはんゑりなりかみはひやうごむすびあたまもりつぱなり）［いつ濱］（むれきが合方としははたちぐらひ黒ちりめんにきんしでこいのたきのぼりあらいそのぬひ下着は御すいもじいたつてうつくし）［新造いつきく］（くろちりめんのとめそで下着は三くづしの八丈黒八丈にすじのあるおびとしは廿四五番しんなり）［濱船］おいらさん［けい］［けいしや大ぜい］イヤアおはやふござります［い］おいらんお早よふ（トいふ内表にいたる中へいつ濱かむろにいゝつけたばこなすいつけてもたせてやるまたさきゝりよこすゑんはかねていろ事あれば合方なし）［船］ゑんさん能御出なんしたネいつそまつていなんす（ト是はゑん巴が色事のまゝ琴といたつて中よくしつているゆへかくいふ）［ゑ］わつちらア新造買で誰も待人はなしさ［ふね］（わざと新造の名をいふ）きな山様がサ［政七］直におつれ申ませふか［い］ソウ〳〵だれぞ御供をしやヨ［千］（ハイ〳〵と此所ごた〳〵してみな〳〵口々にわめき立いづる大こんざつ江戸町二町目ひやうのやにいたるいつ濱がざしきへみな〳〵ならぶゑん巴がおさきの新造きな山も來たり政七盃硯ぶたしよく臺などはこび又酒になる）［藤］モシおかしい事がごぜへました［丸］ナンダ［藤］此ぢうさる所のおいらんがぐつと年があく氣でなにかを二三日の内かたづけの内證へいきモシへわたくしはあすから店をひきとふおざんすといふと内證でいふにやアてめへ氣でも違ひはしねへか來年だでよナニ今年でござりイすと論がひねへから證文を出してみせると來年サ［丸］成程こいつ

は有めへ共いわれねへ [忠]なにかた片付る内がいゝ [船]馬鹿らしいネ [傾](一ぱいやりながら)しん内〽きこへぬぞへ綱五郎さん [大ぜい]有難い〳〵 [滝]イッソ忠ゝヨ [傾]モシへこねへだ松田やへめいりやすと見き船さんなつ風さんぐつとつらめへて新内をかたれとせめるノさどふもならねへからいちつこをみるやうに三味線なしのすがたりをやらかすト二人が祝儀をくれやした(ト中指を二本だしてみせ)貳分サ是じやアかたらねへけりやアならねへ百萬遍に呼れたやうに聲をさつぱりらりに致しやした [む]コヲさる所のおいらんが新造だしに二十兩たりねへで繻半一ッの記念おくりでぢきに客人が承知したいふ話しを聞たぜへ藤の字なんザア随分御ぞんじの客人ナはつだが [けい]そんな事は此御座敷じやアさし合があるめへもんでもねへ [船]傾さんそりやおわるかろふにへわつちらにやアそんな事はおつせんヨ [滝]モシへ井田八かきゝとふおッすネヱ [忠]つな五郎を一だん [升]八十さん調子ヲト

此時大一座にてはなはだく〳〵しければ略ス

何ンとマア。女郎買の一とをりも。大體あのくらいなもの。それから込み入て見れば。愛想のつきる事ばかり。だのしみのあるも青うち。通になつては絲瓜の根。何か無上にこうでもない。あゝでもないと。さみしちらすといつでも香の物で茶漬より外はなし。初心はかけらるゝもふらるゝのも。わからずに遊ぶゆへ。菜さへ有ばいつでも飯を甘く喰ふ。こゝらはやほの一德。いでや此世の多き中に。

やぼならぬもなく。粋ならぬもなく。其中にも己惚にて。通人と見せんとゝ。何かに付て朝夕のこゝろ遣ひ。やつぱりこれがやぼの上まへ。粋の目より不通うと笑る人は。どふした形が持るもしらずぐん内島も。ぜんじの羽織も。祖父のさした朱鞘の脇指も不恰好ともおもはねば。是又心のつうなるべし。名高き遊里にさたされ給ふ。通達のくわんねんの念にもあかざれば。大門をくゞるとならば　たゞ何事も利口だてをふりすてゝ。いつそ愚痴に。だまされて。かけられて。女郎に逢ふこそ買といふ字の深意ならん。これよりおくをさがしなば。此道の横たをしなるべし。このちよ／＼ら傳を見れば。金銀を遣わずして女郎を自由にするを。色男といふし書り。これらははるか下ざまのことのはにして。ろんずるにたらず。やり手の高笑ひではなけれど。作者の心が見たい。今はむかし。新かづさやのすまざぬと。大かづさやあげ巻は。子供狂言へ遣す。幕の出入にて。張合ふたね。ある人中なをりさせし其仕様のよさ。肴賣が花をくれる。物もらいに金をやるな□是らは皆たてひきの。通うよりおこる。行過たるをおつ付。足ざるをおぎなつて。せつなきをすくふ。此むれの通達かぞへがたし。又くるわにも。下を廻るものに名を得しは。近比。松屋のおまつ。かなやのおつま。中あふみやの平三などは。何茂の御ぜんじ。又穴さがしへんてこ論などに。傾城は。中／＼風上にもきらふ物のやうにあれど。少し心得違ひた□□（虫）□が。大門より内を。極樂といふはつまらずと。云しもつまらず。人々女郎を

買ッて。もてたといへど。つとめと云字に氣がつかぬかとの。理くつも□(すカ)めぬ。勤といふ字に氣がつけば。誰か樓中へあゆみをはこばんや。此里へ入ほどならば。面白く遊びて。友達へ咄にも。ふられたといふより。もてたといふが聞へもよし。いかほど惚た客なればとて。初會から實もあかされまじ。先。かけてくるめて置て。其上來る時は。うそから誠も出るぞかし。男にほれたのか。金の有とみられたのか。いづれにもかけらるゝのは客の手がら也。此かみわけなく。めつたにわるい〳〵といふ物しり達は、へんくつのひつくり返しにて。屈へんとや申さんか。戀せずば。人は心の。なからまじ。物の情も。これよりぞしる。此うまみは有がたからずや。聖經賢傳をせんじてあびても。板を擔ふて片〳〵ばかり見ての筆勢ならん。契情の身の上とても。金をためるのは其意に叶はず。向ふの人や堀のむすこに吸取らるゝをそしつても。是もかづ三十余の女郎なれば。いくらも有そふな事。殊更客と色とのへだてあれば。ほれた客より。なま惚な色の方がおもしろくたのしみなるべし。き(ぞカ)そうと笑ひなんしても。よふありんすと云のは。傾城の情なるまじ。さりながら何やの何がしといふおいらんなどが露光命とほりしは。あまりあさはかなしかた。すべて歌舞伎の類などゝ狂ふは。さりとは此里の女郎に似合ず。おか賣女かおどり子めきていやし。心倦までおろかに。ひがみつよく。無筆無げいにして。みさほといふはつゆほどもなく。ちよ〳〵らを常とし。恥をしらず。賢愚貴賤をわ

きまへず。と云人もあれど。そふ云ふのが辨へのなきなり。爰に來ては。高下へだてず興をもよふす里ならずや。常に禮儀がまじり。見さかいあらば。さつぱりはじまらず。戯氣が太々を打やうに。たいそうに取あつかはれるで持た世界。あまたの中にはみさほも實も或事ぞかし。すべてみさほがあつてつまる物か。三百六十日つとめし身。色男は茶づけ食。恥をおもつて一日も女郎の奉公はならず。一頭朱唇萬客嘗。または誰かはけふの夫ならんと語てあれば。うき川竹のふし〳〵ほどつらき事はあるまじ。無筆無げいと笑ふとも。唐机にて文を書もあり。牡丹を一輪生るくらいはずいぶん知ッてる事也。わづかのあたいを費て。はした女郎狂いのやからは。おしなべて文盲のやうに覺もさぞあらんかし。吉原の外にゐていやしく勤せし女など。奴と成て爰へ入しには。ひがみのつよきもあらんか。おろかといふは里の習ひ。中比巴屋のかほる。金魚を持遊にこね廻し。ちつと休せんと盆へならべしも。遊女の心には叶ひしか。彼奴となりて入込し賣女と。此里育の引込禿と同じやうに思ふは誤り。箕輪の庵にて源氏いせ物語やうの草紙をもよませ。又は山彦生田流も。其家〳〵の風にて仕込む事にぞ。諸流數品なれば。委く述るにいとまあらず。遊女と成ては。裂肉碎身の謀にて。人をたぶらかしおかしくないにも笑ひかなしくないにも淚そゝぐは。奉公大切世渡りに精を出すのなり。傾城を古狸野狐とおもふは。さりとは此方のおろかなる事。其心からは女郎に化さるゝも尤な

すじ歟。ぬしがしくじりなんしたら、かくまつて置いしやうとは。伏義神農以來のせりふ付。其客がのめつて死ふともかまはぬといふもふづまり。是を構つて手出ししよふなら。どんな時行ぬ女郎でも。公界十年の間なれば。二十人や三十人は有べし。殊更扇婦ほどにも時行ならば。いくら有ふもかぎりしられず。客に實なければ女郎に實なし。客に實あれば女郎に實あり。さりながら女郎買の功者斗はさのみ高名にもならず益なし。傾城に實を入る程我家業に實を入て勤たらば。親父の澁い顔もあま干にならふといへど。こいらもやつぱり久しいもの。そふいふ形氣ばかりあつてみな。さつぱりわからぬの始りさ。お先まつくらに行のもあれば。通うに買のもわかり。そふ行たがる人が有から。じつとしてゐるのもわかる。迚も女郎を買ならば。とのといわれて遊ぶがよしさ。といふて八を九に置て通ふがほんのわからぬの。とゞまる所をしつてとゞまるをつうとも粋とも通りものともいふべし。今つうといふはなまはんじやくをいふ。まづやぼの仕うち品よく。すいのしかた是に對す。當世の通。中にたとへ。其風もつぱらいきをこのむ。小そで二ツ紋。色黒とひにして。帶は菊壽。せみの羽ぞうり。きせるしんしやうよりは銀目おく。古渡さらさの大多葉粉入。鼻紙袋の金物ふちかしらのごとし。通なる物なきかともとむれば此品を出す。道具なければいきをつくす事あたはず。又言葉有。キマリ。ブチコロシタ。ウツ。ク。カク。テン。スジ。カブツタと一ツとして風雅らしきはなし。本だ

あたまのぎん出しは。正燈寺の西口にかゞやき。傘の蛇の目は。すしやのかんばんかと見まがひゑもんをなをす事茶をひく女郎にひとし。もてたといへば新造にかぎり。すきんせんをば大盡と心得。けいせいの身のうへをくるしめて遊ぶを。みづから大通とさわめ。無口者。内氣者のたぐひを。不通と名付て。足下に見くだせども。やほふつうといはるゝ人は目出たく。すいにはなりにくし。今時の大通は。あんずるより成がやすし。まつすぐな花の中の町を。人にとく事やすくおのれ行ふ事かたし。此道に師なく。非をうつものなし。人を笑ツて。われを笑はるゝをしらす。どふ理屈を云て見ても。ハテそれ〳〵に一ツづゝ能事があればこそ。色里のにぎやか。所詮数十年たつても。此論は。わかるまい。何事も紙づふゑ。お茶でもあがれと爾云

青樓惚多手買

全

序

夫レ弓取の僞を謀計と云釋門の僞を方辨と云市家の僞を懸直と云松位の僞を手管と云其僞から出た誠を採り異双樓の主人其誠から出た噓八百八町に通人といはれる東都男遊びの秘蜜(ママ)を穿鑿うその皮もて張る見世三味線の一部となして青樓惚多手買と名づけチン〳〵鴨の煎鍋の眞の手を顯す予もその意地穢の仲間へ入てチヨツト一トくち筆のつまみ喰をする㕝しかり

甘露庵のあるじ

山跡蜂滿がいふ

自序

寸も余れる所有り。尺も不足所有り。小判も不足壹兩壹分有り。南鐐も余れる四六有と。半過通に小册を著して。

猥に人情を迷すに不有。

ナゼトいつてみな。式部は石山の

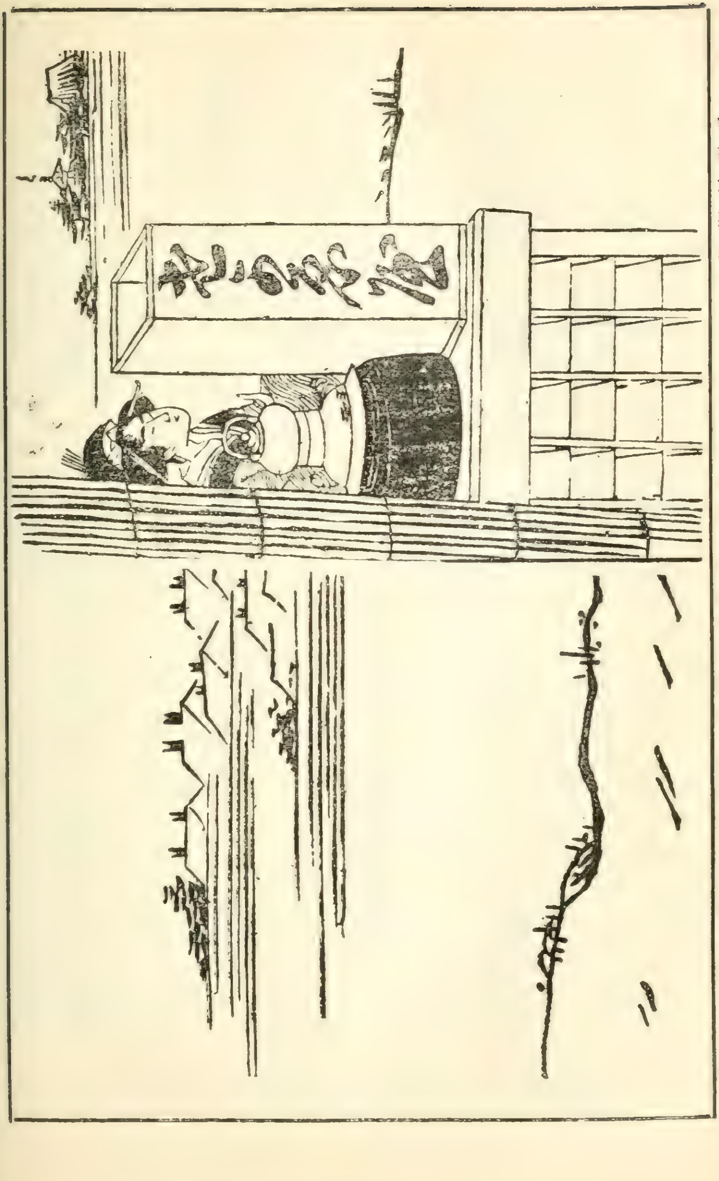
堅きに居て。まるき物語を

著述して。世人をしめし。

書寫山の大和尚は。傾城を

買て悟を開く。さればかたきし
契情を買なにもあらず。買に
かひやう有とは所謂女郎買
大罪にあらず。恍惚を以て
大罪といふも。是則佛の方辨に

地獄極樂有といつて老人を
誡。乳母の乞食蕃椒と名づけて
童子を誡む。則予モ晒落を
いつて靑表紙を知らしむる
教也ア、悟り給へ〳〵



目録

第一會

堤上の浮氣
愛敬者と名の立兒女には遊客多しと
忍ぶれど色に出にけり欵冬の煎ン茶

第二會

座敷の魂膽
手有者と名の立妓女には能客多しと
俤の替らで年のつもれかし青切の拏ン酒

第三會

閨中の兩寐
美婦者と名の立遊女らは色客多しと
深山木のその梢とは見へざりき御誂の送り物

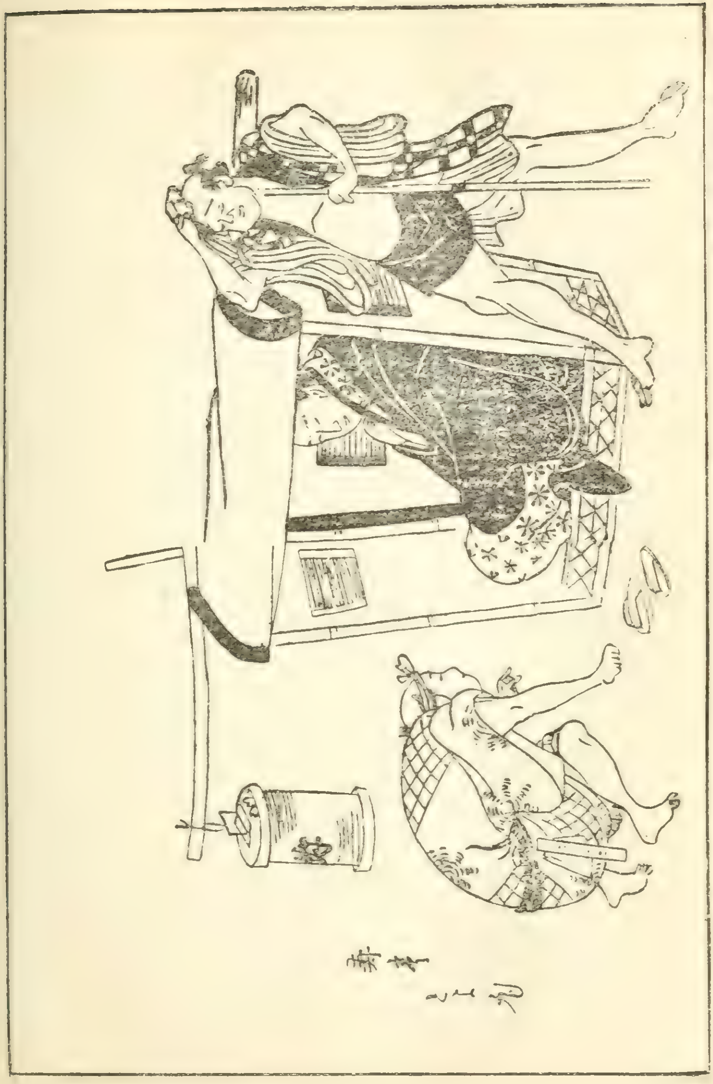
異双楼主人

鎮々鐵棒響簾子
㖒々俠客驚寝㺜
唑待履聲過廊下
人情誰識屛風中

青樓惚多手買

異双樓花咲戯作
甘露庵蜂滿校合

夕べに猪の牙に星を頂き朝に堤の霜を踏むも皆是契情買の常に而已に美食を喰ひ耳に美聲を聞初鰹はいつ出ても昨日喰たといひ流行唄はいつ唄つてもきのふ聞たといひ先へしるのを手柄とし月のかさを雨と悟れば朝の鳶を天氣と悟り牽頭の譽るをくれろと悟ればくろうでざんす はいはぬ色なる山吹の無心とさとり水道の水の朝湯へ這入り混沌の文がらを枕紙としてたのしみ又其中に有りとさとりても悟りがたきは人の常戀の闇路にまよふては雨の降日も雪の夜も眞乳しづんで棹のり込む今戸橋土手の相傘土手節や河東土佐ぶし豐後ぶし祭文しん内四つ竹節浄瑠璃板文時花哥おもひ〳〵の口すさみ鐘は上野か淺草かかわひ〳〵の小鳥も塒へかへる夕間ぐれ日本堤のにぎはひは旦那さんがた藝者衆出家侍諸商人年季者子息通不通花街をさしてぞ 大三重〽 行客の 傾城は月雪花の三ツ蒲團三一ぶいならぬ藏前の道中で霞みし出來合の駕籠と見へ（かご舁次郎作半てんの上に三尺帶おつ尻お片はしよりにぐつとはしより息杖を立てかたにあてた手ぬぐひは取て顏の汗をふいてゐる道々やかましくいはれたと見へてのつてる駕から貌を半分出し客）［源次兵衞］ナニセソウむつかしひ事アねへそんならモウおりてありくから



おろせ〳〵ふてへやつだト腹をたつ　跡棒　[與四郎]モシヱそなへに何も大きな事をおつしやる事はござりやせんふてへのほせへのとなんでも直をした所までめへりやせう　[源]ソレジヤによつてモウ五十づゝもやらうといふに　[治]おめへさんよくつもつてごらうじまし五拾や六十はわらじの錢にもなりアやいたしません　[源]そしていくらやりやアいゝのだへ　[與]いくらといつていつぺいのましてさへ下さりやア　[跡棒]さきほどからもふします通りどふぞお花をいたゞきとふござりますモシ旦那〳〵と

（むりやりにかついで行すぐる）　向ふから來る神道者せと物やきつぎ紅梅散らうのすけかへなべいかけ大工と屋根屋がさく料咄し地廻りすけんうらないしやこちらから行按摩(あんま)はり御膳むぎめし正月屋江戸見物の田舎ものかけはんつきと若イものちいさな聲で咄すのは逃げた女かねんあけかよくのくまだか夜そば賣軒をならべた水茶屋も夜分のていとあんどうへとぼすあかりの光りよりひかりといふはたほの事田丁の土手から四五軒目だるまの書いたその近所ふみ屋と名うての茶屋娘　（としごろやがて十八九

ばけさうな新造大たぶさにいつた奴島田も夕べ色男にこはされたと見へて丈長でかみあげなしてはげて落るやうに口紅をこくつけつげの水ぐしを落そうに横つちようの方へちよひとさし頭痛のまじないとみへてふしん紙のやうにくひさきがみな丸くして兩方の小びん先キへ張り物覺がよくなるとかなんとかいつて手ッ首の所を大白の糸でゆはへ金糸で何かわからぬむづかしい字をぬつた赤糸とき糸のまじつた黑じゆす帯のなりどめの所を半ゑりに

かけて藍立じまの青梅の着もゝに尻の方まで廻るはゞのひろいせいらつのかばいじまの前だれに蛇口にしたひぢりめんの紐をかけ黒もじのやうじを口でかみくだきながら今水をさしたとみへて左りの手でしんちうのやくはんを持右の手でひしやくを持て茶釜の中をかき廻しながら）[お糸]モシ忠さん見ぬふりはおわるうござりましやう（ト呼かけられて向ふがはを通る男廿四五うろ（こカ）の二才羽おりのうへにもへぎのふろしきへなにかかさばつた物を包でしよい手にさかい丁の中村やでかりたと見へて若衆や女のかつらに梅やもみぢのつくり花とけいぶつと見へて竹のかはに包だ物を手に下げて来り）[忠]おとさん此間は ト（這入口にたつ）[糸]チヤのつう（ちカ）ダネ忠さんソリヤアなんにしなさるヱ[忠]なんとよく似やつたろう（トかぶつてみせ）今夜鎌倉屋の夷講で内所におやばんがあるからそれでゐるのさ[糸]成程けふは二十五日さうだねへそして花扇屋にも狂言が有そうでさつき色々ないなむらや松の木や何やかや道具だてをもつていきやしたつけ[忠]ソウサタべも京町の三浦屋で子供芝居があつて團三郎や紋三が来て夕ぎり伊左衛門に五人切りをしたつけソリヤアさうとかゝさんはどうだいゝか[糸]アイありがとふござりますだいぶよふござりますアノ神田の徳さんは此頃はまいはん見かけますよサア一つお上り（ト茶をくんで出す）[忠]（一口のみながら）ムヽなにか壹丁目に色でも出来たそうさアノ男も後生樂な男だ（トはなすそのそば○よしずのかたわきに立て何かとりきまらぬ相談と見へぶつ／＼と二三人してはなしてゐる舟宿らしき男傳兵衛由へめいつた時きた辨けいじま

のひとへ物をいろあげをして袷にしたやつ尤どても仕立のひろ袖しゆす鬼とみせる鼠ぬめのはゞのせまき帯を〆の腕と鐵の棒を一所にしてうつたたいそうな金もの丶ついたまん中へきせるをさし込べに皮のさんどをさげ）［傳］そしておめへさんこんやあそこのうちへお出なさりやアすくなくつても二分なくつちやアなりやせん［幸助］（あいびろうどのおはせばおりの上に茶じまのふろしきに帳をつゝんだをしよい）ソリヤアなぜ［傳］マアうらでござりますから若い者に祝儀が壹歩そして今日紋日でござりますからちうやがつきますト（かんぜうをしてみせるある客と見えたり）○（そうさなどゝあはしてそばに立て居る男つれと見えてどぶ鼠のもめんぶとりのきもの丶上に黒なゝこの帯茶みぢんのあはせ羽おりこしに矢立をさしきぬ糸の黒ひぼを長くして書出しらしき書附を二ッ二ッゆはへつけたを前にぶらりとさげ藤くらのぞうりにも丶引のしりはしより兩國のけいこじやうるりで百ヅ丶出してはれ吉か碧吉に一段ヅ丶かたらせやうといふ男）［茂兵衛］それだによつてマアこんやアわしにつきやつて下さい［幸］ソウじやけれどもト（やつぱりきまらぬ事をいつてゐる）○（又こちらのこしかけだいの上にいきな男二三人こしをかけひとりはうへに立て帯をしめ直してゐながら）［平四郎］五十間の源兵衛が所へいつて一つのんでいかふじやァ有めへかあのかゝアもはたらきものだよノ［安］そうさあの女も辨天お升といつちやアひところははやつたものだがなんでも女と白魚は子持になつちやアくへねへかゝさんといふて花がもさめにけりだそれだからおとさんおまへいろをしめへぜへ

糸ばからしうござりますわたくしはいろのなんのといつて　平それでも此中堀の不己持屋の源と逃る所をかゝさんにめつかつたじやァねへか　糸きつゐしやれさ（トいゝながらゐんどうをあけて）アヽくれへあんどんだのふどふれでだ油がねへ（トそばにゐる男にむかひ）コ半さんごせうだからのアノ内へいつてどふぞ油をもつて來てくれろといつてくんねへ　半コリヤアおかたじけ　糸アレサごせうだからよ今きへるわなキツト　チツト〳〵ヽヽ男になれ〳〵角力せうぶ附〳〵かんざア〳〵

其　一

〽抑廓の始りは弓削の道鏡　勅を請ヶ始てくるわぞたてらるゝくるとはお客がくるゆゑに〇はやはらぐの心にてくるわと名附そめにけりエイホヽ大盡舞を見さいなア引エイホヽ大じんまアイチミサイナア引さてそのつウぎの大盡は金持や大藏がけふ居續の大さわぎ太鞁まつしやがさわぎたつ松が枝屋の表二階相方の傾城粂之助を手にいれてやう〳〵色男に成て夕べはもてたと見え何か心のうき〳〵したやうす粂之助は身ごしらへに行と見へてばんしんくめ川ふり新とめ川のだいこまつしやにとりまかれて正面に大あぐらをかいてゐる　牽頭持閣子旦那お久しぶりであなたの琴を一曲うけたまわりとふござります　大チレモ久しくうつちやつておいたからどう忘れをしたヨ　女げいどふぞ承りた

うござります 闇（少しひくい聲で）おめへ聞た事はあるめいが旦那のことはそれたかさんなざァはだしだ故人のお玉が池にせうさ けい どふぞねへ くめ川 コ　アノ子や組川さんにそふいつての梅がえさんのとこへいつてせんどのつめをちよつとかへしてくんなんしといつて取てきや 大 コヽつめはおれがもつてゐるよト（爪を出し袋を口びるにあてゆびへはめながら）なんにしやうの 闇 三味せんと六段を 六 あはせやうか けい ヨウござりませうト（三味せんをとつててうしを合せる） 大 チットまちやト（琴のてうしを合せ）サアト（三味せんのてうしをあはさせるそばの新造たばこを吸付て出す） 牽頭 此間しん堀でおうわさを申ましたつけ 大 ムヽおれもあすこへも大ぶさたサト（ことをひざのうへに引よせ）

△琴テンツトンチヤントきつかけにて道具廻る。

其　三

三下り〽いつまでぐさのいつまでかなまなかま見へ物思ふこなたの座敷は神田邊馬具清といふ色男どふいふ風の吹たやら二世とかはせし粂之助につき出され哥もふるてや八郎兵衛じやァねへが善かあくかの一トロ商内今宵もこゝへ名代の廻し座敷の床の上白か黑かのへんじ次第でいきてゐぬ氣の淸十郎大藏が來て居るも兼ての承知粂之助も物いはずみのとあふみの寐物語りに引かへて　あはせ

の長ざせる通らぬも又すひならぬやほな文句をかきならべ大藏方へおくつたるしね死なふとのこんたん文をどふして取たか清十郎うちぶところからほふり出す粂之助は氣もつかず取あげて見てびつくりされどもしらぬ顔つきにて [粂]せいさんこれがどふしたへ [清]モウイ丶かげんに [粂]いへとおつせへすのかへ [清]しれた事よ用があるのはなしがあるのと呼びつゝつて [粂]それが氣に入いせんかへ [清]ム丶デヱブおつな木よみをするノナニカこん夜よびによこしたのはきれてくれろといふ事か [粂]アイサマアそんなものさモシヱお斷しもふすもおきのどくざんすがねわたくしはちつとしたわけでアノ大藏さんの名をト(きいてしやくにあたりしがこらへて) [清]ム丶ほつたといふ事かいゝわさそれもおれがためだとおもへば腹もたゝねへなぜといつて見やなんといつてもアノ大藏は當時の大盡夜具はおろかさんだんごろひも出來やうし手めへせへよくなればうれしいとこそ思へなにしにはらを立ものか [粂]ナニサおめへさんの爲もしあきいした夫ニ金づくでもおつせんしホンニしみ〴〵初メのうちはいやみなにくらしいつらの大キいすかねへ客人だと思いしたがどふいふ事かだん〴〵とあつちに情を立られていやだとおもふ黒い顔もいやみな風もいきに見へやほどけつくかはゆく成りわたしやほんとに大さんに心中立て [清]ほつたのかソリヤアいゝがさぞいたかつたろうの [粂]イ丶ヱサまだ此上にぬしゆへならゆびでもつめでもはがす氣さマアちよつとごろふじいし(トうでをまくつてみせる清十郎は

よもやとおもひの外此ほりものをみるよりも）［清］今まではどふいふ狂言かと思つて居たがおもひの外だん／＼けふのしだらといゝいよ／＼心がくさつたなそふとは知らずけふも又さつた女房の内のめへをかくれて通たを内の小僧が見付たやらおなつの妹のお秋がかけて來ておれにむかつていふ事にやァどふいふゐんかしらねへがあねさんのお夏さんがおめへの事を氣にやんであと月のはじめから又ぶら／＼と床につきわづらつて居るからどふぞあつてくれろといはれたその時はかわひそふにとがもねへ女房をさつたも手めへ故とは思へどもこつちの事が氣になるゆへけふはいそぎの用があるあすかあさつていかふからとつれなくいつて立別れそれからすぐに淺草のくはん音さまへめゐつてもてめへの事より手を合せ外におがむのたのむのとはこれ程らねへ身のねがひそれにやァ引かへ［粂］アイサほんとに大さんに惚いしたのさマァよくつもつてもごろうじいしよしやおめへさんが何と思ひなんしてもまだ五年といふ年がありいすから其身のうへでどふ成ルものでざんす［清］しれた事よそれだから勘當せへすめば五年が十年でもどふとら成ル といふ事だそのかんどうのおこりといへばアノ大切な刀の紛失それもたれゆへ櫻姫じやァねへがうぬにうつゝをぬかしたばつかり［粂］（わらひながら）ばからしふざんすわなその刀とやらほう丁とやらのせんぎもしい出しなんすのもいつの事だか知れもしいせんにうか／＼月日をおくろうよりおめへさんにせへきれてしまへばアノ大さんの所へゆき御新

造さんといはれいすはな 清 そふいふ氣ならぞふさもねへのちともいはねへたつた今すつぱりきれてのいてやらふそのかはりには今見ろよ勘當がゆりせへすりやあなんぼ顔が美しくつてもてめへのやうなくさつた女はおんまたきにもよせつけねへ大門口をしやんと打て吉原中の女郎をあげ大盡さまともてはやされてうあしの高蒔繪二十五さいに七十三菜二の膳つきの大だい盡金箔の付た色男になつて見せるわへその時に京町のすみにござる稲荷さまじやアねへがあやまつた九郎助様とぬかしてもふくすいほんにやアもどらねへ 条 清さんでへぶむつかしいふくせいとやらふくすいとやら何もそんなにむづかしい事はいりいせんきれてしまうといふことさへさつぱり聞きやア外になんにもいりいせんあとにひとりでせい出して巻物をおならべなんしと（ついと立てゆかふとするすそをふまへて） 清十郎 モウ了簡がと（引寄る条之助はどつかり下にすはり） 条 （なみだ聲にて）なる程腹の立もむりとは思ふいゝせんが夫もすへにはわかりいすわナ 清 わかるもへちまもゐるものかなんぼ今此やうな形になつてもおれも馬具屋の清十郎だ馬具清といはれちやア人にしられた此おれによふも恥つらかゝせたな

ト（条之助がゑりもとをひつつかんでひざの元へ引寄る） 条 モウ〱そんならなんにももふしいせんからたゝくともころすともかつてになんし又わたくしもぬしの手にかゝつて死ねば本望ざんす 清 そのころし文句も聞あきた毒を喰はゞ皿とやらかわいさあまつてにくさが百ばい坊主がにくけりやけさまで

とアノばんしんの粂川まで同じやうにひとつに成て（かゝる所へばんしんくめ川中の丁へ客人をおくりかへりびやうぶをあけてこの體を見てびつくりして）[くめ川]コレ清さんかならずはやまりなんすなへ（ト大いきをきりながら）是さへありやアおめへさんのねがひもぜうじゆいたしいせうト（つゝみしものをとり出せば清十郎はなにかそれともしらかみのつゝみをとけば）[清]コリヤアどふして此金はト（びつくりする）[粂]それでうたがひはれいしたかへ[川]わけを知らねば清さんのせき込なんすももつともさこふいふわけをはじめからうちあけねへがわたしがあやまり[粂]イヽエそれだともふしいしてもやくそくしてもまちがふは[清]金のわらじでさがしても二人りともねへはくつきの粂之助じやアネエ女房どもなんにもいはねへこれさへあれば[川]かんどうもゆりいすかへ[清]勘どう所か大せつな刀も手にいり[粂]シテその跡は[清]コレかふと耳に口[粂]そんならせむどのはなしの通り[清]シイコリヤチヨンチヨン〳〵〳〵

跋

改正細見未解野暮輔の身分は渾沌として全盛買の世界をしらずや其趣清るものは青樓に昇て座鋪持に馴染無心の文に逃るものは降れて鹽花と成る中に通神あり形編笠に卷羽織名付て御國言葉の客人と申そも侍乳しづんで木梢のり込山谷堀土手節以來張と意氣地の二柱三蒲團の上に天のさかづきもて手管に口舌空言か實か探合たる色男ころじまより豐吉原の中の町天神七軒の青簾地神五町の大屋たいに小見勢西河岸むき〳〵の月雪花の大紋日大門口から水戸尻まで藝者の穴探にさかし嗅計にはかりたるを青樓惚多手買と題して青海原に押はなつことの如く太祝詞すこしも相違は中臣祓に續立たる例の神やまとの蜂滿がうしろに不拍子の太鼓を打て筆を舞せるは一閑亭のあるじ也と謹敬白

青楼惚多手買（せいろうほたてがい）

ねまきまで半ゑり懸てと云女房きどりしんの手のこんたん本

同（せいろう）老花飛美（ろうくわとんび）

余本に類ひなき新造買の新手を穿ちし本なり

同（せいろう）婦寐枕（ふねまくら）

通俗雲談

全

自序

我嘗思へらく宋玉が好色の賦は放蕩を教るに似て反て色情を戒るの端ならん夫文中の通は神通の通にあらず通子の通にして一名をとふりものと呼ぶ亦俗は眞俗の俗にあらずして俗物の俗也一名をきいたふうといふ其通と俗との高低なること水道尻の火の見と常燈の如し於爰通と俗との物語をうつし名て通俗雲談といふこと爾り

雲雀亭

春磨㊞

總目

○發端
○其二
○其三

桂布
銀蝶
根川
太志
豊丸画

發端

夫女淫の甚敷事は往古天竺におゐて五百の登客は通を失ふて地に落一角仙人は扇陀羅女が爲に行法を破れりとかやむべなる哉美人の簪には追剝のたけきも是がためにはがねるにあらずや何ぞ通子これに迷はざらん朝に千金の角屋敷を棒にふり夕に店下に伏事をいとふべき迷といふその源をたづぬれば

○爰に山の宿かしに軒をならべしその中に簾をかけし一トかまへは中の町の茶や津田屋平藏がかり宅と見へて一人の大盡幇閑末社もろともに大酒宴の座敷の體 [客桂布]（よわひ廿八九と見へせいひくく色くろくして大のぶおとこ隨分女郎にいやがられ相なる風俗にて少しぶざめく方なれど手前の氣では一かどの色男通り者の氣どりあげきせるにて煙草のみながらいろいしやう付は諸君子外の本を見てさつして下されかし）これ／＼馬谷ナニト此間は石子が赤松屋へ行黑十が近江やへゆくそふだが　中の戰ひはどふだの [馬合]（酒よほど廻りしと見へて鼻のあなたくん／＼としながら）いづれもおもしろき事だそふでござります [上州叉]（酒をのみおわり雲閣へさす）雲閣公は壹ツのみ給へ [雲閣]（右の手をおかしくしながら）これはひ

らにおさへよふ【上州又】木公一ツおあいをたのもふ【木葛】あいとのむ（この中桂布は馬合伯老をあいてに女郎の咄しなしている此所酒宴の體おもしろきしやれあれども諸本にゆづりてこゝにりやくす）【女房】もし桂布様此間の御やくそくの物を【桂布】ム丶承知〳〵ソレハ馬合にいゝ付ておいたから馬合がよいよふにするだらふナア馬合【馬合】あしたわたしがもつてきやせう【伯老】モフ松樓へいく事でござりませう【桂布】ウ丶そふしやうかしかし大きにわすれたことがあるわへおれがこつちへくる時は太志もいつしよにつれてくるはづだがついわすれたさぞ腹を立ているだろうコレ雲かくどふぞはやくいつてつれて來てくれろ【雲かく】アイ〳〵しやうちと（いそひで出ゆく）【木かつ】太志さんはどふゆうわけで今日は御同道なさりません【桂布】其事よきのふ約束には今日こつちへくるはづだから一所にこよふといつたがついわすれてしらせなんだのよ【馬合】それはわるひ事をなされたのさぞ腹を立ていなさるだらう【伯老】そのうへ松樓へしんぞうかひのつきあいにおいでなされる約束ではござりませぬか【桂布】そふだけれどもわすれたからしかたがねへ（トいふ所へおもてな蘭示が通りかゝり見付けて内へはいり）【蘭示】コレハ〳〵桂布さまこの間はよふ私をおまきなされましたね時に今日は松樓のおせかいでござりますか【桂布】ム丶此間はどふもつれがあつたからだそのかわりに今日は松賀屋へあいべ【蘭示】ハイ〳〵時に取まぎれて御あいさつもいたしませなんだコレハ〳〵何レもさまよふこそ御出なされまし

た 皆々 アイ〳〵 女房 蘭示さん一ツのみな 蘭示 アイ〳〵これはありがたうござります 桂布 ときに亭主はまだかへらぬか 女房 今日は虎の門のほうへまいりましたホンニもふかへりさふなものでござります 桂布 モフいかふそして富士太夫をよびにやつてくれろついでに文四郎も 女房 ハイ〳〵かしこまりました 伯老 蘭公此あいだのはなしはどふだ 蘭示 チツトそれはと口に手（くわんおんのくれ六ツのかねゴン〳〵〳〵）皆々 桂布さまサア松樓へまゐりませう 女房 さよふならば明あさ 桂布 亭主がかへつたらはやくよこせ 女房 ハイ〳〵これたれぞお付まふさぬか 男 ハイ〳〵 上州又 桂布様私はさつきのりくつでござりますからこれよりおいとまを 桂布 ムヽよし〳〵サアみなこい（トみな〳〵打つれどや〳〵と出てゆく）

其二

○百夜もひとりまろ寐せんとはと宗貞のゑいぜしも誠に風月のこゝろばせをのべしならん日本堤のしらつゆと見かへり柳の糸ゆふを五十のあいだにむすびとめその中ごろにしつらいしは松賀屋の假宅と見へて二階はとり〴〵さま〴〵のあそびあるその中に一トきわ目だつ座敷のやうす客は帝王のごとく末社は諸侯のごとく娼妓は后妃に似たりそも傾城根川がそのよそほひ（とし廿一二歳眉ハ如ニ新月ニ肌ハ

如ニ玉雪ニ腰ハ如ニ柳糸ニ齒ハ如ニ烏貝ニ一顧惑ニ洛陽ニ降ニ周室ニそのふぜいわんかたなく黒じゆすにすそぬいのうちかけあらいそ純子のへりとりむくなきて座したるありさま天人のゐうがふかとうたがわる）〔富上太夫〕（男げえしや）へわかれのなんだつばさをそめもみぢのはしともいゝつたふ下略 〔桂布〕太夫ひとつのめ 〔富士太夫〕ハイ〳〵いたゞきませう 〔根川〕もしヱ馬合さんへぬしやアいつそ酔なんしたやうでおす 〔馬合〕ナニわたしがゐふているものか 〔毛川〕それでもいつそ出しきつてゐながらよ 〔木葛〕ゐふたといへばわたくしがこゝのやける晩にごふぎにゐふていまして吉原に火事があるときいて急にかけ出して藏まへでころびまして膝を大きにけがをいたしました 〔伯老〕わたしやアあのばんに玉屋にいたつけがの火事ときいてきもをつぶしてかけ出して内へかへるやつさそして又こつちへかけて來ました 〔根川〕ソレハきついおどろきやうでおすね 〔茶や男〕アノ晩にはわたくし共も大きにさわぎました（かゝる所へかむろ） 〔竹の〕（來りて根川の耳へ口をよせ何かさゝやきてゆく） 〔根川〕毛川さんかのものが來たからちよツといつてきいすヨ 〔毛川〕アイ〳〵 〔蘭示〕おいらんは何の御用でおいでなさりました 〔毛川〕いまちつと用の人がきたからおいでなんしたぢきにおいでなんすヨ 〔桂布〕蘭示うつちやつておけくる時はくるわへ（トすこしかんしやくかゝる所へ） 〔文四郎〕これは〳〵桂布さま先ほどは御人でござりましたがかの千葉めが兵庫屋へまいりまして出ておりましたから大きにおそくなりました 〔木葛〕イヤこれは文

印でへぶおそひの 富士太夫 ちよくし三度におよんだものをはやく來はせいで 文四郎 その儀はみな様まつぴらあやまり入ました 禿いろね（きたり）アノおいらんでおつせへスナゼわたくしの客人はつれて來ておくんなんせんト 桂布 コレ／＼おいらんにそふいつてくれ此間につれて來てあげませうそしてよろしく申てくれ いろね（アイとゆく） 馬合 此間喜八がね聖天下へ料理茶やを出しやしたがねそいつがおかしうござへますたとへおなじみの客人でもしうぎはおことわりといふわけだそふでござりますそれでも無理にしうぎをやる客人があるとそのかき付の内を引さふでござりますそこでやすいとつてみんなくいにいくそふでござります 伯老 そのおつかぶせに聖天町へも八百やといふ見せが出たそふだがこいつも安いさふだ 蘭示 もし桂布様みんな引つれの喜八が所へ明日はお出なさりませぬか 桂布 ムヽそいつはおもしろかろふあした歸りがけにいこふ／＼（トいふ所へ） 川波 來りモシヱ／＼桂布さんへいまゝなんだか大聲の客人で太志さんとやらが來いしたヨ 桂布 ムヽ太志がきたか 木葛 太志さんがお出なすつたか腹を立て來はなさらぬか 川波 どふだかそれはしりいせん（ト出てゆくかゝる所へ雲かくは太志をつれてきたり二階へあがりながら） 雪閣 ソフおめへのやうに腹を立なさらずにマアお出なさいましな 太志（とし廿四五歳と見へ色しろくせいひくきかた）いゝわいおれが桂布にあへばいふ事があるわへ（トせき込で入來る） 桂布 コレハ／＼太志今日は約束だからしらせるのだがついわ

すれたかんにんしてくれろ　皆々　コレハ太志さまお早く御出なされました　茶や女　御おくりもふしたからおちアもふかへるヨ　男　チイ〳〵よし〳〵（此うち太志はみな〳〵のあいさつもかまわず椎布がかほなしげ〳〵と見て）　太志　コレ椎布能きけよあれほどきのふかたく約束をしておいてなぜまいてしらせてくれねへいゝかとおもつて扇箱のふるいのではあるめへしそふやすくしてくれることはねへ　椎布　何そふゆうわけではない　太志　そうだのこうだのと車ひきのうわごとじやアあるめへし大キなさる唐人じやア　ねへかたゞしおいらとあるくとふうでもわるくなるかマアなるにもせよなるかならぬかうぬがつらをみやアがれ色のくろいことは金太郎にひまをだされた熊といふつらだア通物だのひかりものだのと芝居の人だまじやアあるめへしそしてわりやア河東都の太夫をよんでかたらせれば通者の氣だろふが河東ぶしはどこから始てどこでおさまり都ぶしはどこではじまつてどこでおさまるといふ事をしつているかへコノ太志さまなんぞはぎやつと生れると大門をくゞつてすいからいあまいにがひの五味のあじをかみわけてお出なさらアそれでさへ此わけがしれねへものをきいたふうなやろうではねへか　椎布　わりやアなんだわからねへ本よみをするなわるいからわるいとあやまるに唐人だのやろうだのとそりやアあんまりつよすぎるぜへ　太志　のろまが楊弓をひきやアしめへしつよ過るもすさまじいたわごとをぬかすとよこそつほうを張まけるぜへ　伯老　なんだなおめへがたはそふけんくわをする

事はねへいゝかげんにしなせへしな〔太志〕やかましいわへ此かぼちや坊主めわいらがしつたこつちやアねへだまつていやアがれこれへ桂布わりやア通者のきだろふがナ通人だといふものはひとりもねへわへおそらく江戸中の通者わ文魚が死でこのかたはし場の石子石町の雷せん藏前でわナ東里黒十文星信夕調宇覺嘉小田原町の戀東八町堀の五方神田の遊夕松園萬喜文東向河卯柳中之鄕の機遊本鄕の左月品川もみんな死でいまではおくまと草嘉斗りだわへまだいけへことあるけれどむかふでおれをしらねへのは向ふのはぢよおれが向ふをしらねへのはこつちのはぢではねへわへおそらく此太志様をしらねへものは江戸ひろしといへどもねへわへわいらもおれが名をかいて守にしろ厄よけになるわへ〔馬合〕コレ桂布さんおめへもまたたなからおちただるまではあるめへしそふつぶれていることはねへ太志さんも太志さんだそのよふに通人だの唐人だのと瀬戸物やじやアあるめへしそうならべたてることはねへわな（トそばからたきつける）〔太志〕なんだこのやろうめはと（少し大ごへに成）うぬがつらをみやアがれやり屋のかんなといふつらだ〔桂布〕なんだこいつはいわせておきやア付あがりのするやろうだと（ぶつてかゝれば）〔太志〕（ナンダと同じく立あがりて打かゝればみな〳〵おどろき惣立に成てさわぐゆへ井はびんとわれひらのふたは二ツにふみわられ新造はきもをつぶしてにげゆき茶屋男はまご〳〵とおそれ富士太夫は三味せんをしまつて下へゆけば馬合木葛伯老雲閣歯示文四郎双方へわかれ兩人をとりさへしづむる兩人はたゞなんの

〳〵とばかりいつている）［若者伊兵衛］（下よりあがり來り）コレはあなたがたどふゆう事でござります
ちつとおしづかになされましと（若者はじめ根川毛川新造やり手迄來りいろ〳〵いひなだめすかしてソレ〳〵
のざしきへつれてゆく）［桂布］あいつは此くらいなやつこいつは此位(くらい)のやつと直打を定めて付合てやれ
ばいゝかとおもつておかへあがつたかつぱをみるよふにぎすつかアするやろうだ　［根川］ヨウおすわな
ばかだとおもつておかまひなんすな　［毛川］モウいゝかげんにしておやすみなんしと（せうじをばつたり
たてゝ出てゆくかゝる所えみな〳〵太志をやう〳〵になだめてれかしてきたり）［皆々］桂布さまもふ御休なさ
れましたか明朝(あつてう)御日にかゝりませう　［桂布］ムヽいつてねたまへ〳〵　［馬合］おいらんお休なさりまし
［根川］アイどなたもおやすみなんし　［皆々］ハイ〳〵と出てゆく此うち桂布はたゞ無言にてまじ〳〵としてい
る）［根川］もしへもふ　なんせんかへ　［桂布］ムヽ　よふがしかしてめへにきくことがある　［根川］なん
でおすへ　［桂布］外(ほか)のことでもねへが此の間神田のほうからくる銀蝶(ぎんてう)といふきやくにてめへがほれてし
んじつをつくすといふうわさだがそのぎんてうといふきやくはどんな男だ　［根川］ぬしもとんだことを
いゝなんすわたしがどふしてそうゆふわけがあるものでおすか

其　三

根川が契りし客は　銀蝶

（とし三十くらい色うすぐろくにがみばしつた色おとこ名代しんぞうと噺しをしている）　コウおいらんの今夜の客はかの維新とやらか　きせ波　アイサいつそすかねへ客人でおす　銀蝶　それでもおいらんはほれているだらう　きせ波　そんなことをおいゝなんすとおいらんにいつつけるによ（といふ所へかむろ竹のきたり）　竹の　アノおいらんでおつせへすいまにまいりますからちつとまつていておくんなんしとさ　銀蝶　くそをくらへとそふいへ　竹の　（アイといでてゆく）　きせ波　いまにおいらんがおいでなんすから寐ておいでなんし　銀蝶　何あのばかあまにかまうものかと　（いふところへ）　根川　おふきに待なんしたろうきせ波さんあつちのざしきへいつておくんなんし　きせ波　（アイと出てゆく）　根川　（せうじをしめて）もふねなんしたかへ　（とたばこを一ぷくのみすいつけて出す）　銀蝶　はかをいへ此まわしどこのうへに獅子の香爐じやアあるめへし鼻からけぶばかり出してまつて居るわへ　（下わらいながらい

ふ）〔根川〕にくらしゐ口でおす　（へ　かゝる）〔銀蝶〕よせへいてへわへそりやアそふと昨日のふみはとゞいたか　〔根川〕アイとゞきゐしたその文でおもひだしたことがある一寸おきゝなんしけさぬしの所とかゝさんの所へやろうとおもつてふみをかいて竹のにわたして文使にやつてくれろといつたら竹のがとりちがへてぬしのところへやる文をかゝさんの所へやつたらかゝさんがそのふみを見るときもをつぶしてまだその使のかへらぬうちにこつちへきてわたしがかほゝみるとこゝの部屋でいつそなきゐしたわな　どふゆうわけだときゐたらかゝさんのいふには十一日の日にとつさんが來たときてめへのかほつきがわるかつたとうちへかへつてはなしたからあんじている所へけふこうゆふふみがきたからきもをつぶしてあいにきたとぬしのところへやる文を出しいしたからわたしもきもをつぶして竹野にきゐたらとりちがへてやりいしたとさ　どふも子供のことだからしかたはなしたゞうつむひていたらかゝさんがその文をよんでわたしにいふにはかならずたんきなことをしてくれるなてめへがいまふりよの事でもしだすとおいらはどふもこふもならぬと涙ぐみていゝしたからわたしもぐつとふさいできたけれどもかゝさんの氣をやすませやうとおもつてなにそふゆう譯ではおすせんといつたらかゝさんがゆうにはうそをいへみんなおれがしつている神田からくる銀さんといふ客にてめへがほれて死ね死のふといふ中だといふ事をきひたれどアヽたのしみあればくるしみあるといふ

世の中まして若ひものゝ事なればそうゆふわけもあるだろうとおもつていたらばなんの事だ此文にはとてもあわれずばかねての約束の通り未來でそわふなどゝいふ文言かくしてもかくされねへ事だずいぶんそりやアそわれぬこともあるめへから必ずたんきな事を出してくれるなと涙をながしていゝしたからあんじなさんなといつてけへしたがまだくろうだそうで毛川さんに迄たのんでいきるしたわな [銀蝶]ムヽそれはとんだまちげへをしたかゝさんもなくにはなかれずさぞかなしかつたろうこれをおもへば雨がふろうがやりがふろうがうちの首尾をばそんじよそことしらへて出て來るのをお袋はうちにいてあんじくらし風をひかぬやうにしろなんのとお慈悲にあまへてつきあがりたゞゆめの間もわするゝひまなくうつら〳〵とくらすのはこうゆう不孝なことはどふしてあるめへ（ト涙をほろりとこぼす） [根川]ほんにそういへばぬしのかゝさんの病氣はいゝかへわたしやあいつそくろうになつてならねへヨ [銀蝶]そのことよおれがこう馬鹿をつくすゆへおふくろの病氣はだん〳〵おもり身上はかるくなるしいつそ死んでもしまいてへと（うつむいてふさいでいる） [根川]わたしとてもそのとをりとつさんやかゝさんにくろうをかけるもみんなぬしゆへのことゝおもへばなんともおつせんさりながらさりし初會のその日よりぬしのやうなおとこはあるまいとおもひつめたるわたしがむねのうちさつしておくんなんしと（涙をほろ〳〵とながす折からむかふざしきの大一座とみへて都太夫が淨るり文治郎

が三味せんと見へて）　夕がすみ〽**千も二千も三千もせかいにひとりの男ぞとたのしむ中のわかみどり**　銀蝶 何ごともぜんせの約そくづくとあきらめてくれろへ〽**たつといふ名もいんぐわどし** 根川 うるもつらいもうそつくも身からなせる事とおもひかへして見てもかた時わすれやらぬはぬしの事此よふに迷ていゐものをいつそころして未來でそつておくんなんしョ〽**うれしひかなしひくちおしひだまされた身はなにがなるおもひやつてとうつゝにも　わすれぬ姿ゑそらごと**（向ふざしきの客のこへとみへて太夫モウやめろ〳〵といふこへとともに三味せんはおわりてひつそりとする）銀蝶

根川 アイそれはしれた事これ迄せわになつた旦那やおかみさんのおんもかき 銀蝶 残りし五年のねんもつとめずおや〳〵のなげきもすてゝいつしよに死ぬ心か 根川 うたがひぶかひたとへならくへおつるとも未來はかわらぬふうふでおすよ 銀蝶 それはしれた事だあんじることはねへ 根川 それはうれしうおすしかしながらぬしのかゝさんがさぞおなきなんすでおつせう 銀蝶

通言東至船

全

品目

○うまくかゝ禮(れ)るだん

○うまく咄(はな)せるだん

○中(ちう)ゥ腹(はら)のだん

序

十路盤の玉に一リン一毛の微塵がつもつて山々の聞酒から美りん酒の無満喜文句に不通な堅仁も番州の池田はぐつと生中と

カノジレツテイヨの美言
に心を木綿屋と伊丹ても
元が手事の似言里酒酢と
は醬油の幕と井筒元來好
道なれば七ツン目位で足
もとはよろく

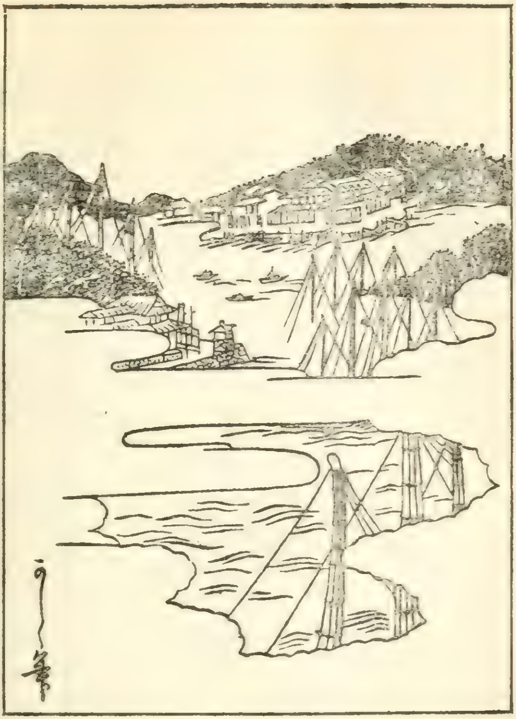
南東住

東來山人述

叶 福助

春

山東に壽まいおわす京ば
しの傳よりあんばいよし
に述やらんと仕入のない
知惠袋のそこをはたいて諸作者
の非言をかへりみずめつぽうか
いニ四方のヨイ〳〵と與而已



水上浮レ船垂レ釣魚掛釣人待レ之外目ニ馬鹿ト見ル　娼女浮レ涙垂レ頸客欺テ内心舌ヲ出ス客ノ後悔役ニ不レ立　幸抱仁ハ亥刻前ニ愁船止テ亥刻待ニ船頭不レ知レ愁

猪牙亭主人

棧橋で

ひねる

夫息子を見る事親にしかずと毛唐人立の云れしが九十六文を二ツにわれと言るれば惣身より玉のごとくなる汗を流しこれをわらんとす百日を十六にわれと言るゝ時は糠袋にて顔を洗し湯氣に上つて黄色な潮來に湯番をおそれさせると松坂の御仕著も萠黄裏が不通と醉道の眞水に洒しの手ぬぐい肩にかけ今湯がへりといふ身で横町をまがればヤア吉さんどちらへ（トいふはいつものりつけの舟宿どの亭主八兵衞かいものにゆくと見へはしたぜになさげ）［吉］ウヽ何方へも行きやしねヱぬしが所へゆく外者居やしねへか［八］イヽヱお梅ばかりで御座りますおいでなされませ（この梅といふは女房の事也）［吉］ヨシヨシはやく行て來さつし［八］ハイ早速で御座ります（ト八はにがわらいしてすこしいそぎゆく）［吉］どふだお梅さんお一人でさぞおさむしかろう［梅］ヤア吉さんよく御出なされましたとんだおひさしいねヱ一年も御目にかゝらねヱよふで御座りますよ（トじようずないゝながら茶なくみたばこぼんなど持きたる）［吉］マタ御手事か世時のヱヽ［梅］イヽエナア誠意にさア夫はそふと今夜は御一人でどこへお出なされました［吉］おれか何方へも行きやアしねへのさすこし面白くねへから出かけたアなんぞ能事があらうじやねヱか［梅］夫りやアねお中さんの事でも御氣にかゝるので御ざりましやうおまへさんおもいが取付ますよ［吉］うさアねへ（是はほかになじみありしがちつとしたりくつにてきれしと見へるなり）［八］アヽおかしいやつらだ［吉］なんだはちかう［八］イヱサ子供が喧嘩さイヤ吉さんへイマ萬八の前で豐さんに御

日にかゝりましたらおめヱさんの御はなしがありやしたゆへ今御出なされましたら事申ましたら跡から行から待して呉ろとおつしやりました大方今御出なさるゝで御座りましよう [吉]ハア豐公にも此ごろは久しくおわねへが久しぶりで附やおふかはやく來ればゐイ [八]ハイ早速にゆくとおつしやりました [吉]そんなら船をこしらへねヱか [八]ハイ屋根にいたしましようか [吉]ナニ猪牙でいゝ [八]夫では寒う御座りましよ [吉]アヽイヤヨシ／＼その寒い日におふも修行だ（トわるくしやれるも是屋根にてはらちがあかぬゆへちつともはやくゆきたい心也）[八]ハイ左樣なら（トかもいのうへからろをおろしうは敷をかゝへかしへゆく。ときに豐はきうびやう人のつかいといふかほにていそぎ來る）[豐]ヤア吉さんお待どふで蟻のおもひが天とやら久しぶりでの御同船うれしいねの太郎は八千歳ハナント新しかろふねヱ（トあくじやれなどいゝきいたふふなしたがりなんぞといつたら中の字ないおふといふ風と見へたり）お梅さんお久しぶりだどふ御座りやす [梅]おや／＼豐さんどふなされました氣づよい御見かぎりだねモウ氣廻よそうじやアねへが先度の一件を親王がしりのあぶなく芝居の毛氈となる所よ夫でもほうべんで遁さ [梅]左樣さねヱそんなおはなしを承りましたどふなさつたやらとおあんじ申ましたけれども御きゝ申こともならずおうわさばかりいたしました（トはなすうちに亭主は船をこしらへきたりて）[八]中御船が出來ました [二人]チイ（トいつて立いでければ）[梅]さよふならばおはよふ（トいふ内に二人は船にのりし跡を見まは

し片付たり）　[二人]（うれしそふに船にかけこみ）[二人]コウ八橋《はつやはし》のうへはよしかへ（トいふはいなりばしのうへな人どふり多くあるゆへもしさしでもあるかとおもふ心也）[八]ハイおかぶりなされませ　[二人]氣拭《きんく》（掛カ）をいふぜへ（是は人めにかゝらぬよふにふとんなかぶるなりよくあるでんなり▲ほどなく舟も沖へいで番所へかゝりけれどもしらかわ夜舟ゴッ〳〵のいびきにてかしわもちのごろねも夜ぶんゆへしらぬ也）[吉]コウあれ見な大《おふ》きなうなぎだの　[豐]ドレほんにうまそうだねエ　[吉]ナニありやア生《なま》だものを　[豐]ありやアうなぎつりだおいらァつられにゆくのだきついちげいだの（下いろ〳〵むだないふうちはや新千場の九間の茶屋みへければあだないたこに心はうてふてん。ちつともはやくいきていこんだのといふうちもはや古千場ふる岡のさんばしへつきければ）[　]古岡《ふるをか》〳〵のこへに　[女]吉さん豐さんよふ御出《いで》　ト（おさだまりのおあぶのふでおもて見とふしへゆくほどなく舟頭の八もきたり女などみな〳〵きたりなれ〳〵しきせりふにて。つまらぬしやれないゝ地口ないふ）〽摂座敷にて酒中の御定りのしやれやら地口《ぢぐち》やら爰《こゝ》に略《りやく》す　〽最早《もはや》座敷も引汐口《ひきしほぐち》にて音《ね》のわるい鐘《かね》ボン〳〵〳〵にみな〳〵おどろきサア御休《やすみ》と行にけり（こゝにて二人のあいかたの女も身じまいする内にそれ〴〵にとこもまわりみな〳〵ねどころに入ければ子どもは茶を持きたりさあ〳〵おやすみと行ける二人の合方の女ろうサアおやすみとしやうじぴつしやり立切て）。[哥]モシへ吉さん誠《ほん》意《とふ》にねなはいましよ（トたばこ吸つけさしいだす）[吉]べらぼうめほんとふにね〳〵いでうそにねる

ものかァ [哥]イヽヱサ帯をしていなはるからよ [吉]しれた事さ六月だとい [哥]ヱヽにくらしいよと
[吉]チイト御免なせへ何にもくい付れるよふなとがアしねへ（ト何かむなざんよふでもするようす哥は吉がいつものよふでなきゆへ） [哥]ヲシヱお前さん今夜はどふかしなはいましたねへ [吉]イヽヱどふもしねへのさ（トすこしかたゝでる） [哥]夫でもお前さんおかしいてふしだものを [吉]しれた事さそつちからおかしくするのだものを（トきせるではいふきたばつたり） [哥]わたいがなにをおかしくしやしたおきかせなはいまし（ト吉が顔をじろりと見る） [吉]ウンニヤいふめへいゝば手めへもわるかろうし。おれもいゝかゝつちやア。さつばりといわねへけりやアおねがはれねへから。それよりやアだんまりで。今夜はひとばん御ふしやうながら。ねかしてくんな [哥]ヲヤおめへさんこんやはでいぶしかくだねヱそんなにわけもいゝなはりもしねヱではらをたちなはる事はねへはなたなんでもいゝからおめへさんのむねのはれるよふにいゝなはるがいゝわなわけもいゝもしねヱではらばかりたちなはる事はございやせんわな [吉]ナニそういふならおれがいつてきかせよふナてめへはしるめヱ〳〵とおもつているだらうがよくしりきつていらア（トいわれ哥はさては豐が事をしつたるかとびつくりしたり） 手めヱがよふにそふまじめでよくうそをつくやつにやアちつといつてきかせるも薬だアコレよくきけ先度も手めヱがいふにやア豐が事もほんのぎりでよんでやるのだ何ンにつけてもしみ

〳〵いやでならねヱからぜひありやァあいそつかして突だすからそふおもつてくんなよといゝおつて其舌で此ごろきゝや吉さんはありやァほんのぎりでよぶのだあの人もほんのりくつもなくきなはるのだよなんのかのとおれが身のうへの店おろしを手めヱはよく太助にくわしくしたァろうがなァばか〳〵しいをれだつても人にそんな事をいわれてはづかしい事はしつていらァ［哥］なる程おめヱさんのいゝなはる通りいゝやしたのさなぜなればほうばい衆もわたいが事をおめヱは吉さんトしぬ氣だそうだの駈落心そうだのといふのを御内證できいてじやそうでそんな事もあるめへもんでもねヱといふ沙汰あるよとおはんさんがそういゝなはつたからびつくりしやしたけれどわたいも常氣な顔でそりやァきつい間違もあるもんだねだれがそんな事をいゝやしたねときいたらお半さんのイヽなはるにやアいゝやしたものはしらねヱがそふいふ風便があるからさといゝなはつたから能爰のうちばかり女郎屋じやァあるめいし氣にいらざァくらけいしようとおもつたけれどいや〳〵くらけいしたら何方な所へ行かしれねヱ爰にいればよしやおまへにあわれなくつてもたよりでも聞れるとそれからおもひ直して［吉］コウ〳〵てめヱまァ茶でもさとふ湯でも呑ばヱヽでいぶ口がはしせヱだそうな［哥］マァだまつてきゝなせヱ［吉］ハイ〳〵もふ一だんうけたまはろうか［哥］（哥はこゝにてなまじめになりて）コレしら〳〵しい夫からねおめヱさんもしつて居なはるだらうが姉妹のよふにするお登くさんにうちあけ

てはなしたらおとくさんもいろ〳〵考てこう〳〵しなといゝなはるからわたいもかんがへてみやしたがそのほうが能ろうとそれゆへに此名もほりやしたのさ〔吉〕フムソレハシテ初が名をほつたのはなんぞ能事でもあるのか〔哥〕ハテサアそふじやァねェのさ先程いふ通りうち中であじに氣を付て居なはるから外女郎衆へもちつとした譯があつておめェさんをよばねへといつておいてそうして此ほりものも初様がほろうといゝなはつたけれども今の譯が有ルからお鶴さんにたのんでほつてもらいやしたその時もおつるさんがおめェ吉さんの事があるのにつまらねェ事をするといゝなさるからいゝおりだとおもつておめェさんの事はうまくいゝまわしておきやした夫でお半さんをはじめあじに思つてこのごろはおめェさんの事もちつとさめてきやした(トいわれて吉はさてはそうかとむねは少しはれ此うへはかのほりものをけさせよふにおもふ心あれば心だくみして)〔吉〕なるほどそういふわけなら心もはれよふといゝていがそのほりものゝある内はマァ心がすまねェ〔哥〕おめェ心がすまざアずいぶん消しやせうが(ト少し詞のうちつかへるは是をけしては豐へすまぬとしやん顔也)〔吉〕ナゼけしやせうがはどふして〔哥〕アイちつと〔吉〕ナニチツトちつとけすならけさねェがエヽ〔哥〕(いろ〳〵としやんしておもひきつて)なにさァそうじや御座いやせんがねェ此ほりものを消とちつと突ださねェけりやァすまねェ事があるからさ〔吉〕そりやァナヲおもしろい〔哥〕イヽエサ夫に利くつがいろ〳〵あるのさ〔吉〕ナンダ〔哥〕イヽエ

その利くつはほかの事じやア御座居やせんが此ぢうわつちが内からちつとしたわけあつて金の入ル事
があるとゝさんがきなさつたゆへわたいもいろ〳〵としやんしてもつまらぬゆへそれで初さんに御
むしん申やしたその利くつさへすみやァなんのあの初の野良ぐらい [吉]（こゝにてぐつとのりがきてなに
とぞほりものをけさせう㒵い男のふうにて）フムナニその金をけへさねへけりやァならねェといふ事かそ
りやァおれも立引だ三両が四両でもだしてやろうからその名を消してしまやよもやよふ消しやしめ
いが [哥]アイおめェそう立引してくんなさりやけさねェでさ [吉]サアそんなりやァけして見や（段々
とりくつにのぼせてくればお哥はおもふまゝにかきのめしはつがかれてやくそくの金三両はまづできたりと㒵
つぼにいり心の内で よろこび） [哥]ナニけしかねるものかと（うたはうでまくりして兼てよふいの枕のひき
出しより切もぐさとりいだし顔をしかめて火をつけければ㒵ん〳〵ともゆる火はあつからであつきは女郎のつら
のかわ也） [哥]ヲヽヽあつヲヽあつかつたサア吉さんよクみなはいませ是心がすみやしたろう [吉]
（心の内は大悦びにて外になき色男の氣どり也） ムヽよし〳〵ついでにそちらも [哥]それみなんせどつこ
もかもきてうめんだよ [吉]ムヽヨレ（ママ）〳〵山を見てきな豆いりがなくつてわりイのう [哥]さついしやれ
だのふ [哥]（こゝにて吉も心とけてやくそくの金子三両紙入よりとりいだし手に手へわたしければお哥はよろこ
び

吉（しばらくあつて）吉さんちつとおやすみなはいまし　吉ムヽでへぶねむくなつたもはやよつほど夜もふけたろう（トいゝながら吉も心もとけすや〳〵ねむりける哥はたばこすいふきばた〳〵たゝいて見しが吉ははやいびきにてよくねたるよふすゆへそつとぬけいでける　さて初はかねて哥がいろ男なればよいの間より奥ざしきへまわしまくらにしのばせおき今夜はかの初は金のくめんにとふわくしあたまないためまつおりからにはつときたり）

哥よし〳〵サア（トかの五両おとのせぬよふに初にわたす）初ほんに〳〵手めヱの事はなみだがこぼれて眞實〳〵なんともいゝよふがねヱおれもこの金がなけりやァあすまでいきちやいられねそれをそなたしんせつなからだにきずつけてもかうくめんしてくれるといふはしんでもわすれはしねヱからそふおもつてくれろおれだとてもいつまでもこうしてもいめヱから（ト男なみだにて）哥はてさそんなにふさいだ事をいゝなさんななんでもわたしが命にかけてもおめヱのわるいよふにやァしねからおめヱずいぶんと身を大事にしなせヱおめヱまた用があつてあいてヱ時はかの所までしらせねヱわたしが都合して行からかならず〳〵あんまりこゝへもきなはんなよト（哥はしんじつのいろ男にてすへかけてとたのむゆへ也）初（なみだごへにて）何から何まで手めヱにばかりくろうかけほんにおもへば〳〵おれも不運な

ものだ（ト男くやみにいゝければ）〔哥〕（是もおなじく涙にて）これさもふ〳〵おめヱそんな事いゝなはんな
いつそもふしんになつてわるいよ（トいふおりから吉が目がさめたとみへて）〔吉〕ヱヘン〳〵（トせきのこへ
きこへしければ哥おどろき行）〔哥〕ヲヤおきなさつたそふなちつと行てくると（いゝながらろうかばた〳〵
吉が所へゆき）〔哥〕吉さんおめヱよくおよりやしたねヱ〔吉〕ムウ氣のつかれたせいかむしやうにね
むい〔哥〕またねなはいますかちつとおきなはいましよ

折から向ざしき

に何か中の室）〔豐〕コレ手めヱもいゝかげんニしねヱおれがよふなやろうだとおもつてあんまりだ
〔八重〕なんだへだまつてねなはいませ何にもそんねヱにいゝなはる事はねヱはな〔豐〕何いわねヱでど
うするもんだ手めヱは宵にちよつくり顔をだしやアがつたぎりで今じぶん来やアがつて最何時だとお
もふこふいやア古い文句だがきのきいたばけものはひつこむじぶんだほんのこつたが初湯から水戸の
水でおそだちなすつてまだいろはもあげねヱうちから水戸の水の醉といふ字も辛といふ字も承知して
居ルのだ〔八重〕おめへもいゝかげんにしねヱなそんな大そうな事をいつてもおとりあげはねヱはな
有無欠込訴訟
〔闘〕何だばかなつらじやアねヱかおとりあげがあるかねイかとかけこみそしやうをしやアしめヱしだま

つてきいていりやとんだ口にはゞつたい事をいやァがらァコレエイおいらにそんな事をいふとごもついてねエばちがあたらァなんだいゝかとおもつて今でこそわいらァつとめのおかげでいたこじやァねエがみた事もねエ上田の八丈のちりめんゆもじだのと國に居やァがるときやァ手おりの木綿に獅子に牡丹のすそもよふ紅うらを着やがつて田草をとりやァがつてまだひ袋にひへくそがのこつて居るだろうそれになんだゑゝかとおもつてのさばりやァがらァこふして居るのもてめエ立がくげへだとおもつてくんでいりやァとんだふてエやつだうぬがつらを見やがれまのぬけたふて〴〵しいしやつつらだ【八重】そウ何とでもいゝてエ事をいふがエヽが世間にも容があらァもつとしづかにいゝねエそしてあんまりばかのつらだのしやつつらだのといゝなはんなよあんまりだァ【豐】ムヽ何だばかなつらだしやつつらがわれが氣にくわねエのかムヽエヽしやつつらだこれへわれがつらのよふでいをいつて聞しやうかなんの事アねエ墨書のだるまをみたよふだ目はやうきうの的を見たよふにまんまるでおふきいといふばつかりでおもひつきがなし鼻といへば此すゞりぶたにあるくわへといふきでいるし歯はしら魚のあかりを見たよふにでたりひつこんだりこれといふいゝぶんのねエゑゝといゝたへがねんをいれたあくできなしやつつらだそれがうそだとおもふならかゞみをだして見やァがれわりやァなんだあろうとはにうむらもどきでかゞみといふものをみた事があるめへナ見た事がなかァようすがエヽ【八重】アイ

サおめヱはうらねヱしやだねへよくあてなさつたそれでもおつなもんでおめヱによふにた客(きやく)があつてそうおふにやアよびてがあるのさ（八重はしよせん此客はヱヽかげんにしてちやかして出(で)る）【豐】チヽそふだアろう手めヱ鏡(かゞみ)をみねヱがうんのヱヽのだ見(み)ちやア今(いま)までいきちやアいられねヱ絹川(きぬがは)もふるいからしんちのめヱのかわヱでも身(み)をなげよふといふものだと（とよは富澤町の朝市をみたよふにふるいせりふやあくでんなおもいれならべたておりしも吉がしん〳〵たる　もすみわたりとろ〳〵やつてめなさませしがとよが中の字をいふよふすとよがとこへきたり　【吉】ナンダ豐公(とよこう)でへぶちわるの　【豐】ナニサ吉さんきいてくんねヱこのべらぼうがとんだきのつよいやつだ　【吉】とんだのとばねヱのとかじば(火事場)じやアあるめいし（下三人にて高(たか)ごへにてせりおふこへ下へきこへければ二階下で何事なるやとなもなくより來り立ぎゝして居(い)たりしがこらへかねて）　【女】豐さんマアなんで御座(ござ)りますしづかにおつしやりませさきほどより承(うけたまは)りましたがなるほど此御子がわるう御座(ざ)ります　【豐】インニヤなんにもいゝ躰(てい)い事アねヱが此子があんまりあごの延(のび)た事をいうから　【女】マア〳〵こんばんの事はわたくしにおあづけなすつて下(くだ)さいまし此御子もまたあんまりだよどふもおめヱさんはまけねヱ氣(き)でわるいよマア〳〵豐さん御りやうけんなすつて下(くだ)さいまし　【豐】コウモウおめヱそんなにいつてくれちやモウゑゝがおれもやほにいふ氣(き)はないあんまり目がすぎるよほんの蟲(むし)の居所(いどころ)がわるかつた　【女】そりやマア御りやうけんなさつて下(くだ)さいましてありが

たふぞんじますマア御しづかにおやすみなはいまし [豊]おめヱもねむかろうもふやすみな [女]ハイこんばんはおきばんで御座ります [豊]ムヽそりやていぎだの [女]ハイさよふならもふ [豊]ムヽいきねヱ [女]モシ吉さん段々御せわさまで御座りましたおたのみもふします [吉]ムヽおせわ〳〵もふやすみな [女]お八重さん [八重]ハイ [女]お哥さん [女]ハイおやすみよ（トいゝながらいでゝゆく此時は八重はうつむいてつまらぬかほなり） [吉]豊公こんやは寒いじやねいか [豊]ソウサでヱぶこんやはさむいの（トいふ時に枕元に宵のかんざましの酒を見付て）吉公何んと此かんざましでも一ぺいやろふか [吉]ムヽそりやよかろう（ト二人づれにてかんざましを火ばちにかけたのしみけり吉はもはや哥がほりものはけさせてしまい　にては哥にうま〳〵じよせいのれいめう辨でかいて〳〵かきのめされ是やつぱり吉につとめるのがはつがためとおもひ吉がまへではないて見せろうかへ出てはしたないだすとはげに誠なるかなわつてみせたき女郎のはらわた夫とは吉はしらふのなまよいぐつといろ男のきどりなりはつが方にごくしんのうまみある事をしらずかんざましの酒をくらいたばこをのみひぢをまげてつまみぐいして居るおりから哥はよいしゆびなりとおもひ初がにそつと行けり） [哥]コウねなはつたかへ [初]ムヽとろ〳〵したらなんだかさわがしくて目がさめたありやアマアどこの客じんだ [哥]あれかへわつちが客じんの連中さ女良衆がこねヱとつてごふせいに中の字をいゝなはつたのさそれで吉さんもつれ衆のこつたからいつていなはる [初]ムヽそんならてめ

エもいつていりやア忝ゝに 哥ナニエヽはなアそんなにおめエゝじやまにする事アねイはな 初ナニサそふじやアねイがそれも世事（せじ）といふものだ 哥イヽエわたしや世事（せじ）もなんにもおめエをすてゝするきはちつともねイそれはそふとじつにわつちやアおめへの事ばつかりがくろうになつてちつともはやくおめエをうちへけいしていとおもふけれどもおめエのうちでふせうちならどふもしかたがねエわつちアそればつかりくろうだまたわたしももふわずかこゝにいるのも半年（はんとし）かそこいらの事だからどうぞおめエもしんぼふしてさけもかけんをするがいゝよわづらいでもするとわつちやアモウいつそくろうにするはなア 初ムヽいつそわづらいでもしてしねば忝ゝとおもふだろう 哥ヨウむだをいふよにくらしいのふ

跋

楠化して石となるは造化の中の變化たり予が弟喜樂山人にはかし（以下、不明、或ハ、にまかしてか）は常に辰巳世界を好で變化にあらぬ闇雲をおこし猪牙に乗

て飛行す蜆貝をあつむるよふな根性ばねで鮑面白なき册を何れもさまえ御目見へと囑じるすう

富樂卿　一盃　述

奇談 假根草

全

奇談 假根草

紅月樓著

發端

遊妓飛至深川客堀馬子附言所謂北界變也嗚呼時哉一角光使耀夜具内

遊妓ハ、則女郎ナリ。深川ハ所名、女郎是ニイタルトナリ、客ハ遊客ナリ、大盡ノ類ヒ。堀又所名、北京ノ近里ナリ。馬子附ハウロ々々尋廻ル言也。北界ノ變ハ一時ノ炎焼ナリ。一角ハ金一分ナリ。光リハ金ノ光リ。夜具ノ内ヲカヾヤカストハ、諺ニ曰百文ノ錢ヲ以テ一〆ノ場ヲハタラカストナリ。

嘽曰樓繁大町究舊地於究其作家居女郎而可不如素人乎

嘽ハ風吾ナリ。樓繁ハ、青樓ノ全盛ナルヲイウ。舊地ハ、北花街大街又同ジ。風吾ニ北郭度々回祿ニヨッテ、向ナ島エウツサルトイエリ。サレドモ願ニヨッテ吉ゲンノ地ニヲラシム。故ニ斯ハ不文セリ。究ニチイテ其家居ヲナストハ、北郭ノ地ニ定メエルサル、ユエニ、家ヲツクルトナリ。女郎ヲシテ素人ニモシカザルベケンヤトハ、彼ノ罪妓ノウカ々々トシテ、何レニ曲輪ノ定ルトイウコトヲワキマエザルハ、素人ニモヲトレルコトナリト仰ラレシト也。タヾ仰ラレシカ其儀詳ナラズ。

自序

大通色生苦仕多伊予。曰夫大門格子外而。諸客爰入門也。於今老亂。色仕者可見者。則此邊存茶屋也。而損毛是智。客者必於爰遊。其上膳不喰近。問夫無話。忍男無支。不可思事。

記ことしかり

卯の行冬

柿降の柳庵述㊞

假根草

惣目

第一囘　三子草庵結夢
第二囘　三子東深結妓
第三囘　三子結睡眠嘶

以上三偏

三子草庵結夢

月代は剃たてをいやしめ。大髪は田舎者と呼。短羽織は山家の猿と笑ふ。數寄や足袋は武左のめ印となんじ侍るも。時花行人ごゝろならんか。今わむかしとなん、東府の西。山の手の邊りに如東と呼べる男の有ける。何を世渡りの種といふこともなく。凡三百六十余日明暮月花を供とし。又有時は北郭南驛あらゆる花街青樓に身をよせ。今様の異氣人といゝはやしける。頃は初秋の末つかた。朝な夕なわ殘るあつさの。苦勞もなく垣根にすだく蟲の音もいとさへ〴〵しく。雲青々として月東海に登り庭前白晝のごとく。秋風の音信もたへて樹木の影畫る風情。心しん〳〵とすみわたり。淋さのまゝ。長うたのそこ爰を。小音にぎんじ。打臥ぬる折から。表へ。里風如君御在宿か。如東どなただ。(ト起て見て)里風師よく御光臨だ。サア〳〵あがりなせい。里ハツ何を一ト人すましていなさる。如イゝ月だから。月見をしていやす。里すさまじいの。倭哥といふ御心か。如ナニ今の浮世はしよじ狂哥の事サ。夫さへもわつちらにわ。ならづの森だから。一口ヅゝも長うたのにた山をさへづるがいゝ引サ。貴公杯のよふな。大宮人のなれの果とちがふて三十二もじなどゝいふ。雲井の人のもてあそびは出來やせん。里さよふサなんぼ今宵の月がさへたてゝ。きつひおてらしだネ。如夫で

も此間貴公の婦人がそふいつたツケ。[里]どふいうたへ。[如]里風さんは。折ふし上がた言葉をいゝなんす。いつそやはらかだネといつた。とかく貴公はエハッといふへんじをするからだろふ。[里]ぜひもねへもんじや。[如](わらひながら)そのもんじやがわるいヨ。イヤほんに貴公蕎麥は氣なしか此間むかふの鰻やがしもふ跡へ。手打信州生蕎麥が出來た。いゝ器物をだしやす。異氣な道具をもつている。[里]わつちアとんと麺類はきんもつサ。アノ拍子木は五ツか。[如]ナニありや用心のサ。なぜそのよふに關の地藏だ。ほんに市がいの講釋わはじまつたか。[里]左よふサ。ぜん座が漢楚で後座が關がはらじやといふ噺じやが。まだきゝやせん。[如]講師はたれだ。[里]たしか隨秀とかいうたケ[如]このはる麹町で。三國志をやつた男だ。神道のこふしやくもやるそふだ。わつちやア去々年小石川邊の御やしきで。つれ〴〵のこふしやくをきゝやしたが。いゝべんだつケ。[里]左よふサ。ちか頃はおふきに名が高くなりやした。[如]きのふおめへどこへいきなすた。だいぶおそくけいつたの。[里]芝口迄用があつて。いきやしたから。かいりにむかい丁を一切かわかしてきやした。[如]へエ入りわあるかネ。しよじ高らいやおやこ大和やでもつた芝居だ。[里]さよふサ。なんでも時代とて。なんぼ音羽やがいゝのなんのといつても。高麗藏がいきおひにわ。かなひやせぬ。今では若手の立物サ。聲のかゝるといつては。おそろしいもんじや。[如]ごふぎなもんだつケ。高麗がこの前賴兼をした時などは。

よかつた。なんでも當時は、こま八百藏兩中富などゝいふものサ。また古人正月やが定九郎などゝいつては、はらは立給ふな。上ミがたにもあるめい。おとゝひの晩も錦公が所で。こまと正月やが桃の井と木藏が懸合をつかつたが。娘ッ子などのこまを嬉しがるといつちやア。とんだもんだネ。男冥加にかのふとやつだ。[里]そふサネ。ちつとあやかりしばいとしたいもんだぞへゝゝ。ほんにむかひうらのかこひはうつくしひもんじや。けさせんとふで。ちらと見やしたがきれいだ。[如]ナニ面ばかりで、張子のだるまだ。少しつかませると。打石の火よりもはやくころびやす。雪のはだへをあらわして。はしごへのぼつた女だもの。如才はねへ。[里]はてな。それならよい御守が。赤坂邊の御やしきからでるに。朝夕首にかけさすればよい。[如]なるほど。こりやいちばんいゝ。(ト二人咄しの折からうかり〱と)[門兵へ]旗のお□□きだいのいきすぎ。眞おかのあひさび。小もんの二三度せんだくしたやつにあいびろうど八丈の帶の刀のあたる所。少しわたのでたたかいの口にしめ。細身の脇ざし斗きめ。髮は中たぶさのはでがけ)如東さん内か。[如]門さんおいでなせい。[門](深草うちわで。こしから下なはらひ。)いま〱しい蚊だ。[如]うるさくやぶ蚊がでやす。[門]何かしめつたおはなしじやネ。[里]ヤ、いらつしやい。(トおきななる)[門]コレ〱里風師。そふかたくてわ。よわり大根だ。なんにもかまわずの池とするがだい〱[里]へゝゝゝ[如]ハヽヽゝ門さん。此間はおふきにありがとふ[門]なんだつケい。[如]

かの一件について、何度御家來を。【門】エヽなん時でも。どふでひまでいるから。つかひなせひ。どふだ。里風さんおもしろひお咄しもなしの興一か。【里】いつこふサ。【如】ナニ門さん。眉につばをぬりなせい。新宿などでは紙に血が付やら。腕にほりものができやした【門】フウどふりで顔がだいぶ八瀬の里がよひに。身が煎豆の花ざかりは。ふとゞきなすびのしぎやきじや（下手まいぎりのしやれにて、外へはつうじがなくては分らず。）【里】（こしやくなことないふとおもひながらわざと。）そふいふ注文があつて見たがいゝ。夫こそひとつはまりの天神とやつてみるけれど。こつちはする氣でもあつちがふせふちだから。いかぬやつさ。そふいうおつやいわ。門さん抔のよふなむす子株で。其上異氣でよくわかつたものでなくては。女郎を片息にわなりやせん。（正月まへの錢相場といふ口上に。ふわとのりが來て）【門】きつひおなぶりだのわつちらアそふいふよくはなしさどこへいつても禪ぜんのすゞサ。ことしで三ねん女郎かいをするがちつとおつやひのよかつたは門山口の陸山になじんだ時と半治松葉やのいやひと東字やのひゝかしとそしておふぎやの玉扇サわつちも【里】へエ【如】だひぶひやつくわい【門】わつちも玉おふぎには大はまりサまづ大一面か美と來て手がまんとおりか其上氣だてがよくて誠をつくすといふもんだからいかな通といつてはおかしいがわつちがよふなやぼてんでものろくなるはづサ【如】さよふサ（などゝ折々ねむたまぎれにとほふもないへんじする）【門】五十會斗いきやしたがわつちが身を切たの

は三會目の床花(とこはな)ぎりサいつたいそれさいひど工面(くめん)でいきやした所がきいてくんなさいこんな面(つ)らにどこをみこんでよんだかしらぬが三會(くわい)目の晩(ばん)にけいろふといふのをむりに居(い)つゞけされやしたがおふきにごふさらしサ　如里「フウヽヽ(トおもしろくもない噺しにたいくつしへんじもせづうつら〳〵と眠(ねむる)もしらず)　門「懐(ふところ)がいつこふ薄雪(うすゆき)せんべいといふもんだからいたさもいたし有よふにいふもけいぶんがわるし大ふさぎサするとはや夫をさとつてぬしやわつちがうるさくおすかへなんぼわつちがしがなくつても主(ぬし)にくろふをかけるやうなことわしやせんほんに男はなぜこのよふに氣づよいのふとちいさなこゑで人の見ぬよふにわつちがこしをつめるといふ仕打(しうち)サそこでわつちもぐつとうかれ烏(がつす)のかわい〳〵なつて來(き)てサア夫から内へけいつてもこゝろこゝにあらざればうちのもの は見れども見へづくらへども其茶漬(ちやづけ)のあじをしらづといふあたりで人がものいつてもとほふもねへへんじして笑われるやつサ(トこふしやくのけいこふをするよふにひとりしやべりまはしている内ふたりはいつかなくねいりグウ〳〵フウ〳〵の高いびきへんじなければよくねるものだコチ〳〵おきねへ〳〵風引よヨヽヽおきさつし(トゆりおこし〳〵すれどもアイ〳〵〳〵フウ〳〵〳〵〳〵)なるほどよくねるもんだ(トあんどふの火でたばこを付手まくらにちいさな聲で)〽更(ふけ)てきぬたのおとさへゆかし。おもふ男(おとこ)に山鳥(やまどり)のと(トやりかけていきつまり)「アヽ〳〵と大あくびいゝ月だともにまどろむうたゝねのいかなる夢(ゆめ)やむすぶらんありし座鋪(ざしき)のいつし

かにかわる浮世のありさまはうゐてんぺんの廻り來て氣のふ迄美をつくしたるふん樓もけふわ一時のほのふにうせて末定なき川竹のながれのすへぞものうかりけんといとゞあわれに覺し折から所は東都辰巳にあたつて目なれぬ妾家の二かいに伏ぬると夢うつゝとなくおもふ折しも御用心さつしやりましよふ（チリン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵）鐵ぼふの音はとりもなをまづ引ケ四つすぎとうちともしぜんにしん〳〵とものしづかなるおり〳〵にどふ〳〵〳〵といそうつ波の音のみ

三子東深結妓

〔里〕コ手めへ茶をひとつくんで來てくりや〔新造〕アイぬしやよくかわかつしやるネ（トおきて火入のうへゝ手を當て見て）ろふかへとん〳〵いて行跡へ〔うはぎく〕（せふじを少し明てかほ斗だして）もしてはいつてもよしかヱ〔里〕たれだうわぎくさんか〔菊〕アイ御しげりかへ〔里〕ごすいれふの通りサひさしいもんだ（ト屏風をあける）〔菊〕ぬし斗か〔里〕いま火を取にいつたこよひはだいぶけん氣がいゝの　色男で

もきたか 菊しりやせんにくらしひ 里コみゝだしな 菊（アイトうなづきらうかへでる）新（茶と火なもつて）モシせふじをあけておくんなんし 里なんだ 新手がふさがつていゝすものを 里ヲイ丶丶おかたじけ（ト茶おぐつとのみア丶い丶きみだ）新あんまりさゝをあがんなんすからのどがかはきいすヲ丶さむうおすネ（ト引かけ手まへもきてねる）里今度は町も向島へかはるといふこつたがそふか 新どふざんすかしりや せんヲゝいつそ寒ひ

菊（らうかをとん〳〵ときてびやうぶの外に立とゞまる）里アハン〳〵 菊モシはいつてもよしかへ 里なんだかおつにからくむの 菊ぬしやなぜ氣のふおいでなんせなんだ 里ちとこられねへ譯があつて 菊その譯はへ 里きいてなんにする 菊ぬしやまたなぜかくしなんすヱ 里（笑ひながら）よく氣をまはすもんだぜ氣のふ芝へんに用があつていつたがどふした 菊嘘をおつきなんしきのふ若ひ衆が堀で見かけたといゝやした 里フウ夫はなにサ嘘もなんにもつかぬが爰の内が堀にいるとおもふたからいつたのサぜんてい四五日いぜんまで堀にいたじやねへか 菊夫がぜふならよふおすがどふもこゝろ

がすみいせん 里 やほなことをいふもんだねつからわからねへ何がすまぬまた客がやかましくいはふまあいくがいゝ 菊 アイおじやまになりいせふがちつとのまおいておくんなんし 里 そんならいつまでもいるがいゝがやかましくいはれふと氣のどくさに 菊 ぬしやきつひくろふせふだねもしこの子を　氣か 里 おもしろくもねへ 菊 それだつてもぬしがぬしだから 里 おれがどふした 菊 ぬしの事をこの子がいつそ 里 なんといつた 菊 かわいゝとサ 里 おきやあがれなにそんなことをいふもんだまだいつかふの子供だ勤すればこそ素人でみたがいゝ色事とわなんだかしらねへ年だ 菊 左よふサしらねへとしだとみへてぬしやみれんをだしなんせん 里 わるい酒だよいかけんにむだをいつておきにしろ子供のしよふこにわこくうとねるかわひそふにらくにねかすがいゝ 菊 きつひお心づかひだ（ト里風が紙入なとりにかゝる） 里 何をする 菊 ちよつとおみせなんし 里 この内には大事のものがある 菊 その大事のものが見とふおすおみせなんし 里 みせよふからマアちよつとうこせ 菊 アイそんな手はたべやせん〇うわ菊さんヱ引〳〵ヱ 里 それよぶじやアねへか 菊 じれつていのふなんだヱ〇お客がいつそはらを立てけいるといつていさつしやる 菊 いまそけへ行（トちいさなこへで） けいるといふならけいすがいゝすかねへのふト（里風がもの心ならねば） 里 アゝあぶない日にあをふとした〳〵どりやとろ〳〵とやろふか（降座鋪は如來・ 折鶴 モシヱ〳〵なぜそなへにねなんす

[如]マヽゆるしてねかしてくれ　[つる]わつちやアいやでおすよさみしくつてなりいせん目をさましなんし　[如]モけいるじぶんか　[ねる]ナニまだおかへりなんすじぶんではおつせん　[如]（よふ／＼目がさまし）アヽなんだかいろ／＼な夢を見た　[つる]どんなゆめを見なんしたいつておきかせなんし　[如]とんだ夢サ　[つる]もふぞふとやらかい　[如]もふぞふかこもそふかしらぬがなんだかうら山しいゆめだ　[つる]はなしておきかせなんしナ　[如]よそふ　[つる]なぜへ　[如]はなしたらおめへこまるだろふから　[つる]アレサはなしておきかせなんし　[如]そんならはなそふマアおれがこふきた所へおめへの色がきた所がゆめのはじまりサ　[つる]ナニまたうそをおつきなんすわつちらがよふなものに　[如]ないといふのか夫でもあると見へて今ゆめに見た　[つる]そんならあるでおざんせふおふかた名はと（いつてうつむき）如東さんとかいゝすか　[如]ナニそんな名じやねへがなんだかいゝ男サおめへのほれたもむりじやない　[つる]アイわつちらがよふなものわそふいつておなぶりなんしにくらしひト　[如]アアいてへおめへあかしはあるし門ちがへすることはねへどりやまたうら山しひゆめでも見よふず　[つる]ぬしやおどけだとおもつ（マヽ）いればほんにわつちをうたぐりなんすか　[如]ナニうたぐりはせん夢でも見よふといふ事サ（トわざと心を引）　[つる]（少しうるんで）ぬしやおつなことをいゝなんすネぬしを見かへて外で色をするよふなわつちがこゝろとおもひなんすかなんぞ希のふやけふのなじ見といふじ

やおすまひしそんなあひそづかしをいゝなんせ、づとぬしのこゝろにすまぬことがおすならなぜこふだとうちあけていつておくんなんせん（トなみだはら〱）〔如〕（すこしひれつておふきにこまり）もふうたがへははれたなんにもなく事はねへやほらしひわつちがいつたことはらがたつならかんにんしな〔つる〕ぬしのうたがひさへはれひすりやよふおすがいまのよふにいゝなんすとわつちやアむねがせまつてつひしぬる氣になりいすほんにこふつとめしてかなしひはかなひみのうへなればおふくの人に身をけがしてなさけらしひかほすれどほんのつとめの座しきなり末々までもとあさ夕に力におもふはぬし斗でおすとゝ樣はぬしもしつていなんすとふり去年のくれなくなりなんすかゝさんといやアまゝ母なりいまぬしにはなれひすとわつちやアしぬるよりほかにしあんはおつせんわつちがよふなものゝぬしのきにわいりひすまひがいま申いすとふりのわつちだからどうぞ見すてゝおくんなんすな〔如〕ナニ見すてゝいゝものかもふ來年の暮わ年あきじやねへかそふすりやすぐにナがてんかサもふこんなはなしやめにしてひとつのもふ（トてふし引よせ茶わんでぐつと引つかけ）アヽだいぶ寒さが身にしむ明がたと見へる〔つる〕わつちに一口のませたんし（トぐつとやつてむれなをし下）ほんにさむうをす風引なんすなへどふも假宅の不自由といつてはちよつ間する事もなりやせん〔如〕いつ頃引越つもりだ〔つる〕ナニまだなんの咄しもおざんせんがどうでことし中でなくては歸れいすまひ〔如〕そふだらうどりやちやふづに

いつてこよふか［つる］わつちもいきひせふ（見すがみを手に持そへ）もしこちらでおすよ［如］おいそふだつヶのこの頃とわかつてがちごふたよふだ［つる］このあいだはおもてのかたゞからそれでサ○かゝるせかいのある中に引かへこなたはこわ高に（手をパン〳〵）［ふり糸］アレサ手を打なんすなばからしひよふがおすならわつちがいきひすなん時だとおもひなんすやがて烏がなきひすわな［門］烏がなこが手をうとがてめへが世話にはならぬ打やつておきにしろまたよくつもつても見ひひとりねるくらひなら一チり二りこねへでもねられるアおもしろくもねへなんぼ野郎はちひさくつてもわいらにあしくされるよふなやろじやねへいゝかとおもひあがつて［いと］そなへ口ぎたなくおつせいすことはおつせんわつちじやとてつとめんではおざんせん［門］つとめんではないフゥよぢうきやくをひとりおくがこゝのうちはふんばりのつとめか［いと］ふんばりとへチヤなんのこつたヱわつちが申いすのはつとめる程に勤たといゝすのサなんぼ客衆がおすとてよふがありやちよつとやそつとわいきひすのサそれだからさいしよちよつやつておくんなんしと断ていきやしたそれがどふざんすへばからしひ［門］なんだ小言ぬかす事わねへ雨あがりのけいる見るよふなつらをしてマアうぬがつらをみひしろいぬのにごり酒によつたよふだ［いと］おふきにおせわだネぬしやものづきな人だよわつちがよふな女郎を［門］なんだ女郎女郎もくそがあきれるアよたかといつてよい風だ［いと］ヱそんなら主や折介だネけいぶんのわる

ひ　【門】なんだこのふんばりめが耳のやくだとおもつて出るまゝにいわしておけばいろ〳〵のねつをふくわ　【いと】それでもよたかを買きやく衆なら折介とやらじやおつせんかへ　【門】べらぼふめ折介ばかりよたかをかうか　【いと】どふざんすか　しりやせんがよたかは折介のかうもんだといゝやすからす　【門】（ぐつとはらがたてど言ひこめられてせん方なく）うぬふてひやつのと（すでにあやうき其折から里風如東きたる）　【如】門さんどふした事だ　【門】うちやつておきなせひわつちがれふけんがある　【里】しぢうはきいたマアおれにまかしなせひわるくはせん　【いと】けしからんのふ（ト下へゆく）○跡に三人顔見合あきれ果たる時しもさつと小夜時雨の音におどろき三人が目を打さませばありつる座鋪に假寐のゆめあたりはしん〳〵ものすごく夜もはやいたく更わたり月もいつしか山の端に隠れたもふに燈火もいとゞかすかに消てまたくわつとひかりを知死期時三人一チ度にくつさめあかしもぴつしやりなむさんぼふとあるじの如東手元の火打カチ〳〵

三子睡眠結噺

其夜も既に牛みづ過遠寺の鐘のおりふしにゴン〳〵〳〵〳〵またも木末に音そへてさつと降くる雨のあしひとむらしげる草むらにおふくのかわづなきつれてふりくる雨をよろこぶ音いろ門兵へすつくと

おきなをりアヽラ不思議や今すいめんにいづくともなくひとつの借家にいたりしが時雨のおとにねむりをさまし睡中のことゞもおもひまわしきひのおもひをなすおりからいままたしきりにふる雨におふくの蛙の音をはつし降をよろこび其音色はとりもなほさずすいめんの我身のうへのありさまを見するはきつくわひイヤいまはしの有樣やナア　里 我もおもわづ手枕にまどろむとなくうつゝとなく是よりはるか辰巳にあたり目なれぬひとつの青樓にたはむれあそぶ遊君のこゝろもいとゞ深川とすいさつなしたるそのひとつは磯うつ波に千鳥なく聲のかすかにきこへしがゆかしき君にたわむれてこゝろ時めく閨の中まだ夜は深きとおもひのほか別れをつぐるかねのねにむなしくおしきかんたんの夢を覺しておもひをのこすはわが戀の叶はぬしらせかハテざん念やナア　如 さてはふたりのゆめものがたりきくもあやしきことなるかな夫夢は五臟のわづらひこゝろにおもふことあればかならず夢に見るとかやそれは世説是は目前　門 すりや貴公にも　如 いかにも所は名にほふ深川のみたりが心の中町にしばしすまいを假宅の　里 其所こそ兩國とおもふにたごふこよひのゆめ　如 かはるは則夢客事所かはれど其ぬしのかはらぬはたゞ葭原の昔が言葉も夢ながら　里 ほぐにわならぬけいせいの詞もおもき古石場　門 ふるもふらぬも　如 かくとだに　里 いわれぬ一チ座の咄しの合の手　如里門 あわぬはたがひのむねの内　門 あけていわれぬ　如 この場のしぎ　里 ハヽヽヽヽしからばお休また明日　門 わつちもい

つしよに如君さらば［如］お休なされませ○戸口のかけがねチヤンどりや休もふ歟

跋

柿降の庵主假根草の作あり假根の夢の眼覺に熟是をあんずるに殆佳境に入がごとし角の取たる容人の三角ならぬ三容の闇の手管の所作ごとは切の幕に明らか也五ツの街の假の賑はひ其繁昌をあらわし衣のひとつの卷をもち來て書林の翁頻に跋を乞辭せずに請むと盃を取あげながら滅たにしるす

越野山人述 印

青樓夜話 廓數可佳妓 全

自序

詩は漢より魏にいたるまで四百餘年千體三度かわるといへり和歌の風流代々に新戯作年々に移行秋の形見の紅葉ばも明日は時雨とふりすぎ陽に向へる花木忽春の色を顯し待得て開く梅が香は蘭麝待と時めく事歳々相同じ如此あひ同じからざる滑稽を著んと思へども野夫不通鵜を眞似るからすの水を飲ん事を恐れ世作者の糟粕を甞むことを恥實や戯言なれども思より出ると宜哉不言腹滿ていきたはしき調子違のすがゝきも一寸と腹ごなしに格子三筋糸を借て先その壹筋をペント云としかり

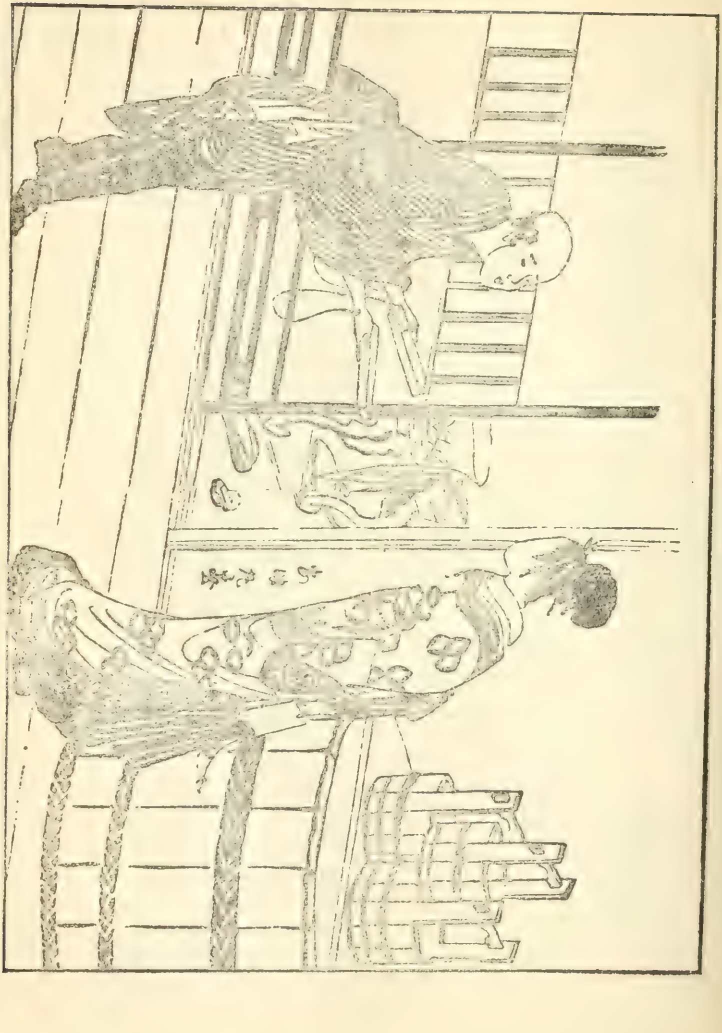
干時

申孟春

成三樓

鳳雨述

廊数可佳妓



序

由基矢を猶豫て猿叫蒲日弦彈して凫落皆ものゝ的中するによれり爰に鳳雨なるもの黄表紙の小册を綴る予閱すに見世三味線の古きを尋風流唱歌の新を探是に新手をつけて廓數可佳妓ト題アゝ岡崎の寒聲にはあらねごきなる趣向といつつべし夫がかみごまの糸口わからぬ序文も四方の御評判をねぎして口三味線を引くとになん

かんだ
あつ丸
なべ

青樓夜話 廓數可佳妓目録

發端　向ふ島の隱家に芝のあみ戸の
夫ならぬあめる草紙のひと趣向
咄しの種まき三番叟

第一日　丁子頭に玉の數意氣と張との
二階笠は一對の廻し枕極印に
夫と知られたる是腹ふくれの
布袋大盡

第二日

五葉の松の緣が知らせ粹と野暮

この仲の町あんに違ぬ一坐の情

其名も世界一面に鳴わたりたる

雷庄九郎

第三日

丁子車の廻り氣は　情と義理の

兩輪にて　押におされぬ　戀の山

雁のたよりの一筆は思ひを込し

文の文七

以　上

青樓夜話 廓數可佳妓

成三樓鳳雨著
神田あつ丸校合

人間の榮枯は更なり今日は昨日と變り拙きは拙に隨て其時の風流に押うつりゆふべ朝と掟の違ふ事隙行駒に駒止石もあらねばなり爰に浮世をらくにすみだ川のかたほとりに櫻佐といへる戯作者ありもとはお江戸の眞只中に水道の水を産湯となし曳窓より金の鯱を觀て長となりたる息子株なりしが青樓に九年面壁し深川に遊んで罪なくして配所の月を見る事三年しかふして後混空白讃して匪通世人と世の人を見くだしついに向島へをしわたつてひざいるゝばかりの草庵を結び屢浮世のたわむれ事を著述す机上にかゝつて句案の折から表の方より入りくる人は[完知](なりはしまつむぎいうわぎうへだのはなり八丈の下着二ッ對黑なゝこの裏えりにしてはかたの帯やわた黑のくつたび手にさらさの風呂敷包なさげ)[文七](雁がねやのひとりむすこ衣裝付は小册にゆづりて略)先生御在菴かね[櫻]こいやアお揃で行かかへるか雁がねのといふ時分だわからねへね[文]わざ／＼きたのさ[完]例のおやしきから歸るとつて

出合がしらにぶんさんにおめにかゝりましてそれからわたりに船でこぎつけました 櫻マアあがりなせへ(ト勝手へ行小僧に何か書付てむさし屋へやる)はやく\/ヨ 小ハイ 櫻時におせかへはどふだねきのふ蘭爾が河東がてらへめへつたかへりによりやしたとこへ藤兵へモ秀太夫も落合ておうわさが出やしたほんに完さんにこねへだの屏風のおれいをよくとらんじがいゝやした 藤もなにかおねげへ申してへといふ事だつた 完此ごろはちときもめの筋で筆もとれません 文こりやア御尤だ(といふ内むさしやよりいろ\/持てくる是より酒はじまる此内しばらくしやれありて時うつるされどくだ\/しければはぶく)

櫻時に完知さんは一丁目か文七さんは二丁目かたゞし附合の一坐かの 文おめへも附合はどふだの

櫻どふもこんやばかりは御めんだきうにかゝねへけりやならねへものがある 完そりやアざんねんだほんに一丁目といへば角の役所の張付日の出に松は主人が書たそふだの 文二階でもならひたがるものがあるおめへをしへてやらざアなるめへ 完左やうさねトわらつてゐる 櫻庄吉が所の左(古カ)一蝶が舟だるまの掛物はいゝね 文そふさ道斎がひやうたんのてうしと蓬莱の花生は妙さ 完ふるびあんばいがきつゐものさ 櫻時に行ならもふよかろふぜ 完先生も用をながしてお出なせへ 櫻こんやはかんにんしねへ 文罪にもなるめへトそつちこつちとゞ二人は立いづる

櫻佐は机上にかゝつてしん\/みだして

案じる折からくれむつのとけい
キリ〳〵〳〵
チョン〳〵〳〵と
まはりじかけは
よるのせかいとなる

第一日

丁子頭に玉の數意氣と張との二階笠は
一對の廻し枕極印もそれと知れたる是腹
ふくれの布袋大盡

いかでかは鳥のなくらん人知らず思ふ心はまだ夜深きにとは伊勢ものがたりに戀々の情をのべしことの葉にして實よし原の夕氣色百人が百人鳥鐘を怨いかなる柳下惠も心はうごかさざらんや爰に堀留へんの問屋株布袋や市右衛門（なりはゆふきつむぎをふつかされ商人ながら男氣なお江戸の水に晒らし上三十四五のとしかつこう）一人わ雷門の庄九郎（これもおなじく一座にてけふもつれ立庄九郎は五葉や市右エ門は張子やへ行いのじいせやの角にて）［庄］そんなら〳〵あすの朝さようらさんおいらんによろしく［市］さたなしにお賴だ今夜ァ付合てへがちつときつかけがあるからいわねへけりやァ濟ねへ事がある［きようら］庄

さんたんとおたのしみざんしやう（市右エ門があいかたきよはる居續あるゆへ番頭を向ひによこしたのさ二階のせかいげいしやのしやれた（だカ）の本にふれし故略スわかいものちとあちらへに座納る）【市】（廻し座敷尤座しきのふとん故こざつぱりとしたいたじめ）こうあしたアすぐに向ふじまの櫻左が所へよるからいかねへか　女げいしや【てう―ひな―】わたくしどもゝもりさんの所へめへります歸りにおより申ましよふ七越が所へかまつて居るせへよらつせへ傳公德藏も一所にいかねへか【德―傳】めへりましよ【市】四人づれをすぐに土手で擲ばしにかたらせてへ【德】にわかの船といふもんでわたくしを大臣と見へましよふ【てう】すかねへまだおめへは梅枝さんといふかみの風だよほんに市さんへおまはんのほつくをきつと覺へてまいりますよ【傳】おれがうつしてきてやらふ【市】時にみんな歸なせへ【傳―德】左やうなら明日中の町迄まいつて折ましよふ【てう―ひな―】御きげんよふ【市】コチ〳〵あしたもりさんのとけへいつたらよくいつてくんねへ【てう】かしこまりました（茶や男平兵衛立かへり）【平】（ひくい聲にて）もしおいらんはおきれいでござります此間のお初會のお話し今晩の御やうすなにか一物ござります是切にやアヒ成ますまい【市】大きにさそれだから初會なじみとした【平】しかし一丁目へしれますとわたくしがしめられます【市】其時ア法があらふこつちの二かいへわさたなしだよ【平】どふいたして私は是から京町へちよつくらまいります【市】升樓（せうろう）の客人はねこか【平】いゝへおたんちんのほふサ【市】おきやアがれ（此ごろのはやりこ

とばほれたがねこすかぬがおたんちんといふノ也）［平］左やうなら明朝（ト此時いつの間にかきよはる終中聞と
つてしらぬ顔にて）［春］ねなんしたかへ［市］座敷はいゝのか［春］清うらさんがつてんサ［市］こんやは
ぐつと寐るとしよふかりものをしたよふでわりひ坐しきへいくがいゝ［春］そんならねなんすおつもり
ざんすねあつかましいよねせ申事アなりいせんこんやはよくきておくんなんしたしかしこれが一丁
目へしれると平兵衛さんも茶やもきのどくざんすねへ［市］ナニヲきゝなすつた［春］なんにもきゝはい
たしイせんがそふおまよひなんす所が有しつちやア所（しょ）せんなんと思イしても及もねへがもしおわる
ひ時にはこれを御ゑんにきておくんなんし御頼みざんす［市］夫りやアこつちからいふ事さまよわれ
たのがいんぐわだと思つて御ふせうながらおじやまにならねへ時はよんでおくんなせへ［春］うそをお
つきなんしそりやアつき合でおいでなんしたおまへさんまだおなじみもねへうちにこんな事ヲ申んし

【市】（ナニチと顏を見てわらつて居）【春】あれサぬしやァ極印の千さんとほんとうにお心安ふざんすか【市】心安けれヤわりひかへ【春】そりやアよふすがね文七さんとお心やすひからサこねへだの清川さんの文を七さんにおとゞけなんしたかへ【市】ムヽおきにとゞけたどふも文七もこまつたもんだ（トいふ所へ屏風の外から）【清川】（奥州がせり出といふ身にて物思ひにやつれはてなをしもきれいにぞつとする姿にて）ごめんなんし清春さんお休なんしたか【春】サアおはいんなんしちつとやうおざんすかへ【川】アイモシよくお出なんしたぬしやア七さんにお心やすひとうけ給りんしたから清春さんにお頼申てまだおめにもかゝりイせんが文を此間おたのみ申んしたおありがたふざんす文七さんはどふなんしたのでおざりいすおまへさん申イすもなんとかおつもんなんしやうがたとへどのやうな事でもちよつとたよりぐらひなんしても罪にもなりイすめへ　しみ〴〵くやしうざんす（トはら〳〵なみだをこぼす）【市】いんにや今の身はとんだむづかしいおめへの文もやつと届た文七にじよさいもあるめへ【川】それに田舎へやられなんしたの二階ずまいだのときく度にしみ〴〵かなしくなつて身をけづられるやうざんすどふぞもふひとめおめにかゝつて其上で（トしゞふふさぐ清春もともにもらひなきなする）

市おめへの心いきもかねてきいて居るどふぞあわせてやりてへが文七にこねへだの文をやるせへおめへのめへじやいゝにくひがどくをあてがふやうなものでどふゆう氣をだしてはやまつた事でもしねばいゝがとあんじられるおめへもマア當分思ひ切つていねへナ　川思ひきられるくらいなら此やうにわづらひもしんすめへそれにあんまりあさはかなやうでざんすがとりかはしたものもありどふぞもふ一度おめにかゝつてそれをもと〳〵にとりかへていゝ置事ヲさつぱりといつて思ひきりイせふからどふぞおつれ申しておくんなんしごしやうざんす　市そりやアわつちがつれてもきめへもんでもねへがさるもの日々にうとしで此ごろはやう〳〵ちつとおちつきかゝつて首尾もなをり掛たヲ又とんだ事にでもなつた其時わわつちが身はどふでもいゝが二人りの身爲にならねへ文七にいつたら氣ヲ落すだらふ咄しもしねへが此子のはなしでおめへのわづらふ事もなにもかもしやうちしてかけでもらひ泣ヲして居たヨ　川そうしんみにいつておくんなんすほど文七さんにおめにかゝつたも同前デざんす天道さんかけて七さんのためにわるひ事はしイすめへから鳥渡なりとあわせておくんなんし　（ト折から奥座敷にほのかに）〽**かよふとて何かたのまん水くきの跡を證據にもつてはおれど**合　市おめへしん實取かわしたものヲもと〳〵にする氣か　川しやうこがしやうこに立イせんものヲ〽**たへてあわねばひよつとまたよそになるみの捨小舟**チャアン（下略）　川そんならかならずおたのみ申

ッす清春さんおやかましふおざんしたろうかんにんしておくんなんし　春たにんがましいマアお聞しなんし　川ちよつといつてめへりやしやう　春いつそかあいそふでおざりイすつれ申てきておあけなんしモシエそして千さんの事がどふもきにかゝりイすわたくしもかくごをしてよび申きでざんすからどの道きておくんなんし（トいよ／＼千と心やすくは(ほカ)つき出してぜひ市をよぶきになり）　市されはどふだらふかまよつたからくるのさ　春あれサ茶になんせずとほんとうにおいゝなんしくろうになりイす女郎の一念でお出なんしやうがおいでなんすめへがよび申さねへじやアおきイせん　市そりやアいゝがてうしがあるか　春おあんなんすかへあつためイしやうト火ばちへかける八ツの拍子木カチ／＼

第二日

五葉の松の緑が知らせ粹と野暮との
中の町安にたがわぬ一坐の情其名も
世男一面に鳴渡りたる雷庄九郎

夕べの一件庄九郎五葉やへいつてふきこみし故こよひは市右衛門庄九郎中の町に居る内いつはや条之助よりしんぞう条川をよこすそも／＼条之助が市右衛門となじみとなりしはじまりはまだ堀留へ市右衛門が□(てカ)らしにいがぬまへ蔵前に居りしじぶん新造かひにてよびし客なり今は表向にてくればたがいにほれたでもなくほれんでもなくよんで居る内此間市右衛門鎮子やの清春にふと附合て上ッた所がおつうからんでぜひ／＼ゆかんと思ひ今夜も

いくつもりヲ庄九郎が耳うちにて新造粂川にみつかつたつもりにて引ずられてきたの也こんやは粂之助が座しき旅人客ありまた名代也市右衛門はよくねて居るまくら元に新造くめ川おきこたつによりかゝつてまい〳〵つぶりの顔死といふ身でねている所へ粂之助きたる市右衛門目をさまし）〔市〕モウ何時だ〔粂〕八ツさよくねなんす〔市〕手めへいつきた〔粂〕あれからおつきさ（トまじめではぐらかす）〔市〕坐しきの色男はどふした〔粂〕おふしやれなんすなよく寐て居イすいまめの覺た所でおす〔市〕おきやアがれねつから面白くねへそして手めへはおつな匂ひがするぜへひなたつくせへ夫でも色男の匂ひとかなんとかいつて嬉しがるだろふ〔粂〕かんにんしておやんなんしどふで二丁目のやうじやおつせんまつすぐにかへりなんすふりで又あすも立かへりなんす氣でおつしやう〔市〕しれし御事まつすぐにかへると高札へつき當て田中のはふへつんぬけるョ〔粂〕そりやア付合でおいでなんすもよふおつすがふり袖でもお上なんす事かふみつけたらしく坐しき持をお買なんす事はおつせん茶屋も茶やでおつす〔市〕何サ買てもいゝじやアねへか可愛(かあい)そうに茶やの知つた事じやアあるめへしてめへのせわにする事もねへ〔粂〕せわになりイす五丁目までぬしを呼ぶ事はみんな知つて居イすにお前さんいすきにしなんしちやアどふもわたしが立イせん〔市〕立ともすわるとも勝手にしなせへ（ト腹の立思入あり）〔粂〕腹がお立なんしたらかんにんしておくんなんし　ぶきげんで御歸りなんすと　氣にかゝりイす（折て出るのもちといちもつ有）〔市〕木

にかゝるの竹にかゝるのと糸のきすた（れカ）風じやあるめへし[条]いつにねへ市さんだヨこわふおす[市]いつになかアさがみにでもあらふ（条之助も五分もすきのないやつゆへ市右衛門が腹を立ても柳にうけまた茶やへ頼だ事もあるゆへ氣をつけてよくする市右衛門もまさかはしたなくあくたいもいわれずどふぞして腹を立そふと思つてもかまはぬゆへぐづ／＼して居る）[条]あんまり酒ヲおあんたんすな（トいゝながらのり出てさせるでくめ川がせなかなつつつきおこす）いつそよくねるこだ坐しきへいつて氣を付てくんなんし[田]めをこすり／＼チヤあちらへいかふと思ふ内つゐ久蘇イした（トおきごたつなかゝへながら出て行）[条]もしへあしたお歸りなんすならおうちさんにきいておくんなんしちつトたのんで置イした事がおすから[市]（はとふに承知なれど）何を定メしいゝ事だろふ（トいろ／＼かんがへまだ庄がふつこんだ事は氣がつかずゆふべ条川に見つからすばすぐにそれなりにしよふにどふで十まいもやらすばなるまい二丁目へわ行氣なりまさか無心ぎれもはづかしくこんや切てこまいと思へば名残りなしきみれんもあり心の内いろ／＼ともめてまよふ）

[条]何ヲ考ておいでなんす[市]ふさぎはしねへがねむくなつたコウきのふ秀太にあつたら太夫もこんどふきや町へ出るそふだかほ見せの祝儀とさし引にしてゆのみをやつた[条]きのふまいりしたかへさつき坐しきへもまいりした（ヨトかれこれはなしながらふたり共とろ／＼とねむる夜はあけはなれ）茶屋男ハイお迎ひでござります

第三日

丁子車の廻り氣は情と義理の兩輪
にておすに押れぬ戀の山雁の便りの
一筆は思ひをこめし文の文七

（二丁目鈍子や清川が坐しきふとんチ二ツに折おきこたつチ入てやみほふけたるその上に鹽立茶立にやせおとろへふたへまぶちもなきはらし露をおびたるかいどりのさもやるせなきふぜひなり折から向ふざしきにて）〽**ありしよの袖のうつり香きへはてゝ又あふまでのかたみさへないてあかすは我からと**合 文コウそんなになく事アねへさつきのものをはやく出さねへか 〽**鹽やくあまのそれならでしほたち茶たち神さんの御利生ありて思わずもあひてはらひしむねの内枕のちりの又もつもらん**チヤチヤン 川そればつかりはおゆるしなんし 文あれがあつちやアくげへのじやまとさつきから口のすくなる程いつて聞せ手前も合點したじやアねへか一生やもめで居られもしめへはやくたつしやになつて今迄の事はうたゝ寝の夢にして又さくはなあ（たか）たつきにすいた男に身をまかせ一生中よくくらしなせへそのしやつつらじやアだれでも迷ふのサ 川夫アおめへさんの事をおつせへすのでざんしやうあのおつたさんとやらたんと可愛がつておあげなんし私はどふで達者にはなりイすめへから死まではあげる事はなりイせん死んだ跡ではどふともしなんし 文もと〱にしてへといふ

はせんてへ手前が望じやァねへかからんだ事ヲいわずともすつぱりと女らしく歸してしまへ〔川〕如才もなくつてそんな事をおつせへすそう申イせんじやァよもや市さんもつれ申てきちやァおくんなんすめへしよせんそわれぬわけをがつてんしいしたから此病氣はなをりイせん〔文〕夫りやァ點違だろふあいたいなつかしいと思つて病氣はでるものでそわれぬとわかりやァしぜんと病氣はなをるのサ〔川〕どふしてもわたくしの命はおざんすまい〔文〕手前そりやァしぬといふ事かよくつもつて見や命から二番目といゝてへが一番の金を出した親方にごふはおはたかせそんをかけ父つえとも杜ともたのみにしてゐる母にはなげきをかけ孝と忠とのふたつにかけしんだ所がまた出てきて色事もありめへによ〔中〕去年から何べんも死と思ひイしたもどふぞもふ一度おめにかゝつた其上でそはれん時はひと思ひとかくごきわめおりイすと（またも泪にふししづむ）〔文〕これ手めへ斗りがほれやァしめへし去年の櫻に何ンのかのと手めへがいふから三日のいつゞけ無分別夫から二階ずまひの身となり茶屋に屆けた其文を三度が四度まで目に立て出入のいしやも足留夫からといふ物はたへて便りもなくなつて此清川はどふしたかのろひやうだがおれが事ヲくろふにしてゐるだろふと日にはなんたび思ひ出し又はなんぞ出來たろふかと思はぬひまもねへ内にちつとは内の首尾もなをりふとした事で市右衛門がわたした文それにいふには清川が何かしらぬがやつたものとつたものなもと／＼にしてへといふそして

二人のためだからさつぱりとしてしまへお袋は家の子娘おつたにいとこ合そふ義理がらめの中だ故しよせんそれれぬ事だによつて早くきれるが身爲だとわつつくどいついけんをして市右衛門がはたらきでけふの首尾持ていかねば市右衛門がめへゐどの顔が合さゐゐものか又面目ィ世けへもあらふ何はともあれかへしてくりや　〔川〕たとへどのやうにいるゝなんしてもけへして上る事はなりイせんぎりのなんのと二世かけた女房にぎりはいりイせんか　〔文〕女房もおかしいばか〳〵しい事ヲならべずときり〳〵出さねへか　〔川〕すりやどふあつてもきせうをほどく心かへ　〔文〕くどいとりにきたのだ　〔川〕よふざんすあげいしやう（ト思ひ切たる姿にてしごき引しめ立て行やうすいかゞとうかゞへば次の間へ鏡臺をなし用だんすの間ぶくろよりきせうとり出しかれて用意のかみそりをそでにかくして片手にきせうしつかとにぎりせきくるなみだを袖にかくしかくごきわめし折からにしやうじさらりト）　〔春〕蒲川さん七さんがおいでなんしておうれしうざんしやう　〔川〕（びつくりして）さつしておくんなんし　〔春〕ほんにわつちが申ンす通りわづらひなんしても命があれば緣もありそれ又今のよろこびもあるといふものでざんす　〔川〕夫れはそふでもゐんがあれば命もありゐんがなければ命もなんにもなりいせん　〔春〕二世三世こいゝかはした客人に切ねばならぬうき世のぎりといふやうな時はだれしもつきつめた心よりいつそ死ぬがましとふりやうけんもその跡でそれ程迄の心なら浮世の義理もいとひもしめへにと殘た人が後悔してかへらぬ

は人の命そのしんていにほたされて外に女房はもつまいと獨りぐらしにする人ア有た所かおそまきと
いふもいこゝのさかいが思案の大事なんべんも思案し直し外にしかたも有そふなもの其上で死ぬはい
つでも心やすいこと（トわれなはすれてしんみいいけんふと氣がついて）ほんにわたしとした事がおめへに
なんぞいあるやうにこりやア常から女郎のかくごかならず氣におとめなんすなと（そしらぬ顔でそば
へより刃物もつ手なしつかととり）こりやアどふなんすうろたへなんしたか 川かんにんして此手をは
なして見ゆるしておくんなんしごしやうざんす（トわつとなき出す） 文（此壁にはしり出はものもぎとり）
こりやなにゆへに 川何ゆへとはきこへイせんひと通りわたしがむねもお聞なんし初ッに出イしたそ
の折からまんざらでないと ふつと思ふがまよひのはじめまだその時は年はもゆかず氣まゝにあつた
もなんとも思ひなんせずきておくんなんす其じぶん七さん はいきだのすいだのほうばいさんがた
のいゝなんすその時のうれしさ今にわすれはいたしイせん五度十度一年が二年目にく〳〵つもる思ひの
種を明し合つらるくがいもくにならず一日あわねば一年もあはぬやうに思した其内に今のおまへさん
の身の上わたしがさぞにくうも おざんしやうあはふ見よふをたのしみにいきながらへておりイした
今おまへさんに切れてしまひ何たのしみにたれを便りにつとまりいしやう此上のおなさけにこゝをは
なしてころしておくんなんし（トしじうしやくり上て なみだのふち） 文どふあつても死ぬのだナ 川

わかれる時はひと思ひとかねてのかくごこれ見なんし（ト下着の白むくに南無あみだぶつの六字の名號はづかしそふに出して見せる）［文］そふとはしらず傾城に誠なしとはよくいつたあれほどまでに云かわしたものをとりかへそふとは是りやァ一年もとふざかる内こつちのことはわすれてしまひ又もや外へます花のきしやうのわけもうちあけて色男への心中立おれをつき出してしまう積り傾城の百枚ぎせうゆびきりかみきりもみなしようばいづくとかいふ物の手まへに限りよもやそふいう事はあるめへと思つたもやつぱりうぬほれそれにしても今の身のうへみんなあいつゆへと思つた時の口おしさ打たゝきもはしたなし一向ひとりで死ふかと思つてまでも見たがいや〳〵あいつがそふいふ心になつたがおれがうんのまだつきぬのとむりこじつけにあきらめてひとこともうらみの文句はならねへてめへの義理のかけねへやうにさつぱりと切レるがおれが寸志と顔の見納メほれ納めにきたのだ［川］そふとはしりイせんでむごいつれないあんまりとしみ〴〵うらめしくおざんした［文］その心を見るからは二世も三世も我女房さわさりながらしよせんそわれぬ身の上なればおれも一所にとかみそりさか手に持なせば）［花］これはやまりなんす所じやァおざんすまい幸イしたの大一坐さわぎにまぎれて清川さんがつてんか（ト格子なはづししこきなさげ）そつと爰から落なんし清川さんにひごろからいゝふくめておきイした三川のわたしがおばのところへ落ついて旅のやういこれはわたしがはなむけと小判

十両紙包落ついたら三田迄文を　[文]用舍でこそあれおぢのいん居所　[川]かやのやねでも　[文]手前と一所　[川・文]何から何まで清春さん　[春]さぞお嬉しうござんしやうお禮に及ばぬちつとも早ふ　[川・文]おさらば

櫻左が内の小僧　シイ

鼠なおふ聲に　櫻左は　ふつと
めを覺しともしびすでにきへんと
ほつして亦あきらかなり折ふし
夜廻りの拍子木
チヨン／＼

女肆 三人酩酊

全

自序

生醉に三ツの癖あり椀久の醉倒は亂心水のたとへをはじめ酒にあかさぬ夜半もなく寢酒の眞實には一寸先ハ闇と成三盃の酒人をのミもち越酒の二日ゑひにハ伴頭の迎酒もおよバずてれん手管のあやなしに跡引上戸のたわひなく底ぬけ上戸となる時ハ新酒ハだん／＼貧乏樽となり親仁さんの腹立上戸に忽其身ハ菰かぶりとなり盜人上戸の名を呼バれ世間の人の笑ひ上戸にゑひがさめ昔こひしき泣上戸のむすこさんがた茶わん酒をやめなんして袖の梅の本性となり樽ことをしらば お手がなつたら銚子とさとり間のおさへのめんだうなく獨手しやくのたのしミ酒しんぐひ／＼とひつかけた一盃きげんのくだらぬ寢言子が呑のまハらぬ所ハ諸君子のお間イをます呑

初春

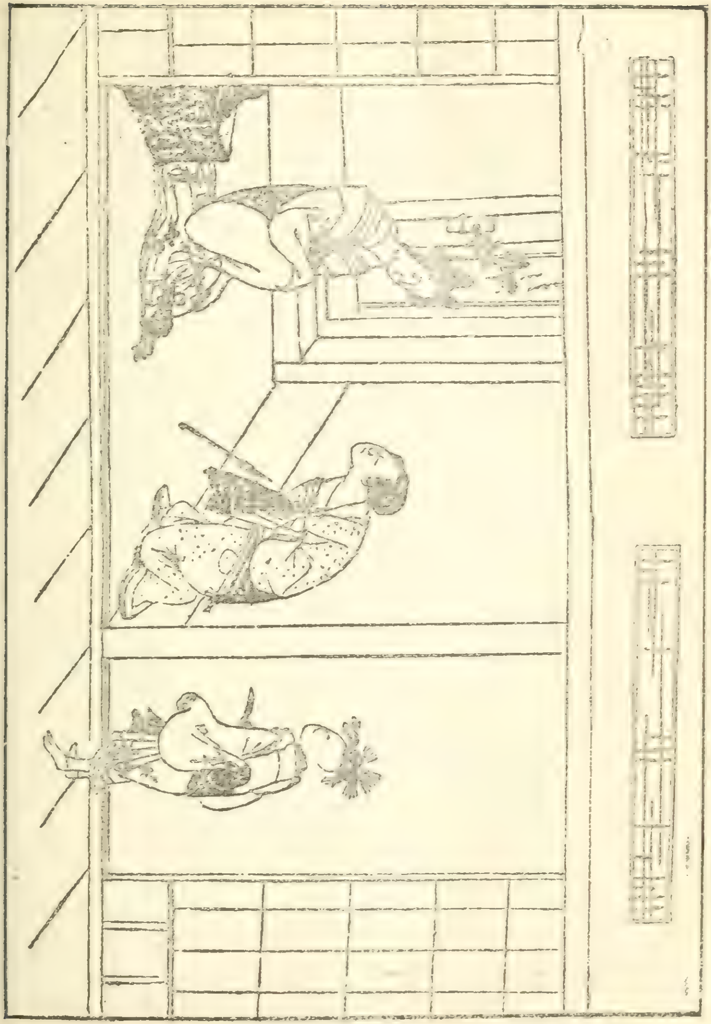
屠蘇酒の

機嫌にて

三多樓

戯家山人誌

戯家



品目

南海の腹立上戸の段
辰巳の笑上戸の段
青樓の實泪上戸の段

以上三編

女肆三人酩酊　上之卷

三多樓主人著

青樓の賓泪上戸の段

〽世界は大見世客と女郎のしんの床

客　錦賀　年は卅一二ぐらゐにて物事じよさいのなき通人三ツぶとんのうへにすはりふさひだかほにて多葉粉をのんでゐる

仌　哥町　としは二十一二ぐらゐぽつとりとしてせい高くあいきやうかほにこぼれなさけふかく中座のくらゐあるおいらん錦賀がふさひでいるゆへそばに琴をしらべてゐる

琴唄　思ひねの夢のまくらにちぎる明方さめてはもとのつらさにて泪の外はあらじなコロリシヤン

哥 モシヘ 何もそんなにおふさぎなんす事はおざりイせん夕べはマアどこへおいでなんしたへ染山さんが中の町で見かけたとおつせへしたゆへおきゝ申のさ 錦 コウ手めへはうはきらしひ事をいふな人の目角立ッほどこつた二人が中たとへ鋸で挽切ッてもきれはしめへとおらア思つてゐるがそんなにねへ事迄もいけてへそうに角をはやすはムヽおれが此しみつたれなりにあいそがつきそれを手にしてきれる氣か（すこしうるみしこゑにてわが身のかはりし姿を見ていとゞふさぎ）おれが目で見てさへあいそのつきた今のざましてや引く手あまたのつとめの身あきたにうそは有めへアヽ今まで眞實な者だと思つて居たがあいそもこそもつきはてたサアきれる氣なら二かいから目ぐすりといふまはり遠ひ事をせずとすつぱりとつき出せそれを思へばこの間中からのしうちがすつぱりわりふに合ふは 哥（わつとなき出し）いかにわたくしがいじめいゝとてあんまりむごひ事をいひなんすなんぼはかなひつとめをしておりんしても心までは賣りんせんに仕うちがわりイの何のといひなんしてもぬしをそまつにしたおぼへはおざりイせん何がそのやうにはらが立イすへ 錦 腹が立ねへでどうするものか今迄はいひはしねヱが倉まへからくる龍子といふくめんのいゝ色男にほれて身揚をしてよぶといふ事がおれが耳へはいつたからむしにさはるは牛を馬にのりかへるりやうけんだらうそうとはしらず内に居て子どもの世話をしたりしめしの世話をして居ても手めへの事を思ひだすと氣をふさひで物事も

手に付ぬ故女房のくろうもなげやり三ぼうで雨にも風にもとんぢやくなしにこんなにのろくしげ〳〵くるも今思へば大たはけなせんぎだア丶うそとまことの引かへし女郎の心といふ物はわからねへ物たぞ【哥】（いとゞなみだのやるせなきむりとは思へどしたじからほれた中ゆへなをかなしく〳〵）何でおざんすへおまへさんも愚痴な事をおいひなんしそんなわたくしがうはきな心ならこんなにくろうはしんせんまよつたればこそ是ほどまでにぬしの事をとやかくと思つておりイす今のやうに申イすもみんなぬしが大事からの事でおざりいすに【錦】チツト待なやきもちをやくがおれが爲とはこいつは大笑だ【哥】何が大笑で をすつもつてもおみなんし今ぬしが外心が出來てわたくしがつき出されてお見なんしほうばいのまへもたゝずしぬより外の事はおざんせんぐちは女のつねでおざんすなぜに男はそ のやうに氣づよひのう（トなみだはら〳〵）【錦】モウよめへごともてへげへにしろおれよりは手めへのほうが氣がつよひは【哥】何で氣がつよひかわかりイせんよ【錦】手めへにやアわからねへでもこつちは わかり切つてゐるはへ【哥】どういへばかういふとことば質ばかりとんなんす夫ほどわたくしが心がわからずばいつその事におまへの手にかけてころして しまひなんしぬしの手にかゝつてしねばわたくしはほんもうでおざりイすヨ【錦】それほど死たくばころしてやらふ（トたぶさをとらへてまくらでくらはす）【哥】おまへさんのうたがひさへはれんす事なら此身はいとひせんどうともかつて にしなんし（トその身をおしま

すなきふしかみもみだれてきやうきいごとく）口舌(くぜつ)かうじて常よりもおびやうのしやくのさしこみてもだ
へくるしむその有さま氣つよき詞もこしおれて又しやくがおこつたかどれ〳〵さすつてやらふかと
　くるしむかほを見るにつけむねいつぱいのなみだ川 [錦]チヽ常から氣の小(ちいさ)ひ生れゆ
へちつとの事にも氣をつかひしやくもおとなりこんなに病にくるしませるも元をたゞせばみなおれ
からさぞせつなからふヨせんなひ事をいひ出して持病(ぢびやう)のしやくにあたつたかかんにんしてくれ此マア
むちうになつてくるしがるをみるにつけモウ〳〵むねがいつぱいになつてかなしくてならぬはひハテ
どうせうと立つ居つ（はな紙入より薬を取出し口から口へおしうつしそばのどびんのぬるまゆをのませてなか
　んびやうす薬のきゝめかゆめのごとくに持病のしやくもおさまれば錦賀も少しおち付て） [錦]どうだ心もちは
いゝか [哥]アヽくるしくてなりイしなんだがちつとおさまりんした [錦]そんなら今の薬をもうちつと
呑がいゝ（又とり出して薬をあたへければ） [哥]いつそにがうおざりイすよ [錦]にがくなくツちやアきか
ねへはそのしやくをおこさしたもおれがわざだかんにんしてくれ只さへくろうをさせるうへにも
持病(ぢびやう)でくるしむもおれゆへだモウ〳〵何もいひはしねへみんなおれがわるかつたコレきげんをなをし
てしやくをおさめてくれ [哥]そんなにいひなんせずとよふをすねしいうたがひさへはれればうれし
ふおざりイす何のぬしをうらみんせう

こんなにまよ
つたもふく／＼いあくゐんでおざいイしやうねへわたくしかつたがゝてゐねにゐるほどおしい身のた
めにもわるしきぞおかみさんがおはらをおたちなんせうそゥ／＼ふつつり思ひきらふといくたびか
おもひてもかほを見ると思ひ切られんせんよ〔鐵〕手めへ斗りではねへおれだつて人にゐけんもする年
で居ながら二人の子どもを女房にあづけて内は野となれ山となれ一寸先はやみのうき世とむしやう
にかよつたあげくのはては右も左りもかりたおし黒の金にはつまるがならひとはいひながらそこら
こゝらがふつだうだらけなしぎなれど逢ひたひと見たひがおれが病で心はむかしにかはらねどかは
つたはおれが妻さぞや世間の人がわらふであらふがたとへたわけと云はれても死なねへうちは此ね
んがぬける有か思ひ絶せばえはすほど何かつまらぬ事だらけだ〔哥〕是もうゐみし輩にてぬしの所の文
吉さんはほうさうをしなんすではおつせんか〔圓〕ムゝそのほうさう子も女房一人にかんがくさせお
れがこんなに夜もひるも内に居ねへでもけがに一度もいけんがましひ事を云つた事もなく夫大事と
いひ度事もむねにおさめかけみをやつしてくろうをするにおれはそれには引かへて只苦になるは手
めへと茶屋のかりこんなじやけんなおれでも夫と思へばこそふさひでめしをくはねへで居りやア壹ツ

もよけいほしひと思ふ着た物もわたしはいらねへから是でかけの方をちつとヅヽもすませろといつてくれる心ざしのかたじけなさこんな貞心な女がおれがやうなふしあはせな亭主をもつもよく〳〵ふかひゑんであらふ女房とは思はぬおれが爲には神か佛かこのしんじつに心を改めモウ〳〵くるわへは足ぶみは是ぎりと心のちかひも水のあは（なみだはら〳〵）ゆるしてくれ此世ではしよせん禮はいはれぬみらいから禮をいはふ（ト大きにふさぐ）［哥］そのやうな實の有おかみさんにくろうをさせ中もみんなわたくしがわざでおざりイす何のゐんぐはでほれすぎて切るにきられぬ今の身のうへ此ごろの容しゆはみんなはつばかり故所々のかけとてまゝにもならず何やかや思ふといつそはやく死たふおざりイすさだまつたおかみさんの有おまへさん故ひよつとあの世で逢れまひかと夫ばかりが氣がゝりでおすかならず見すてゝおくんなんすへ

琴うた

〽さよふけてなく千鳥何を思ひあかしねうき世をすまいうらみにて我とひとしきなみだかな［錦］今さらいつた所がおそまきな事ながらかふ遣ひ過してせかれるやうになつたゆへ此ごろではやりてやわかひ者のかほがゑんまやしやうつかのばゞアのやうに見へる氣のせへとはいひながらかけでもすましたらかふも有めへとアヽしよじ金の先だつ身になつたト（ふさいでだんまり）［哥］わたくしとてもかけ

の方がくになりイすからはやく少ヅヽもすましをしたうへで世間をひろくしたふおすつねからはでにあそびなんしたぬしゆへこんなさびしひあそびをしなんすもさぞくやしふおざんしやう是もあんまり毎日おき申シたからの事でおざんすわたくしとても中の町へも出られぬ身になりイしたゆへ内所でも大きにやかましくいひすがあはれるだけはと一日二日とつらひ月日をおくつておりイすがモシモ逢はれぬその時はおつせへしたとをりでおざんすにへ［錦］そうなればぜひがねへたとへ別れて死ぬとても三途の川も死出の山路も行かふはさ［哥］うれしひねへ［錦］（よろこぶかほをみるにつけ錦賀はむれがいつぱいに友になみだにくれけるが）コレ手めへがそのやうに死ぬをうれしがるを見るに付むねがいつぱいになつてなみだがこぼれるそうさへ思つて居れば又花の咲く時節もあらふよ一寸のびればひろひ世かいあはれるだけは此世のたのしみとは思へど花にあらし月に村雲たとへ五日と十日うき世のぎりにへだてられ使のねへ事もあらふかかならずたん氣な事をしてくれるなそれがくろうだ［哥］ぬしもかならずわづらはぬやうにしなんし［錦］是から先は神佛をたのむばかりとはいへおれがやうなむふんべつなものに神佛の利生のあらふはづはねへ［哥］わたくしとてもどの神さんがゑんをむすんでおくんなんしたかしみ〴〵じれつたうをす［錦］かういち〳〵引出していつた所がかけのかたにはなるめへしゑんとじせつのすゑをまつばかりだアヽこんな事をくりかへし〳〵いつてもふさぐばかりでおもしろ

くもねへちつと寐ませうく 哥ねかしイせんよ 錦ひとりでねるさねへけりやア (ト 作者もしらず有りしつらさもしばしはうちわすれ屏風のうちのひとねいりいかなるゆめやむすぶらん)

其 二

夫より錦賀は雪のあした雨のゆうべもいとひなくかよひくるわのうら茶屋でも今はあはれぬよすがとなりせかれていとゞ戀しさの思ひは日々にますかゞみ命と思ふその人のおとづれもたへはてゝいとゞかなしき哥町が心のうちぞものうけれ次第々々に戀やみの病氣といひたて見世も引キとぢこもりたるうきふしや ふりしん錦木モシおいらんえお心もちはよふおざんすかへ 哥(氣のおもさふなかほつきにて)アイけふはちつと心もちもよふおざりイすよよふ毎日〳〵ぬしたちはたづねておくんなんすよそのやうにわたくしを思つておくんなんすはうれしふおざりイす ふりしん錦木そんな事をおいひなんせずとはやくよくおなりなんしなわたくしらはそれがたのしみざんすヨ。(トいふ所へばんしん山しな來りおまへがたはおゐらんにおまんまをあげなんしたか 哥イヽヱのちの事にしておくんなんしけさはいつそおまんまもいやでおざんすよ 山モシおいらんへそんな事をいひなんせずとちつと氣

をじやうぶにおもちなんすがよふをすおまへさんの病氣のおこりは錦賀さんゆへでおざんすからわたくしらがどうかかうかしておまへさんにおあはせ申んすからうき／＼としておくんなんしな［哥］おまへたちがとも／＼せわをしておくんなんすから夫をちからにかうしてはおりイすがこのごろのやうにからすなきのわるひ事はおざいせんからいつそぬしの身のうへがくろうになつてなりイせんよ［錦］モシへ山しなさんへ錦賀さんもちよふつとでもたよりをしなんしさうな物でおざりイすねへ［山］錦賀さんも便りをしたひも山々でおざんしやうがせかれなんしてまゝならず心ばかりつかつておいでなんすで有ふとおもへばいつそ身につまされてかなしふヲス［哥］（きくほどむねはいつぱいになみだのみこみこみふゑはし）ぬしも定てなつかしふおざんしやうがほう／＼が不義理だと思ひなんして夫ゆへ大かたきなんすまひネン　何ばんあはれんした時はたくさんさうに思ひしたがたがいにせかれて　あふ事はならずぬしをはかなひ御身のうへにして人に笑はれひざしをされなんすもみんなわたくしがとかでおざんすいくらあんじてゐてもさうだんする容業はなし氣が心じやアおざんせん［山］そうでおざんしやうよわたくしだとて是までたび／＼ぬしのせはになりんしたおんもおざんすからどうぞと思つてもまゝならぬつとめの身わたくしらもいつそくろうでなりんせんよ［哥］そのやうにやさしくいつてくんなんすはうれしふおざんす（ト又もなみだのそのところへ）やりて［つま］（しやうじを明てはいり）おるゝ

ん御心もちはよふござりますかへサア　おめへがたははやく身じまひにかゝんなせへべん〳〵だら〳〵として居なさんな夫だからひろみせがらちがあかねへよト(いつもの小ごとにふせう〴〵みな〳〵立出口のうちにてすかれへぞヨウ)　やりて　はあとを見おくつてモシおいらんへおまへさんの病氣のおこりは大かた錦賀さんの事ゆへでございやしやうがハテ何もそんなにあんじなさる事はねへかけの方がちつとヅヽもすめば又二かいも明キはれてあはれるやうにもなりますとかくみちればかくる世のならひ錦賀さんもつき出しの其日より來なんすからどうぞとはおもへどもおまへひとりゆるがせにしては外のしうのしめしがきゝんせんから二かいをおとめ申シたなれど是きりでゑんのきれるかなんぞのやうに思ひなんせずと氣をうき〳〵とおもちなんしな　哥　アイわたくしが身の上を思ひなんしてのだん〳〵の御ゐけんさらさらわるくは聞んせんありがたふおざんすまゝにならぬがつとめの身せきせかるゝは里のならひモウ〳〵錦賀さんの事はふつつりと思ひ切イしてあすから見世へ出るがわたくしが身のせうこでおざんす　やりて　その心ならあすにはかぎらぬからずいぶんと氣ばらしをしなんしそんならおいらんへお大事になさいやしアヽ南無妙法れんげ經と　出て行く)　哥　は　(あとを見おくりてしばしなみだくれけるがやゝ有てかほをあげ)　だん〳〵の御ゐけん有がたふおざんす錦賀さんとは切るにきられぬあくゑんでおざんすからもしもせかれてあはれぬ時は死であの世であはふとつね〴〵いひなん

した言葉もおればこのごろのやうにおとづれのなひはもしや夫かとむなさはぎとてもいきておりイしてもおかみさんの有ぬしゆへにどうせふうふになる事はならずマアわたしほどふしあはせなものはなひとゝさんやかゝさんにはちいさひ時にわかれ外に兄弟とてもたひたよりすけなひわたしが身まだしもたよりに思ふは錦賀さん其たよりに思ふぬしにはとをざかり何をたのしみにつらひつとめをうか〱としておりんせふ死ンでそふのが近道でおざんしやうからわたくしはとうから覺悟をきはめておりイすからけふがくるわのなごりでおさんすわたくしよりまだあとにおいでなんしたらかならずおつせへしたおことばをおかすれなんすなへとてもしぬたら今一度戀しひおかほが見て死たひ戀しゆかしい錦賀さん（トりうていこがれふししづむ）又ひとつには是まで世話にしてくんなんした旦那さんのおんもおざんすがかんにんしておくんなんしまたつね〴〵から身じまひや何かを世話にしてくんなんした山しなさんのおんもおくらず死だ跡でぎりしらず道しらずと思ひなんしやうおゆるしなんしけさ御目にかゝつたが此世のわかれでおざんすにへみんながまめでつとめなんしわたしにわかれて錦木さんや此哥さんがさぞたよりすけなふはおざんしやうが身養生をして折々は灸もすへなんしかならずわづらは ぬやうにしなんしへ夫に付ても錦賀さんが元のやうで居なんして身あがりでもしなんすならおまへがたもよからふにせわになつたるおんがへしもなくそのかはりにはわたしが櫛かうがい をか

たみと思つていゝやうにわけなんしおまへがたはみな二親ある身ゆへわたしがやうなむふんべつな事をかならずともにしなんすなモウいふ事はおざんせんト（すでにさいごの死やういさいぜんよりしやうじのそとに立聞したるばん新山しなしやうじを明てうちへ入り）山「モヽおいらんへしやうじのそとで何もかものこらず聞イしたがおまへさんのせつなるお心ざしさら〳〵むりとは思ひイせんが夫はあんまりたんきといふものでおざんす身にせまつてかなしひ時は死なふと思ひなんすもむりではおざんせんが錦賀さんが死なんしたうはさもおざんせんからかならずそんなかなしひ事をしておくんなんすなたよりに思ふおまへさんにはなれてわたくしはどうなりんせうそれほどまでに思つておいでなんす事なら錦賀さんとおまへさんへ是までのおんがへしにわたくしが年ンを切りかへてなりとかけの方のすみすましをしたうへではれて錦賀さんをよび申んすからかならずたんきな事をしておくんなんすなへ何ンぼわたくしがやうな者のいふ事でもちつとは聞わけておくんなんしト（しんみのなみだはら〳〵ともになみだの哥町もやう〳〵にかほをあげ）哥「居ればゐるほどぬしたちにくろうのうへにくをかけるがかなしさに死なふと思ひイしたがやさしくもそのやうにわたくしを思つておくんなんすはうれしふおざんすお禮は是とふし拜ゆば（山「そんならわたくしが申んした事を聞とゞけておくんなんすかへ　哥「アイ。（おりからとなりざしきにてゐつゞけの客めりやす五人力をひく）〽**いつまで草のいつまでもなま**

中まみへものおもふたとへせかれてほどふるとてもゑんと時節のすゑをまつなんとせう合［山］おいらんへとなりの唄の道行でおざんすにへめりやす〳〵たがひに心うちとけてうはべはとかぬ五大力さはさりながらかはるいろなきおんふぜいやがてあをぞへかたろぞへおしき筆とめ候かしこチヤン〳〵［哥］ホンニ何から何までぬしの心づけしんみも及ばぬやさしひ心ざし死でもわすれはいたしんせん［山］その死といふ事をかならずいつておくんなんすなへ何の是しきの事をばからしふおざりイす世話になつたり久したり互の事でおざんすものそんなにやくにもたゝぬ事に心づかひをなさりんすなマア酒でもおあがんなんして氣をおはらしなんしトいふ折ふし仲の間のとけい九ツ時竹門から來る［あき人］あけとうふ引ごまあけがんもどき

［作者曰］

けいせいにまことなしとかたくおぼへたる客此書の實意をかんがみて箱根からこつちの人になり給へかゝるせかいのおもむきもおかめから見てはばか〳〵しけれどその身になつたらむりも有まじせかいの通子さつして御見なんし

女肆三人酩酊

三多樓主人著

南海の腹立上戸の段

出立あいおなんどのつむぎのはおり上着もついのあいおなんどつむぎ三ッかしはの五ッ所紋下着は上州八丈らせんしぼりのちりめんのじゆばん花色しゆすの帯こんのはんぐつをはき下タくらゐするうらつけぞうりをはき目ぐろまいりといふ所をはづして田てうより坂をはへい〻りいきなとしまのゐる水茶屋へやすみむだをいひながら茶の錢をはらひ街のとり付非口やといふ引手ちや屋へはいる） 女房 おいでなさりましサアあなたこちらへ御上りなされまし 下立 茶をくんで出す 客 おかみさんけふはい〻天氣だね 女 さやうでござります今日は不動さまはきつひ御參りでござりますあなたはどちらへ御出なさります御なじみでも 客 インニヤなじみはねへよ松本へ行くつもりさすぐ行にしやしやう（ト立て一ぷくすい付てのむ） 女 松本にはい〻女郎衆がそろつておりますからきつひはつかうさ左やうなら御出なさりまし ト（花色さなだのうら付ぞうりを出しほどけたおびをちよいとむすんでつれ立行く） 下 さやうなら御きげんよふ 客 アイと（目のうち松本やの前へいたる） 女 善介どんやおきやくだヨ 若者（おくよりとんで出）コレハよふ入らつしやいました（客だんまりにて二かいへあがる若者はき物を上て札を付ておく） 若 おなじみでも

[女]お初會だよ　[若]さやうなら御見立なされまし　[客]見立もよからふ(トつれ立てゆく)　[若]おみたてだよト(いふと今までむだ口なきいた女郎もたちまちまじめとなりかげ見世へならぶ　てうにては中座といつてまん中へ居るが今なれど　みんなみは雨ほうのはしにすはるが　印のおしよくなり)　[客]はしにゐる黒の着物だ

[若]芝浦さん(それより又元のざしきへかへり女郎も來りお定りの通り盃すむげいしや里吉來りちよいとしたものなひくこのうち出しものいろ／＼出るわきとちがひ南はげいしやなあげるとしんぞうが付くからモシへ　おそれやすれへ)　[若]チトおすひなされましコレ富次(とみこ)や今のおてうしをはやくもつてこねへか　[小およく]アイ(ト下へ行く)　[げいしや]チヤン／＼(トひきしまふ)　[客]ヤンヤ／＼サア一ツのんでくんねへ　[げい]コレハちトお押(おさ)へ申ましやう　[客]マア／＼一ツのみねへ／＼　[茶や女]わたしがおしやくをしやせう

[げい]チツトついで御くんなさんなおがみのごしやうだ　[茶]ソレハせうちのまくサ　[客]一ツくらゐはい丶はなサア御肴は御かつ手次第だ　[げい]ハイ(是よりさかづきのとりやりに時うつる)　[若]芝浦さんきかへておいでなさいまし　[女郎]きかへてまいりんせう(トたつ)　[客]は(もはやまつかになり目ばち／＼ゆへ)

[若]チトあちらへ　[客](よろ／＼しておりてざしきのへやへはいる)　[みな／＼]さやうなら御きげんよふ(トいとまごひをしてみな／＼かへる)　[客]コレハ御くろう／＼(ふとんの上へ大あぐらにてさらさまがひのかみたばこ入に唐しんちうのこけばりのきせるにてきいたふうにたばこを呑でいる所へ)　[若](來り、只今よんど

ころなひ 客 客が來たといふのか 若 お氣のどくながら 客 おきやアがれなじみが來やふがねづみがこやうがやる事はマァいやだのすしだ 若 こんばんの客人がいつかうわかりませんと申ものでござりますからどうぞ 客 ナンダ わかる のわからねへのとどもりの早口(はやくち)かつんぼうさじきでほめ詞(ことは)を聞はしめへしやらねへといつちやアどこがどこまでもやる事はならねへぞ 若 イヤモウどうも申わけもござりません事ながらいくゑにもおねがひ申ます 客 おれがかういひ出してはちよつとでもかす事はならねへが手めへが口をすくしてたのむ事也錢の有やつにつとめさせねへもせつしやうだからちつとの内かしてやらふはそのかはりにはしやうがわりいとやてへほねをふみこはすぞ 若 それはありがたふござりますさやうならおやすみなされまし 客 べらぼうめやろうのおびんづるでは有めへ しかうやつてゐられるものか （若ひものはやう／＼の事にてもらひ口のすくなるほどお有がたひないつて出て行くとたつたひとりになりむしやうやたらにたばこをのんでゐたるがだん／＼よもふけとなりのへやの は
きこへるしきたらどうしてかうしてと待てもく／＼おとさたもなひゆへがうをわかしてむしやうに手をたゝく）
若（來たり）何ぞ御用でござりますか 客 用がなくつて夜ふけにさへた手をたゝくものか 若 （こいつはれいのあくたいと思へどしらぬかほにてあいさつをしてゐる） 客 かしかりにもてへげへほどの有ものだ宵(よひ)からまだつらも出さねへがどうするつもり細工(さいく)だ金つかへでまくのあかねへ芝居を見に行はし

めへし宵からあくびの二三百もしてゐるぞ壹人久ねるくらゐなら內にねるは拾匁出して壹人ねてつまる物か悉も有がたく有がたくもおれさまが御あげ遊ばした女郎をかすのやるのといふきやうけんはねへが手めへがおためごかしにおきのどくだの御不肖だのといやアがるからかしてやつたはそれほどたて引をしてやるになぜ人をばかにしやアがる 若 みなあなた樣が御尤でござります芝うらさんにちよつとおしらせ申ませふ（ト立つ） 客 コレしらせるのしらせぬのとはや打の御ちうしんでは有ルめへしあんまりばかにするななじみでも初會でも客に二色はねへぞ何ンぼ氣のきいたつらをしやアがつてもうぬがやうな權七で若ひ者もすさまじひ赤ひものが聞てあきれるはおいらは一年三百六十日初音やのかごにのり通し宿のうちには引手茶屋が何ン軒有ツて男げいしやがいくたりで女げいしやがいくたりある妙德寺の仁王樣には何屋の女郎のてうちんが上ッているといふ事から宿のかごかきのよこ目役迄あかるひのだぞ何だのかだのとおためごかしの上手は白魚とりか釣り舟ではねへがおきにしろへ 若 イヤモウわたくしがぶちやうほういくゑにも御りやうけん ト（手のこつぼうをすつてあやまつてゐるところへ） 女郎（來たり）なんの事でございやすモシおまへさんそんなにはらをおたちなんす事はねへャアしづかにしておくんなさいやしな 客（やつきとして）はらを立ふが立ッまひがおれがはらでおれが立つにわいらがせわになるものかこんな化物やしきにうかうかとしてゐてどんな目にあはふかしれ

ねへはかういひだすからにやア何ンでも歸るはばかなつらじやアねへか [女]モシヘモウ何時だと思ひなんす今からかへられるもんじやアござゐやせん [客]八ツか七ツでもかへるといつちやアかへるは [女]モシヘ外のきやくしゆへやかましふござゐやすからどうぞしづかにしておくんなんしごせうでござゐやすはなおまへさんにはらを立たせ申たもわたしがあんまり心やすだてをしたからの事さそれにこんやの客しゆは侍しゆでいつそぐちな事ばかりいつてしみ〴〵いやでならねへけれどちつとばかりせはに成たおんも有からいやとはいはれずせうことなしさそれにわたしはさぶらひしゆはどうもきがつまつていやだからはやくおまへさんの所へまいらふと思つてはおりやしたが何だのかだのといろ〳〵な事をいつてなぶんなんすからついおそくなつたのさわたしだつてこんなはかなひつとめはしてるれど客しゆをそまつにするとばちがあたりやすよ [客]よしてくれそんないやらしひ事をいはれる覺へはねへは [女]そんなに氣づよひ事ばかりいはずとマアへやへおいでなんしおめへさんに買はれたからだゆへはらがたつなら切ふともつくともかつてになさいやしおまへさんの事ならちつとも此身はいとひやせぬ（トとんだ手の行やつたね（だか）はつやうらにはいはれぬせりふよつぽどかへと見たしかたなり） [客]切るのつくのと沖のくじらじやア有めへし手めへがどうなるものか [若]マア〳〵おへやへおいでなされまし（むりにつれて行く何のかのと太平はいつたものゝ今かへつてはまんざらのそんなり見ればみるほどまんざ

らでもねへしろものゆへもはやじゆうになつてゐる）[客]そんならねやう（トよこになる）

ト（とんだのろひ事ないふ）[女]（もふしめた物と思ひたばこな吸付てだし）モシへけふはどこへ御出なんした[客]目ぐろからこつちのほうへそれたのさ[女]おつれしゆはへ[客]つれが有ッちやアじやまだから壹人さ

おまへさんは御ゐんほうかへ[客]ナニちかくさ鯨（くじら）のとれたじぶんはとんだにぎやかで有たねへ[女]さやうさわたしなぞははじめてくじらを見やしたがとんだ大きな肴（さかな）さねへ[客]さうさのふ[女]モシへわたしがやうなぶちやうほうなもんでもかうしみ〳〵御はなし申といふも大體（だいてい）ふかひ御ゐんじやアねへからどうぞちかひ内に来ておくんなせへしかしおまへさんがうらにきなんせばいり豆に花とやらさ[客]きたらどうする[女]マアうそにもそんな事をおいひなんすはうれしひよ[客]おめへはがうぎにせじがいゝよ[女]何させじじやアございやせんしんじつさ[客]

女 モシへかならずおなじみの所へおいでなんしてあすこの女郎はとんだふざけたやつだとおはなしなんすなへ 客 おめへさへよんでくれる気ならあきられる迄は来るきだ 女 おまへさんもとんだこわひよ ちるのねへやつだと思つておつゥおなぶりなさるねト(これよりはなしごへがとぎれほどなく東の方があかるくなり間や場の馬はいなゝきおきるじぶん茶やの男はねぼけたつらをして来り) 茶や ハイお迎ひでござります 客(目をさまし)大きにおそくなつた(ト目をこすり〳〵帯をする) 女(はなりなきせ一ぷく吸付て出し)またいつお出なんすへ 客 二三日の内にこよふ 女 ぎりにもおいでなんしよ(トはしごばた〳〵おくつて出る若者ぞうりを直しくゞりを出ると) 若 ハイ御きげんよふ からす カアー〳〵

辰巳の笑上戸の段

客人東好 (小もんのあいかへしのあはせはなりめんちりのせいらすじまの上着なんぶじまの下着帯はねづみこはくとしは廿六七おだばかりいふ人物にて此土地では大もてなりはなりなぬひで船頭にわたす) 船頭直 (さんとめのこばんじまのひろ袖にもへぎさなだたしめかはさんどのたばこ入をさげさらしの手ぬぐひをかたへ

かけはなりなたゝみながら　〔源〕そこへアノ子はとんだせじものでござへやすね　〔東〕ムヽ櫻川にはだしといふ妙な狂言をかくよ　〔源〕おとゝひおともをしてきやした時アノ子は地所へおくりに行ッたといふてうしでおめへさんがうきにふさぎなすつてそんならすぐにけへらうといゝなすつて新地のはな迄こどもどもとアノ子が向ふから來なさつてチヤ東さんだよト聲をかけやしたつけ　〔東〕その時におれもしんにうれしかつたやつさ　〔源〕どうりでおめへさんのおかほのいろがたちまちなをりやしたッケそうするとおめへさんが今けへりかおくりだといつたからけへッて來たがてうどいゝ所であつたサア舟をけへしてくれろといゝなすつてそれからはなしながらおんぼしへつけすぐにつれ立ッて見通しへ行キのさはぎのまくでおめへさんはとつおりよびなすつたがすつぱり狂言のすじがわかりやしたらふね　〔東〕ヲヽわかりよおれも手めへがもうけへんなすつてもいゝにぶんだといふから帶をゝなをしている所へおさきがなをしざかなをもつて來たからこいつアどういふからくりかがつてんがいかねへはへとうでをくみのかんがへものよ　〔源〕そんならおけへんなさるかへちつと風が出たがのつきれやふすトはしごをばた〱おりやしたらアノ子が帳場のわきにゐていゝなさるには大かた市場へでもいきなはるだらふといゝなさるから舟宿のせうがにやアお客がどこへでも行かふといゝなさる所へ御供をしやすといゝやしたらおめへがゐてはわりいからとナル升（ママ）一もらひの女郎かいさおめへさんにはあの

子もぶちころされさト（はなしている所へたばこぼんを持て來りはおりを帳場へもつて行く舟やどもなじみのほうへはづして行くあとひとりになりまくらの引出しから玉帳を出しよんでいる所へ此きやくのあいかたと兄弟分にて中よしの女郎くる）［梅］たとへからすがなけばとて天道樣でぬうちやァかへしやせぬ（トはなうたをうたひながら屏風をのぞきて）［梅］チヤ東さんおさみしひネお歌さんはどけへいきなはつた［東］だろうそくをみるやうに時々たちぎへがするよ［梅］またそんなものを出して見なはるよおうたさんにいつ付やすよ［東］おつとこんな事はいはずかたらずしよじだんまりのひやうしまくさ（トいふ所へあいかたおうたきたり）［歌］チヤ東さんソリヤァおまへ見る物ではなしだよこつちへよこしな（ト引ッたくる）［東］大分いゝ客が有なそれでは病氣を付るも尤だ［梅］おめへのるすにてへ〳〵わるくいゝなはつた事じやァねへ［歌］そうだらうよどうも東さんはかはだヨ［東］何んだ川だの山だのといなかものに江戸繪圖のかうしやくをしやアしめへし［歌］（笑ひながら）客人かへ［梅］アイほひき丁の大黒屋の客しゆさ［歌］おめへきのふ内へいつたじやァねへか［梅］むしんにいつたらありやこりやだといつて大きにしかられさおそれるのう［東］いゝきびだあんまりびはようとうをするからの事よしかしおめへの口車にかゝつちやァどんなきいたふうなやつでもうし車をみるやうにのろくなつて内はたちまち火の車だ［　］（トカ）東さんやかましひはなよふ口をきゝなはる豆ぞうのやうだ［東］何ンだ豆藏だなに豆がぞうにな

るものかおめへたちの豆は金になるよ［歌一梅］（わらひながら）にくひ口だねへ（トきせるでくらはす）［東］ア、あやまり〳〵あやまり樣は火のやまひおれらはかゝれて身のやまひだ［梅］けふ幸さんの所から文が來たがね是々と一所につれだつていかふからよひとまりをつけてまつていろとさ［歌］おめへはきついうれしがりやうだね［歌］うれしくなくつてさわたいが是々だものをト（火ばしではいへ何かかいて見せ）マアいつて來やせふ［東］マアはなしねへな［梅］わたいはいつまでもゐてへがおじやまとやらなれば［東］ナンダおじやまの御たんじやうだ大分おめへはくすぐつてへ事をいふのおいらアそんないやみはなしだよマア〳〵はなしねへな〳〵といつてはばアさんがうなぎをうつてゐるやうだ［梅］そういはれるとなをゐたくなりやすよマアいつてきやしやうト行く［歌］コウ東さんおめへせんどの下着はどうしなはつた［東］せんのしたぎはおの丸太夫テンツテン〳〵［歌］わりイしやれだねほんとうにいゝなはんねへとくすぐるよ［東］下着とは此中かりた着ものゝ事かありやアとうにはねがはへていそ非の内へとんでしまつたは（いそ非といふはなかまちの手合のやりくりするしちや也）［歌］おめへはとんだ中の字になんなはつたよ［東］手めへは此ごろはがうせいくめんがいゝといふはなしにござる法印さんのうらなひだ［歌］ナアニわたいらア大ひつてんだものを［東］うそをつけくめんのいゝといふ請人はこゝに御出なさるは（トなじみからきた文をだしてみせる）［歌］ソリヤアおめへどこからだしなはつたゆだんもすきもな

るものじやアねへヨ（其文のぶんに）

此間御はなしの金子の儀今日五両舟宿までとゞけ置候残りのぶん来る十
二日にまいり御めもじのうへいづれとも致し可申候間左やうに御さつし

〔東〕かういふ鳥かかゝつちやア父はなせるはへどうだ千代萩の勝元といふもんだからぐつともへんとうはあるめへがアヽつがもねへ（トしたゝ出してにらむ）〔歌〕（わらつてゐる）〔東〕（おや玉がこわいろで）この通りのしやうこの有にしらぬなぞとはこゝなうそつき女郎のじやうなしめそこ一寸もうごくな〔歌〕どうもおめへはわりいとつちやアねへよめつたにかくし事も出来やアしねへ〔東〕そんなら半日しやうちのおかはりか〔歌〕まゝにもしやせう〔東〕しやれるなへ手めへがそのつらでかのだんにないて見せちやアどんなやつでもたちまちうつゝになつてふところのしまのさいふに金の有のをやれこれさと手めへが方へとりおはんぬ　なんほうおそろしき御物語にて候だどれ一ツぷくのめの若草とせふコレ見やいけぞんざいなたどんがくづれていらア〔歌〕ドレわたいにちよつときせるをかしなはい〔東〕まてへヨウ人まねをするぜ〔歌〕（ひつたくりけぶなかほへふつかける）〔東〕（むせて）エヘン／＼アヽせつねへせつねへをうかそだしやれ所じやアねへ〔歌〕（わらひながら）いゝきびだ〔東〕おれをば糸櫻の岩藤といふめに合

せるぜ [歌]岩藤おばいろ〳〵な事をいゝたはるね [東]手めへはでへぶおぐちがあがつたぜ [歌]あんまりおめへのまねをしてしやべつたらのどがかはひてきたヨあをつきりとせふ（トつゝ茶わんへ酒なつぎのむ）[東]牛ぶんすけやうこいつはのめねへ酒だ（トかはなしかめ）れぞう六腑へしみわたるは此いきにぐつと一ねいりやらかさふ（トねぶり）[歌]（はなをつまむ）[東]よせへ[歌]マアねなはんなはなしが有よ [東]（だんまりでねぶる）[歌]コウおきねへ[東]ナンダおきねへそばだ[歌]マアわたいがいふ事を聞なはいおとゝひあれから市場へいきなはつたかおもてへ行なはつたか [東]しらねへは [歌]しらねへもすさまじひ市場の三河屋の女郎衆が用事を付て江戸へいつてまであふといふ評判記だそれに口ぎれいに切わたのたんのとよんだ新手をかきなはるの [東] いたこ〳〵**かくのたますれどいはんすけれどわしにかゝれるぬしじやなひ** [歌]とんだいゝ聲だそのこゑにおはるさんとやらがほれたのかへソリヤアみんなわたいがいふ文句だ [東]文句の中でこなさんの [歌]コウおめへはむだ斗いつてゐなはるの口のはたをつめるヨ [東]アヽいてへべらぼうめ [歌]いたかアいつまでもいなはいな [東]こいつは有がてへそんならなをしてそつちかふりだぞ [歌]ヲヤむしのいゝ（はなしするまもせはしなき）[船頭]ハイ御迎でござります

傾城傳受

全

序

花は盛りの中の町、月は隈なき茶亭が樓上に而已見る物かは、脚異見する令堂の泪の雨には、むなしく配所の月を乞ひ、勘當の身は華よりも、散しほれたる姿こそ猶哀増りて、娼妓の情も深からめや、諸譯よし田の兼好もどき、つれ／＼なる予が草廬に、おとづるゝは誰ぞ 遊里山人 例の小册を着して序文を乞ふ彼馬をさして鹿といへる、秦皇の伴頭ならで、花孃をさして馬となす、意氣地の地乘、手管のかけ引、しげ／＼通ふ足のはこびに、心の駒の手綱ゆるさば、茶亭亡八樓の、借にすゝめられ、鐙ふんばりこたゆるとも、終には己をあやまたん能乘る者は必ず落ると傾城も又鞍變ざるさある時は小栗本間の達人も一トむち當て檀溪へ走るべし今此傾城傳受を閲するに口舌ひぞりの曲馬はおろか鬼鹿毛といふ手怖き買婦も一鞍に乘靜めん事文中に

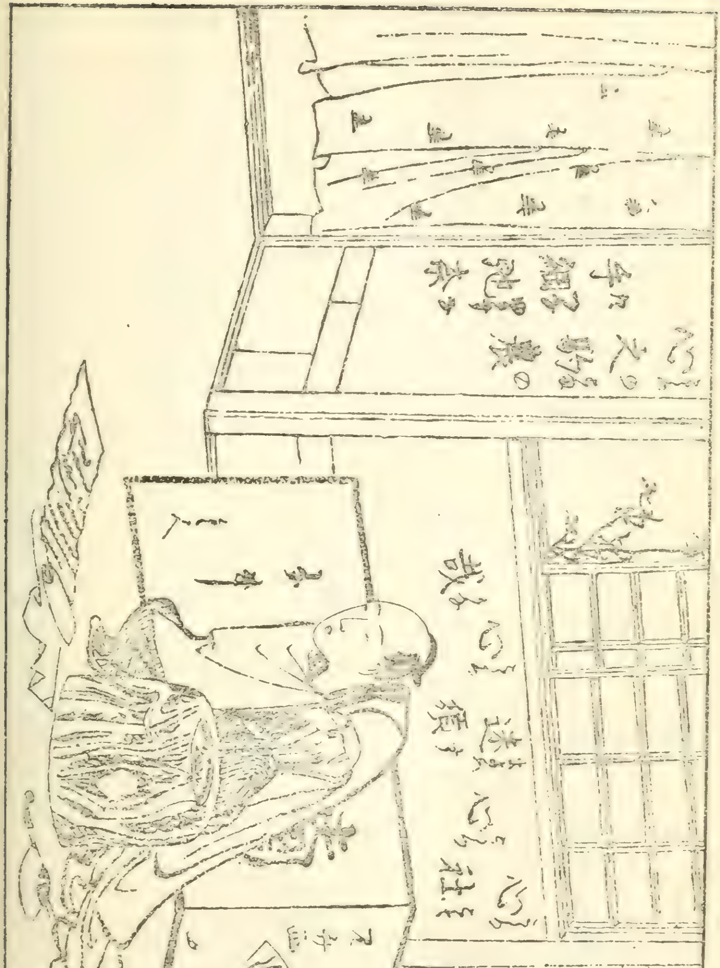
ソレあるぞへ〳〵ご下手なおかるを見るごとくお麾麾輔非番に代つて遊好
山人序ばかりしるすとしかいふ

序

契情に實なきと堅く覺へる乖巧あり亦功計僞なしと思ふ運盡あり無しと思へばあり有と思へば無が故倡妓人の懷を我ものにして苦を越る事水虎の庇のごとし是に迷ふは其本へ屆ざるゆへと明理を説聞すればまた冷咲あり是を雙一ツ挺と雨落の蟻砂にたとへ口には聖賢の尊きを吐き高傲をするとも花娘の虛實だに知りがたき鵞才なんぞ衆人の心に通じん事をやヲ、可咲と片腹抑てやつと筆をとる事しかり

はつ春　自序

ふ



遊里山人著

契情買心得

はいかひ高點集に〽人は武士なぜけいせいにいやがられ　といふ句ありなぜとうたがつたるはまつたく武士をきらふばかりにあらず貧して大つらをこき富て切れ放れわるく朝に愚痴を暮夕に淫蕩ゆへなり都て此くるわ貴賤にかぎりなければ尊を尊とせず利あるをもつて尊しとす故に契情の心をさぐり見るに馬の心と同ふして客人の氣を察する事妙也喩ふるもおそれあれども馬術惡故ニ天地父母ノ手綱ト云有リ父ハ制シ母ハ救フノ意味亦中傳ノ正中五方ノ鞍ハ我躰前後左右ノ釣合ニシテ鬼ノ拳ヲ以テ強クシテ強カラズ弱ヲ以テ強キニ勝實先師ノ教謹デ可敬也　馬にまたがるもの智愚強弱ともにのりやすくしてのり人まれ也借馬のむかしより上手氣にしは人をそしり嘲哢事皆氣分の上手にて其師手に合ふゑらみ勵す大功を不辨さいわひと惡馬にのがれてわが非をしらず女郎をあつかふ事同意にして虚を制し實をいたはり逢方茶や若者やりてほうばい女郎此左方の釣り合をかく時はひやうしに落合ふ時に側よりあしざまにいへばついに引かけそけたがるもの也そのところを切ッてはなし釣合を直し男氣をもつて強くしてつよからずの場也又女郎の心を論ずるに

一ほれたるはいかなるもうちば

一中くらゐなるはにぎやか
一いろ事あるは出入しげく
一うは氣なるはあきやすし
一欲なるはしつふかし
一慳なるは意氣地有て手なし
一しづかなるはいきぢなくて手あり

手なくしていきぢ有情ふかきこそまことの契情共云ツべし此意味をよく〳〵かんがふべき也今世上のうぬぼれ客の風俗を見るに客の客たるをしらずたま〳〵女郎の氣に合たるに出合へば我上手故おもしろく乘合たると思ふともがら多しさにあらず此所にいたりては手の有無によらず男の善惡にかぎらず向ふより手引するところ〳〵思はずおもしろく思ふ事のり合よき借馬のごとしいかなるおつとりの難妓たり共相對する所よりはおもしろく思ひ思はすることこそ眞の上手ともいふべし

初會上中下三段の定辨

上の定詞

客
女郎

〽六百番の哥合の哥に　〽浪のうへにうかれて過るたはれ女も頼む人にはたのまれぬかはかくはかなきものなれども實に心をかよはす人には通はする人情也されはけいせいとて同じ人なるべしそのあらましをあらはすに［新造］おいらんへまんまをおあんなんせんかへ［女郎］たべたくねへからのおれにかまはずともなんぞ持て行てたべな［新造］おありがたふだんます［ほうばい女郎］ちつとおはなしなんしな［女郎］客人がたつきからねておりイすよ［ほうばい］きつひいひ譯さはやく行ツておたのしみなんし［女郎］しりイせんよト（いひながらしやうじをたてすぐに床へ行く）ねなんしたかへいつそねぶつたさうな眼でだんす［客］眼はねる氣かしらねへが心がねゝへはナ［女］その口をおわすれなんすなへ少しでも眠りなんすとくすぐりイすにへ［客］くすぐらふ〱と思つていつかねてしまふもおかしからふ［女］イヽエなに目はさへきつておりイす［客］おほかたひるまねたらふからさ［女］ナにばからしひねたくねへから［客］ソウ氣をおかずともねるがいゝおれも親兄弟もあるものだめつたな事をする事じやァねへよ［女］むりにてへよく寢せやうと云イなんすのかへねたくばおめへさんばかりねなんし［客］ソウ寢せたがつてもねやァしねへ［女］たれがへ［客］おめへが［女］イツソむりばかりいひなんすにくひのふ［客］にくがられてさへだからかわひがられたら［女］うるさからふといひなんすのかへ［客］いゝや心がかけおちをするだらふといふ事ヨ［女］なぜへ［客］心といふ實事師がゐてさへだものを無かァどのやうにまよふも

しれぬのさ〔女〕おめへさんのやうな女郎しゆにばかり氣をもませなんしさふな人にもまよひなんす事がありイすかへ〔客〕おれだとつて人間だものをまよはねへでどうするものだたゞしおめへにはまよつてゐるひといふおふれでも有たかへ〔女〕おふれがなくツてもまよつてくれ人はだんせんがね一度や二度ならまよはせねへほうがいゝとお觸が有イした〔客〕おめへにか〔女〕イヽヱおめへさんにさ〔客〕氣のはらねへ時にはよく茶の出るものよいくらでもいひなせへ〔女〕わたくしが心をよくしつて御出なんすよ〔客〕しらねへでどうするものだ何ンとか思つてる身ではの何ンの氣もなくいはれる事もアヽいつたがうそか誠かと氣をもんでかんがへるものをちつとはしれそうなものさ〔女〕何とでもいつておなぶんなんしそれだからじれつてへ〔客〕そうじれつたがる事はねへハテすいたものばかりくればよからふがたまにおらがやうなものがくるから苦界といふものだ〔女〕アイおめへさんのやうな人がお出なんすからつとめの邪魔になりひすのさ〔客〕コリャア一番聞キどころだおらがやうなものがくれば女郎衆の風俗でもわるくなるといふのかへそんならいゝかげんにうつくしく生れて置たがいゝおれがからだでおれがほれるにさへじゆうにならぬといふもほんにまゝならぬうき世だト(すこしむつとした風にてうつむきたばこをつぐ)〔女〕ソリヤアたとへ風俗がわるくなつてもこゝろがらだからたれもうらみはしイせんがネどうでおめへさんのやうな客人をどこの女郎衆でもよぶかしたゞはとをしイせん

すればふかく御出なんす所も有イせふと思へばはしたねへ事をいつてさげすみなんすもはづかしくどのやうに思ひイしても及ばぬ事だとあきらめておりイすのさ [客]人に一ツぺい手向て氣はづかしひ事を丸むきにいはせておひてあきらめたとにげ口上では不承知だころすともいかすともはつきりとした所を聞かぬ中は十日が廿日はつかゞ三十日でも歸りやアしねへ [女]そんな事をいつてうれしがらせなんすがわたくしはどうともおめへさんのすきになりイす氣だがネおめへさんうそだからかんにんしろはなりイせんによ（此所かはゆきかほにてにつこりわらふ） [客]齒から外へ出した事は此世がでんぐりかへる共一寸でも引のじやアねへ [女]きつとかへ [客]手めへこそだれへでもかうして上ますのだらふ [女]イツソはらが立心までつとめをしてはおりイせんはナ [客]（じつと顔を見て）こんな顔をもたずともいゝ事に [女]だますとつみでござんすにへ [客]ばかをいへこれ [女]エヽト

屏風をひやうしまくのごとくやゝ有て（女郎のこゝろ）〽いつそはづかしひと（かほをかくすやうすにて）ほんに此口で　いくたりころしなんしたへ [客]（こたへて）手まへが此かほでころしたかずとりほどさ　（トかすかにきこゆるまもなく）茶や迎に來たれども　しばしまたせしゆへ　下へ行上へあがり見れども　大かたはねたる所斗にてはなすべき所もなく　らうかのれんじへこしをかけやつと目のさめたかほにてやみとあくびをしてこの内いついく日のやくそくかたくし

てやう〳〵かへす也女郎らうかへ出てはほれるほどおちつきがほのものにてこゝが至ての美味

故に爰にて身をはたす輩多しつゝしむべし　かの付合の句にも

〽けいせいにほれられている身の行末

此所かへり見てよく〳〵考ふべき事　くはしくは末にしるす

中の定詞　客　女郎

續千載集の哥に　〽露ばかりかけし情もとゞまらずかれ行中の道芝の艸。此哥の心迄もなくいかほど

情をかけるともかよふ内ばかりにて其跡はしらぬ顔をするもの也そのあらましをあらはすに

坐しきおさまりどれへかこぞつてめしをくひめん〳〵のたくはへものなぞをかぶろにとりにや

り又此風の女郎は心ちとなく思ひて自身にとりに行その折しも屏風の外よりねなんすなへまん

まをたべて今ざきにまいりイすなどゝすて詞をいふて行されればめしすみたれば直に行くかと思

へばべん〳〵とやうじをつかひいらざる人の客のよしあしを云て時をうつしそれよりかれこれ

しまひやつぱりやうじをくはへ何かいそひで來た風にてざしきへ入

女郎 ねなんしたかへ　客 ムヽとろ〳〵とした　女 たばこの火は有いすかへ　客（手をかざして見て）イ

ヽヤねへさふだ［女］おだしなんしとつてきイせふ（行かんとする所へかぶろとなりかゝるゆへこれへ火をとりにやり程なく持てくる）よくきへねへやうにいけてくればいゝのにコレサあとをよくたつていきやヨ（コレハカ）（と六こんたんな人にきかせまじきにてはなし何か食物がある有猫をおそれての事なるべし又たばこを出さんときせるを取て）オヤ此きせるはどうかしたさうだちつと紙をおくんなんし（其紙を小さく切がんくびへ敷その上よりたばこをつぎ呑也きせるを通すまじないか吸付出）よく寝なんしたネ（トしら〳〵しくいふ）［客］てうどよからふ［女］ナゼへ［客］きやく人が來たからサ［女］いつへばからしひ［客］そして何をしてゐた［女］（くそにもならぬ事をながばなしをしていた共いはれず）わつちが客人の連衆（つれしゅ）が來たからしらぬかほもならずかほを出したらむりどめをして大きにこまりイした

［女］どうもぬしは見申シたやうだネどこへなじんでお出なんすへ［客］ナニついぞこつちへきた事はねへ［女］ようかしこねへふうだぞ［客］これもあんまりむりだらふ［女］たしかになじんで御出なんす所がつがうがわるくッてそれで御出なんしたらふ［客］おれもみへだからそうだといひてへがはづかしひ事だが是にやアこまりの天神さまだ［女］ほんに今時の客人は女郎衆ははだしだわけてわつちらなどは客人にだまされてばかりおりいす（大なうそにて金の間違のなるべし）［客］おめへがたをかくやうな氣づよいものが有ならおれが

所へしらせてよこしなあしぼねをなぐつてやらふ 女モシへ直(ぢき)にあるに 客ソリヤアどこに 女ぬし
の眼(め)には見へんせんかへ燈臺本くらしだぞ 客ア丶アあつちの色男か 女あつちのとは丶 客コレそ
んなにしらを切たら行しほが有めへぜ 女むりにやりたがるもい丶ね 客ハテやりて丶事はねへが
思ひ思はれる中じやアてへ〴〵まちどをひ物じやアねへそれをやらねへで置くは思ひがおそろしひ
女色男のなんのとそんなものはおつせんネまた客人が有くらゐならぬしたちのやうな如在(じよさい)のねへ人
にかくしだてをしイすものかな 客そんなら客はねへにもしてやらふが色男のめへ立を見てやらう
(と入ほくろを見にかゝる) 女そんな物はおつせんコレ見なんしきれいな物だね(ト右の手斗見せる)
客こつち斗りではふせうちだと(左の手を見るにけした跡二ツ有)是りや何ンだ 女みんなけしたのさ
客なるほど大きなつみだ死(しん)でもぢごくだぞ 女きみのわるひなぜへ 客つみもねへものをソウ火あぶ
りにするからさ 女むかふでもするから五分〳〵さ(此所にて少しさみわるく言わけがましくいふ) 客何も
そう思ひだしてふさひでくれる事はねへ 女ナニふさぎはしいせんがネほり物などをしてあたな(だカ)もの
とさげすみなんせうかと思ひ過しがしられてサ。モウどんな事でもほりものなどはしイせんからわら
つておくんなんすなへ 客なるほど手の有女だ 女ばか〳〵しひ手とはどんなものだへサアおしへてお
くんなんし 客もゝんぐはア(兩手をかざしこはひかほをして見せる) 女こはふおすそれが手と云ものか

へ［客］いかにもかふ化物(ばけ)のまねをするにも只(たゞ)もゝんぐはアじやアどぬけるからかふ手をかざせば化(ばけ)ものらしひといふも手のわざだがおらが手はしんだいきり出した所がこのくらゐなもので是ぐるみ心がおしへねへじやア手がはたらかねへ又おめへがたの手はかくべつなものよ

手の有といふ事は是をさして申なりイヨイハアヽホウ〳〵何とちがへは有めへ［女］ソリヤア大違ひむかしの事さ今はこつちばかりほれて先でいつかうなもおかしかろ(トしり目で見る)［客］ソシテほれ人がありやアどうする［女］ソリヤアその時の事さ［客］おらアそのやうな氣の長イ事はきらひだ［女］それだつて初會でどふなるものかなきなさつたうへじやアどうともわかりイせふ［客］そのことばをわすれめへによ［女］マアきて見なんしいつそくどひ(トつめる)［客］アイタヽヽ

是よりしばらく無言(むごん)にてほどなく夜もしらみければうらやくそくもおはりかへる時らうかよりはしごの下へおりる迄一坐有てもかまはず二三度も引廻しさゝやききつと〳〵をよくいひたがるものなりこれは女郎のつねにてのろきは是に高身をはたすありさてかの古人(こじん)の發句(ほつく)に

〽うき草やけふは向ふの岸(きし)に咲(さく)　此心をかんがへしるべき事なり　委敷(くわしく)は末(すへ)にしるす

下の定詞　客 女郎

〽萬葉集の歌に〽目には見へて手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありけると詠り　けいせいの身のうへにはあるまじくなれども眞にすかぬと思ふ客には眼前にありて此歌の心に叶へるもありそのあらましをあらはすに

一ッたい坐しきの内一坐の女郎おかしき事ありて笑ふとも少しも見むきもせずしざうむごんにてそれよりざしきおさまりゆるりつとめしを喰人のかほさへ見れば客をわるくいひてこんな時だれさんがくればいゝとらちのあらぬ事をいひだん〳〵夜もふけ人の所にもゑんりよあれば今はぜひなくわが部やへ行見ればむつとするゆへ又たばこの火を四五丁もある所へ行く程手間どりてもつてきていそぎもせぬ文をもよき折と長〳〵と書しまへばぜひなく

[女郎]なぜねなんせんへ　[客]おめへのくるのを待てゐた　[女]きつひしんじつネ　[客]がうぎにこんたんな文をかいたな色男にはうき日をやつすの　[女]わつちやア色男だの色事だのとそんないやらしひ事はきついきらひさ　[客]こいつはきつひの（事カ）だ　[女]きつくッてもいゝ（此所しばしはなしたへる）　[客]來るとモウねるぜマアおきてはなさねへか　[女]いつそしつこひヨ人といふものはねぶひものかねぶくねへ

ものかね 客（調子おもいれにこゝへに）これは大事なことのおたづねかの古人の句にも草も木もねるにけいせいほとゝぎすッ、テン／＼なんとおもしろからふが 女ねつからおもしろひ 客とんだ世事のいゝ女郎衆だ 女ぬしにほめられたは何よりだネ 客なるほど氣のきいた人唐だ 女なんだとへ 客人唐もたかず屁もひらずといふ事よ 女大きにおせわいつそ苦勞せうだね 客（中車が聲色にて小ごへに云）ハテ袖ふり合すもたしやうの緣ことにはかりのめうとの盃緣あればこそ一ッ襀せめてくるわのうちばかりもせわをやきてへおれが心夫とも又せわになりてへ心ならたとへ千兩二千兩でもむかで小判ならいとひはせぬはへ 女いつそきいた風だよ 客コレおいらん是でも氣に入ラねへか 女おいらんなぞといつておくんなんすな（此所にて眠たきむりに明てむりにねぶる思入あり）客わたやの二階を見るやうにソウぴん／＼する事はねへきいたのきかぬのと道成寺のまく明キじやアあるめへしハア、こいつはお寺にいろ男があるな成ほど手前にやア坊主がそうをうだなぜといゝや手まへの顔がゆうれいが西瓜を喰ひてへといふ歯だぜ聞やれそのゆうれいが何で出るかと思へば硯箱の引出しへ錢を百のこして死だからうかされねへとよはかねへゆうれいだの 女ぬしはおてらのめしたきだそうでゆうれいとちかづきであらつしやるよ 客コレ／＼そんなにあつくなつても上歯が一ッ間ほど前へ出てゐるからはぎしりは出來ねへぜ 女手前だの何ンのといゝ客のふりをして棚おろしも氣が強ひ 客ナニ棚から

おろすのなんのとそんな手おもひのじやァねへうそならかゞみを見や仕切出居しにやつてもなきく〳〵
二分はおぼつかねへにいゝ女郎のふうをしておやかたをそまつにしねへがいゝぜハァ生國羽生村だの
どうれでいゝ女の氣だその心はかゞみを見た事があるまへ有がてへ御出家に御加持でもしてもらやひ
よつとしたらいゝ女にならふもしれねへ

此所は一坐きゝ付ケこれをせいしもはや夜も坐もしらけてかへるなり是もあらだてざる時はか
へつてしんとなる事もあるもの也まづかくいふ時には行かぬがましなるべし

かの附合の句にも

契情も欲氣を去ればわが心
故に善惡うごきあるなりおそれ考ふべしくはしくは末にしるす

右初會三段の定辨も此外問ふによりていろ〳〵答もあるべくなれどもまづ惚たる所の定詞常ある所
の定詞ふられたる所の定詞上中下にわけてしらしむる
上定る所の詞は實情なり此客に餘念なく惚たるなれば此女郎いかほど手ありとて内はなもの也はじめ
足ちかければついには死ぬ事もいとはぬ物にて身を果すのもなる害也またはじめの中とをざかりな
ばわがおもふやうになききやくと我壹人氣をもむやうに覺へうらむ所よりうすくなる也又この類はか

れにわるくこれによくするゆへに上の字を返せば下といふ情にうごく所うたがひなし
中の定る所の詞はうそも商ふけいせいの常なり中は口に棒をつらぬき上より見ても下より見ても同じ事にてこのごとくいかなるいろ男たり共少しも惚る氣なくいかなる醜男といふ共いやとも思はずされば男の善惡手の有無によらず惚たふりをして小遣ひをもらはんと思ふ心ばかりにて少シもうごく事なしかふいふ女郎にほりものは多くはなきもの也たとへ有ても至て爲になる客か時によりさしつまり夜具の無心などのときほりものゆびなど切る也又年ン明まへもあれや是やの差別なくたゞ金の有ル人には金にほれて女房になりたがるものにて是らを心のしみつたれともいふべし
下の定る處の詞といふは是又實情也契情此其本を尋れば七夜に付たる名はおの字成るべしされば同じ女すきぶすきはあるべし尤の事也如此女郎ははじめの女郎のごとく好たるきやくいやな客に心をあらはし又客もわるくされしを腹だち大かたはおろすもの多しこれはなはだわるし尤女郎にはぢをあたへるやうなれどもくらやみのはぢをあらはす非なり又はいかほど理有ともやかましき客とか人柄あしき客とか評すべしされば其見世先は通りにくきもの也おとなしくたしなませやうこそ有べき事又女郎いかほどあしくするとも少しもかまはず實を盡しかよふ時には打てかはつてうちとけかへつて深くなるもの也ゆへに下の字をかへせば上の字となるうごきある故上下の辨は別ておそるべきなり中の辨は誠

に板彫でおしたる所の詞少しもちがはず故に是へ上下をくはへ上中下三段の辨と定むる

契情買五ッの愼事

一　第一が其心を亂さず

一　第二が其身を亂さず

一　第三が其業を亂さず

一　第四が其儀を亂さず

一　第五が其家を亂さず

如此愼の第一とす心の一ッみだるゝ時には跡の四ッはひとりでに出來揃ふ事恐るべし爰をよく辨へたま〱行に何のくるしからずそれを女郎かひに災ありと地女をせゝくるのすましがほはすへに害ある事をしらぬはらりなり（大馬鹿をさしていふ）また若き時人にすぐれて馬鹿をつくすあり年よつて（マヽ）まつはのけらんとして思ひやりのなきものにて又は口へあらはすともおらもわかひ時はどらをしたが今のわかひものゝやうじやァなかつたどうも今の風はわるひなどゝ手まへがつてをよくそしるものなりされば其身たちも此つゝしみを守りたるかと思へばゆへなく心をみだし親兄弟に苦勞をかけ夏は幮なし冬は夜着なく分限もなく大酒をくらひ翌日はこれがために作病をおこしまたやぼながらも女

郎によく思はれんと思ふ所よりはその時のはやりものなどをきたるべしされはそのおりふしもとしよりたちの氣にかなひよき女郎買の風とてほめそやすべきやそふはいふまじくおのれがした事は何もかもよく思ふは愚者のならひ也此類いかほど女郎買をなすとも人に害ありて益なしたとへめん〳〵わかき時はたらきありて五ツの愼をやぶらざるとも人に智愚強弱あれば十人よれば十人ちがふなりされども志すところは同じなればふはたらきものには異見を加へべきにわかきときの事は誰もしるまじと思ふて利口らしき事をいふと誰かこれを用ひんたか〳〵中の定辨を大もてと思ふ類なるべし評ずるに足らず去ルによつて予が手引く所の意味よくこれに通じ切ればはなれをしるべしはじめ上の詞にて惚られたるはよく〳〵了簡すべしとおしへ又中の詞に虚なるをうそとして下のあしきに近よらず虚かへつて實となる災ひありと三段共にいましめざればいづれ行かぬかたなりといふやうなれどもさにあらずわかきうちなれば此意味をわきまへて行べしとしよりは側からせがむとも行まじく年寄とて死ぬ迄は色氣はなるゝにあらざれどもいかほど思ふ共向ふにてふせうちゆへおもしろくなければ負おしみにりきんだ口をきひてゐる事是もわかき時金銀をいかして遣ふはたらきものなればいか程としよりても女郎せうちするもの也又身をつゝしみ是に近よらずともその人情に通ずれば若きもの女の爲に身をはたさんとする災ひもこれが異見をする時にはよく止りきくとかく金銀をいかしてつかふ事をしら

ねば女郎買の醉々に落入事なけかはしく尤女郎買の金とて別にとりのけてもなけれどもひどきつがうして行ときははたしてかねが死ぬものそれは直でなきゆへの事也又貧福とも廓の金にはつまるならひなればずいぶんとふ義理をせぬやうにいろ〳〵やりくりて行べしまたふかくなりてはたがひに壹ツもよき了簡は出ぬものなればとかく此おしへを守りてその本をかんがふべきなり何故といふにたがひに此世はおろか來世までもはなれまじくと惚あふたのなればぜひなき事是も神々のむすび給ふ惡縁と親さへゆるさば女房になしびんぼうして見るがよしこゝに心得の大事あり何といふに女房にするまでに家をぶんさんせぬやうにすべしそれはどうなればまづ十たびあふ内に五ツたびは只あつて斗り歸りその餘は文のおとづれにて事濟すべしそして折ふしにあがらばたがひにこがれたるところなればうれしさおもしろみも十倍なるべしこゝを片時あはねば心持をわるく思ひむり酒など呑でやけをおこしかんじんの女房にする時はてびあみがさにてつまらずよつてむふんべつもおこるもの也これみなもとへとゞかざるゆへ也年明までながきやうなれども明てからは一生なりされればみじかき年季の内斗り月日の有と思ひながき月日にその身たちの苦しむ事を辨へぬやうなあだな氣にてはたとへ金ありてうけ出し女房にするともたがひに直にあきる事うたがひなし故に此五ツのつゝしみ三段の意味をよくわきまへ行ときはほどよく又人情につうじ老てもおらが若ひ時はといふ句は出ぬもの也可レ考

理哥

〽傾城の文字を目あてに買ならば
　小家といへどあぶなげはなし

〽ふられてもせくなさはぐなはら立な
　そこの一夜をおもしろく買へ

〽内の首尾世間の首尾をとゝのへば
　しぜんと先のしゆびもとゝのふ

〽あひかたがたとへいやでも一夜ぞと
　ほれたるやうにはなしあふべき

〽少しでもその圖〳〵とあてがへば
　活たるやふに金がはたらく

法定

一　己惚一切致間鋪事

一　安手決而致間鋪事

一　連之事悪鋪申間敷事

一　坐鋪濟一坐之床へ行長咄致間鋪事

一　悪忌ても夜中に歸るといふ事

一　亦は仇ニ悪さを致間鋪事

一　女郎を儀理詰に引申間敷事

大通流跋

右之條々於二相背一者

梵天大借夾第驢盡惣而日本極通大通之人器淀藤屋（淀屋辰五郎 藤屋伊左衛門 是也）兩通

之根元從二紀文大通人一可レ蒙二赤耻一者也仍而起請文如レ件

是茂稚梅契向述

谷

峩

靑樓貞廓誌

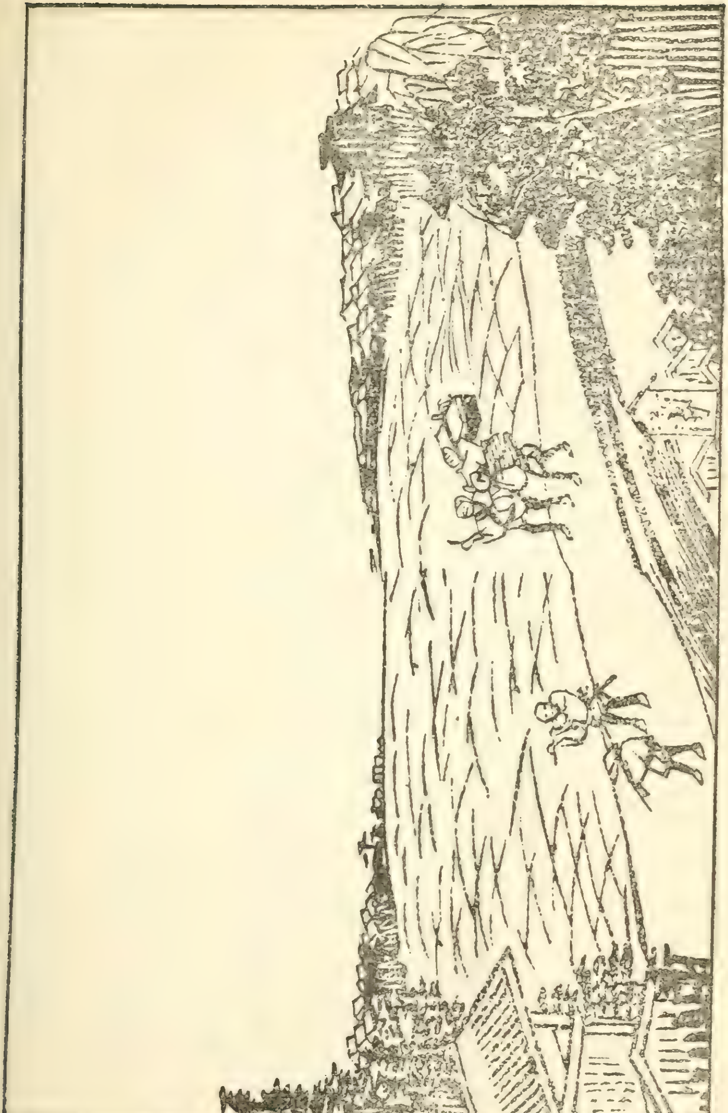
全

序

晦日にも出る竹村の月あれば鷄卵の四角もあの硯蓋に眼前たり豈契情に眞なしといはんや陳文漢の武帝さんも雨となり雲となる兒や嬢となり笠となりて間夫の爲には年季をかぞふる指さへも打切的發に金の草鞋を蹈せて翼なふして とび足なふして乘虛田間徒も悟れば迷へば皆可もなし不可もなし嗚呼理屈で分らぬ浮世じやナアされば此郷に入て郷に隨ふ豪傑な傲興を題して眞廓誌といふもたわれたる新手を歎息して鬪得末見の口を鋭一助にもとて盆暗な我に序を乞ふ惟その傾城に噓あればこそ誠の見證は此小册にくわしと筆の足の馳るにまかせおこがましくいふ事しかり

女子登富嶽之年

初春　やはし　云亭



目録

○第一回　まじりみせのせかいをいふ
○第二回　西河岸のせかいをしるす

青樓眞廓誌

孝不孝二ツ並る塗枕とは宜哉身を親の爲に賣て苦界に入此國の戯女唐の妓釋迦も街賣女色と說給ひ
しもおなじ遊君のことなるべし迷ば卽財寶はなんのその終には身をせばめるのうれいを受實に男
女の淫樂は息骸を抱くと古人の金言賢を賢として色に易よと親分の遺言併まよひやすふして悟がたき
は此道ならんこゝに一嫡の遊子あり名を青木庵とよぶ一日例の戯作にあくびをのみこみながら〔木庵〕
退屈だおすまどん煎茶でもさつせへ〔すま〕アイとうみかけた帯をそばへ置勝手へ立行(かゝる所へ友だ
ちと見へ年頃廿四五うしろ奴にひつつめ本田二三日跡にゆいたひたい黒八のついの羽織にすがぬい紋板〆にしま
かんとうのへりとりのがくむくの下着さらさのじゆばん袖口にて蘭のちらしぼりのきせる古わたりさらさのひ
つかけの多葉粉入ばら緒のうらつけにてさも大そうにバツタ〳〵ト木あんの門口から)〔如琴〕木庵今夜はぜひ
〳〵つき合ツせへ時におすまさん一ト晩かりて行てもよしかのしかし女房もちを連て行は無理だが
〔すま〕又如琴さんの世事にやアこまる大切なもんだがおかし申ましやう(トいふもさすが女郎あがりなれ
ばかほにも出さずどびんへ茶を入ながら)マアお茶が出來ましたからお上りなさりませんか〔木庵〕いつそ
のことに茶づりはどふだ〔如琴〕今みちでうなぎでくつたりのんだりこんやはすけんばかりでとまろ

ふとはうそだぜへ（ト女房のまへなかれている）[木]モシごふてきにせつこんでマア一ぷくのみなせへ（トたばこぼんをつき出すとてはいふきをこぼす）[すま] 久しいもんだのふ [如]大さわぎ〳〵とそふに立（そふじをしている所へ又三十ぐらいの男ざかり衣しやうは好なしあるべかゝりなり）[不通]先生は在宿かのいきなぞうりがある（ト云ながらあがりトキ）如琴子今足下の所へ居たらモウ出たといつたから大かたこゝらだろふとおもつて來た [如]ソレハ御太義〳〵コウ此間土橋のおたみがおめへに言傳をしたぜへ何かたんとうらみがあるといつたッけへ [不つう]あいつも娘ぶんではよつほどとをつたものよ [如]サア〳〵石町の七ツがなるぜへいつまで咄でもはてしはねへことだいきやまいりとしようじやアねへか [木]そんならぜひ〳〵わたしをつれて行氣かそんなら先へかへりやすによ（トいやがる木あんを二人して引つれ柳ばしにてふねをこしらへさせ）[木]アレ見さつせへもふしゆびの松だたばこ吸うちに柳が松になりとはでかしたぜへ [如]モシ此松としゐの木といろごとをした咄を聞たか [不]インニヤ聞てへ [如]そんなら咄やしやう此松と向の椎の木と忍〳〵終にはふかくなつて袖にかくすも三月か四月となつて植木中間へ浮名が立どふで生てはゐられぬゆへいつそころして下さんせと椎の木がひざによりかゝりなげくから椎の木もとほうにくれコレお松手めへさへかくごすればたがいに心中しよふと出かけた時に椎の木がいふにはひよつと心中しぞこなつてさらされた上で木挽の手にかゝるも口惜しいことだ

とはどふだへ[木]おもしろくもなんともねへモゥわらつてもよしかへ[不]むかふ嶋もさびしいよふだのふ（トなにか咄をする内舟はほりへつく）[舟頭]アイあたりますおあぶのう御ざりやす[三人]おせわ〳〵（ト是より土手へかゝるむこふより）侠者二人り[久]（松坂の辨けい島ゑりぐりでとちたどてらにわり木のせいのたかいひより下駄さらしの手ぬぐいをかたをかへ〳〵いかついぶんごぶし）初に見そめしはつとらのびしやもんさんの御仲人（トかたりながら行あとより）[力藏]久やチイまちやな一所にいくべへ[久]コウ手めへゆんべは見へなんだナ三日月長家の女が用があるといつたぜへ[力]あのふんばりめへいめへましいあまよてめへおそろつく工面がいゝナ[久]くそがあきれらアゆんべも元手を四貫たてなげにあつた（アト二人はなし〳〵行土手の茶みせに下谷金杉ものと見へ）[丁通]おきほうけふもいゝ天氣だのふチャこつちの家名は（トいふより）[おき]ハイいろはと申します[丁]フゥいろは茶屋といつては芝の神明に名の高い茶見せがあるがよくむかい丁やふきや町でしたつけへ[おき]わたしどものは上方のいろは茶やのさそれはそふとコウおめへがたは毎晩おたのしかへいゝ氣だのふ[丁]こんな下直なしやれはなしさもふ一ツくんねへ[おき]丁通さん久しいもんだ何をくつてきたのだ[丁]何をとは知れた事ヨ向嶋でおごつて[おき]きたならよかろふといふ事かへ[丁]うさアねへコウ安公ぬしやアそんなに堅く土用干の具足といふ身でいずとちつとうかねへかナ[おき]もしへあんまりおめへさんばかりおかたいねへ[安]

わつちらは丁通がよふに口がきけやせん［おき］ぬしの名はなぜ丁通といゝなさいますねへ［安］町の事ならマァあたまで細見をそらでおぼへてどこのうらにはいくつこふかゞあるといふまで［丁］それを知ちやア［おき］とんだこゑとりだねへ（トしばらくわたりせりふにてむだないつているうち大門の方より侍二人出入の町人おはむきと見えて茶や男都合四人づれにて出てくる）［侍］ハヽアかゝるけしきを打捨て屋敷へかへるとは残念ナ［町人］いかさまもそつと御遊びなさるとよろしう御座りますに［若侍］イヤハヤかよふな節は町家に住たいものじや［侍］時にお手まへはモウ御出に及ばぬ［町人］せめて堀迄お送り申ませう［若侍］ハテ丁寧も時によります［若者］いつ頃又御出なさりますやら御聞申て來てくれろとお二人のおいらんがくれ〲もおつしやりました［侍二人］悦喜の色みへて（さもうれしそふなかほにてにこ〲わらいながらモウ）來ぬ〱彼等が心底がすめぬ（トとんだことないゝ出ス）［若］おかしさをこらへイヤモウきついもんで御座ります花様なぞはしんのことと見へます［侍］イヤ平岩氏なぞは手まへ共より年若だけかあいがられるはづじやてなんと平岩氏番の日は御時斗のまへであくびをして居るがけふなぞは又きつう日短に覺るでは御ざらぬか［町人］いづれつとめと申ものはさよふなもので御ざります［侍］イヤ貴様なぞはお浦山しひ又これからおたのしみであろふ［町人］イヘこれもたま〱なら私なぞは皆様を御つれ申ますゆへ夫になれてまいりましてはとんとおもしろくもなき里でと若ものはやみ

とヘイ／＼／＼とへんじばかりして居たりしがやがて先へかけぬけ　〔若〕モウ舟は出ているかネへ
〔舟宿むすめ〕さつきから出て居ます　〔若〕舫をとく町人はみよしをおさへおあぶのふ御ざります左樣な
ら御きげんよふ　〔若〕平どん御くろう　〔町〕氣をつけてたのんます（トこしたこどめ二人にて土手のかたへ行）
〔町〕あの屋敷が一番なんぎだこれから呑なをそふとぞんぶんにわるくいふ（跡よりは木あんふつう如琴三
人づれにてきやくも扇のかきはからとゆふ日をよけながら）衣紋をなをすやら思ひ／＼に見へをしてすで
に大門にいらんとす實に此世界を月本國なりと書し人も理にや中の町の夜の色には金は戀の淵に投
じ玉は酒の泉に捨るこゝなん鬱氣の墳場路柳墻花の植溜にしてしかも今日はさくらのはつ日とてこと
もおろかや左右の茶やニハ傾情禿袖をつらねコロン／＼の音さはやかに纖々素手繁絃は土手の蛙の音
をとめ打かけの紫は毛せんの朱を奪ふ通も不通もおしなべてこゝにぞ春のけしきなりけり艶歌玉琴の
音聲にはうかれ人の魂を動し素見の日和下駄ハむつごとの寐耳に響く肩輿のかけ聲もおのづとこへを
春雨のぬれぬさきこそつゆもいとへぬれてあふ夜の色男あればふられてかへる客もありいづれぐんじ
ゆのその中に彼三人は中の町いづゝが見せに立よる　〔女房〕ヲヤおそろいなすつて木さんお久しぶりで
御ざります此間は深川へ御かよいを承りました又あちらでもおもしろい事がさぞ出來ましたろうね
へ　〔木〕かゝアがやかましくてとんと出られやせん　〔如〕主人は江戸か　〔女〕只今江戸町へ御客をおくり申

てまいりました 不 初日からでへぶにぎやかだのふ 女 イヽエサ見物ばかりでこまりますコレサだれぞ二丁目へおしらせもふさねへか 如 マアだれぞよびにやらねへか 女 ハイかしこまりました(ト何か下女にいゝつけてやる此所盃出るほどなくなじみあいかた直江ゞの原いちのく若もの)さしそひ来る跡より ていしゆ コレハ〳〵今日は存がけないお出ありがたふ御座ります 不 何かいそがしそふだのふ ていしゆ さのみいそがしくも御座りませんが(トいふうち) 牽頭 連治幸蔵あそ吉呑治来る てい主 サア〳〵はやく来なせへナャ呑治さんゆふべはねむかつたらうごふてきにおめへはまわされたそふでぐでん〳〵をいつたぜへ のみ 今日はいつそづつうがしてかみをゆふ事もくるしいからおまきさんにたばねてもらいましたよ(此おまきといふはかみゆひなり) 幸 何かあだダネこいつは御しんがもめの仙人だ是よりおもい〳〵地口をこじつけたりおもい付をいつたり盃のまわり〳〵て あそ ナント又おいらんのおざしきでのみ治としやしやう のみ (ばちでたゝくまねをする) みな〳〵 そふさ〳〵とたつ 女 ハイさよふならばのちほどわたくしもまいりましやう 連 モシそこに扇はなしかね 女 おめへこしのはなんだ 宗 コレハおそれ入ます 女 さよふならどなたも御きげんよふ 三人 のちにきつと来なせへよ 女 かしこまりますした(マヽ)(トたいこ持をよび)連治さんおいらんへもよろしく(トいふはその内の新造にあたり有)三人は牽頭(たいこ)もちうちつれ立ほどなく娼家(しやうか)に入る(かくてざしきのけしきことしげければこゝにはぶく)

木あんがざしきはあいかた【いちかく】（羽ご板(マヽ)のほいろにて茶をほうじているしんぞうもありながらじしんにするは此女郎下戸と見へちやにやかましくよくあるやつ也）【木】下着のまゝにてふとんの上に大あぐらをかき新造禿を相手にして口をたゝきいるそのそばに　ふりしん【さよ舟】こくり／＼といねむつている　【木】コウ／＼さよ舟さん／＼（トおこされてめをこすり／＼）【さよ】なんでおつすへ　【木】もふ堀へついたぞへ　【さよ】なんだとへ　【木】のりてもねへのにおめへひとりこぎ出すからよ　【さよ】それだつても夕べまんじりともしいせんものを【木】カノ何か中むらやからくる色男か【さよ】かんにんしておやんなんしあんな梅ほしがづつうがするといふじゞむせへおいさんでおすものを　【木】それでもまんざらでもあるめへ　【さよ】何とでもいゝなんし（トすこしつんとする）【いちりく】木さんはよつていなんすよ　【木】今はさめやしたどふしたわけだかおまんまにたちけへりたくなつた【此さよ】おちやずんなんしな【木】とはいふものゝ又酒々（トあたりを見廻す）モシへそれその棚(たな)に包(つゝ)であるのはなんだへ　【この】これかへこりやア梅治がきしやごでおつすはばからしい　【木】おきやアがれ　【いち】ぬしやアとんだけびぞうだねへ（トはなしている所へ）部屋もち　【糸たき】木さんよくお出なんしたね　【木】是はおいらん先(さき)こくからお噂斗り申て　【糸】又おつうあはせなんすさござわるくいつたことだろうねへ　【木】わるごふか(おカ)いるほど　【いと】こふな(なるカ)ものかねへ（トきせるでたゝくまねをする）【木】あやまつた／＼大いてへ　【さよ】まだぶちもしねへうちからいた

くばいつ迄もいなんし【木】何かしやれしやつしやる【さよ】エヽすかねへおふじやれなんすなよもふ
(ト足でたゝみをふんで立て行)跡よりふりしん【川はし】しつたかおいてもくりやよふ引(トろうかなかけ
てくる)【いち】たれだそう〴〵しい【ばんしん】川はしさんなんだよ引【川】あのね駿河やの人にからか
つてつかわしいしたのさ【ばんしん】力(りき)さんかへ【川】アイサ おや木さんいつのまによく御出なんしたネ
【木】おめへ今おれを見つけたのか【川】それだつてもかけてきいしたからしりいせんものを(ト手まへも
わらふ)【糸】わたくしはもふおいとま申しいしやう木さんおさらばよもしへ おやすみなんし【木】マア
いゝわなはなしねへ【糸】又いつてまいりいしやうさだめて明日は御とうりうで御ざりいしやう【木】此
あめではいざあなりやすめへ【いと】オヤいゝ月でおつすものを△(おりふし向ざしきにては【ふつう】何かせ
つこんだよふすにて)【不】てめへといふものはわからねへもんだぜへせんどからきれるのきれねへのと
とんだためしもんだ又おわりやの客をよぶつもりか【なを江】どふもぬしやアきゝわけがわるうおつ
すあれは茶やへの義理(ぎり)があるから切レにくうおつすとわけはたび〳〵きゝなんしたろう【不】よせへお
いてくれろおらが(うカ)〳〵といふ侍じやアあるめへしてめへたちのちよ〳〵らにかゝつてなるものかせん
ぞよりおやぢやおふくろにたゝねへ茶やのぎりだの大屋のけつだのとみそやのふんどんといふもの
でむこふめへからわるくからませるぜへたんぼの人玉ア見るよふにしなりぐなりぬかしてもおれも男

のいきおだァ〔下を〕マァしづかにおつせへしな〔不〕しづかにしめへいやだばかなつらな今までこけになつていりやァいゝかとおもつてうなァかごかきやおでんうりをひねつてひのみ（火見）ばんのむすめだそうでたけへつらをするそつちがいやならこつちらよすべへ〔なを〕ソリヤァおありがとふ　おざりいすぬしがそふせへいつておくんなんすりやァわつちらもおもふ男をはれてよびいすよくいつておくんなんしたそれせへ聞ばもふ何にも用はおつせん〔不〕此あまァとんだとりのまちだコレ二日の禮日から人のいやがる大晦日迄此さとへはいりうそとまことのしよわけ手くだァきなかもすかねへ不通さんだァ此くるはがおれがうちで内へ寐のはとまりがけにいくとおもつているのだへんてこめへ（トけつきりひんまくり足でまくらたけ出ス　〔なを〕よしてもおくんなんし大事の色男の定紋がついていゝさァ〔不〕けりやァなんだ中見世のたばこばこかねんきやろふのめしわんといふ金ばくの紋所がそれほどわりやァありがてへか〔なを〕あきれかへるひとりでしやべんなんし（ト出て行）はや八ツのひやうし木カチ〱△（かゝるせかいにひきかへこなたのしんのしんじつばなしじよきんがあいかた）〔いの原〕人に斗り口をきかせて寐たふりをしなんすなわつちだといつてかたのねへことをいふもんでもおつせん〔如〕またてめへそんなぐちをいふよたれにかしやくられたなおれだつてもひろく附合をすりやァ外の内へもいくめへもんでもねへ〔いの〕それみなんしそのつきあい〱といつて今さらす

てられちやァたちいせん【如】すてるのうつちやるのと待人のよふしじやアあるめへし手めへとおれがわけはいわずとしれているだろうどふして外に目うつりがしてたまるものか【いの】それといふもおめへさんはうわきものだからおもひすぐしをするも女のあさはかからあんじめへもんでもおつせん【如】なんぞといつてむりに口説(くぜつ)をして手めへのほうからあきが來たのか【いの】そりやアどの口で(トつめるまねをして)そんなあまくちな心ならこんなに氣はもみいせん【如】これよくきけよおれだとつて今になつて手めへにきれちやアともだちのまへもすまねへは(トたばこぼんを引よせる)【いの】そふいふぬしの心なら手をはなしておきもしいしやうがどふもあそこの二かいは氣がかりな事がおざりいす(トいふは如きんをよびたがる女郎ありとみへたり)【如】もふいかねへといつちやアどんなこつ(マヽ)でもいかねへいつたがわるくばあやまつた(トのろくを引よせ二人ともわらいながら)【いの】なんの人にはらをたゝせたり氣をもませたりせずともな事をほんにうわきな心はきり替へておくんなんしおがみいすから【如】しれた事よ

第二回

人生再莫少年春千金を費し此の里の深意を知らんとうかれ〳〵て身をあやまつも日前にためしおほしといへどもなどか心を動ぜざらん蓋はまつて買ずのぼせて通さもこそ通の通たらんその傾情もおなじ事にて惚たとなればどんな醜男にてもかあいくるやだなとおもへば無性に嘩もいやなるもの也傾情は金次第とは嗚呼是夷狄の言ならんたとへ臥龍鳳雛が妙算ありとも此の道におこたりなば其極意をさぐる事かたし〽うはきさんすとわしやつきまとい此よばかりかみらいまでとは實に男をしたふ一心ならずやときわ木がざしきには二十二三とおぼしき客外につれもなきよふす折あしくおち合たる客人ありと見へて相生やか重詰もむなしく夜もすがら捨おかるゝおりも折から（引ケのひやうし木カチ〳〵〳〵）床のうちには常磐木あんどんへかんざしにて何かむだがきをしながら〔常〕もしへ〳〵おきなんしな〳〵〔客〕フウ〳〵〔常〕よくねなんすねへわつちはさつきからまんぢりともしいせんにぬしやアおかへりなんしてもねられねへからだゝといゝなんすからもふおこしいしやうとおもつて見ても又

かへんなんしてねむいときは今までわたくしがしんぼうしていたのがむだになりいすから（トいへどもやつぱりれている）もしへ（トひどふに引おこし）そしてまあ内のしゆびはどふでありますへ 客 ためいきをつきながらとてもこんどはおさまらねへ此ものまへは首だろう 常 わつちゆへにそのよふにくろふしておくんなんすとおもへばかなしいやらくやしいやらむねがいつぱいになりいす 客 久くだらぬ事をいつて癪でもおこすのかどふするもんだつばざわになつてからのしあんよコレ久なくのか 常 なんぼなくめへとおもつてもすへしじうのことをおもひやりいすとしんにかなしくばかりなりいす此の間たよりやへ出した文はとゞきいしたかへこれからはこつちへきなんすとてもものゝいらねへよふにしなんしまゝになるならばおめへさんのだんなさんにわつちがいつてこふ／＼だとわけをはなしておきかせ申とふおざりいす（トぐちになりきか（ママ）） 客 おもへばつれへ身の上だ

しんめりとふさいでいる折しも ことゝいと もしへおやすみなんしたかへ（トいふこへに二人はおどろきサア）もしへ こと 常磐木さんは寐なんしたかへ 常 オヤ琴いとさんまだおやすみなんせんかへ こと アイサもしへ外でもおつせんがねマアよくおきゝなんしよわたくしがとしはもゆかぬ身でこふ申いすは出すぎたよふざんすけれどきのふもときわぎさんがおめへさんの話をしてふさいでいなんすからわたくしがいふにはおめへもたんとねんきでもあるじやアなしわづか壹年か半としの

事をまちかねずとものことでおつしやうとそれにはいろ〳〵と及ずながらいけんがましいことを申いしたならばねきゝわけたといゝなんしたがまだむねが晴なんせんかへもしあのおくざしきのがあくだまでおすからしれた時はせかれて見なんしわたくしだつてもおめへさんをたよりにこふしている身ちつとはきゝわけてとりあげておくんなんしとしんじつの言葉に 常 もふかんにんしておくんなんしそんならそのしあんにあきらめていゝしやうとたばこをすい付出す ことのみながら此の間のよふなりやうけんをかならず出しておくんなんすなへそんならもふおやすみなんし(トうれしそふに出行) 常 とてもつまらぬ身の上わつちもかくごをきわめていゝすからこふしてはと耳に口 客 何も今となつてはあとへひく氣は五分でもねへ 常 そんならその今のほかのことはそふして見ておくんなんし又跡ではどふともしいすとやくそくして人ごゝちはさらになしと見へて 常 何んにもいわず

評曰 此客は久しい馴染といふにもあらずいまだ一ねんならざれどもいつたいにがみばしり男ぶ

りよく傾せいもとよりうわきゝものにてほれやすき方なれば大かただん／＼うわきのたゝまりにて外にきやく人もすくなくたちきれぬゆへにげるといふしあんも出たらうなんでも客は店ものと見へれば逃おほせてそれから先が見たいみんなこふいふりやうけんになるやつさト云々

跋

泣て嬉しき涙にはまくら帋さへ濡紙に心の駒の放れごま與五郎が氣ちがひじみしも吾妻か顔にまよひのたね廓日記のぬき書は半格子と西樓の二ツ蝶〱菜の葉に止る事を知りしと火の見やぐらの高見より見物しながら水道尻のしりへにしるす

松葉亭

三ツ
モリ

青樓夜話色講釋 全

自序

古語曰。人の短を謂事なかれ。我長を説事なかれ。ものいへば。唇寒し穐の風とは。實に蕉翁が確吟なり。予が氣性の長き事ハ。長崎より貰ひし强飯にはあらで。青樓に長の夜をふかして。長尻をかはき。長家中の迎ひを受て漸に歸るとひとしく親仁の長談義に。鼻の下の長きを譏られ。長い物には捲うたこ。始て鼻毛の長きを思ふ。是に於て長羽折を切つて。蝙蝠こ倶に潜み褌を短くして手拭の代に遣ふ。もこより才の短きに傚こいへ共。火見櫓に縫上をして。其用ならず糀町の幹を。揚底にして其詮なし。髭さきの長きを断て。蜻蛉を迷悟つかせ　牛に小便を堪させて。淋病の患を引出さす是をいらざる殺生とやいはむされば。福祿壽の頭の長きは其性質にして。大黒の屑糞の短きは。其屁る所の略するにやあらん。永いもあれば短も。あるは八百屋

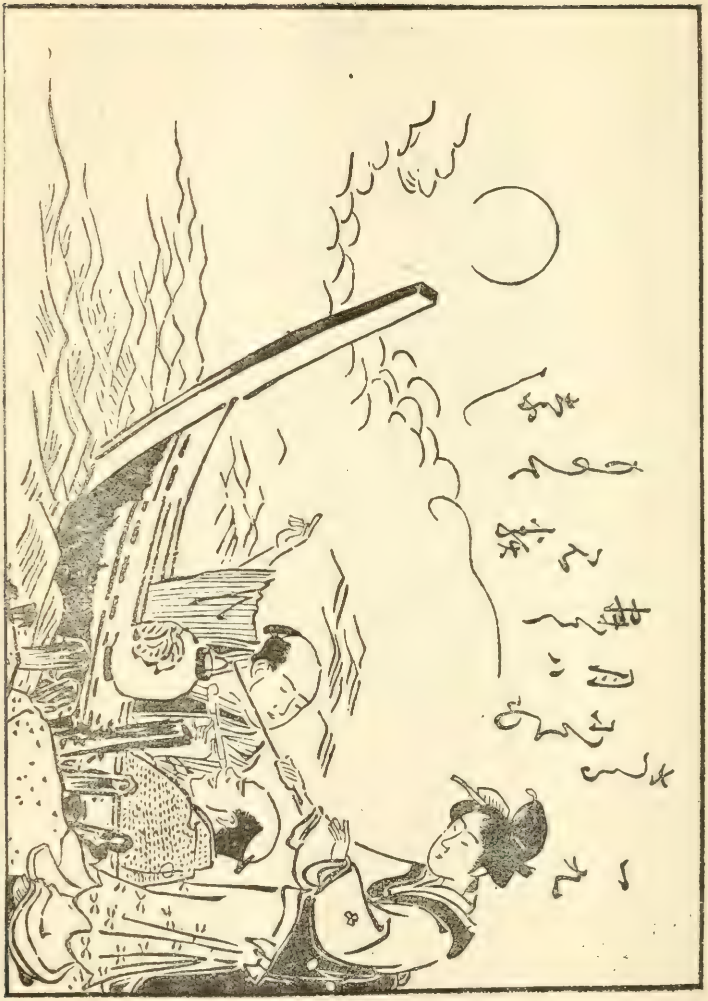
の椽の下九太夫ならで。くだ〳〵しき長口上は御退屈。されど又短きも飽氣なし。其よいほどの中の街。花の盛の永き日を。短く遊んで歸るが通。永く呼のが娼婦の好意。その長短を滑稽に。色講釋ごちやらつかす而已

于時寛政十三稔

辛酉孟春吉旦

十偏舍一九誌

敬貞



天

口車にふわごのつたる
猪牙舟の色講釋は
堀までの座料鳥目百銅

地

簈(ママ)の銀のかわりに
なまりちらかす太平樂は
にた山客の損料金三分

人

客と女郎の門ちがひに
思ひもよらぬ寐物語は
傾城の塞價千兩

青樓夜話色講釋

顚狂柳絮隨レ風舞とは。ちよいときなさい。塵〳〵と。氣違水にうかさるゝを。風にもまるゝ、柳に類ひし。輕薄桃花逐レ水流といふは。ほんにわつちやア。ぬしゆへならと追從に。とんだ手のある娼妓を。水に從ふ桃花にたとふ。見倒やへ見せても花廓の佳興。春夜一刻價千金是を客にふまする時は。今夜早速揚代借金。通も不通も。大象も是にはつなぎとめらるゝ。女の髮の柳ばしから。猪牙にのつたる同行二人

水狂（としころは三十五六、いたつてふおとこながら、なりかつこうは、五ぶもすいたところのれへといふ、見かけだなしのにた山つうなり、いぜんはそうおうにして、くらせしだんなかぶなれども、今はなだいばかりにて、いつかうのすかんぴん、みへぼうなれば、やまゝいつむぎの小そでに、くろりうもんのはなり少しようかんいろなり、いつたいよく、ちやハ〳〵とくちをきゝて、とかく女には、いやがられるふうぞくなり

辰三郎（やう〳〵十九はたちぐらい、おとなしふうのむすこかぶ、とうざんの小そでに、ねごやちゝぶの小もんのはなり、あきんどふうながら、まんざらのやぼとも見へぬおとこぶり、すいきやうにそゝのかされ

て、やなぎばしの、くはいせきな、すつぽりぬけて、ちよきなやたらにいそがする【すい狂】一心輕舟となつて。落日青樓へおもむく。かう出かけた所は。又どふもいへねへの【辰三郎】さよふさ。氣がはれて格別よふござります【水】そふさ。ヤ又おめへたちやア是からだよ。わつちらア。この猪牙や。駕にのつた錢斗でも。角屋敷が買れらアな。わけへときやア二度とはねへから。あそぶだけは。あそぶがとくといふものさ。わつちらがよふになつちやア。もふおへねへ。どけへいつても。こつちやアしらねへが。さきではもふしりきつていろゆへ。ヤレすいきやうさまがいらしつたと。産所から出た。取あげばゞを見るよふに。家内中に取まかれて。やれこれといはれるもんだから。もふじきに。からあたまから。金がいらアな。女郎も又。おいらをそまつにしちやア。なでへがわるくなるから。いやとも。よくせにやアならねへといふもんだから。こつちも又。顏づくで見つともねへこともできやせん。それだから。マア今じやア。うつかりといかれもしねへといふものさ【辰】そのかはり。又あなたのよふに。顏が通ふるといふもおたのしみさ。【水】ナニくるしみだはな。そんだいむかふで。むだなかねをつかはしもしねへが。あじなもので。又うつちやるよふなかねも。つかはねへけりやアならねへことがあるものさ。去年もきゝねへ。名びろめだの。ながへだのと。もらつたすりもので。袖なしの紙衣羽折をこしらへたところが。てうど。そのはをりに五兩何がしといふもの。かゝ

つていらア大わらひじやアねへかへ。草市の鬼灯に。小判をくづしたよりやア。まだつまらねへはなしだわな。そのかはりには。どけへいつても。いゝてへことをいつて。遊ぶだけが徳といふもんだが。ぬしたちやアまだ〳〵。それじやアいかねへ。初手のうちは。ずいぶんわるふざけをせぬよふに。おほよふにあそぶがいゝによ。そして。おめへたちのいゝことにやア。二會目三くはいめでからが。おさだまりのいりめばかりで。外にもし。旦那とかなんとかいつて。しけこむやつがねへからいいわな〔辰〕さやうでござります。そしてアノ三會目には。いくらほどやればよふござりますね〔水〕ソリヤアいろ〳〵ありやす。おめへがたが買うに部屋持ならば。三くわいめの入用若者遣り手が二分か。つとめが一分。とこ花があたじけなく。壹兩二分ともしられめへから。まあ二兩よ。茶屋が一分と。それで三兩といふものだ。しかし。迚もなら。中座にしなせへ。きついこたアねへわな。ぜんてへこれからでも。こうしなさるがいゝ。先舟宿へよつて。南一はづんで供につれてゆかアな。それから茶やへあがり。ちよびとのんで。茶や舟宿をつれて。はじめのうちは。ずいぶん端手にしなさるがいゝによ。そして。ひとりでゆくことはけしてよしなせへ。是悲(ママ)ど神もつれにやア。ざしきのあんばへがよくねへものよ。そしてけへつてからもはなしができやすわな。ちうさんかいに。ひとりで行といふは。そりやアわつちらがよふに。ならねへけりやア。しこなして遊れるものじやアねへわな。そ

こでぬしが。馴染にでもなろふとおもいなさるなら。三くはいめにやろふといふところを。二くわいめにしなせへ。マアこふだ。若ものやり手へ二分か。茶やのふうふへ二分か。つとめが片じまいで壹分二朱よ。床花をぐつと。はしよつたところが三両。しんぞうが一分。けいしやが一分。イヤまだちや屋の挑灯もつた男に二朱。それでこふと。てふど五両で。きつちりきまるといふものだ。それからでも。紋日その外。少しづゝのことは。相談づくで。きいてやらねばならねへわな。又女郎ほどつらへものはねへによ。ソレ中の町へ出ても。むかふから逢つてわるいといふ客でもくると。どこのうちへでも。チト御めんなんしと。はいつたばかりでもふ。壹分やらにやアなりやせん。けいしやたいこに。何をねだられても。やらずにすます客はあれども。女郎は又。やらずにやアおかれねへわな。ゐど神でも人のわりいやつは。うぬがつれてゆく。客をはなにかけて。女郎をひきたをすやつは。いくらもあるといふものだから。そんなこともくみわけてやらにやア。こゝろいきがわからねへわな。おいらが又。さかんに行時分には。茶屋はもちろん。やりてわけへものにも。とき〴〵。ひらりと見しらせておいたおかげにやア。酔つたまぎれに。肝癪をおこして。惣じまいにしよふの。イヤ新造をみんなあげろの。なんのかのと。となりざしきへのみへをいつても。わけへものが。ナニついへなアおよしなされませといふくらいで新造禿に向ふ島をねだられても。やりてがナニサ内證からのいゝつ

けで。わたくしらが内では。出しませぬと。けつく。あつちからかばつてくれたはな。そふいふものだから。二階ぢうが。ヤレすいきやう様〳〵と。もてはやすによつて。いやともこゝだじやア。相方の女郎も。ほれてこにやアならねへといふものさ。イヤ又つらで出来た色事は。そふでもねへもんだが。じみ〳〵と心いきにほれてきたやつは。はなしやいがべつなものだよ（このおとこ、いつたいふおとこゆへ、どこでも女郎が、みす〳〵たゞほれたとばかりはいゝにくきゆへ、そこでぬしのきに、ほれいしたと、いわれつけているおとこゆへそれでこのせりふな、いふと見へたり此内、何かふれのうちから、けぶりがでるゆへ）

舟頭 モシなにかくせへよふでございます 水 ヤほんに。火なわばこの引だしへ。たもとがくばつていた（トうろたへまわりて、やう〳〵ともみけし）マアそふいふものだから。今宵おいらにつきやつてみなせへ。こふいつちやア。しほ屋じやアねへが。おそらくおいらほど。おもしろくあそぶ客はねへによ。性は夫で今に。この遊びがやまねへわな 舟頭 もしまだけぶりがでやすよ 水 どこに〳〵（トたちあがつてきよろ〳〵と見まはす） 辰 おはなりがまだきへねへそふだ 水 ほんに。これは（トやう〳〵に又もみけす、此さわぎに、たいへいらくのはなしも、ともにきへてしまい） 水 こいつアつまらねへ。辰さんも又きをつけて、くんなさればいゝに（ト人のしつたことのよふに、うらめしそふにいふ） たつ わたくしは。いつかうぞんじませなんだ 水 こりやアいゝがの。内へけへると。山の神がどこでこがしたな

どゝ。せんぎするにやアあやまる（トまだいろおとこないふ）【辰】もふまいりました【水】チヤ兄貴ごくろう【舟頭】ハイおたばこ入が【水】チイ〳〵サア辰さん【たつ】先おさきへ【舟頭】旦那おけへりは【水】例のとふりさ（トさんばしをわたりあがる）

○金銀を湯水と遣ふ流れの里。人も命のせんだくと。行つもどりつ聲〴〵に【ウタ】すけんぞめきはむくどりの。なれつゝ木つゝきこうしさき（ツケチリ〳〵）【地廻り傳】コウおりよけいながら。ひとつ。おたのん申やす（トきせるをこうしのあいだへつつこむ）【新造】チヤこの雁首を見なんし。大きなもんだよ（トすいつけていだす）【傳】おつきなとつて。股のさけるほどでもあんめへ（トほうかぶりのむすんだところを、上へあげてばく〳〵とのみ、かうしの下のさんへはたいて、またすいつける）【地廻り占】傳や。ついでに紙をいちめへもらつてくりやな。犬のくそをふんづけた。いめへましい。きのきかねへちくしやうめだ。とんだとけへたれておきやアがつた（此内みじかきかわばなりをきて、少しのふろしきづゝみをせをひ火をともさぬてうちんをてにさげたるおとこ）【太兵へ】十兵へさん見なせへ。黒いものはどふしてもふめねへの。【ツレ十兵へ】そふさ。ぞくがわりいぜ。どれもけんで。六匁ぐらいのしろものだ【太兵へ】はたでやすくうればよい【十】むかふのやなぎぢやア。せんど参會の時大平がかつた女だ【太】こいつもおへねへらうずだぜ。げんなまにしちやアたけへもんだ（トむちうになつて地廻りのあしをふむ）【傳】アイタヽヽ

［太］これは御めんなさい［傳］やろうの鶩(あひる)じやアあんめへし人のかゞとを。めがきやアがるこたアねへわへ［吉］なんだ。よこつつらア。かぶりけへてやりやな。（此そばにかみがたものが二人きいていて）［八右衛門］嘉兵へさん。こちよらんせ。ぶらいたんなわろじや［か兵へ］なるほどあづまゑびすじや。ゑらうものいゝのきたないとこじやわいの。大坂(おほさか)では。かぶりかくの。何のとはいやせんわいの。つらアくいかいてこますといふてじや［八右衛門］京都(きやうと)でも。たまにいさかいをしおるが。またきれいにいゝおるわいの［嘉］なんといゝおるぞいの［八］よこつつらアたべてこますぞといふと。さきの相手(あいて)も。サアあがりくされといふわいの（此うちわかいものそばへきたり）［若者］もしちとおあがりなされませ［八］イヤ〳〵。わしらはついに。人のつらをたべたことがないわいの（トそう〳〵に行すぎる）。すががきチヤンラ〳〵〳〵

○水狂辰三郎は、ちや屋舟やどをつれて、大みせへしけこむ、尤初會、
客すいきやう、大なまよいとなりてふとんの上にたをれている。あいかたははしだて、かほだちきつとして、すつかりとしたるしろもの、うへしたともに、すゝたけいろのむく、しろちりめんのしごきを〆、やうじをかみくだきながら、ゆふ〳〵とざしきへはいる、客しばらく、たぬきをやらかしいたりしが、こたへかねてかほをあげ

【水狂】チヤいつのまにきなさつた【はし立】たつた今きいした（トかんざしにて、あんどうの火なかきたて、てうじがしらなさらの中へいれんとして取おとし）ヲヤすかねへよチ（トひざでたゝみを一ツとんとうつ）【新造松の】モシおいらんで。竹里さんがおつせへす。さつきは筆を。おありがたふござりいすとさ【はし立】そりへいれておきなんし。コウ松のさんいせやの兄さんはまだいなんすかへ【松】いつそしやれてゐなんすよ【はし】そんならね。さつきおはなし申いしたことを。おたのみ申いすと。いつておくんなんし【水】そふ申いしやう（ト出てゆく）【水】おもて座敷で。九平次が聲がしたつけが。きているかの【はし】その九平次さんの事ざんす。わしやアしつてお出なんすかへ【水】しつているだんか【はし】もしへゝとんだおもしろへ。人さんでおざんすよ。こけへちよつと、よびにおやんなんしな【水】ソリヤア御めんだ。おいらが来たことがあのてやいへしれると。それからくちがおほくなつて。あそこからもこゝからも。おくりものだのなんのかのと。てへ〳〵うるせへ事じやアねへわな【はし】それでも。今おもしろへはなしをしていなんしたを。わつちやア。聞さしてきいしたから。そのあとがきゝとふすはな【水】ソリヤアおめへは。いつてきくがいゝが。こけへは御めんだ。おいらがきたことがわきへしれちやア。ちとあんばいしきの。わりい理屈もありやすよ（ト外のうちに、なじみでもあるよふなことないふ、いつてへ此客、いせやにも、はらひのこりのはごな、しよつているゆへの事なり）【はし】そふてへ聞

かけたことを。みんな聞てしまいゝせんと、気にかゝつて。てへ〳〵わりいちんじやアおざんせんよ(きやくはひよつと、こけへこられちやアならぬゆへ、せんかたなく) 水 それほど聞てへはなしなら。さぞおもしろへことだろふ。はやくいつてきゝなせへ はし たんならちよつと(トそう〳〵にたちかゝるな)

水 おいらが事はけしておんびんだよ はし ソリヤアしやうちでおざんす(トずつとたつてかけだす、此おいらんなにか、そは〳〵してざしきにいつかず、折ふしとなりざしきの客ねとぼけごへのうた) ウタ へんなこんばん。こんたアすかん。めつたにきやくがおほければ。きいてびつくりまはしに。さん〳〵まつた。あかつき。すい〳〵のすいとな 水 ヱヽいめへましい唄だ(トまくらもとのてうし、さかづきをひきよせ、ひやざけをやたらにひつかけ、そのいきほひに、そろ〳〵とねぶりだし、いびきをかく)

夜もはや更行まゝに。浅草寺の鐘は頭の上にきこへ。鼾の聲枕の下に響て。金棒の音喧く。犬の吼尤高し。廊下の足音に。天窓の黒き鼠きのじ屋の臺をひいて行ば。隣坐敷の猫撫聲。爪をたてゝ客をかく。ひそ〳〵話は聾の耳にもとゞまり。漉帋の音はふられし客の胸にこたふ。ねずの番の噺にうかさるゝは。お茶をひいたるてやいにして。皆小便くさき所に集る。其頃ほひに。水狂もふつと目をさまして。見ればやつぱり我ひとりなり

水 つまらねへばんだわへアヽ水がいつぱいのみてへもんだ(ト又てうしの口からすぐなみ〳〵(にどく〳〵カ)とやらか

し、さけはのぼせけへるほどよいがまはり、おいらんはこず、ひとりまじ〳〵としていてもつまらず、とう〳〵こたへかねて、やたらに手なたゝく）〔若者〕あなたでござりますか（トしやうじを明ては入）是はおさみしうござりやすね〔水〕さみしくつてもソリヤアいゝがの。聞てくんねへ。こゝの内の法かアしらねへが。うろたへた幽靈が。かどちけへでもしたよふに。ちよつとつらア見せたなりに。消てしまつて。今によつつきもしねへわな。ほんのこつたが。おらアこの土地は鵜でいるものだから。女郎がちよつとでも。目はなをいごかしやアハヽアこふだなと。何もかも。せうちのすけで居るから。客があるならあるよふに。打明てこふだといやア。たゞくれてゞもやらアな。てへへいらくじやアねへが。おらあ敷初の蕎麥にやアいびつなりの切手を配り。燈籠俄の砂糖水にやア。小粒をいれてのませたおとこだ。女郎の腕へ逆修をいれさせたこたアねへが。新造の開眼には。いくたび施主についたか。しれねへといふもんだから。似た山客をとりあつかうよふにされちやア。つれの手めへも外聞がわりいわな〔若〕御もつともでござりやす。何もかも。御しやうちのあなたのことだからお願へ申て。どふでもなるものを。どけへいかしつたやら。只今そふ申ませふから。先今宵の所は。御りやうけんなすつて〔水〕ナニ了簡をするの。しねへのといふ譯じやアねへが。あんまりだアな。安菓子屋の紙ぶくろに。じやうだん書をしたよふな頬アしやアがつて。ふるも氣がつゑへ。なんぼこんな。飴のとりでこしらへたよふな野郎

でも。九郎助いなりの繪馬をみねへ。みんなおれが代句だはな〔若〕もふく〱御めんなさいませ。おいらんたちも。氣に御ぢよさいはねへが。とかく取しまりがござりやせんので。いつでもわたくしどもが。誤つてあるくにはこまります。ハヽヽヽさやうならたゞ今（トおかしくもねへをわらつて、さう〱にたつて行、

〔はし〕ぬしやアなぜはらをおたちなんしたへ〔水〕なぜたアたゝねへでさ〔はし〕それでも。わけへしゆをよびつけて。あんなに。おつせへすこたアおざんせんはな〔水〕いつたがどふした。いはねへでさ〔はし〕それだとつて。ぬしがいつてこいと。いゝなんしたじやアおざんせんか〔水〕いつてこいといつたとつて。てへげへしれたものだ。麩屋の手間とりを。飛脚にやりやアしめへし。たかゞ五間か十間のところへ。いつてくるのに。今までこねへといふことがあるもんかへ〔はし〕ソリヤアわつちも今宵は癪がおこりいして。下で藥をたべたり。何かしていゝしたはな。そんなにこゞとを。おつせへすくらへなら。初手からいつてこいと。いゝなんせんがよふおざんす。それになにも。あんなにきかれもしねへことを。おつせへすこたアおざんせん。客人をそまつにでもしたよふで。ないしやうへきこへても。てへ〱わつちがわるふおすはな。よくかんげへてもお見なんし。ぬしもこけへはらをたちにきやアしなんすめへし。ちつとの間。ざしきをあけたとつて。わけへしゆをよ

びつけなんすこたアおざんせんよ（トたていたに、水のながるゝよふにいゝすくめられ、きやくもからかつたところがはじまらぬとおもい、にはかによわいねなだしてあやまり）水コウおいらもはらのたつまぎれに。わけへしゆにいつたがわるかア。かんにんしねへ　はしソリヤアどふせ。わつちらがよふなものでおざんすから。ぬしたちの。おきにそまぬこともおざんしやうが。この土地（とち）へ。はじめてお出なんしたお方（かた）じやアおざんすめへし。ちつたアくげへのことも。すいりやうして。おくんなんしたがよふおざんすはな　水ハイ〳〵　はしあんまりぬしやア。ばからしうおざんす　水ハイ〳〵　はしふけいきな　水コウおれがあやまつたから、きげんをなをしな　はしはらがたつて。いつそしやくがいとふすはな（トねつからとんじやくなし、

○（おもてざしきのきやくは）辰三郎（ふとんのうへにねころびながら、つくへの上にあつたやゑがきの本を、とつてみてゐる）あいかた花ぞの（何かふさぎて、しな〳〵としてざしきへはいる、あとからほうばい女郎、ばんとうしんぞう、なにかさゝやきながらはいる、おいらん、あんどうのうしろに、うつむいてすわ

ろ）

ほうばい [浪花]もしおゆるしなんし（下あんどうのうしろへまはり）花園(はなぞの)さん。もふ〳〵いつそ。わつちやアそばでくよ〳〵おもつておりいしたが。おめへさんは。よくもだまつてお出なんした。さぞはらがたちいしやう [番新きく里]わたくしもくやしくつて〳〵ないてばつかり。おりいしたものを。さぞおいらんは。くつついてちやりてへよふに。思ひなんしたろふが。いわねへにしくはおざんせんよ [花]すいりやうしておくんなんし。橋立(はしだて)さんよりやア。わつちらアとししたのもんでおすから。いわれうちだとおもつてはおりいすが。あんなにいわれちやア。もふ〳〵くやしくつてなりいせんよ（下なきごへにていふ、客はなんだかわからず、あきれたかほなしてきいている）[浪]アレぬしのおかほを見なんし。いつそ。あきれけへつてお出なんす。（とくちに そでをあてゝ）[きく]ほんになんにもおしんなんすめへが。おめへさんのことで。てへ〳〵のさわぎじやアおざんせん。おいらんなんざア。あんなにいつそ。泣(な)てばつかりいなんしたわな [園]ソリヤアまたどふいふわけで [きく]きいておくんなんし。おめへさんも。その事はしつておいでなんしやうが。ぜんてへざしきでは。ぬしのおつれさんがさかづきを。わつちらがおいらんへさしなんして。おめへさんは又。はしだてさんへ。おさしなんしたでおざんしやうね [園]なるほど。おめへがそふいゝなさりやア。ちげへねへそふだおいらも。こけへへ

へつたときやア。こいつアおいらんがまちがつたと。おもつてはゐやしたが。そんもとくもねへことだから。だんまりでいたのさそれが又。どふしやした

〔きく〕それがね。はし立さんがまちげへて。おひとりの客人を。じしんの床へ。つれていきなんしたもんでおざんすから。おいらんも。こりやア客人がまちがつたよふだと。おもいなんしてもふしかたがおざんせんから。それでおめへさんを。こけへおつれ申いしたのでおざりいす。それといふも。あつちらの客人よりかア。おめへさんのほうが。いゝ男ざんすものを。おいらんも心のうちじやア間違つたのがけつく。嬉しくて。なりいせんからのことでおざんしやう。そふしたらおきゝなんし。橋立さんが。いつそこつちから。客人をまちげへたよふにいゝなんして。よいからてへ／＼。おいらんと。いゝやいなんしたことじやアおざんせん。橋立さんは。おしよくのことなり。肝積をおこして。いつそおいらんを。こなしなんしたときやア。わつちらももふ／＼。くやしくつて。くいついてゞもやりてへよふに。おもつておりいしたものを。その時じつと。こらへてゐなんした。おいらんの心がいとしくつてなりいせん。それだからおめへさんも。これからきてあげておくんなんし。ごせうでおざりいすよ

〔なみ〕ほんにこりやア。わつちらもとも／＼。おたのみ申います。そふいふいきはりでおざんすものを。ぬしが是限にお出なんせんと。花ぞのさんのかほがたちいせんわな。それにまだ。お聞なんし。はしだてさんのおつせへすにやア。たとへ

此ぅへ。あの客人といろ事をしても。花ぞのさんを。つきだして見せいしやうと。いゝなんしたとさ。ほんににくらしいくちだのふ。【辰】そんならまちげへの理屈を。おいらがつれもしつているかね【きく】ナニあの客人は。いつそ酔つてゐなんしたから。そんなこともむちうでいなんすそふさ。ぜんてへはしだてさんも。ぬしにやァほれなんしたと見へいすよ【なみ】それだからのことざんす。もしへ。いろおとこはもふ。これがうるそふおすね（トわらひながら、たばこのけぶりを、うちへひいてはたき）花ぞのさんも心づけへを。しなんしたかわりに。是からまたしつぽりとお　なんし（はなぞのフヽンとはじめてわらひうつむく）【きく】おいらん。もふ何も用はおざんせんかへ【花】なみはなさん。おありがたふす。きくざとさん。もふいつておやすみなんし【なみ】もしあなた【辰】おやすみなせへ【きく】ハイあなた（トなみはなとゝもにきくざともでゝゆく）【辰】そいつはとんだことであつた（トよぎをかぶりねる、おいらんはあんどうの火をかきたて、びやうぶのかげへよせて、　あがり、きやくへいつぷくすいつけてだしうつむいている、さきほどのいさくさにて、日はなきはらし、まへがみはぶらさがりて、うつとりとしたるかほのうつくしさ、されども、ほれているきやくにあふうれしさは、しぜんとわらひをふくむ、二かは目のあいきやうみへたり）【辰】ソリヤア大きにきをもみなすつたの。きのどくな【花】どんなにこゝろづけへをいたしいしても。おめへさんが是から。見すてずに。きておくんなんすりやア。よふおざんすが。ひよつ

と是きりにして。お出なんせんと。もふ〳〵わつちやアいきてはいられいせんから。それが又。かなしくつてなりいせん（ト又少し目がうるむ）〔辰〕そふいふわけじやアたてひきでも。これからこにやアならねへといふもんだが。おめへがまた。その氣でつきやつてくんなさらにやア。はりやいがねへといふものだ〔花〕おめへさんさへそのお心なら。わたくしが身はたとへ。どのよふになつても。いとひはしゐせん〔辰〕ソリヤアおたけへだ。しかしおめへがたのこゝろは。あてにやアならねへ〔花〕はじめておめにかゝりいして。こんなことを申いすものでおざんすものを。うたぐりなんすは。むりじやアおざんせんが。わたくしやアもふ〳〵。どんなことでもいたしいすから。おめへさんのおこゝろのはれゐよふにしておくんなんし〔辰〕ソリヤアおめへのからだへ。きずをつけさせたとつて。なんのけへもねへことだから。いゝわな。おめへがその心いきなら。わつちも。其つもりでこよふわな〔花〕そふだとつて。このうへ。はしだてさんと。いろ事でもしておくんなんしちやア。いよ〳〵すみいせんにへ〔辰〕ナニおいらのよふなものが。そんなことができるものかへ〔花〕できいすわな。はしだてさんがてへ〳〵。ほれていなんすことじやアおざんせん

先この本は是ぎり。是から跡の一ト狂言。橋立が色事。花園が深切。客の内股膏薬を。ひきのばして。後篇にいだす。私の曰。漆喰に。粉屑をもつてかためたる。水も洩さぬ戀中も。はなれる時節にやはなれやす。されど破れても燒繼あり。女郎買も。新造をすくうちは人がよし。若者やり手に迄。あやまるやつはすれがらし。兎角人は。惚られるうちが花。こつちからむしやうやたらに。惚るよふになつては相手がなし。是をもつて。若時二度アねへと爾云

花廓問答 恵比良濃梅

十偏舎著

全一册

出來

青樓曲少年行

趨庭萱草動精神　已愁俠客年少人
那報倡家千金諾　獨行何處邀芳春

十偏舍一九賦（貞）

色講釋跋

（若松亭）

鐵拐が洒落を吐き。鯨が白屈を吐く。此に十偏舍のあるじ。廓中の通言を吐く。雷同に是を謂ば。嗚呼其才の高事。凡三萬三千丈。白髪色翁も。放蕩悴も。一度閲して。或は迷ひ。或は悟し。詐と寔をならべたる兩枕に盧生が鼾も狸と變ず。文福茶釜に。一段まさりて毛の生たる。手練手管の本間の中。障子の賓の穴まで探て頓に此一册子をなす。予序の後に。其理を誌すと謂へ共。いまだ其究の深に至らず。一寸先は。真くら闇の穴賢と爾云

若松亭扇光濆㊞

契情買帳略緣記　完

十返舍作

倡客一夜鮓　全

同作

右來戊春出板御もとめ御覽被下度候

青樓娭言解　全

自序

三絃雖淫樂之魁球國之人。列諸雅器洒雖百藥之長醉鄕之客。自傷性命然則此二者。所謂㑹參盜跖之偷。而必從其所用異矣。故大星淫遊。一日不變復讐之志。助六遊俠。片時不忘搜寶劍也。因此觀之。雖滑稽書。心之主人公。不昧於彼。則其戲言雜語。能通人情豈不勸善懲惡之端哉。雖然是陳奮漢之糟粕。流之墨河。兎角浮世三絃枕。是邯鄲榮華之夢。乘除夜酒之醒著此書題青樓妓言解爲歲首剩語爾

戊孟春

蘭麝亭主人題

第一　未至通の知たかぶり　ふられそうな　仁

第二　おかしみを常とすればいふことが　むづかしくない　義

第三　義理と情のふかきには　いわねばならぬ　禮

第四　雛妓がじつ氣にて　側からそへる　智

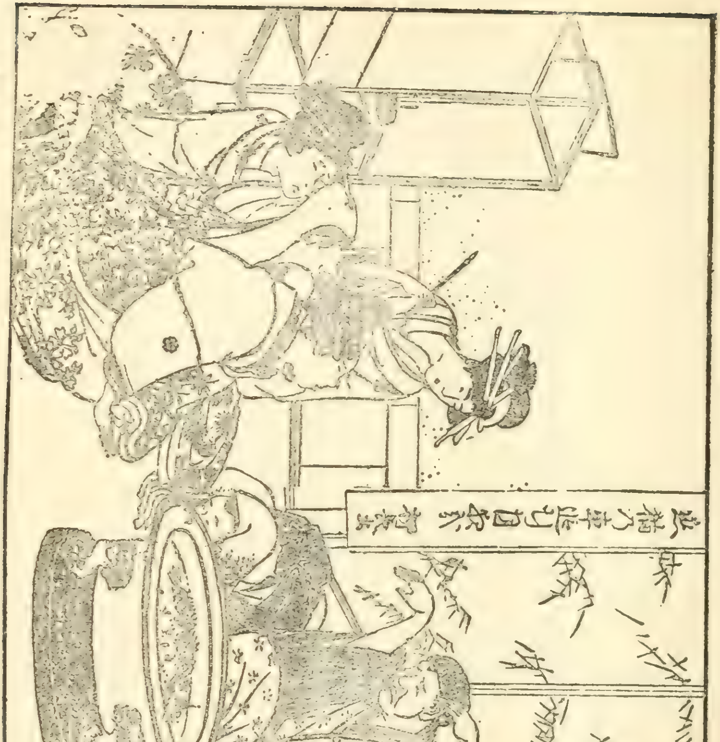
第五　身請をしてそはせるは　誠とよむ心切の　信

青樓娭言解

蘭奢亭主人作

夫富士太郎の文句に曰武州入間郡金龍山より乾にあたり北をうけたる一廓あり唐の阿房に勝三千人の遊女をあつめし此里に春は花秋は菊燈籠俄二度の月四季折々の戯は其物毎に賑へり八朔の雪は簾をかゝげて見衣〳〵の鐘は枕を欹てゝ聞くも淸女がことばを慕ひ八駿の駒下駄□(はカ)いて二星客にあふも穆王がむかし(虫)□□□□が關に黑屛かけるも九郎助いなりといふ(虫)□□□におなじ和國屋に唐橋の名あれば日本(虫にカ)□□蜀黍の燒立匂ひ香し衣紋坂に樽貫の柿をうれば熟の如き生醉門を過り秋葉燈籠の側にひよけの板の差出るもよし早歸り相談小田原やの前にて破れ七軒の松飾を見ては林かともおぼめき角町にたつ股引客も緣なきにあらず羅生門河岸の女娭地色に手を

切るゝもおかしく川竹の伏見町にも一夜ぎりの客を送ル娼女ぬけうらとも
いふなるべし禿の着類てんつるてんにみじかけれどもてれん茶屋に三味せ
んの音なし名だゝる檜舞臺とはいへども喜の字屋の幕の内なきこそよけれ
一篇きりに枕かわすもみなつなぎたるゐにしにして靏屋の筋むかふにかめ
のかうざるをうれば松葉屋の門ぐちに竹むらの蒸籠あり千代も八千代も千
客萬來のにぎわひなり



○第一

こゝに表德を帆船といへる商客あり年の齢四□□□(虫)外にて衣裳付は古渡唐棧のこまがら縞羽織おなじ縞の小袖あい着下着はいづれも結城の小辨慶花色七々子中幅の帶四分一拵の木柄の小脇指鞘は鯖蟲喰刀豆小尻帶どめは金のむくにて何かひねつた形の物を付さらしの足袋丸尻の雪踏づんどこうとう成る出立なるはだが目にも大店の主人とみへけるいにしへは此里へはでに名もうれしが今は折々のたのしみのみなれど諸事に行渡り何一ツ如才なく溫にしてはげし威あつて猛からず至て大ふうの夫なりまた數井正德とて帆船が物見遊山は勿論寺參りへ行にも付てあるき方劑はすれどもやくたいのなひ鑿頭醫者なり帆船が着ふるしたる黑龍紋の小袖飛色七々子の八時分の羽織足袋雪踏までおながれてうだいなどともらつてはくなり年頃は五十余になれども氣ぜん若くぐつとおかしみのあるふうなり帆船は今日巴屋の會席より供をかへし二人連にて觀音へ參り馬道へぬけ行けるがむかふより繁家年のころ三十三四にてひたい大きくかつがせ何か知つたふうのとりなし着るいはいはずとしれたきいたふうなりこれは帆船が近所にて町代と家主をかねてつとめるゆへ何事もむづかしくさばきたがる風なりけふは會席より廓へ行ことをつけこみ田町邊に霞

をはつて待ていてひよつくり逢たふりにて

［繁］モシ旦那どちらへ ［帆］（も秋ならばしやうとう寺のもみぢ見とぬけたけれども春だけぜひなく）中の町の夕げしきで。ひとつ呑氣だがどふだね。御同道は ［繁］それはありがたし。ぜひおとも芝居の大あたり。ときにおつれハヱ ［帆］おしやうばかりさ（正徳は小べんをしてゐるうち大におくれ跡からかけておひつく）［正］イヤ繁家さんこれはポイト（後見がみへある）［繁］イヤ 正公いち別以來（下少しりきむおもいれあり）扨旦那のお世界はさだめし急度いたした筋だらうね ［正］勿論さ ［繁］妙〳〵（手つきの圖あり。略ス）（といふ手つきにてよろこぶみへ）こん夜は正さんぐつと。うきじやれの女房と出やせう。公のおどりも久しく見なの川だね。 ［正］イヤもふゑゝ年をして。あんまりおどるもひやうきんだと。笑われるから。もふよすべき事だね ［繁］よすこともねへね。でへぶじみてきたの。なぜそねへに ［正］はてさ。おどるひやうきん久しからずさ。 ［繁］イヤ奇々妙々ごうきとあんじの姫をやつたね。こつちがまにうけてゐるうちが大わらひだ（トはなしながら行帆船はだんまりにて先へたちゆく）［繁］モシだんな此間それ。おめへさんもごぞんじのいなかの竹子さんが江戸へ出なせへして。榮町の中土屋の二階からよびなせへすからあがりやした ［帆］ハア竹子はきやしたかへ ［繁］ハイさ久しく御逗留で。ごぜへます ［帆］今度は半夏もきやしたかへ ［繁］イヽヱこれはめへりません。その半夏とやらはくへねへしろものでござりますね ［帆］そうさ

[繁]それからあがつて見ると藝者の熊とかの鶴次ね。そして木戸の熊がどんとさわひでいやすからわたしもちつとさくかだから。何がさわけ〳〵に咲むらさきのや。何やかやで大のみのだら介や。又おさへられの。ひど醉でいづれも引つれのちん餅と。夫から圓子さんの。根岸の寮へしかけたら。いなり町手やいが四五人。誰にかまかれたといふつらでいると。竹子さんが氣性(ママ)だから殘らずつれの。一丁目としやれたが。大一座だに藝者がまんとあがつたもの(ハ)だからイヤもふ。大そう直ふしてかみのごときやつらも。大出來でござへました(ト大そうにはなすは今夜帆せんにどんとおごらせる下心とみへたり)

[帆]鷄舌では竹子はだれだへ　[繁]葛にのでござへます　[帆]そりやアうめへとり組だ。竹子のやはらかみでは。妙だつたらふね。そしておめへは　[繁]わつちやあひねつて。新造の思入でござへましたが。ちと望のすじで。歌人になり。これはとおもひのほか。イヤあのけいもごうぎになりました。△の中での秀逸で(マヽ)系物はまんとありだね(トしかたばなし)　[正]ほんにおつりきにざしきなざアゑゝといふことだ。わつちがこゝろやすひくすり屋なぞもあれにやアよつほどきまりのすじださうさ　[繁]左もあるべしさ。そしてまた藝者もあまた多ひ中に。さみ子と藤司ほど面白へやつもねへものさ(トはなし〳〵行むかふへよそいきのおいらん列をみだしてくる行ちがひけるが帆せんはみぬふりなして行しが繁家はあなのあくほどみて)　[繁](ちとちいさきこへで)モシ妙契だね　[正]さやうさ。しかし此方妙けい目につかずさ[繁]

ありがてへ【正】アリヤアどこのだらうねあれは何さ〳〵（ト考がへるうち其跡から三味子来り帆せん正とくをみつけ）【三】これは旦那ホ正さん。おそろひはありがてへ（トふたりにあいさつすれども繁家には一向しらぬふりにてわかれる）【正】噂をいへば影とやらだねへ（トいへば）【繁】（きよろ〳〵したから）さふさねへ（とはいへど三味子がたれかわからぬゆへ大きにぶきなりはやほどなく茶やへきたり女ぼうは上げゑんのはたに禿の口上をきいていけるが）【女房】ナヤ帆船さん。よふいらつしやいました。只今御噂を申ておりました【正】どうりでおめへのこわいろでくしやみが出やした【女】正さんはあんなことばつかり。先御きげんようあなたよう（ト繁家にもいふ）しもやおちやを持てきや（それたばこ盆てうしよ盃よとあいそうよきがちや屋のならひにて女藝者にたいこあまた上りてちよんとさはぎそれより皆々樓におもむく繁家はかみにしては跡で日のわるき男ゆへやはりつれにして平の中三【浮船】トきまる　正徳はいつもなじみのしんぞうのとうにたつたる【櫻の】座敷にはたいこげいしやはいろ〳〵としやれをひろい伽りやうびんがの音曲にうつばりのちりもおちなんざしきのさわぎ此所いろ〳〵趣あれども事しげければ略之やゝあつて帆せんのあひかた【尾上】すがたたをやかなることみぬもろこしの楊貴妃はいざしらずわがてうの小まち通衣（ママ）ちかくは高尾瀬川におとらざる花の唇遠山の眉柳の髪のうるはしく漢の武帝のいにしへに傾國傾城の文字もすたり今は契る情のふかきには。首たけはまるもむべなるかな。つき出しの其日より帆船にあいそめ内證の世話もはやくはなれ人におと

らぬぜんせいなり。今宵は何かものあんじがほにてにぎやかなることも。一向ふさぎの顔色ざしきのひけるまへかたに座をたちいづれへかゆきける　跡はおかたづけのこゑをあいづに小便所をさしてゆくつきそふたいこげいしやもいとまがいでみなめい〳〵の床におさまる　これより繁家がざしきのていなり。重ねるふとんのまん中の少しひくゐところにあげあぐらで。口のうちで江戸ぶしをうたつているところへ禿が火鉢の火を生にくる）【繁】コウ手めへいくつだ。此ごろこけ（愛）へきたの【禿】イヱわたくしやアノおとゝしまいりいした【繁】フウそんなら仲の町でゞも。見かけそふなもんだが　ト（かむろにまで入こんでいるふうをいふ）コウてめへにゐゝものをやろう　ト（あんぺらの紙入のあいだからすり物や大小のもらひあつめたるをとりいだし見せる）【禿】ヲヤわたくしにおくんなんし【繁】こりやアならねへこちらのをやろう【禿】わたくしやアこりやいや。そちらのをおくんなんしなヨウ〳〵　ト（むりにもらひたがるを高くさし上げて）【繁】サアとつたらやろう【禿】あれさおくんなんしといふのに（トそでへとりついてもらひたがるところへあいかたの）【浮船】（きたる）このかア。どふしたもんだぶしつけな（トしかられて青なにしほ〳〵と屏風のそとへ出る）ヲヤこりやなんざんすへ【繁】これは誹諧のすり物さ【浮】きれひざんすね。こりやアぬしのおこさへなんしたのでござんすかへ【繁】アイわつちが連のすりものさ巻軸は元来で脇がわたしが句さ畫はくら前にかゝせやした筆工も華溪がなくなつて。たれもよく書ものがねへからわたしがまがりなりに書やした。此羽織の肩襟は節山

だが山水はまたかくべつだね。此扇を見なせへきのふ川口でがうのみのけへりに寄て。艸谷へたのんだらわたしだけ直にかいてくれやしたちよつと墨をつけても百疋はすさまじひもんさ(トむせうにしやべりわがすり物だといふを一まい出して)こりやアぬしにけんじやう 浮ハイこれは ト(あいそうによんでみる)春の夜の引此字はなんとよみいすへ 繁(ちよつとみて)ナニこれは瀧といふ字さ (ト聞に合ないふ) 浮チヤ瀧とよみいしては。字がたりひせんものを(少しかんがへて)ほんにこりやア朧まんぢうのおぼろといふ字ざんす 繁ウヽそれ〳〵朧にてらすさ。板が間滅してよみにくひ 浮チヤこりやアぬしの句じやアざんせんかへ 繁わたしがのだが板木やへ。いゝつけたまゝ校合もろく〳〵しやせんから(ト人のすり物なればしれぬなむりにまぎらすなり)これからちとのらつきをやめの。内にとぢ籠り。作にかゝらねへけりやア。なりやせん。もふ須田重からも壽留喜からも。らい春の新板のさいそくだが。鬼がきいたら笑ふすじたね 浮なんの作をなんす 繁青の作さ 浮青とはなんの事ざんすへ 繁青とは草双紙のことさ 浮そんならぬしやア草ぞうしをおつくんなんすかへ 繁毎年二三ばんづゝだしやす(トいふを何といふげだいで名はなんとゝきかんとせしがそれではこまるとさとり) 浮そりやアごきやうなことざんすねへ 繁こねへだ中から本屋が來て、しやれ本をかいてくれろといつてうるさくせめやす。毎年たのまれるが今じやア。かゝねの頭巾さ。よしや面白くかいたところが新造衆の

あたまときて。手がらにやいはれやせん。なぜといつてみなせへ。繁家なざア道入へへりこんでいるから。此くらるな事は書そうなもんだと。ぜひいわれやす〔浮〕それでもおなぐさみにやア。よふござんしやう〔繁〕近所の花の弟子や茶の湯の友達のわかひ手やいに。教訓のため一ばんかきかけやした（トまた紙入の間から半紙の二ッ切りへかなくぎのおれのやうにかいた本などとり出す。其ついでに茶ふくさなたゝみなたし黒桑の朱硯のひざの上へおちたるなっしらぬふりなしてある聞れたらいはんとのおもいれ也）いま迄おいらん達のふうや。新造衆の瘡禿のいたづらもっ。もふ書盡しやした。そして馬鹿にかたひとをかくのも。しやれ本のほん意をうしなふといふものだが。ちと書出しはひねりやしたちよつとよみやしやうト（そばにつめたくなっていろちやわんの茶を一トロのんで）エヘン局部屋ひやかしの發端に曰エヘン（ト一まいひらきかうまんらしき顔をして）

鮓を喰ひ酒をのみ質を曲てこれを勤とす樂しみ其中にありとは。論語しらずもこうやてうへんより先のことにして。友達も誘ふにこくけんれいこく（刻限例刻）錢すくなしなどゝはみな素見のやからの覘く。かうしにのたまふ處なり。子の。のたまはくは十有五にして廓に志し。内は蔵路が火車となりてどうらくの。通用も。ろんじは。もふしつきませんといはれ。四書十貫の口なしなきいかえんといふも。むかふみずのするところなり。此北窓に琉璃を逆につるせし風をみては蒲奮がごと

き怯ものは豈恐れをなさんや

こゝのところはまじめで。面白くねへしかし世説の語を少しいれやしたがちとかたすぎるかしらんもちつとさきを。よみやせう（ト二三まいはれてひろひよみをする）こゝのところは素見手合のわる口さヱとつぱじにいるかんざしもなんにもさゝねへでくしまきにしてゐるのをみやべちやァねへ。どぶつぱたの角石へ。左りねぢりといふあたまだぜ。其次なァがうけつだな。かつ山にいつてしのぎやかうけへを。六七本さしてるぜヱ、人をつけにした居酒見世の辨慶か。狩場の跡の鑓といふみへだ。二三ぼんかりてへもんだ。まん中のはしらへしばりつけられたといふ身でゐる新造は乞食芝居の雪姫といふ思入だぜあたまのしまだは。ごてへそうだ銀の花かんざしなざァよつほどありがてへ結綿のもんどこへ南鐐でおつつけたやうだあとのとしまのひてへ（額）をみやほくろくじん（福禄寿）へ運上をとげ。みけんじやうへつりをとられるといふ面だ。こちらの中どしまのはなもよくひらつたくできたぜ。めへから見るとやぼでへじんの頭巾か三がい松のかんばんといふ鼻だ。しかしはたらきはありそふだ。これからゆふべのところへいつてぶつつかりのつけ馬とくらはしやう

（トさはやかによみたてる）

こけへらはあんまりやすいところさ（トおもしろくもないながばなしにあくぶのふたをふりでしたり袖でした

りしていれど興者がつれゆへよんどころなくあはせてゐる）〔浮〕おもしろうざんす（トせうことなしにいふ）
〔集〕（また二三まいあけて）こゝのところが妙あんだ。まだだれもこりやアかきやすめへ（トまたよみたて
る）

二會目
世界に大見世の中座。客は大阪ものにて名に聞へたる大盡。もつともうらなりけいしやたいこト
四五人大さはぎ。なかにもおたつ。おとらおむめ。おたけ。たがひに聲をあらそひうたふチヽチ
ンチ〱うつら〱と寐てまてば。しまだほどけて蛇となる。しんく〱のかんしやくも酒ほど
うれしひものはない。グイ〱ノグイ隣ざしきでこゑがすりや。さゝれた盃きや手につかぬ。
辛苦〱のかんしやくも（トよみかけて）
こゝいらは來春は流行におくれるだらうこいつはぐつとひつこぬきの（トまた二三枚あけて）
かの大盡初會はおふきにふられしゆへ。今宵は座敷にこと〲しく花をちらすこと吉野初瀬も
およぶまじ。此客諸藝に達し何一ツ知らぬことなきを鼻にかくれど。島原祇園難波にては新町坂
町の。通人ゆへ。此廓のあそびにあわず。只金でつらをはらんとせしゆへ。おいらん大不承知。
茶屋も心づかひにいとまなし撰酒もよほどたけなはにおよびしのち。こひ茶をたてしが亭主にな
る思入の高慢くさきをにくみ。おいらんもちとこまらせんとおもひ付て大丸盃へ麥こがしをふじ

の山にひとしくつみ。前には浮島ヶ原もまがふ。非どんぶりに出島の砂糖を水にとき。少きみごぼうきを入て。かたへにちりれんげを付。うや／＼しくもつていで。客の前へおかせサアおとんなんしといゝければ名にしさすがの大盡どふしてとるものかしれぬゆへこれには大へきゐき擧頭でやいも。ふいをうたれし趣向ゆへたがいに目と目を見合せていると。おゐらんがごめんなんしといつて（トこれはおいらんゥゆへなり）かのみごぼうきへときたる砂糖をふくませ。茶せんのたてかげんといふ手附にて。麥こがしへふりかくればころり／＼とまゝ子になつてころけ落るをちりれんげにてすくつて客へ出すといふ

しゆこうを出やした。これからだん／＼あたらしいしやれをかきやす（トたいそうに咄す。もはやいねぶりの出るところへ）【淫】とんだゐゝごしこうでござんす（トもちやげられかつにのり）【繁】これから色男にあおふといふところは。まだ書やせんなんでも世界はこゝのうちにして。ぬしをあてゝかきやせう。定し御全盛のことだから。きまつたおかたがなくて叶はじだ。かき入レてあげやせう名はなんといひやす（トきどりのきでいふ）【淫】ヲヤわたくしどもはそんなものはざんせんよしやしたくつてもたれもしてくれてがない身の上でござんすもの（トまたいや／＼ながらもいろけなふくませていふ）【繁】おつと御ゐんりよなしにはなすがよしの紙。すきとふつてあるのがみへやす。江戸はもちろん国々迄もゆく本だ

からっ　みんなどふぞいれてくれろといふかはぶきのぬしならいれようといふもんだ。よつぽどはでになることだねへ　ト（しつゝこくいふに少しじれがきて）［浮］そんなことはわたくしどもはきらいでさんすばからしい　ト（せうじぴつちやり立てゆく繁家はおもしろくしげろうとおもいのほかあてがちがつて床の上にまちりく〳〵）

○第　二

帆船が座しきはいつになく、あいかたの尾上きたらざるゆへおちやをひるたるしんぞうをのこらずあげ。正徳ははなしのおんどとりとなりいろ〳〵おかしみのあるみへばかりにて。いつもの小謝のいしやはむつかしい事をいふけれども此正徳にはいつたいが藪醫ゆへむつかしきこともしらぬかしてどうけばかりいつてさはぐ

［帆］和尚みんなと。酒でものんではなすがゐゝ［正］おめえさんはあがりませんか［帆］イヤおれはひどく酔たちつと寐ねへとあすがなんぎだ［正］そんならちつとおやすみなせへまし。此おゐらんはなぜおそひ（トふしをつけていふ）松のやおよびもうしてきやな［松の］アイ引［帆］こねへでもゐゝよ　ト（ねむそうなこゑでいふ屏風をすこし引よせ）［禿咲の］正さんやくそくのものをもつてきておくんなんしたか（これ

はしぼりばなしのきれなたのんだの也）［正］なんだつけな［咲］ソレおわすれなんしたか［正］ヲヽわすれはしねへが。ありやァ手めへにはわりいよ［新造外山］さきのは何をねだりごとをしんしたへ［正］アノさつまいものふとひやつをもつてきてくれろと。たのむが。むしのどくだからそれでもつてこねへはな［外］そりやァもつてきておやんなんしくひものゝいしはこわいものざんすよ［咲］そんなもんじやあざんせん。にくらしい正さんだヨウ［正］そんならかわいらしいのをやろうか（ト手をだす手のひらをぴつしやりたゝく）［咲］しつたかすかねへぞよ ウヘ（まだ十五六のふりしんしごきのあいだへ手を入レまへゝこゞみかげんにてくる）［霞の］どうぞおがみのごせうざんすからあのくすりをちつとおくんなんし［正］どふしなすつた［霞］さはりむしがかぶつてなりひせん［年］それにやァ妙くすりがありだね［霞］なにがよふざんす［正］あかがへる（蛙）がふゝ［霞］チヤたりやァかんのむしとやらに。のむものじやあざんせんかへ［正］おめへにもふゝ。さはりのむしやあかがへるといふは［霞］しやれどこじやァざんせんにくらしい（またひとりのしんぞう内證で壹寸四方ほどの帳のひやうしのたちおとしをやう〱もらい色の名とわが名をきりぬいてやうじさし（らカ）へつけんとの思入にてかた手に筆をもち來り）［立すも］正さんどふぞアノこれへどふぞアノ立といふ字とそして。どふぞ（ちいさなこゑにて耳のきはで）文の字をひよく紋のやうにかいておくんなんし。りつばによ［正］フウかのだの［立］だまつておいでなんしよ［正］どれ〱筆なし羽織じやアつまらねへ

立 墨(すみ)をよゥくつけてめへりひした 正 よし〳〵(トふでといため紙をとつてかきにかゝる立ずもうしろからのぞく)これさ見ずにいねへな 立 ようく書ておくんなんし 正 オヽサ(ト□□□をふでぶとにかく)立 オヤとんだものをおかきなんしたよ。わたくしやアモウいや。此間から旦那さんにたのんで。やう〳〵のことでもらつてまいりひしたものをにくらしいこんなものをかいて(トすこしなみだぐみ)おへねへ正德つらだ ト(ぶつつける) 正 ぜんてへわつちに頼(たのむ)といふはおめへがふかくさの少將だ。かき直してあげやしやう 立 イヽエいりひせん (また外のしんぞう) あらなん(あうなんか) 正さんちつとはなしをなんし 正 ごく妙ばなしがありだね (おい方のしんぞう) 櫻の ソリヤアよふざんしやうおとし話でざんすかへ 正 化物(ばけもの)ばなしさ 外山 オヤ化物ばなしはこをふざんすからやつぱりおとしばなしになんしな 正 そんならばけ物咄しのおとしばなしにしやしやう 櫻 おもしろうざんせう。はやくおはなしなんし 正 去年(きよねん)の盆(ぼん)の十六日のことだが。わたしがついにとをりつけねへ。箕輪(みのわ)どをりを通(とを)りかゝると。らんとうぼがござへす。そこではなしごゑがするからそつとのぞいて見ると(トゆびさしをしながら)あれむかうのよふなうすつくらひところから幽靈(ゆうれい)がすウいと(きの音 拍子木。)(トいふ手つきにてはなす) 立 外山さんもつとそつちへおよんなんしきみがわるふざんす(トだん〳〵かたまる) 正 これさもつとはなれていなせへな。そうするとしやれつこうべが。まるいあたまへ鉢卷(はちまき)をして。けふはさい日だから祭(まつり)をしやうと

いつて。何がはや桶を二ツならべまへえ七木塔婆をかざり。上へそとわをぶつちげへて。さきのはうへ紙のはたを下ゲ萬度にしてもちやす。さふすると狸や狐や山猫が白張のてうちんをもち。藝者が俄の時出やうといふ身で。きやりなどいつて出るのさ　かむろ【咲】オヤ狐や猫が口をきゝいすかへ【外】マアだまつてききやよ【正】そうするとあの子のあたまのあたりでぴかりとひかるとひとだまがふはり〳〵□([illegible]子。略ス)(トいふ手つきをしてはなすとあんどうのそばにふみをかいていたふりしんきみがわるくなりしゆへたつて正とくがそばへすはる)【正】なんだおめへ紙と筆をもつてきてはなしを繪にかく氣かとんだ子だ【小の山】それだつてもこわいはなしをなんすもの【正】それからゆかんばをやたいにしておどりがありやす。下かたは銅鐃鉢狐はうしろ面をおどる猫はしぼりの浴衣で□(ねカ)このつまなどをうたひ狸ははら皷をうちしめへにはたぬきだ道成寺をおどる(わざとへんにはなす)こちらからきれいな女がおどり出すと。だん〳〵首がほそくのびると。ぶらり〳〵とすると。其女のくびがにつこり照ふ顔のこわいといつては(とかほをしかめてはなす)ゑりもとがぞつ〳〵ときみがわるくなり何だかひんやりとト、すゞりぶたのくれんぼをとつてうかれきつてきいてゐるしんぞうのゑりへいれる)【外】キヤアとうつむく【櫻】およしなんしおびゑゝすはな。もふほかのはなしになんし【正】まだ〳〵大事のところだ。それからさま〴〵のおもひつきをしてしまいにさかさま(逆様)になつておどつて(躍)くるのをそりやなんだときひたら。さか木

の化物だとさ其跡から（目手眼の形ヲ爲ス）といふ目の大きな坊主だ。よい〳〵くといつて来たからなんだ〴〵といふと。見こし入道だとさ。もふさかきと見こしが来たから。祭りもしめへだらうからかへらうとおもつて。日さしをよく〳〵見ると。晝の八ッ時分といふ頃さ。どふも合點がゆかぬ。よつてそこに川童のおばけや。なにかゞゐるからこれもふ何時だと聞とあいつらがいふにやアばか〳〵しい。何時だと思ふ。もふこんたしは足をあらつてひつこむじぶんだとさ ト（はなしはおとしたつもりなれども此所へはねつからおちぬゆへみな〳〵正徳が顔ばかりみて）［外］それからどふしんしたへ（トいふからもふこれぎりだといふもちあがなひと思ひて）［正］そうするとだん〳〵にまた。くらくなると墓場の石塔がさつとわれると。なんだかぐつと火の王がフウト（あんどんをふつけす）［皆々］（キヤア〳〵なな〳〵正徳はおどかすやゝあつてあかりをつけるつけ木のもへしさりで指をやく）（指燒く圖爲ス）［正］アツゝ〳〵［櫻］それお見なんし人をあんまりおどかしなんしたばちでざんさア［正］アゝモウ口がすくなつたサア〳〵酒にしやうつひでくんねへ（ト酒をむせうにのむおどかされたるしんぞうくやしがり五分づけの中のとうがらしを出して玉子やきの間へいれ）［霞］正さんおさかな［正］これはありがの松だなんだ玉子かまたせいをつけさせる氣だの［霞］だまつておあんなんし（トくつ〳〵わらふ）［正］オゝから〳〵くおほからくだつた唐の芋よくいしがへしをしたな（トついである酒をぐいとのむ）酒をのんだらヲゝなをからだんのうとらやアやアスウ

〳〵［立］エヽきみざんすホヽ〳〵〳〵（みな〳〵わらふ）［正］おめへたちやアうらみなもんだおほへてい
ねへ其かわりこん夜はなんでも。忝り　　にしねへけりやアならねへマア此子からさきへ（ト立すもが
脊中をなでる）［立］しつたかしりいせんすかねへぞヨウ［正］そんなら酒だもつとついでくんねへ（トむせ
うに酒をのむ）［櫻］およしなんしそんなにおあんなんすとどくでざんさア（ふいかただけとめる）［正］よく
せ話をやくうつちやつておくべしさ。これさきのはモウねむるかくじらのきれだ。でくのほうといふ
身でむせつにうつむくぜ［櫻］モウいつておよりひしな［正］そんならねのまくの小平六にしやうおいら
んはどふさしつたあらう［櫻］今にお出なんさアな［正］サアみんながあしかをやりなせへ。さらばあし
かおめにかゝりやしやう（トはりひぢなしてたちよろ〳〵しながらさくらのに手をひかれらうかをおどり〳〵
下座敷へ行）［櫻］ちつとおたしなみなんしあんまりばからしいこと斗いふなんすからみんなが釘の
寸だともふしいさアな［正］なんだ釘の寸だ其義はいかゞ（すこしかんがへて）たらねへといふのか。なん
といつても忝ゝはうつちやつておくが忝ゝわな［櫻］それだつてもわたくしが身になつてごらうじひ
しはらがたちんす（トいろをふくむも正とくな大事にせねば帆船へふはむきゆへちつとヅヽつとめるもとしの
たけたしんぞうだけなり）

〇第　三

こゝの一客は伊太八年頃二十一二にしてやせがたちにていやみなくつきりとしたいろ男三間年つゞけてつくせしゆへお袋の臍くり金ものこらず引出し段々ほこつて親父の勘當をうけ叔父のところに居候となりいたりしが尾上が此里へ身をうらぬまへからの深しき中なりしがしばらく中絶せし内此里へ身テしづめあるとき仲の町にて此伊太八をみかけそれより過しことを思ひ出して色客にして上ゲ猶々こりし中となり今宵は間満とおち合しゆへ尾上はにぎやかなる座しきもおもしろからず前文にあるところの座を立てこゝへきたるところなり

〔尾〕今夜はさみしうざんせう。かんにんしておくんなんし〔伊〕ナニさみしいのも承知のうへだもの。ときにこんやの客はかの旦那か〔尾〕アイ〔伊〕そんならあつちへいつてゐるがゑゝ。たのんだこともあるじやアねへか〔尾〕ようざんさアなぬしはだいぶ。おふさぎなんす。なんぞくらうになることでもざんすかへ〔伊〕くらうがなくつてさ。浪人の身分だもの〔尾〕イヽエ何かほかに苦勞になることが。あんなんすだらうおかくしなんすな〔伊〕何をかくすものか〔尾〕イヽヱそれでもおとゝいまつのをいせやまでつかひにつかはしひした時貳丁目の角でおみかけ申したと歸つてもうしいした。おつれ衆もなかつたそうだからお付合ともおつしやられんすめへ。また錦田さんにねんがのこつておいでなんすだろう〔伊〕ヨウ手めへもゑようらしいことをいふものだ。そんなゆうふくな身のうへだと思ふか〔尾〕そりやアそふおつせんすけれど。あちらも一トとふりの中でも。なかつたそふだからいつそくらうになりんす〔伊〕そりやアおれが貳丁目へ行じぶんは。手めへがこゝに居るかなんだかしりもせず。またにしき田もまんざらでなかつたもんだから。むかうにいつたがいつぞやも咄たとふり。内をかぶり鷄舌の二階も見おさめだといふばんにてめへに逢てだん／＼わけをはなしたら茶屋のはらいもかた付てくれたり。夜具までもしてやつて。さつぱりきれてしまつたじやアねへか。それを今更あつちへいつて見や手めへのばちが當るは〔尾〕ばからしいそんな事をおつせんすな。それでもにしきださんが

しんに惚てるて此ごろじやアわたくしをうらんでお出なんすそふだ 伊そりやア手めへのおかげであのやうに義理のわるくならねへやうにしてやつたもんだから。よびたがりもせうが今の身ぶんでいつちやア第一外分がはりい(わ)。こふして何もかもしてくれゝばこそ。こゝの内へもこられるといふものだこゝのところをさつしても見たがゑゝ。うたぐるとつてもほどのあるもんだ 尾そんなにおつせへすけれどかわりやすきは人ごゝろ。若ぬしが外心でも出なんすとわたくしやアいきてはいられいせん 伊こつちの心は金鐵よりかたいが。そつちの身の上は引手あまたのつとめのこと夜ごとにかわる枕なれば。ひよつとたにはられて見ろ。おれが身こそつまらねへ（トうちしほれたるかほにて大きにふさぐ）今こふいふ身になつたをみかぎつて（無）ねへもしねへことを言立て。きれる気たろうはかねへ身になりはなつた（トうら見し目をもかくさんと袖中をむける）尾あれさどふいへばこふいふぬしが其氣でさへおくんなんすりや。よふざんさアな。どふして私の方からどのようなことがあつてももつてへねへ。見かぎるのなんのといふがあるもんざんすか。モシこちらをおむきなんしたぜだまつてお出なんす。そんならわたくしがわるうざんすから。かんにんしておくんなんしマアこつちをおむきなんし。おむきなんせすば（ト入りかはる）なぜおふさぎなんすどふぞかんにんしておくんなんし（トとくける）伊（ぶいとはれ）アヽもふみかぎられねへうちかえりましよ／＼

（ト立んとすればなのへは袖にすがりつきわつと泣出し）マアまつておくんなんしソリヤあんまりでざんすすこしのことを其様に腹をおたちなんすことはざんせんお歸りなんすならお歸りなんしわたくしはかくごをきわめておりいすこふしてゐてこそじゆうにおめへさんに逢ふこともできんせんけれど。死と魂ばくとやらになつて側をはなれずいられると申いすからはやく死とふざんす 伊てめへも能ばかをいふもんだ。なんぞといふと死の生るのとおどかしてみたがる。これ。なかずとよく聞。此様に氣づよくいふのも。實は手めへの身のうへを思つてのことだ。おれといふものがついていりやア爲になる客もつくめへ。まづ第一今夜の客人も結構人とはいひながら。地藏の顔も三度とやら。ひよつとはらでも立てきれて見ろ。つまるめへ。おれを手めへがあげてくれるのもみんなあの客のおかげじやアねへか。わかれぎりといふでもあるめへがマアちつとのうちきれたぶんでゐるがゐゝ。そふすりや客のまへといひ。内證の手前。大きにいゝじやアねへか。子共じやアあるめへしよく聞わけたがゐゝ。そふしてまたおれもうちへ歸るやうにでもなりやア。こねへに世話にばかりもなりもしめへ 尾それごらうじいし。どふもおめへさんのおつせへすのは氣にかゝりいす。世話になつたりなられたりするはづのことじやざんせんかへあたまのもの衣るいまでいゝ男のためにいれ上ルは此さとのならいにてかへつて嬉しき思入也）伊それでもあんまり氣のどくだ 尾またちつとのうちはおろか片時でも。きれろ

とはあんまりつれなふざんす。ぬしも大ていへ内の詫言もできいす處をむりどめをしいしたゆへ猶々親御さんにお腹を立させ申いしたも。みんなわたくしゆへそれでざんすから此上はどのやうなことでもよびもふさねばすみいせん　伊夫程迄におれがことを思つてくれるといふは　尾（顔をのぞいてみて）そんならお氣がすみいしたかへ　伊すまねへでどふするものか。身につまされると愚痴になる。此様な愚痴にやあたれがした

あつちへ行がよからう　尾ようざんさアなおめへさんは貳丁目じやアはでにあそびつけなんしたから此様にさみしひとはいやでざんせうね　伊さみしいのさみしくねへのといはれるもんか。ときに段々と手めえに苦勞をさせるが見ればでへぶ都合がわりひそうだ。仲の町へも出られねへじやアねへか　尾イヽエそうでもざんせん（トいへどもふひどくなりつめたれどくらうにさせんためかくいふ也）伊そふでねへこともあるめへ　尾どふでゐゝことはざんせんが今夜きて居る客人に（これはやつぱり情婦がこと也）たのんで。廿まいはかりもかりいせうと思ひいすが。今迄いろいろなことをたのんでも。ついぞいやといつたこともなく。外の客をせいたこともざんせんついに一度心中立を見やうともいわず。あんまりけつこ

う過いすから。もふどふも頼にくゝざんすどふしたらよふざんせう［伊］とふといつておれにしれるもんか。いひにくかアよゥがあゝおれもまた都合してからこッう（トいへどとこもくめんは出きぬといふことを尾上は知つてゐるゆへ）［尾］イヽヱそれよりやアわたくしが。いゝ了簡がざんす［伊］どふする［尾］（少しかんがへて）それともおきにすみなんせずばよせとおつせへしアノ客に（トいゝかねている）［伊］客にどふする［尾］指でもきつてやりいしたら二十枚ぐらゐはかしてくれそうなものでざんすそふすればまたおめへさんをよびもふされいす［伊］（すこしふさぎのかほにていたりしがやゝあつて）くやしさアくやしひものだが。何をいふもおれが為だ可愛そふにだいぶくろうをさせるの（トほろりとなみだ）［尾］ソリヤアおめへさんのためなりや。指はおろか命でもおしくはざんせんがそうしてもよふざんすか［伊］おれにゑんりよはいらねヱ［尾］そんなら今夜［伊］此節だしかし本気になりは御めんだぜ［尾］善か悪か跡でしれへす（ト用だんすより血どめとかみそりとりそろへしめしあわする折から障子の外にてやりてのお岩しじう聞耳ともしらず尾上はらうかを何げなくゆくうしろから）お岩モシおゐらんへ（トこゑかけられてびつくりすれどさわらぬてい）［尾］わたしかへ［岩］ちよつとおよんなせへまし（トやゝ手部やへいれる）［尾］なんざんす［岩］マアしたにお出なせへまし。おめへさんといふもなアくげへ（苦界）といふことを。おしんなんせんおかくしなせへますな。こんやきていなせへす伊太八さんといふは。親元もかんどうのおかた

ざそふだへ。それを間夫にしてお上げなんすそれもおめへさんのおはたらきでお上げなさることだからっきのねやかましく申てもござりませんがつき出しのときより間部さんがお付なすつて。内證の世話もはやくはなれ。此日紋日數初新造出し。其上いろ／＼な恩のある客人の金をとつて。間夫をおにけなさるといふも勤の身にないならひではねへが。聞せなさいばおれはそうじやア。すへませぬいたしがついて居てはマアそふはなりやせん（トいふもことさら心にかけのおゝいゝへなり）［通］イ、エそういふわけじやアきんせんどうして間部さんを疏末にしてはすみいせん［留］さつおかくしなすつても。今夜の仕かた宵から坐敷へ出もなさらず。ことおっ内から戯作見のずもにゐてはわたしが身分もたたぬ。おめへさんがたにはただいに今はつきらぬ身のへ一所に死なふといふ覺悟でござへませう（トこゑあらゝげつめかける）［通］アノおいわどんとしたことがてまへ〲のことをおいゝなんす。わたしが身におぼへもねへトわけをいはんトせしがいゝきらなす）［留］イ、エ覺へねへとはいわせねへよふせうこ一ト（尾のへがくわい中へ手をさし入レかみそりとり出すをおのへは手ばやくかくさんとするを留はそばにありあふはそうりをもつておさへつけ）［留］覺しあたした其かふだそふ自由にやならねへ死なかくこの此かへそれ。これでも言譯立ふと思ふか（ナア／＼トつめかける）こふいふことでは外のしあじもきかぬ已後の見せしめ（こう／＼とまたおたおたのそうりをとりあげおのへがつむり四ツ五ツたゝく）［その］は今はた

まりかれむたいのい、かけい、(くカ)ほどかざるむわのうちぢびやうのしやくのさしこみてしつてんばつとうくるしき思ひ）[岩]そうでござらう。そら病でも出さずばすみますめへ此かみそりを内證へもつていて。いちぶしゞうい、ましやう（トせうじをあけて立出ルらうかにかむろがくるつてい るをしかりちらしこしのきんちやくぶら〳〵行もにくげなり）

尾上はしばしやくをおさへやう〳〵と立かへり思ひにあまるうき涙伊太八にもしゞうだんまりまたの御げんときぬ〴〵の別おしみてかへしける春の夜のながからざりしものなれば時うつりもはや五更におよべども佩船がざしきへ顔出しもせぬゆへはらをたちまたつれの繁家もわがわるくされたるをくやしく思ひ太平樂の巻物をならべたて佩船におり身うけをすゝめ茶屋をよびいつの何日と身請をとり極ル此處小冊なれば丁かずをいとひてくはしくはしるさず見る人のすいもじあるべきか

○第　四

尾上はしやくち口ごとにおこり伊太八にはわかれふさぐにふさぐやまふの床また一ッには外聞わ

るきをはなして四五日引て居る心よければぜひ帆船がむり身請思へばものうき折からにしん造【初のへ】おいらんへけふはどのやうでござんす。ちつともおちつきなんしたかへ。薬でもおあんなんし【尾】あんじておくんなんすなけふはよつほどよふござんす【初】そのよふにおつせんすが。どふもいろがわるうざんす。あのしやくといふ病は何かにくつたくがあると。つよくおこると正徳さんもおつせんしたどふぞお氣のはれるやうにおもちなんし【尾】よくしんせつにいつておくんなんすが、何もくつたくするやうなこともざんせん【初】それ其樣に口ではおつせへすが。心のうちのしんくを私におかくしなんすといふが。つれなふざんす此間お岩どんのむりないひかけも。なぜ其時にわけの立つやうにおつせへしねへわたくしもやり手べやのことでざんしたから其時はしりいしなんだがお岩どんが旦那さんのまへふひらきなをつて。伊太八さんのことから。いろ〱なことをいつつけんしたけれど旦那さんのおつせんすにやア尾上も人にしられた女郎だにそれを履でうつといふことがあるものか折檻してよければおれがすると。大きにしかられへした。其あとでわたしにだん〱のことをお聞なんすから。ありやア死のいきるのといふこつちやアざんせん。帆船さんにたのみのことがあつて。心中立の用意のところをとりまいておいわどんがいゝかけをいつたのでざんすと殘らず申ひしたら。そふいふわけならお岩も其分にならぬとおつせんしたおめへさんはまた　恥をあたへられたと思ひなんして。ひよつととりの

ほせて短氣な事でもしなんすとわたくしもいきてはいられへせん。おめへさんにつけられへしてから。どういふことやらモウ實の親のことより苦勞になりんす。しん實の姉さんと思つておりんすわたくしに何もかもおつゝみなんすがかなしうざんすどふぞごぜうざんすから聞かしてともに苦勞をさせておくんなんし。また伊太八さんの二階ヲとめられなんしたもおめへさんの仲ノ町へ出られなんせんもかけのほうさへかたづければ。やうざんさアたとへわたくしがねん季をいれんしてもわけをつけてあげんす。かならず心ぼそく思ひなんすな（下むれにしぐるゝ雨もよひはら／＼思ふしんせつに尾上もともに涙のしづくおし拭ひ）［尾］其樣に實にいつてくんなんすをモウ死でもわすれはいたしいせんほんとうならおまへがたのうはさらしいことでもなんすを異見こう（ソカ）いふべきわたしがこふいふ身になりひしたをみかぎりもたんせずに。何かに心をつけておくんなんすはモウお禮の申やうはござりひせんわたしやア癪がおちつきいすと帆船さんの方へ行ねばならぬやうになりいした［初］ほんに帆船さんが此間つひにねへこと座敷を明たとはらをお立なんしてやかましくおつせんしたがどふも合點がまいりんせん無理に身請の相談はありやア連衆の惡魂からおこつたことざんすまんざらそふいふわけのゝからぬお容じやざんせんもの［尾］それでもいせ屋のお亭さんがたへげへ相談をきめなんしたそふざんす［初］でふいふわけか帆船さんにおめにかゝりたふざんす［尾］イヽヱみんな私がわるひからおこつたことざん

すイ太八さんにおあいなんしたらよふろしく言譯をいつておくんなんしとてもモウわかれでさんせうからみんながまめで居ておくんなんし。わけておたのみ申いすは松のでおざりひす（此まつのといふはつかふ禿なるがまた六ツ七ツのけしぼうずにて舌もろく〳〵にまはらぬいたいけものなのへはやさしき生れ故わが子のやうにかあいがる）どふぞ手習をよく教てやつておくんなんし。わたしがおりいせんあとでは心ぼそく思ひいせう　どふぞ氣をつけておくんなんし。櫛笄はおまへにあげんすから。鏡臺ばかりはどふぞ松のにやつておくんなんし（尼になれども今は伊太八にあふともならず帆掛にうけ出されては猶々伊太八へたたねばしぬるかくごときはめしたかくせどもるゝうれいの涙袖に包みて）そしてあの子は蟲持だからちよつ〳〵と灸をすへてやつておくんなんし。おまへもかならず煩ひなんすな。もふわかれと思へばいつそかなしうざんす　—紺チヤばかちしびたとへ廓をおわかれなんしたとて。あわれぬものかなんぞのやうにかなしいことはつかいおつせんしてまたしやくがおこりんせう。そんなことよりは面白い噺でもしいせう。夕部年のとさんの座敷で安和太夫さんがかたりひした。梅川忠兵への上るりおもしろうざんした。大阪を立退ひてわたしが姿めにたてばかり駕籠に目をおくり奈良のはたごや三輪の茶やといふ文句は。よふざんす大ざかのくるわだとてやつぱりこつちのやうでざんしやうが。よくにけおをせんした梅川ははつめいもんでざんす（トにげるしあんのつくよふに上るりの文句にてすゝめる）

尾にげおゝせたところが日影ものの金ゆへ大事の忠兵へを咎人にしてなんのマア發明なことがざんしやう。そして義理ある親の妙閑殿とやらにくらうをかけるもみんな梅川が心からあゝいふ身になつては生てゐかいはざんせん 初そふおいゝなんすけれど死で親も夫もあわれるもんでざんすか。よく了簡をしなおしなんして。今一度伊太八さんにおあいなんしたら。またよいしあんもでへせう心せいてはわるうざんすかならず死といふことは（トすこしびつくりせし思入にて）チヤわたしとしたことがおまへさんに如才があるかなんぞの様にはなしにのりがきていけんがましくなりひしたごめんなんししかし梅川はどふしても利口もの一たん立退たればこそ親の孫右衛門にもめぐりあい。金をもらふ所もおざりいしたね 尾なんの死身に金はいりひすめへ 初イヽエあれは忠兵へが人ごろしの罪とやらかあるゆへどふで死ねばならぬ身の上そんなわるいこともねへもたアマアいきてゐるかとくでざんす。アノ此世でそわれぬ中は未來とやらへいつて夫婦になると申いすが。みんなうそかと思ひゝすにしき繪や團扇の繪にもおそめ久松お花半七 おさい代半兵衛。みんなめうとゝいわれにかいにのりひすがついに佛さんの夫ふつれといふはたゝ書たいにもしれた事はざんせんながいことにやアまたわるい風はなりもふきいすめへ（トしぬるかくごなかくせどもかほにあらわるゆへにかやしんじつふかきはつのへがいけんのことば利にふしてたがひに涙袖しぼる折からうかに鈴のおとガラ／＼／＼）モウ夜見世がはじまりひすそふだま

たいつてまいりいせうト出てゆく

○第　五

尾上はあとをみおくりてこらへ〳〵したためなみだ今はいちどにながれの身うるとつらいとかなしひと三ツかさなる三ツぶとん餘義なき義理もあくゑんのきるにきられぬ川竹のひとよかぎりとふししづみふしまろびつゝきへいるばかりなげきしがやう〳〵顔をあげ

尾 アノしん實な初のへさん。としはもいかぬ心から。わたしがやうなものを大事に思つておくんなんす心ざし。うれしうざんす。上るりやにしきゑをたとへにひき。わたしが死ぬ氣でも出ようかとい ろ〳〵にいゝまわしての異見。まことの兄弟でも出來ぬしんせつ。死でも中々忘れはしいせん。今わかれへしたが一生の別れ。後にきて見なんしたらさぞなげきなんすをいまみるやうでかなしうざんす（またさめ〴〵となき出す折からかむろまつのすゝりなきなしながらくる） 尾 どうしたてめへは 松の スヽヽヽアノ竹のどうがどふもアノたゝいてなりひせんスヽヽ 尾 てめへはちいさいからたゝかれてもどふしてもかまふめへそのもつてきたなァなんだ 松の アノこれは内證でこの御くすりをおゐらんがへあげろとアノウおよこしなんしたどふぞはやくおあんなんしてじきによくおなんなんしわた

くしはどふぞくろうで（ト半ぶんいつてしく〳〵なく）[居]そのやうにてめへ迄しんせつにいつてくれるによつて。はやくよくなりたいけれど今ぢきによくなられるもんじやァねへありがたい旦那さんのお情だん〳〵と御恩になりその御恩おくりはをろか年季の内をつとめもせず死だ跡迄御苦勞になり不忠の上の不忠よく〳〵因果な身の上人間に生れたかひもなくまよひまよふはいとわねど帆船さんにはよみつくされぬお世話に成り義理しらずと思ひなんせふが未來でお禮もふしんせうかへすがへすも戀しひは伊太八さんはつに逢ふ夜のあだ枕かはす言葉も水のあは先へ死だ其跡で外のちぎりがうらめしひかういふ別になるならばよく〳〵お顔をみておきんしやうに殘おほをざんすおわかれ申まへかたに必煩てくれるなと。夜ごとにかわる枕故身の養生をもよくせよとふだんぬしがかけて居なんした守りを災難よけだとわたくしにおくんなんしたを肌身はなさずかけていんしたが死る身にはいりいせんからおかへし申いすによつてぬしがかけて隨分まめでお出なんし（トとはずがたりにいふもどうりなり）せめて一筆書殘しいせう（ト机の上の硯まきがみとり出すてもとにありあふ大和物がたりなみて）

むかし津の國に住女をよばふ男二人あり一人の性は（ママ）むはら今一人はちぬの男となんいひける其男どもとしよはひ貌形心ざしたゞおなじやうなり女思ひわづらいぬ生田川のつらにひらはりをうつて其よばひ人共をよびて女のおやのいふやう此川にうきてはべる水鳥をいたまへあてたまはん人

に奉らんといふいとよきこととているに一人はかしらのかたをいつ今ひとりは尾のかたをいつなにといふべくもあらぬに思ひわづらひて女

〽住わびぬ我身なげてんつの國の生田の川は名のみなりけりとよみて此川に落入りぬ（トよみて）

うき川竹の身の乙女が貞節におよぶべきにあらね共二人の御方へ申譯此哥をかき送らん（ト硯にむかい筆のいのち毛はら〱とこぼれかゝるや春雨の雲かみのたんざく二まいしたゝめるかむろ松のはぐわんぜなくそばにないて居る）松のやわたしやあの遊び極樂とやらいふ所へいかねばならぬゆへてめへはずいぶんよく手習をせい出しや琴もよくふくしてかならずわるひことを見ならはぬやうに行義をよくしやはやく大きくなつたらば一ぺんの回向をたのむぞや［松］おゐらんへお出なんすならわたくちをもいつちよにつれていつておくんなんしおいらんがお出なんせんとみんなに猶いぢめられんす［尾］そふだけれどどふしてつれていかれるもんか。いぢめられねへやうに初のえさんによくたのんでおいたから。人の言つけることや何やかやじやうみこわくせずによくいふことをきゝや。手めへは二タおやにはやくわかれ六ツや七ツで此里へきてわたしばつかりをたよりにおもつてゐるものを見捨て死ぬかまよひの種（トいだきあげいだきしめたがいになみだ川［松］どふもわたくちはアノおゐらんにわかれいすはい

やでざんす（尾上がひざにいだきつくやゝあつて）【尾】そんならわたしやどこへもいかんから此ふみを仲の町の伊せやへもつてつて帆船さんへ上げておくんなんしとおかさんにたのんできやこちらのは玉やへもつてつて伊太八さんにとゞけておくんなんしといつてきやたがきいてもだまつていやよサアよく顔をふいていきや【松】マアくすりをおあんなんし【尾】くすりはわたしがのむからきり〱いつてきやよ

ト（しかられてしぶ〱出てゆく）【尾】（はおもひつめたる最期（ママ）の場よういのかみそりとり出ししろむくぬぎかへけさ打かけじゆずつまぐり西にむかひてなあはな佛のみなとのふるも三たびかへせばましらより腸を断折も折せうじけはなし飛入）【帆】ヤレはやまるな尾上【尾】おまへは帆船さんどふしてこゝへは【帆】さいぜんよりとなり座しきで始終のこらず立聞したしぬにをよばぬマア〱まつた【尾】といふてもおまへさんに云わけたゝずどのかほさげいしておめにかゝられいせう【帆】何ごとも義理立いらぬこと身うけの金は茶屋にわたしした【尾】サア其身受のことにて【帆】はてゝ身うけして伊太八にそはせたら何の言ぶんあるめへが【尾】ヱ、そりやほんざんすかへ【帆】ほんでなくつてどうするものかおれも妹にしてかたづけてやろうとたいていほねをおつたことじやねへ手めへがつき出しの其口より馴染できたがえんの縁伊太八とはもとからふかい中で間夫にして上ゲるといふをきいたとてせいたりまたきれてしまうもおかしいゆへだん〱ときて見るところが伊太八がおやぢとおれが親父とはもと兄弟のよふで

あつたがおれもあれが年ぐらゐにやァ大きにどらで爺のくにへもあづけられたじぶん伊太八がおやぢにやアたいていせわになつたことじやアねへ其時はあれは三ツ四ツの頃であつたつけそれから廿年ほどいぜんふとしたことで中をへだてとふどうしくくらして居るうちもうあのやうにせいじんして放蕩になりうちをもかんどうされだん〳〵おちぶれたを手めへが見捨もせず身にかけてせわをして遣る心ざしおらァかげで禮をいつていた手めへが度々の無心をいつたがつひにいやといつたことがねへがよそめからみるとあんまりのろくなりすぎたようなれど伊太八につかわせる金としつて居るからむせうにやつたものさ 〔尾〕そんなら何もかもおしりなんしてのことざんすかはづかしひ 〔楓〕しらねへでなるもんかおれも金のなる木はもつめへし馬鹿らしくむだがねをつかひもしねへわな此間のばんも無心の義理づめにゆびをきらうといふしゆこうをちよつと聞たからそれじやァまんぞくながらだを疵ものにしてゝは伊太八へすまぬからとやかう思ふうち遣り手のお岩が胸わるの異見も指をきらせぬ都合にやァ大できのしゆこうと思つてゐたおれがむり身請の相談をしたも手めへがしん實を見やうばかりのかき狂言だ 〔尾〕なぜそんなことならはやくあかしておくんなんせん何ンだかあんまりうれしくて夢のやうでざんす 〔楓〕それからきゝねへ伊太八が内をそゑんにする中でねへからヱヽさいわいと伊太八が勘當の詫ながらいつて。手めへがじつ義をふたりのおやにはなしたらほんに涙をながしてうれ

しがりおふくろがいふにやアヽいふ商賣(しやうばい)をしたものをいれては上ミがたの店へたいしせけんへもすまぬけれどあんまりの眞實(しんじつ)にめでゝわしがおやぢどのゝほうはエヽようにいふからおめへおや元トになつてよこしてくんなせへ。としよつて一人リの子をかんどうしておくも本意(ほんゐ)でもねへあれが氣にいつてゐる娵(よめ)なら此上おとなしくもなりませうはやくかたづけてくだせへと其晩(そのばん)に金をおれにわたしてよこされたおやといふもなアありがてへものだそれを伊太八にいつてはわるひから今迄まじめでゐたのさ今夜(こんや)はつれて來たからゆつくりあつたがゐゝへ（トせうじをあけて入ル）[尾]何もふしいせん（ト手をあはせて）[尾伊]おありがたふ [正]（とび出て）なんときつひもんでごぜへませうボイ

夫金は遣ふべき時。遣ふにしかず。程へてゝ必光りうすし。されば大門をつけつまわしつ。髪を切るゝ遊客は。あたまかくして尻かくさぬ。田町の床の障子にかくれ。今戸山谷の通ひお針は。口も八丁土手八丁と。用うるも亦可也。猪牙のみよせをつき出しあれば。歸る廓駕籠の引込禿。明のかねつけ袓留も。別の鳥の羽根やうじ。鐵漿下水にかけはしの。うそとまことを裏表。道をわけゆく蘭奢亭のあるじ。ひとつの册子をあみ笠茶屋にうがひの鹽のからきのも。粹も不粹もあまんじては。頼兼の下駄猶かんばしく。言葉の花にくゆらせては。意休が髭もなでざらん。かゝる香會にまじわれども。沈香もたかず尼もひらずと。此序をきく仁さみし給ふな

鈍々亭和樽（印）

近松輻内が綴し劇本ハ操芝居にて用ひ 櫻田並木が作し 正本ハ歌舞妓の戯場にて 控今流行の小册ハ作狂言に似て 能斷側渡りぜりふの掛合時世粧にして叓給也 不侫 戯作の一風ハ 義太夫本にてもなく また極意の骨稽本にもあらず兎角口癖の中の字をとりて 早言ながら俳優舞臺にて 淨瑠り狂言をするにひとし見る人其差別の分ざることを兇しせりふのたらざる所をば 助言入レて給へかしと

香保留

みづから拔す

青樓娭言解　出來

蘭奢亭主人作

いろ〳〵の客によりてけいせいの喜怒楽をくはしくしるす

祇園會挑燈藏

同作

品川客の新吾左に忠臣ぐらをとりまぜ
ゐしおかしき本なり

茶店の娼妓　來春出來

同作

てれん茶やにて客に逢ふけいせいの極祕をあらハす

補遺

最近、「銚子戯語」、「三人銘酊」、共に他本を手にし得た。によりて、此集成本（底本）の缺字其他の補足に供へたい。「銚子戯語」の口繪ヒラキは、此の新渡の一本は、完全であるが、がこれとても黑くなつてゐて迚も凸版にとれさうにもない。で殘念ながら文字をもつて、これに代へる。卽ち圖は、（不足の左の圖）同行の一人が、先頭に立ち、右手に持つた扇が開かれ、扇面は、富士を描いたものである。遠景に屋根や立木。土堤を歩むの體である。振り返つて、右の圖の同行に、物を言ひかける體、此方稍若ければ、これが、路州であらうか。

次、此の一本によりて發見した底本の序の缺字、並に推測の迹の誤。（二三の外は大抵推測通りであつた。）本文の中の二三紙魚のあとの補足の誤と、及び、「三人酩酊」序の首落丁分とを、左に載する。

尙、此類の缺字（紙魚のあとの）の發見、成るに及んで、機會ごとに、無論補足につとめる。なほ此の校訂本披閱の諸賢にお願ひしておく。未知の諸賢藏本の中、幸はひ、此種他本の落丁又は缺字のあとを御存じよらるゝ方々あらば、校者に敎示の微勞を惠まれたい。事は、可成的に完本を後世に遺すにある。無論現在、同好同學の方々にも至上の滿悅とならうと思ふ。右御願ひしておく。（十月三日）

一、「銚子戯語」の正誤

序（一〇九頁）の三行目、「濫觴とし」は、「濫觴として。」（讀點あり）の誤。●同四行目の「煉□□喰て」は、「糟を喰て」の誤。同行、「□□述作」は、「治が述作」の誤。●同五行目、「我はい□」は、「我はいやと」（讀點ナシ）の誤。●同九行目の、「大窮嘲誌」は、「大窮嘲哢」の誤。次の印様のものは解題には、上が南鐐三片、下が米云々というたが、下は、米吊と讀める。

本文。一一〇頁の冒頭、「今此時とおもひやらるゝ」は、「今此時と、おもひやらるゝ」の誤。（との下に、讀點あり）●その下の「みの□□」は、「みのわの」。●次の行、「五六人左様なれば」は、「五六人左様なら」。●その下、「明後日のひらきまで」は、「明後日のひらきは」。●その次。「いつしよにい□□」は、「いつしよにいかふ」。

一一一頁の五行目、「ちがひやせうか」は、「ちがひやせうね」の誤。

一二七頁の末行、船宿女房の言葉、「あゝ御」は、「あい御」の誤。●一二八頁の八行目、「あそびはな□」は、「あそびはなへ」の誤。

二、「三人酩酊」自序の落一丁分

自序

生酔に三ツの癖あり椀久の酔倒は亂心水のたとへをはじめ酒にあかさぬ夜半もなく寝酒の眞實には一寸先は闇と成三盃の酒人をのゝみもちゝ越酒の二日ゑひには伴頭の迎酒もおよばずてれん手管のあやなしに跡引上戸のたわひなく底ぬけ上戸となる時は新酒はだん〳〵貧乏樽となり親仁さんの腹立上戸に忽其身は菰かぶりとなり盗人上戸の名を呼ばれ世間の人の笑ひ上戸にゑひがさめ昔こひしき泣上戸のむすこさんがた茶わん酒をやめなんして袖の梅の本性となり樽ことをしらばお手がなつたら銚子とさとり間の（おさへのあんだうなくまゝ）（以上「三人酩酊」序のハジメ一丁分）

卷末に

「洒落本集成」第一卷が、いよ〳〵出版されることになつた。此の本校了になつたのは、既に四年前の昔であつた。其後、洒落本原本の騰貴は、一躍又二躍、大正十五年校了の秋から較べると、夢のやうである。自分も、此の集成本完成のため、この校了當時數册に過ぎなかつたのが、其後騰貴に追はれ乍ら、無い錢を捻つて止むを得ず蒐集、比較的善本が百四十册ばかりは集まつた。然るに此の「集成」は、元來が嘗て江戸文學大系といつたものに計畫されたものが、中止、私の洒落本だけ生きたので、初め三卷のものが、材料が殖え、六卷豫定となり、此の第一卷端書にもある大正十五年秋に第一卷、翌昭和二年秋に第二卷を校了（いづれも四校了）、然るに、色々な事情で、延刊に延刊となつてゐた。今となつて事情が分つて見れば、決して春陽堂出版部の怠慢のせゐではなかつた。此の本延刊の運命もやはりあつたのである。從つて第三卷以後約三卷分は、既に原稿も出來てゐるのであつたが、まだ組には運んでない。延刊のため、私は、仕事の上と生活の上に、非常な苦しみを感じた。仕事の上とは、私自身が、此の集成本を諸研究の底本としようと思つたからである。讀者諸賢や私の知友先輩からは、書肆へも度々あつたであらうが、私へ延刊の理由を詰られるのが多かつた。折よく（此の

複刻本のためには、洒落本は、昭和二年頃から大騰貴、そのため此の編本の出るのを翹望されるのが多いのも、理由の一つだつた。

其後、國民圖書の近代日本文學大系の「洒落本」云々の笹川氏校と稱する本が出た。が、凡て此の本のものは、從來の帝文や國書刊行會本のと重複で、新複刻は、一種もなかつた。今年來月あたり、此の私の本と前後して出る由の、興文社版名著全集の山口剛氏校の「洒落本集」（これは、善校訂本と思ふ。）も、内容上の都合多く、材料は、多く既出のものである。即ち、私の此の編集本が、校了の大正十五年秋に出れば、その第一卷は、先づ全部新複刻で、讀書界を喜ばした筈だつた。但し今でも左程遲くはない。その譯は、此の本と、山口氏本との衝突（重出）は、唯一種「居續借金」だけであるからである。校了の第二卷と衝突するものの一種もなし。唯第三卷以後の豫定した原稿の中に、三四種を見受けるが、それは此方が犧牲になつて、材料を挿しかへるだけである。その中の「箱枕」は、山口氏底本の早大本が、ひどい落丁だつたので、私の方から、私の方の集成本には入れぬ積りで、その落丁の分だけ原稿を貸してあげた事を、別に謂ふ程の事でもないが、述べておく。「息子部屋」（令子洞房）も、私の方でも豫定してあるが、昨年末の帝文の再版本「京傳」に、笹川氏が入れられた。山口氏のにも入るやうだ。若し私の校本が、順當に出てゐれば、私の本の第三卷に「息子部屋」が入つ

て、此の名作が一ばん早く活字化した譯だつた。

がこんな愚癡らしい事は止める。唯、第三巻以後は、まだ組まぬ事であるから、最初の所期の如く、全部新復刻ばかりで收めるつもりである。

唯、此の巻を出すに就て、なほ一寸お詫びをしておきたい事がある。それは、此の巻の所收本は、寛政以後の物に多いことと、且つその底本に、數册惡本があつた事である。末期本の多いことは、未飜刻物をと志した以上、止むを得ぬが、然し惡本には、申譯がない。が當時は、これで原本の蒐集として精一杯だつたからである、無論善本見つかり次第增補のつもりで、現に校了になつてゐる第二巻には、此の第一巻の不備が、解題の中に附記せられてゐる。今、その要點をいふと、第一。南楼歸路雀は、やはり口繪一丁分が落丁であつた。これは、第二巻校了の時も、自分に善本が獲られなかつたから、其儘にしたが、今では既に分つてゐるから、第三巻に補充する。(但し此の本の善本、三村竹淸氏も有たれてゐる。間に合へば、此の第一巻の、丁度、八十二頁の餘白に挿入れたい。が、偖どうなるか。)但し、序文などの蟲は、三村氏本によつて、第二巻で全部塡字訂正した。第二。「銚子戯語」の口繪半丁分も、善本——比較的に——を獲て、その圖柄も全部分つた。これは第二巻に附記しておいた。蟲も全部埋めた。年代は、大飯喫の印が、南鐐三片、米五升である事が明らか

となり、卽ちこれにより天明三年の大飢饉を指し、又本文中にある「ことしのくさぞうしの大通の出入」は、黄表紙「大江山大通出入」の天明四年版であり、卽ち此の黄表紙を初春版と見て、此の洒落本は、同年の初春を越えた春頃の出版であらうか。遲くとも天明五年を降らぬものだけは分つた。第三。「通志選」は、「北遊穴知鳥」（安永六年版）と大部分同じ本である事が分つた。卽ち「穴知鳥」の闕足改題本である。この事は、旣に、昭和三年五月發行の拙著月刊「江戸軟派研究」の洒落本の書形的研究なるものの中で、述べておいた。第四。「廓膽競」は、本卷解題では、まご〳〵したが、朝倉氏の新修年表の如く、享和元年の酉と斷定しておく。（朝倉氏のは、唯、享和年間とのみあるが、酉により同元年である。）第九。「意妓口」に就て、解題にいうた見返し云々は、底本悪本のための誤りで、これは、初丁裏であつて、識は、その表に、なほ半丁分の文字があつた。覺としたしやれたものである。これは、第二卷に補記しておいた。第六。「房情記」は、表紙が色紙形題簽のものであるが、其後見た二三の此の原本、凡て過半剝脫して文字が明瞭ではない。第二卷出版までには、善本をと思うてゐる。第七。「三人酩酊」は、案の如く、初一丁落であつた。がこれは、其後善本を得て、第二卷には、補記されてある。第八。「傾城傳受」は、其後、元表紙題簽付の初摺本を發見、これにより、「傾城買猫之卷」が、本外題である事が分つた。第九。「娭言解」の初一丁分の落も、其後發見、但し、その原本が、非

常な粗本であつたから、買ひ損つてゐるうちに、行方不明、此の第一卷延刊のため、その序一丁分だけを寫すこともうつかりしてゐて、未だに殘念。但し第二卷出版までには、ぜひ探し出すつもりである。

以上、かうした不備な本をどうして出すかと問はれると、誠に耻ぢ入るが、それには、諸藏書家圖書館によつて、なほ幾多の不備を發見、より多く完全な底本となすに足りる活字本たらしめたい慾望の強いのと、僅かには、此の卷の欠伸の出る程の延刊だつた事に、とにかく第一卷を出さうと思つたからである。

なほ、此の卷抹殺の部分數十箇處は、永久の抹殺であつて、これだけの瘡痍を私もあなた方も忍んで頂かないと、全く出し得ない事を述べておく。この部分は、大部分、我々の研究上には、不必要なる、暗示、又は前後の描寫である。是あるが爲に、洒落本は、昔から誨淫の書として上司から指彈を受けた。今日、これを切り捨てゝも、まだ大半の主要部分を生かす爲には、惜しくはないと思ふ。なほこれは、いらざる言葉かは知れないが、私の手許にも、此の卷の初校又は原稿は、凡て既に破棄せられてある事を述べておく。

なほ――、第三卷以後は、無論完くの善本を底本とし、且つ全部新複刻となし、自他のために最も

善き集成本たらしめようと今から斷言しておく。且つ所收本も、寛政以前に多く取る事を、今その一端を豫告してみるなれば、

魂膽總勘定（寶暦四年）〇鉄案内（寶暦）〇閑居放言（明和五年）〇蕩子筌（同七年）〇野路の譫言（明和）〇放蕩虚誕傳（安永四年）〇當世爰かしこ（同五年）〇風流裸人形（同）〇甄金窟（同）〇穴知鳥（同六年）〇花の姿色名寄（同八年）〇深淵情（同八年）〇巵子鳥（同）〇南客先生文集（同）〇女鬼産（同）〇眞似山氣登里（同九年）〇風流仙婦傳（同）〇遊婦里會談（同）〇虚靜先生穴賢（同）〇本艸妓要（安永カ。）〇金枕浮女相談（同）〇無陀物語（天明元）〇古今三通傳（同二年）〇鯉池全盛噺（同）〇其あんか（同六年）〇廬寶情夜櫻（同八年）〇青樓五雁金（同）〇鳴通力（寛政元）〇奘技五所紋（同二年）〇良夜韵搔（不詳。）

など、凡て其後の家藏本に大半俟ち、しかもより善き底本と信ずるものである。寛政末・享和期のもの、多く用意あり、又稿本も十部以上、その中の比較的善作も數種ある事を述べておく。

なほ、どうしても新刻の困難なものは、せめてその解題梗概を心がけ、それなどや、又はこゝ兩三年私が憂身をやつしてゐるつまらぬ詮索かは知らぬが、洒落本の初刻本再刻本以下の異同、又は改題本、改題補正本の有無、異同、又は見當つた原本約三百種近くの序文本文口繪挿繪、體裁などを述べ

た酒落本の書形的研究などの事や、又は内容上からの各分類、異論や普通論など凡て内容形式に就ての事を一まとめにして「酒落本研究」と題して、此の複刻本の姉妹篇として、出す積りである事を述べておく。

以上、いろ〳〵。

昭和四年二月廿二日午前二時頃

久　彌　誌

再び巻末に

編　者

前後して不様になつたが、第一巻の補正は、やはり第一巻に附くべきものとして、今急に第二巻の校正摺を求め出して、その解題に附記した第一巻補正の部分を、左に轉載する。これで缺けてゐるのは、「南極驛路雀」の口繪一丁分と、「銚子戯語」の口繪半丁の落れとである。これは、第二巻出來までには、間に合せようから、第一巻のその部分に面倒ながら貼つて頂きたい。今後は、かゝる、不體裁なき樣心がけませう。先づ、第二集解題の終りの、第一巻補正の部分全部を、その儘載せる。

「三人酩酊」の序一丁分の落と、幸ひ、前の「巻末に」を書いた以後、見つけ出した善本によつての「青樓娭言解」の序一丁分の落とは、その頁を組み直す事によつて、出來さうだから、こゝには附記しない。前掲「巻末に」をその儘組んで、また此の補正をするのは、それだけ苦慮惨憺たるものがあるのです。何分四年前の校正丁である事と、暫く私も發行を斷念してゐた事と、それに後から新しい仕事に追はれてゐた事と、及び東京在住で仕事をしてゐないなどの、事情や不便があつたからです。私の此巻生れるための記念として、前掲「巻末に」も其儘載せる事とします。（以上、三月二日記）

○南極驛路雀

序文及び冒頭の完全なるもの、一本を見た。それによつての、補正である。序文は、此の善本によつて全文を擧げておく。によつて、第一卷分と對比せられたい。二三、想像により字數等に誤つたのがあつた。

序

世有金翅鳥兩翅長三万六千六百里莊子呼之爲大鵬其色黃にして白し常に義理と情を喰ふ色林に入て美娘をころ壽娘も亦殺寸手數千本有て娘と手く良扁して互に相搔相殺故諺に能殺すやつは必ころされ能搔やつハか支蓐さると此鳥南の奥を見んと行事億ゝ九億八万里にしていまだ其中にも到良寸道に飛とつの空ゝ寂ゝとして南に向亭數ゐいきに壽るものを見る忽化して鳥と成大さよし原雀のご登し其早き事爽駄天素足で迴る其名を問へバ驛路雀と答ふ則金翅鳥にいつて曰予南方の世界耳通ふ事數年夕に行朝に歸る汝足甚遲南方に行バ先此小卷を見給へと懷中與り取出し亭渡してさあ歩行彼牡丹餅耳醉ふて自述焉

逸我 印

とりのはつ春

再び卷末に

右の署名の下の印は、相變らず不明、はつきり讀めない。唯、印形、白ヌキならず、小林方小平太と三字づゝ二行である。小平太は確かだが、右の三字が小林方ヵといふのである。

本文冒頭の正誤、如左。

（本集成第一卷、八〇頁・八一頁・八二頁）

頁	行	誤	正
八〇	二		間中交ニ日水ニノ下ニ、○（讀點）ヲ入ル
同	同		三而後止ノ下ニ、○（讀點）ヲ入ル
同	五	房州へ放（こう）。	房州へ放（ひり）。
同	九	木椀の一□	木枕の一睡
同	同	……の鐘鮫頭□	……の鐘鮫頭に
同	同	上總の山に盡る□	上總の山に盡る。
同	一〇	……駕舁□	……駕舁の
同	一一	ほうかふり手拭	ほうかぶりの手拭
同	同	肴荷□□	肴荷の

同	同	まじゆ□	まじゆれ
同	一二	□□後陣(ごぢん)の	ば。後陣(ごぢん)の
八一	五	爪を□□かり。	爪をはかり。
同	七	酔□□明	酔走に明
同	九	連れ。	引連れ。
同	一四	里□□しるよし	里にしるよし
八二	一	□□夜……	共夜……

○東山見番 意妓口

意妓口の本集成本第一巻の底本としたものには、紅二云々の題か、表紙に貼りつけて、見返しのやうになつてゐた。今一本を見ると、それが實は巻頭初丁の裏で、表は、左の如くあつた。

覺

一 二階へこたつ仕懸申間鋪事

一 河岸迄あんか持出し候共風烈之節堅無用之事

一 客人身の用心大切に相守可申事

月　日

といふのがあつて、此のふち、また輪廓を取り、それに、三ッ巴、丸に四ッ目、鶴の丸、横木瓜を三ッ山積みにしたもの、此の四個の紋が、模様の如く、天地左右に置かれてある。順序は、これに書いた順で、右上が三ッ巴で始まつてゐる。

(一)孔雀染勤記

孔雀染勤記の跋形式のもの（本集成本、三六九頁十一行目）、「何ンとマア」以下は、全く舊來の版木を重用（實は三用）した、補足である。全くの同版木である。その祖は、安永九年版の南蛇加紫蘭の「咄の綺有多」にある。これには、柱に噺之綺有多跋とあつて、これが丁を更へて五丁ある。その第一丁は、初め三行、餘分の文字があつて、第四行目以下が、孔雀染勤記の第十五丁目（但し新らしく一とある。これ舊版そのまゝのため）の、即ち「何ンとマア」以下である。丁數も同じ事。これがまた、小金あつ丸の「内所圖會」（天明六年版。これは咄の綺有多と九分まで同一。唯、序の二三丁が彫り更へてあるのみである。）となつてゐる。即ち、祖が「咄の綺有多」、親が「内所圖會」、子が「孔雀染勤記」で、結局、此の五丁分斗りの版木は、三代襲用といふ譯である。

○傾城傳受

傾城傳受、第一卷のをりの底本は、元題簽なきものを使用したから、これが猫の卷だらうが、萬一を惧れて、序の中の外題を借りた。然るに最近、元表紙（稍明るき茶表紙）元外題の美本を獲た。それには、きつぱり「傾城買猫之卷」とある。卽ち此の外題が第一と決つた譯である。

○「銚子戲語」と「遊僊窟烟の花」の年代

「銚子戲語」も「烟の花」も共に年代不詳。本集成第一卷解題には、まだ銚子戲語の方を天明末にも見てゐた。それが共々に誤りで、銚子戲語は天明四年作（刊行は、翌五年の春か）、烟の花は、寛政十二年の作（出版は、享和元年）かと思へるのである。それには、畏友忍頂寺務氏の考證が力になつた。同氏の書信を拔く。

「烟の花」は、吉原火災にて假宅せし折のもの故、火災年表を見て、寛政六年、寛政十二年と繰り、また「鬼坊主の弟子にやります」の記事あり。鬼坊主の所刑は、文化二年故、この少々以前の出版物と考へ、結局寛政十二年中の作品と推定仕居候。

「銚子戯語」は、天明四年の作と存候。序文の印影に「南鐐二片、米五升」（忍頂寺氏本、この印形鮮明。によりて、米五升と五升の文字が讀めたのである。即ち小生第一巻解題の米云々は、五升とあるのであつた。久彌。）と有之候。御承知の天明三年は、秋不作にて同四年米價高し、加之黄表紙「大山江大通山入」は、天明四年作、「津以曾無弟甚六」は、安永九年作（其後再刻か）にて、二者の評判この本に出し故、かた〴〵天明四年の作品と愚考仕候。

以上にもある中、「銚子戯語」は、動かぬ推定である。なほこの「銚子戯語」は、黄表紙の「大通山入」や「弟甚六」の外に、浮世繪師湖龍齋の評判もある。又東江の書の評判、及び坂三津の「道成寺」の評判などもある。これから考へても天明四五年のものたる事は、推定出來る。（なほ、此の推定材料には、小生の「銚子戯語」其他から抄記した「洒落本雜抄」なるものがある。本集成第一巻を持たるゝ方には、重複であるが、他の未飜刻洒落本にも及んでゐる。所載「江戸軟派研究」第三編の第十七以下。）（以上、補記）

○「青樓娭言解」の虫埋め

第一巻本文の五五二頁、第一　未至通の知たかぶりの下、ハを脱した。五五三頁五行目、欲は、そばと假名であつた。その下の虫は、をはの二字。同頁六行目、虫は、を思ひ四郎兵衛の七字だつた。そ

の下、いなり以下が一寸間違つてゐて、九郎助いなりに白狐のあるにおなじ、であつた。その下、日本の下の虫は、三字であつて、堤に唐である。五五五頁の口絵には、その右下に、長喜畫と落款があつた。また、五五六頁二行目の虫は、十うちの三字である。

以　上

昭和四年五月二十五日印刷
昭和四年五月二十八日發行

酒落本集成第一集
（定價參圓五十錢）

編纂者檢印

編纂者　尾崎久彌

發行者　東京市日本橋區通三丁目八番地
和田利彦

印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地
堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪五十六番地
常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通三丁目八番地
（電話日本橋、五一、六四一、三六八）
（振替口座東京、一一六一七）
春陽堂

1145/2

PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

Far Eastern 68

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02993 7984